

浦河町

向別遺跡・栄丘遺跡・ 昌平町遺跡・常盤町遺跡

— 上向別浦河停車場線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和元年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

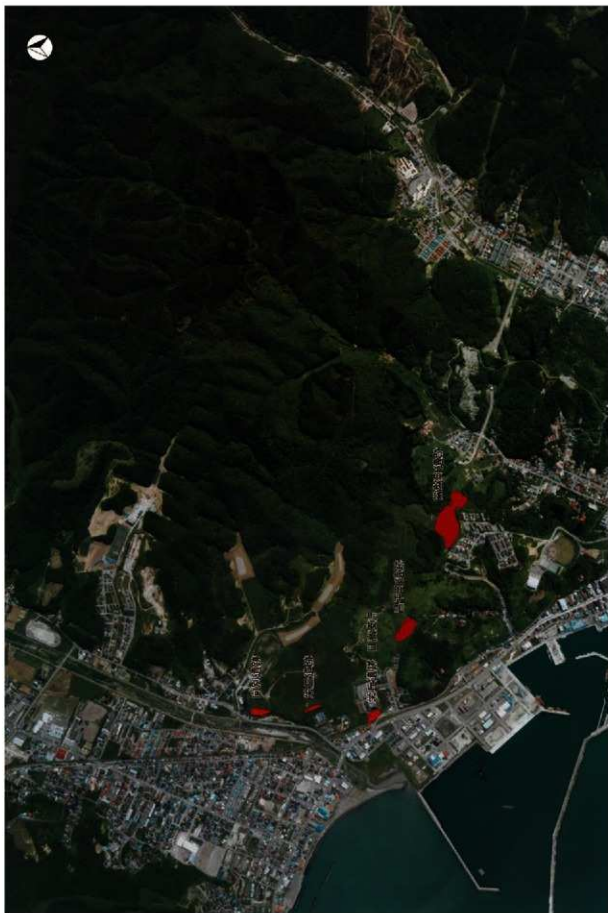
浦河町

向別遺跡・栄丘遺跡・
昌平町遺跡・常盤町遺跡

— 上向別浦河停車場線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和元年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



口絵 1

遺跡周辺の地形 (空中写真)

※国土地理院 (空中写真) [CHO-2009-12X C3-7] に加筆



向別遺跡調査状況



栄丘遺跡調査状況



昌平町遺跡調査状況



常盤町遺跡調査状況

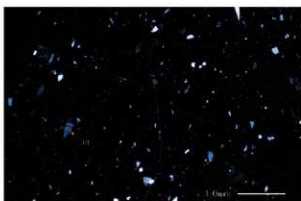
口絵 4

試料番号：ウ 2

岩石名等：須恵器



オープンニコル



クロスニコル

試料番号：ウ 3

岩石名等：土師器



オープンニコル



クロスニコル

試料番号：ウ 4

岩石名等：擦文土器



オープンニコル



クロスニコル

例 言

1. 本書は、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部が行う上向別浦河停車場線改築工事に伴い、公益財団法人 北海道埋蔵文化財センターが平成30（2018）年度に実施した、浦河町向別遺跡、栄丘遺跡、昌平町遺跡、常盤町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（『浦河町 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡』北埋調報363）である。
2. 平成31（2019）年に当センターが刊行した『調査年報31』に報告した内容よりも、本報告書記載の内容が優先する。
3. 本書の執筆は菊池慈人・末光正卓が分担し、文責は各項目の末尾に括弧で記した。編集は末光が行った。
4. 写真撮影は、現場は中山昭大・菊池慈人が、報告書掲載遺物は菊池が撮影した。
5. 鉄製品の保存処理は、三浦正人が行った。
6. アンモナイト化石の鑑定は、株式会社ジオ・ラボ代表取締役社長栗原憲一氏の協力を得て、第1調査部普及活用課 主査 柳瀬由佳が行った。
7. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各氏から御指導・御協力をいただいた。

（所属は当時・順不同・敬称略）

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

浦河町教育委員会 新ひだか町教育委員会 様似町教育委員会

浦河町教育委員会 和田 修 伊藤昭和

様似町教育委員会 高橋美鈴

記号等の説明

1. 確認した遺構は下記の略号を用い、連番を付し本文及び図表中に用いた。

P：土坑 TP：Tピット F：焼土
PS：土器集中 FC：フレイク集中 S：礫集中

2. 遺構図面等の縮尺

土坑・Tピット：40分の1 土器集中：20分の1または40分の1
フレイク集中：40分の1 礫集中：40分の1 その他：60分の1ほか
地形測量図・遺構位置図：原則1000分の1（任意に500分の1に拡大・1250分の1に縮小）

各図に、スケールと方位記号（座標北）を付した。遺構平面図の「+（十字）と文字列」はグリッドで、遺構平面図等の「・（ドット）と数値」はその地点の標高（m）を示す。

3. 遺物図の縮尺は次のとおりでスケールを付した。

復原土器：4分の1 推定復原土器：3分の1 破片土器：3分の1
剥片石器：2分の1 礫石器：3分の1（大型のものは4分の1） 石製品：2分の1
鉄製品：4分の1

4. 本文及び図表中で遺構の規模は次の要領で表記し、一部破壊されているもの等は現存する計測値を（丸括弧）で示した。

掘り込みのある遺構：

確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/確認面からの最大深（m）

平面的な遺構：

範囲の長径×短径/確認面からの最大深（m）

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	

I章 緒 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	3
(1) 上向別浦河停車場線	
(2) 範囲確認調査（試掘調査）の概要	
(3) 発掘調査の経緯	
4. 調査成果の概要	4
(1) 向別遺跡の調査成果	
(2) 栄丘遺跡の調査成果	
(3) 昌平町遺跡の調査成果	
(4) 常盤町遺跡の調査成果	

II章 遺跡の立地と周辺の環境

1. 立地と環境	7
2. 遺跡周辺の環境と地名	9
3. 文献や旧地形図の情報	11
4. 浦河町内の遺跡	23
(1) 調査・研究史	
(2) 河川ごとの地域	
5. 浦河町に駐屯した日本陸軍	30
(1) 昭和18（1943）年頃まで	
(2) 昭和18（1943）年～終戦	

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定	37
(1) 工事図面	
(2) グリッドの設定と調査杭の打設	
(3) 面積変更	

2. 基本土層	37
3. 調査の方法	50
4. 整理の方法	50
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 遺物の分類基準	51
IV章 向別遺跡	
1. 概要	57
2. 土坑	57
P-1 P-2	
3. 土器集中	57
PS-1 PS-2 PS-3 PS-4 PS-5 PS-6 PS-7 PS-8 PS-9	
4. 鉄鍋集中	69
5. 道跡	69
6. 包含層出土遺物の概要	74
7. 陶器・須恵器・土師器	75
(1) 図上復原土器	
(2) 破片土器	
8. 縄文時代～擦文文化期の土器	81
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
9. 遺構出土の石器	87
10. 包含層出土の石器	87
(1) 剥片石器	
(2) 礫石器	
(3) 石製品	
11. 鉄製品	95
V章 栄丘遺跡	
1. 概要	112
VI章 昌平町遺跡	
1. 概要	113
2. 出土遺物	121
VII章 常盤町遺跡	
1. 概要	125
2. 土坑	125
P-1	

3. Tピット	125
TP-1 TP-2 TP-3 TP-4 TP-5 TP-6 TP-7 TP-8 TP-9 TP-10	
TP-11 TP-12	
4. 遺物集中	136
(1) 土器集中 PS-1	
(2) 裸集中 S-1	
5. 包含層出土遺物の概要	143
6. 土器	147
7. 石器	147
(1) 遺構出土の石器	
(2) 包含層出土の石器	

Ⅵ章 まとめ

1. 自然科学的分析結果について	155
(1) 向別遺跡 土器胎土分析について	
(2) 黒曜石原産地分析について	
2. アンモナイト化石	160
3. 松浦武四郎の記録との照合	163
(1) 山越の道と地形の名称	
(2) 海岸沿いの名称	
(3) 地名「西舎」について	

付篇

付篇1. 浦河町向別遺跡出土土器の胎土分析	167
付篇2. 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡出土黒曜石石器の産地推定	187

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

目 次

図1	遺跡位置図	2	図45	向別遺跡	包含層出土破片土器(1)	80
図2	遺跡周辺の状況(1) 明治年間	8	図46	向別遺跡	包含層出土破片土器(2)	82
図3	遺跡周辺の状況(2) 大正年間	10	図47	向別遺跡	包含層出土破片土器(3)	83
図4	遺跡周辺の状況(3) 昭和年間	12	図48	向別遺跡	包含層出土破片土器(4)	84
図5	向別遺跡 周辺の地形(都市計画図)	14	図49	向別遺跡	遺構出土・黒曜石原産地分析の石器・石製品	86
図6	栄丘遺跡・日高支庁 周辺の地形(都市計画図)	15	図50	向別遺跡	包含層出土剥片石器(1)	88
図7	昌平町遺跡 周辺の地形(都市計画図)	16	図51	向別遺跡	包含層出土剥片石器(2)	89
図8	常盤町遺跡 周辺の地形(都市計画図)	17	図52	向別遺跡	包含層出土礫石器(1)	90
図9	向別遺跡 現況図(工事図)	18	図53	向別遺跡	包含層出土礫石器(2)	91
図10	栄丘遺跡 現況図(工事図)	19	図54	向別遺跡	包含層出土礫石器(3)	92
図11	昌平町遺跡 現況図(工事図)	20	図55	向別遺跡	鉄鍋	94
図12	常盤町遺跡 現況図(工事図)	21	図56	栄丘遺跡	最終面地形測量図	111
図13	浦河町内の遺跡	22	図57	栄丘遺跡	遺物出土分布図・出土遺物	112
図14	浦河町内の軍隊	31	図58	昌平町遺跡	最終面地形測量図・遺構位置図	114
図15	向別遺跡 グリッド設定図	38	図59	昌平町遺跡	P-1・P-2・P-3・P-4	115
図16	栄丘遺跡 グリッド設定図	39	図60	昌平町遺跡	P-5・P-6	116
図17	昌平町遺跡 グリッド設定図	40	図61	昌平町遺跡	P-7・P-8	117
図18	常盤町遺跡 グリッド設定図	41	図62	昌平町遺跡	P-9・P-10・P-11	118
図19	浦河町 基本土層模式柱状図	43	図63	昌平町遺跡	F-1	119
図20	向別遺跡 基本土層図	44	図64	昌平町遺跡	出土遺物	119
図21	栄丘遺跡 基本土層図	45	図65	昌平町遺跡	遺物出土分布図	120
図22	昌平町遺跡 基本土層図	46	図66	常盤町遺跡	最終面地形測量図	126
図23	常盤町遺跡 基本土層図	47	図67	常盤町遺跡	P-1	127
図24	向別遺跡 表土除去後地形測量図	58	図68	常盤町遺跡	T P-1	128
図25	向別遺跡 最終面地形測量図・遺構位置図	59	図69	常盤町遺跡	T P-2~T P-5(1)	130
図26	向別遺跡 P-1・P-2	60	図70	常盤町遺跡	T P-2~T P-5(2)	131
図27	向別遺跡 P S-1・P S-2	61	図71	常盤町遺跡	T P-6・T P-7	132
図28	向別遺跡 P S-3	62	図72	常盤町遺跡	T P-8・T P-11	133
図29	向別遺跡 P S-4・P S-5	64	図73	常盤町遺跡	T P-9・T P-10	134
図30	向別遺跡 P S-6	65	図74	常盤町遺跡	T P-12	136
図31	向別遺跡 P S-7	66	図75	常盤町遺跡	P S-1・S-1	137
図32	向別遺跡 P S-8・P S-9	67	図76	常盤町遺跡	遺物出土分布図(1)	138
図33	向別遺跡 鉄鍋集中1	68	図77	常盤町遺跡	遺物出土分布図(2)	139
図34	向別遺跡 遺跡	68	図78	常盤町遺跡	遺物出土分布図(3)	140
図35	向別遺跡 遺物出土分布図(1)	70	図79	常盤町遺跡	遺物出土分布図(4)	141
図36	向別遺跡 遺物出土分布図(2)	71	図80	常盤町遺跡	遺物出土分布図(5)	142
図37	向別遺跡 遺物出土分布図(3)	72	図81	常盤町遺跡	出土古銭・破片土器	143
図38	向別遺跡 遺物出土分布図(4)	73	図82	常盤町遺跡	遺構出土剥片石器	144
図39	向別遺跡 遺物出土分布図(5)	74	図83	常盤町遺跡	遺構出土礫石器	145
図40	向別遺跡 図上復原土器	76	図84	常盤町遺跡	包含層出土剥片石器	146
図41	向別遺跡 復原土器(1)	77	図85	常盤町遺跡	包含層出土礫石器	148
図42	向別遺跡 復原土器(2)	78	図86	遺跡周辺の山越えの道	164	
図43	向別遺跡 陶器・須恵器・土師器・胎土分析試料	79	図87	東西蝦夷山川取調圖 六 (浦河町の部分)	165	
図44	向別遺跡 遺構出土破片土器	79				

表 目 次

表1	浦河町 遺跡 遺構数一覧表……………	5	表33	向別遺跡	
表2	浦河町 遺跡 遺物点数一覧表……………	6		P S - 2 出土復原土器観察表……………	102
表3	浦河町内の遺跡一覧表……………	26~29	表34	向別遺跡	
表4	太平洋戦争中の北海道地方の 陸軍部隊の動き……………	32・33		L - 5 区出土復原土器観察表……………	103
表5	浦河町 発掘調査基準点一覧表……………	42	表35	向別遺跡	
表6	向別遺跡 基本土層……………	48		I・J - 3・4 区出土復原土器観察表…	103
表7	栄丘遺跡 基本土層……………	49	表36	向別遺跡	
表8	昌平町遺跡・常盤町遺跡 基本土層……………	49		E - 3 区出土復原土器観察表……………	103
表9	土器時期分類基準……………	52	表37	向別遺跡	
表10	土器部位分類基準……………	52		L - 5 区出土復原土器観察表……………	104
表11	土器残存状態分類基準……………	52	表38	向別遺跡	
表12	石器等器種分類基準……………	53		I・J - 3・4 区出土復原土器観察表…	104
表13	石器等残存状態分類基準……………	53	表39	向別遺跡	
表14	岩石分類体系表……………	54・55		遺構出土破片土器観察表……………	105
表15	岩石(石材)の略号……………	55	表40	向別遺跡	
表16	向別遺跡 土坑・道跡一覧表……………	96		包含層出土破片土器観察表……………	105~108
表17	向別遺跡 遺物集中一覧表……………	96	表41	向別遺跡 遺構出土石器観察表……………	109
表18	向別遺跡 遺構出土土器点数表……………	97	表42	向別遺跡 包含層出土石器観察表……………	109
表19	向別遺跡 包含層出土土器点数表……………	98	表43	向別遺跡 包含層出土土製品観察表……………	110
表20	向別遺跡 遺構出土土器点数表……………	96	表44	向別遺跡 鉄鋤観察表……………	110
表21	向別遺跡 包含層出土土器点数表……………	98	表45	栄丘遺跡 土坑一覧表……………	112
表22	向別遺跡 遺構出土鉄製品(鉄鋤)点数表……………	96	表46	栄丘遺跡 包含層出土土器点数表……………	112
表23	向別遺跡 因上復原 陶器・須恵器・土師器観察表…	99	表47	栄丘遺跡 包含層出土土器観察表……………	112
表24	向別遺跡 陶器・須恵器・土師器破片土器観察表…	99	表48	昌平町遺跡 遺構一覧表……………	122
表25	向別遺跡 P S - 9 出土復原土器観察表……………	100	表49	昌平町遺跡 包含層出土土器点数表……………	122
表26	向別遺跡 M - 5 区出土復原土器観察表……………	100	表50	昌平町遺跡 遺構出土土器点数表……………	122
表27	向別遺跡 L - 5 区出土復原土器観察表……………	100	表51	昌平町遺跡 包含層出土土器点数表……………	122
表28	向別遺跡 P S - 3 出土復原土器観察表……………	101	表52	昌平町遺跡 包含層出土破片土器観察表……………	123
表29	向別遺跡 P S - 1 出土復原土器観察表……………	101	表53	昌平町遺跡 包含層出土土器観察表……………	123
表30	向別遺跡 G - 3 区出土復原土器観察表……………	101	表54	常盤町遺跡 土坑一覧表……………	150
表31	向別遺跡 P S - 5 出土復原土器観察表……………	102	表55	常盤町遺跡 Tピット一覧表……………	150
表32	向別遺跡 J - 4 区出土復原土器観察表……………	102	表56	常盤町遺跡 遺物集中一覧表……………	150
			表57	常盤町遺跡 遺構出土土器点数表……………	150
			表58	常盤町遺跡 包含層出土土器点数表……………	150
			表59	常盤町遺跡 遺構出土土器点数表……………	151
			表60	常盤町遺跡 常盤町遺跡 包含層出土土器点数表……………	152
			表61	常盤町遺跡 破片土器観察表……………	153
			表62	常盤町遺跡 遺構出土土器観察表……………	153
			表63	常盤町遺跡 包含層出土土器観察表……………	154
			表64	向別遺跡 歴史時代の土器……………	159
			表65	胎土分析試料 比較遺跡一覧表……………	159
			表66	第三紀の地層とアンモナイト……………	162

写真図版目次

- 口絵1 遺跡周辺の地形（空中写真）
遺跡周辺の地形（空中写真）
- 口絵2 向別遺跡調査状況
栄丘遺跡調査状況
- 口絵3 昌平町遺跡調査状況
常盤町遺跡調査状況
- 口絵4 胎土分析試料偏光顕微鏡写真
- 図版1 遺跡周辺の地形（空中写真）
- 図版2 向別遺跡周辺の地形（空中写真）
- 図版3 向別遺跡
調査区遠景（南東から）
表土除去完了（北から）
- 図版4 向別遺跡
沢部埋め土除去完了（北西から）
台地部北側表土除去完了（南東から）
- 図版5 向別遺跡
沢部南側調査状況（北から）
沢部中央調査状況（東から）
- 図版6 向別遺跡
台地部土層断面
沢斜面部土層断面
- 図版7 向別遺跡
P-1完掘
P-2完掘
道跡土層断面
P S-1検出
P S-2検出
- 図版8 向別遺跡
P S-3検出
P S-4検出
P S-5検出
P S-6検出
- 図版9 向別遺跡
P S-7検出
P S-8検出
P S-9検出
鉄鍋集中1検出
- 図版10 向別遺跡
調査区南側完掘（北西から）
調査区北側完掘（西から）
- 図版11 栄丘遺跡
調査区周辺遠景（東から）
表土除去作業
- 図版12 栄丘遺跡
調査区南側調査状況（北西から）
調査区中央調査状況（東から）
- 図版13 栄丘遺跡
基本土層
調査区南側完掘（北西から）
調査区北側先端部完掘（南東から）
- 図版14 昌平町遺跡
調査区遠景（北東から）
調査区東側表土除去完了（北西から）
- 図版15 昌平町遺跡
調査区東側調査状況（北西から）
調査区西側調査状況（北西から）
- 図版16 昌平町遺跡
基本土層
P-1～4土層断面
P-9～11完掘
調査区西側完掘（北西から）
- 図版17 常盤町遺跡
調査区東側表土除去作業（北西から）
調査区中央表土除去作業（北東から）
- 図版18 常盤町遺跡
調査区東側調査状況（北東から）
調査区中央斜面部調査状況（南東から）
- 図版19 常盤町遺跡
調査区西側調査状況（北東から）
調査区中央平坦部調査状況（南から）
- 図版20 常盤町遺跡
P-1土層断面
T P-1確認
T P-1土層断面
T P-2土層断面
T P-3土層断面
- 図版21 常盤町遺跡
T P-4完掘
T P-5土層断面
T P-6土層断面
T P-7完掘
- 図版22 常盤町遺跡
T P-8土層断面
T P-9完掘
T P-10土層断面
T P-11土層断面
- 図版23 常盤町遺跡
T P-12土層断面
T P-8～11完掘
T P-1～5完掘

- 図版24 常盤町遺跡
P S - 1 検出
S - 1 検出
石錘出土状況 (N - 13区)
石錘出土状況 (M - 13区)
- 図版25 常盤町遺跡
調査区東側完掘 (北東から)
調査区西側埋め戻し作業 (東から)
- 図版26 向別遺跡
図上復原土器
- 図版27 向別遺跡
復原土器 (1)
- 図版28 向別遺跡
復原土器 (2)
- 図版29 向別遺跡
復原土器 (3)
- 図版30 向別遺跡
陶器・須恵器・土師器・胎土分析試料
遺構出土破片土器
包含層出土破片土器 (1)
- 図版31 向別遺跡
包含層出土破片土器 (2)
- 図版32 向別遺跡
遺構出土土器
黒曜石製石器産地分析試料
石製品
- 図版33 向別遺跡
包含層出土石器 (1)
- 図版34 向別遺跡
包含層出土石器 (2)
- 図版35 向別遺跡
包含層出土石器 (3)
- 図版36 向別遺跡
鉄鍋
- 図版37 向別遺跡・常盤町遺跡
アンモナイト化石
- 図版38 栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡
栄丘遺跡 出土遺物
昌平町遺跡 出土遺物
常盤町遺跡 出土古銭・破片土器
常盤町遺跡 遺構出土剥片石器
- 図版39 常盤町遺跡
遺構出土礫石器
- 図版40 常盤町遺跡
包含層出土剥片石器
包含層出土礫石器
- 図版41 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (1)
- 図版42 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (2)
- 図版43 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (3)
- 図版44 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (4)
- 図版45 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (5)
- 図版46 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (6)
- 図版47 胎土分析試料偏光顕微鏡写真 (7)

I章 緒 言

1. 調査要項

事業名：上向別浦河停車場線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道胆振総合振興局

調査期間：平成30年4月5日～令和2年3月27日（現地調査 平成30年5月7日～10月31日）

遺跡名：向別遺跡（K-07-27）

所在地：浦河郡浦河町緑町4-6、5-2

調査面積：2,400㎡

遺跡名：栄丘遺跡（K-07-23）

所在地：浦河郡浦河町緑町177-1・4、192、194-2

調査面積：800㎡

遺跡名：昌平町遺跡（K-07-58）

所在地：浦河郡浦河町昌平町73-8、10、12

調査面積：3,179㎡（当初予定：3,200㎡）

遺跡名：常盤町遺跡（K-07-57）

所在地：浦河郡浦河町昌平町103-2、104-3、105、105-2、常盤町130-3、131-2、
133-3、170-2、229-2、242

調査面積：18,121㎡（当初予定：20,000㎡）

2. 調査体制

平成30（2018）年度

第1調査部長 長沼 孝（常務理事兼務）

第2調査部長 鈴木 信

第1調査部第1調査課長 中山昭大（発掘担当者）

主 査 菊池慈人（発掘担当者）（5月21日から）

主 査 末光正卓（発掘担当者）

主 任 三浦正人

主 査 愛場和人（第2調査部第1調査課）（5月18日まで）

令和元・平成31（2019）年度（整理作業）

第1調査部長 鈴木 信（6月まで第2調査部長、10月まで同職兼務、10月から常務理事兼務）

第2調査部長 村田 大（10月から、第2調査部第3調査課長兼務）

第1調査部第1調査課長 中山昭大

主 査 菊池慈人

主 査 末光正卓

主 任 三浦正人

主 任 田口 尚

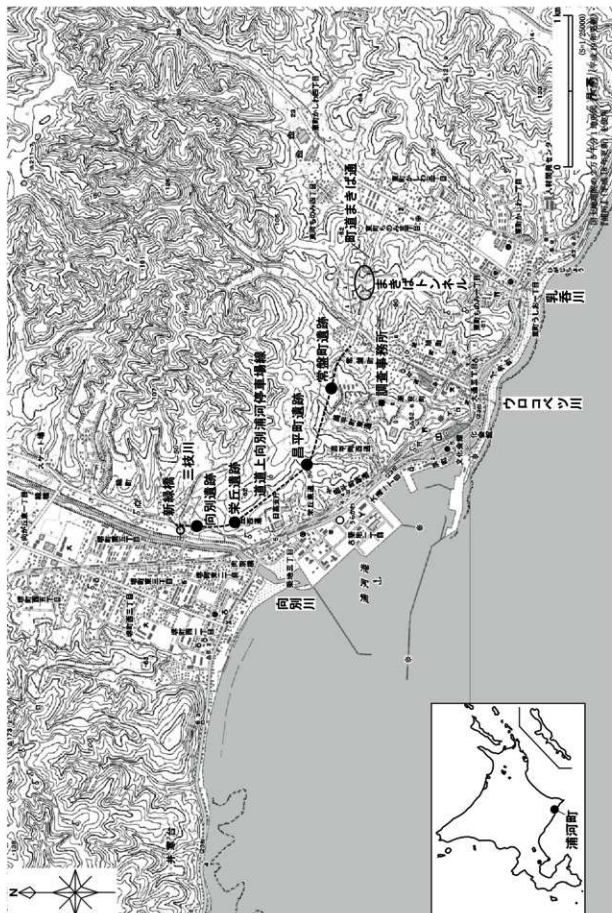


図1 遺跡位置図

3. 調査の経緯

(1) 上向別浦河停車場線 (図1)

上向別浦河停車場線は、浦河郡浦河町上向別地区の上向別神社、本沢橋付近を起点とし、同町内の昌平町駅通のJ R北海道日高本線浦河駅を終点とする長さ13.1kmの一般道道481号線である。昭和40(1965)年3月26日に路線認定された。台風や大雨、浦河沖地震等の災害時に、標高が低い海岸沿いの現国道235・236号の代替道路の必要性が昭和後半期に高まり、これに加え、大通地区市街地の交通混雑を緩和するため、同国道のバイパスの計画も持ち上がった。後者は市街地の再開発に伴い、国道の路線を変更せずに現在の線形で拡幅することとなり、平成初期に完成した。

災害時を想定した新路線は標高の高い山間部に計画された。すなわち、東町～常盤町～昌平町～緑町を結ぶ総延長2,910mの「町道 まきば通線」(路線番号3・4・4)で、平成2(1989)年3月に都市計画道路として決定された。常盤公園のある山間部は「まきばトンネル」(全長190.0m、幅員12.5m、高さ4.7m)で、平成17(2005)年3月完成し、東町と常盤町間は供用されている。これ以外の区間は、町道の計画から変更され、現在は「道道」の改築工事として、北海道胆振総合振興局 室蘭開発建設部 浦河道路事務所が事業を進めている。自然災害に対する安全意識が高まる中、平成25(2013)年に、浦河町地域防災計画で防災道路として再度位置づけられ、防災時の機能を維持・向上させる目的がある。

現在の道道は上流の向別地区では向別川の右岸を南方向に走り、下流へいくにつれ道の両側には市街地(堺町地区)が形成され、海岸沿いの国道235号に接続する。新路線は向別川左岸に「町道緑町1号線」の位置に設計されている。向別川の左岸に流れ込む「三枝川」にかかる「新緑橋」を渡って山間部に入り、栄丘西通、北海道日高振興局、昌平町西・東通、潮見ヶ丘団地、これらの東～北側に広がる山を走り、ウロコベツ川付近までの延長約2kmの緩やかな曲線である。ここからは「町道 まきば通」になる。同町道は「ウロコベツ橋」を渡って「町道 常盤町通」と交差し、「常盤公園」を「まきばトンネル」でくぐり、「乳呑新橋」で乳呑川を渡り「町道 東町西舎線」に丁字路で合流する。この一連の防災道路の主たる機能は、津波等で浸水が懸念される海岸沿いの国道235・236号の代替道路で、日高振興局、ファミリースポーツセンター(浦河町役場の災害時の代替施設)、日高地域の中核病院である浦河赤十字病院へのアクセスを確保することである。本道道の改築事業は平成28(2016)年着手、令和5・平成35(2023)年に完成予定である。

(2) 範囲確認調査(試掘調査)の概要

範囲確認調査は浦河町教育委員会が行った。路線内の第1～5地点と呼称した場所で、人力で試掘坑を掘削した。第1地点は常盤町遺跡で遺構と推定される部分が4か所みられ、包含層が残存しない約8,500㎡が遺構確認調査で、11,500㎡は包含層調査を行う通常調査で合計20,000㎡となった。第2地点(3,009㎡)は、昌平川の源流部近くの「道路センター12,900」付近で、工事立会地点と判断された。第3地点は昌平町遺跡で遺構推定部分が2か所、1,200㎡を通常調査、斜面部分の2,000㎡が遺構確認調査で合計3,200㎡となった。第4地点の栄丘遺跡は800㎡で、北東側の試掘坑の1か所が遺構と推定され、石鏝が出土した。半分の面積400㎡が通常調査となった。第5地点は向別遺跡で、遺構推定部分が4か所で、土器、石鏝、スクレイパー、フレイクが出土した。調査面積は2,400㎡のうち600㎡が通常調査と判断された。

(3) 発掘調査の経緯

発掘調査は平成30(2018)年度の5～10月に第1調査部第1調査課が担当した。現場調査事務所は「町道 潮見団地通」沿いの潮見町17番地、「忠魂碑・慰霊碑」の北側におき、各現場まで車両で移動した。各現場へのアクセスは、向別遺跡は町道緑町1号線とこれの旧道(平成8(1996)～14(2002)年工事)を利用し調査区近くまで車で移動した。栄丘遺跡は栄丘西通の借地に駐車し、平均勾配14%の斜面を登った。昌平町遺跡は栄丘東通の行き止まりの空き地に駐車し、直線距離190m標高差30mの斜面を登った。後には、調査区近くにある鉄塔の管理用道路の使用許可を得て、昌平町西通から現場まで車でアクセスした。常盤町遺跡は、潮見ヶ丘団地の北側まで車で移動しそこから徒歩と「まきば通り」から西方向の山間部へ至る沢沿いの未舗装路の山道を整備し、車両で現場に通った。

発掘調査の進行は、面積が広く時間のかかる常盤町遺跡を継続させて、これと並行して、昌平町遺跡、栄丘遺跡、向別遺跡の順で調査した。すべての遺跡は用地内に廃土置き場がないので、調査区を反転させ半分ずつ、あるいは部分的に調査を進め、完了した部分は埋め戻し廃土場等とした。また、昌平町遺跡と常盤町遺跡は未買収地があり、この部分は周囲の遺構・遺物の状況を踏まえ、発掘調査を要するかは、北海道教育委員会の指示をおおぐこととなった。結果、常盤町遺跡では東側中央付近の送電線部分も加えて、両遺跡で調査区が変更となり面積を減じた。また常盤町遺跡の南西側に保安林があったが図面で精査したところ、遺跡の範囲との重複はわずかで影響はなかった。発掘調査については地元の日高報知新聞に、6月2日(土)と7月6日(金)に記事が掲載された。

なお、遺跡やその周辺に多数自生している「オオハングソウ」について特定外来生物としての対応が必要と事業者から指示された。調査員は「特定外来生物防除作業従事者証」の交付を受け、事業者が委託した環境調査会社の指示の元、表土除去作業を進めた。飛散防止のため、この植物の種子を含有する表土をすきとり、これを含まない下部を掘削した土を上にして枯れ死させ、埋め戻しは種子を含有する表土を、これを含まない掘削土で覆う方法で行った。

報告書作成のための整理作業は平成30(2018)年11月から開始し、令和元(2019)年度に本報告書(北埋調報363)を刊行する。

4. 調査成果の概要(表1・2)

(1) 向別遺跡の調査成果(図24・25)

深さ3mの沢を埋めた厚い盛土と深く削平された造成の痕がみられ、この盛土から多くの遺物が出土した。遺構は土坑2基、土器集中9か所、鉄鍋集中1か所、道跡1条を調査した。土坑(P-1・2)は円形で調査区の北側に位置し、擦文土器が出土した。土器集中は、縄文時代早期のPS-1が最も古く、PS-3は縄文時代後期のタブコブ式の深鉢が出土した。PS-1・2・5・8・9は擦文文化期後期の甕、PS-4は須恵器、PS-7は土師器、PS-6は陶器である。PS-4・7は坏で回転糸切り痕があり、前者は棒状工具によるヘラ記号が刻まれる。PS-6は珠洲焼である。鉄鍋は内耳で、道跡は調査区の北東方向へ続く現地表土の落ち込みで、現代と判断した。

土器は1,604点出土した。擦文文化期が最も多く、縄文時代早期、中期、後期、続縄文土器もある。石器は4,334点で、剥片石器は石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、礫石器は磨製石斧、たたき石、すり石、石鏝、砥石、台石が出土した。また、遺跡に持ち込まれたと考えられるアンモナイトの化石もみつかった。

(2) 栄丘遺跡の調査成果 (図56)

昭和58(1983)年度に日高振興局建設に伴い当センターが調査した栄丘遺跡(北埋調報16)と同じ名称、登録番号が付された。本事業の栄丘遺跡と日高支庁は直線距離で400m離れ、標高差は18mあり、立地が大きく異なる。本書では「日高支庁 栄丘遺跡」と表記して本事業の栄丘遺跡と区別する。調査では、現代の土坑1基がみつかり、黒曜石の石鏃とフレイクが出土した。

(3) 昌平町遺跡の調査成果 (図58)

南西・南東側で土坑がまとまってみられ、合計11基を調査した。F-1は掘り込みに焼土がみられ、すべて現代と考えられる。土器は10点、石器は14点出土した。土器は縄文時代中期後半で、剥片石器はすべて黒曜石で、石鏃、スクレイパー、フレイクである。

(4) 常盤町遺跡の調査成果 (図66)

昌平町・常盤町の両地区に広がりの削平や盛土がみられた。遺構は土坑1基、Tピット12基、土器集中1か所、礫集中1か所を調査した。土坑P-1は円形で浅い。TピットはTP-11・12が長楕円形で、これら以外は溝状である。TP-1~5、7~11はまとまってみられた。土器集中の土器は無文で縄文時代早期前半と考えている。礫集中は石鏃が多く出土した。

遺物は土器40点、石器331点である。土器は包含層から統縄文土器が出土し、石器は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、磨製石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、台石が出土し、花崗岩や片麻岩製の石鏃が目立つ。

(末光正卓)

表1 浦河町 遺跡 遺構数一覧表

遺跡名	種別	記号	数	名称
向別遺跡	土坑	P	2	P-1・2
	土器集中	PS	9	PS-1~9
	鉄鍋集中	—	1	鉄鍋集中1
	道跡	—	1	道跡
栄丘遺跡	(現代の土坑1基)			
昌平町遺跡	土坑(現代)	P	11	P-1~11
	焼土(現代)	F	1	F-1
常盤町遺跡	土坑	P	1	P-1
	Tピット	TP	12	TP-1~12
	土器集中	PS	1	PS-1
	礫集中	S	1	S-1

表2 浦河町 遺跡 遺物点数一覧表

遺跡名	出土地点 ／遺物種別	土器	石器等	鉄製品	合計	備考
向別遺跡	遺構	284	8	18	310	
	包含層	1,320	4,326	3	5,649	
	小計	1,604	4,334	21	5,959	
栄丘遺跡	遺構				0	
	包含層		3		3	
	小計	0	3	0	3	
昌平町遺跡	遺構		3		3	
	包含層	10	11		21	
	小計	10	14	0	24	
常盤町遺跡	遺構	34	61		94	
	包含層	6	269		274	
	小計	40	330	0	368	古銭1点
合計		1,654	4,681	21	6,356	

II章 遺跡の立地と周辺の環境

1. 立地と環境 (図1・13)

北海道日高管内浦河郡浦河町は北海道日高振興局が置かれ同地方の行政拠点で、西は日高郡新ひだか町、東は様似郡様似町、北は広尾郡大樹町・広尾町と接する。南西側は太平洋に面し、北東側は日高山脈がそびえたつ。標高1000m以上の「神居岳」・「ソエマツ岳」・「ピリカスプリ」・「トヨニ岳」・「野塚岳」・「双子山」・「楽古岳」の頂を結ぶ山稜が広尾郡との行政区界である。元浦川近くの「リクスヌシ山」(428.6m)、向別川上流の「うらら湖」(浦河ダム)、西舎の「日本中央競馬会 日高育成牧場」を結んだ線より北東側部分は日高山脈の裾部にあたる山地で、浦河町内のおよそ半分を占める。これより南西側部分は、南北方向に河川と海側へ延びる山地が交互にみられる。町内の三大河川は「元浦川」・「向別川」・「日高幌別川」で、これらの間に「絵笛川」・「ウロコベツ川」・「乳呑川」等の比して小さな流れも多くみられる。これら河川の兩岸には狭い低位の平坦地が形成され、集落や農地はここと海岸付近の平坦地にみられる。

元浦川の右岸に連なる北西側の峰は新ひだか町との行政区界で、同河川と絵笛川との間は「ポロイワ山(372m)」と「二等三角点 向別山(399m)」から海へ延びる山地で、海岸近くの標高は100m程度である。絵笛川と向別川との間は、標高368mの「高津山」から海側へ、標高173mの「二等三角点 井寒台」がある山地が広がる。向別川と日高幌別川との間の山地は比して幅が広く、標高200～100mの山頂が散見される。様似町との行政区界は、海の近くは「鞆苦川」、西舎付近から上流部は日高山脈に続く峰である。

浦河町内の国道は「大通」交差点から、西方向へは「235号」で新ひだか町から苫小牧方面へ海岸沿いを走る。東方向の「236号」は「西幌別」交差点で北方向の山側に向かい、海岸沿いの国道は「336号」である。前者は天馬街道の愛称で知られ「野塚トンネル」の山間部を通り、後者は襟裳岬を經由し海岸沿いにのびている。両国道は、十勝地方の広尾町豊似地区で合流した後、さらに分岐し236号は内陸の帯広市街、336号はおよそ海岸沿いに浦河町につながっている(ともに重複区間を除く)。

JR北海道日高本線は非電化の単線で、「下り」方向で浦河町内を概観すると、新ひだか町三石地区から内陸部を走り、元浦川の右岸、河口から約1.5km上流にある「荻伏駅」につく。駅から同河川を直線で渡り、東栄地区の山間部を緩やかに蛇行し標高50m付近の鞍部をトンネルで抜け、絵笛地区に出る。最高標高173.0mの井寒台付近は山裾が海岸近くまで広がり、線路は内陸部へ迂回し、線形は直線が長く曲線が少ない。「絵笛駅」付近を過ぎて、「道道 静内浦河線」と平行し、トンネルをくぐり、向別川右岸の平坦地に出て海方向に向かい、同川の河口で左に転じ「浦河駅」に至る。ここからは山地の裾かつ海岸近くを走り、潮見町の細長く突き出た台地を長いトンネルで通過する。ウロコベツ川を渡り、海岸沿いに出て国道236号と立体交差し「東町駅」である。そこからは国道沿いに海岸のそばを走り「日高幌別駅」につく。日高幌別川の兩岸に広がる低地を緩やかな右曲線で走り、鞆苦川を渡る手前で国道と交差し、様似方面へと向かう。日高本線は、近年の台風等の自然災害で多大な被害を受け、さまざまな事情で復旧が進まず、平成30(2018)年12月に越川～様似間の廃止が決定し、バスでの輸送転換となった。他の長距離交通機関は高速バスで、道南バスとJバスが札幌と新千歳空港まで運行されている。

気候は、夏は太平洋に吹く「やませ」の影響で気温が低くて霧が多く、冬は降雪が少ない。発掘現



図2 遺跡周辺の状況(1) 明治年間

場では、海からと海へ向かう南北両方向の風が強いことを体感した。春頃に調査した昌平町遺跡では、濃霧がひどく先を見通せない時もあり、向別川河口近くの水面に濃霧が発生したことも記憶している。山頂部にあたる常盤町遺跡は強風が絶えず、秋頃は寒さを一段と感じた。

浦河町の主な産業は牧業、農業、漁業である。西舎地区にはJRA日本中央競馬会の育成牧場がおかれ、日高地方全域は競走馬の産地として広く知られ、観光客が訪れる。農産物は夏いちごが有名で、酸味が強く洋菓子用に需要が多い。漁業では「日高昆布」が有名である。

2. 遺跡周辺の環境と地名 (図1・5～12 口絵1 図版1)

JR日高本線浦河駅から直線距離で、北北西に950mで向別遺跡、同方向750mで栄丘遺跡、北東方向に300mで昌平町遺跡、東方向に700mで常盤町遺跡がある。これらは浦河駅の後背に広がる山地あるいは台地に位置し、いずれの遺跡からも海が望める。向別川とウロコベツ川の間に位置し、「北海道日高振興局」(日高支庁 栄丘遺跡)の北側には「標高62mの頂部」、南東方向に「標高84.8mの広い頂部」がある。両頂部をつなぐ尾根は分水嶺となり、北東側は「三枝川」が西方向へ流れて向別川の左岸に注ぎ、南東側は複数の無名の沢がウロコベツ川に流れ込んでいる。海側は小河川の「栄丘川」・「昌平西川」・「昌平川」が流れている。「62m頂部」の北西側斜面の下部、標高18～20mの平坦地に向別遺跡、同頂部から西方向への斜面の標高35m付近に栄丘遺跡が位置する。「84.8m頂部」から西側に続く尾根の標高50mの鞍部付近に昌平町遺跡、同頂部から南南東方向の「標高65.2m」と「標高59.4m」がある台地上が常盤町遺跡である。

向別遺跡(図5・9)は向別川を西に望む左岸の河岸段丘に立地し、三枝川とその支流が北側を西流し、向別川に流れ込む地点である。現況は平坦地であるが、調査では台地が削平され沢が埋められた地形の改変がみられた(図5)。この沢は南東から北西方向にみられ、向別川へ流れ込んでいたのであろう。現在は水の流れるはないが、降雨後は水はけが悪かった。調査区の西側は町道緑町1号線が南北に走り、三枝川を「新緑橋」で渡る。調査区の南西側は雑木林で、北東側は背丈以上のイタドリが自生していた。

栄丘遺跡(図6・10)の現況は雑木林で、浦河町の配水池と管理用の電気設備がある。現場に至る山腹には古い配水池が2か所残っており、古くは昭和8(1933)年頃と推測される(「浦河百話」第46話)。工事図面(図10)では調査区の南西側と下位にある配水池近くに、沢の流れが図示されている。遺跡からの眺望はよく、北～西側は向別川河口と向別遺跡、南西方向は浦河港がみえる。図6に示した日高支庁 栄丘遺跡はこの尾根の南斜面の裾部、本遺跡から見下ろす位置である。

向別遺跡と栄丘遺跡の北東側は同じ牧場に接している。この所有者の話では、牧場を整地したときに多くの遺物が出土したという。西側に位置する向別遺跡は沢の埋め土から多くの遺物が出土し、南側に位置する栄丘遺跡では、試掘で遺構の覆土と予想された土層は造成による盛土と判明した。

栄丘川と昌平西川に挟まれた地点が昌平町遺跡(図7・11)である。現況は原野で、遺跡の東側は昌平西川が流れる急な谷で、調査区全体は北西側への斜面である。この斜面の下部を栄丘川が西へ流れる。「浦河町史」に「昭和42年8月に「昌平台」の宅地造成計画」(202頁)と記載があり、JR浦河駅の北側に広がる台地の通称と考えられる。

常盤町遺跡(図8・12)は、潮見ヶ丘団地の北側の台地に位置する。東側に町道「まきば通」があり、遺跡の北側に登る山道が分岐し、これ沿いに流れる無名の沢はウロコベツ川に注いでいる。この山道は図8では調査区の北側で分岐し、一方は尾根上を「標高84.8m頂部」まで、もう一方は調査区

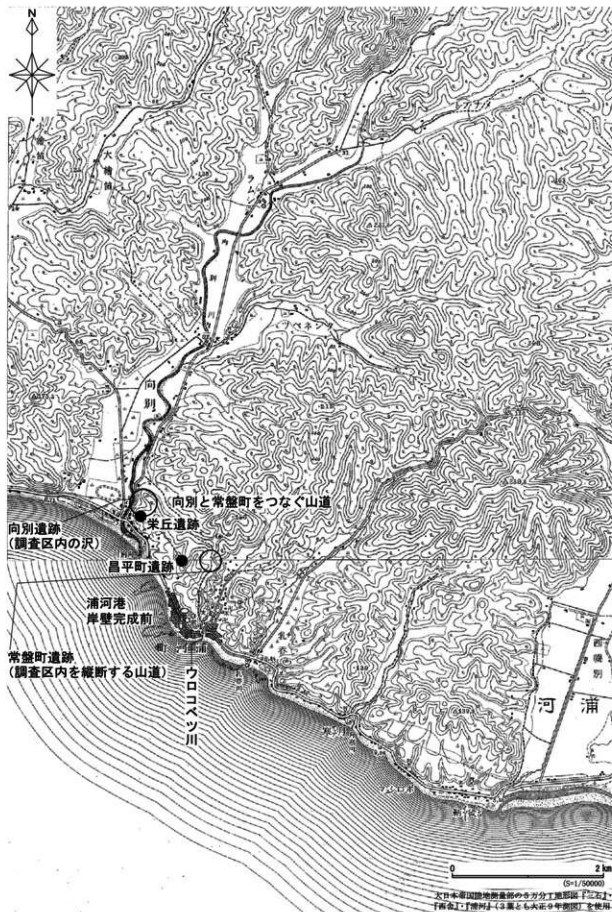


図3 遺跡周辺の状況(2) 大正年間

の西側にある沢まで続いている。西側の沢は水流の表記はないが、昌平川の支流である。遺跡の現況は原野で、調査区は瓢箪形でそれぞれの中心部が高い。かつては牧場で、東側は削平と周縁に盛土がみられた。調査区北側の中央付近から南東方向へは道が造られており、地山まで削平されていた。これ沿いに水道管が埋設されていたが、発掘調査での掘削より深いので影響はなかった。また、南側の中央付近から北西方向に送電線が走り、送電塔（様似線10号）が調査区内に位置するが、クリアランスを含め調査は不要となった。

町名の「浦河」はアイヌ語の「ウララ(リ)・ベツ」で霧のかかる川の意味で、転じて「ウラカワ」になった。この名称がつけられたのは获伏地区の「元浦川」で、当初ここに「浦川場所(会所)」がおかれた。浦川(河)場所は、後にJR浦河駅周辺近くの「ムコチ」に移動したため、「元」=昔の・ももとの「浦川(河)」の名称が河川名に残った。この「ムコチ」は「ムクオチ」、「ムクチ」、「ムクベツ」、「モコチ」、「モコベツ」と表記され、向別川(ムクオベツ)のことで、狭義には河口付近、現在の栄丘、昌平町、大通の西側部分を指し、広義では同河川の流域沿いの呼称である。「向地川」と表記された時期もあり、アイヌ語の「モコ・ツチ」または「モコ・プチ」で、「静かな・谷間、またはくぼみ」の意味で、風が強い海岸沿いの浦河町内で、比して穏やかな場所と解する。現在の字「向別」は、同市街地の北側の向別川と「タンネベツ川」の合流点より両河川の上流側に残る。

遺跡名の「昌平町」と「常盤町」は昭和10(1935)年の字地番変更でつけられた。昌平町の旧名称は、「浦川」や「ボンナイブト」等で、ボンナイブトは昌平西川と判断される。常盤町は「鱗別」で近くを流れるウロコベツ川のことである。これらは和名で、由来について説明している記録はみられない。土地に由縁のある者の名前や苗字の可能性はあるが、広辞苑で、昌平は「国運が盛んで、世の中が平和なこと」、常盤は、松や杉の木の緑色あるいは岩などに対して人間が感じる「永久に不滅なこと」の意味とあり、これら縁起のよい言葉を付したと思われる。

昭和56(1981)年、向別川下流域の住居表示が公示され、向別遺跡が位置する「緑町」と、遺跡名の「栄丘」が生まれた。前者は地元が要望した名称で、後者は古くからの通称を採用したようで、緑町は自然豊かな場所で、栄丘は繁栄への思いと解されるが、入植者の苗字から「堺町」と付けられた向別川流域の平坦地(さかい・さかえ)を見下ろす丘の意味もあるかもしれない。

3. 文献や旧地形図の情報

・江戸時代末期

松浦武四郎が記録した名称のうち、遺跡周辺の地名・河川名称について述べる。

・『東部 保呂辺郡 誌』(ほろべつ) = 日高観別川

「ウロコベツ」：ウロコベツ川(鱗別川)で、「草を干してから川につけた」あるいは「シカの死体を箱に入れて俵に包んだもの=フロコ」の由来が記されている。どちらの解釈も釈然としない。「ウロコ」はアイヌ語で交接するとの意味があり、魚類の産卵が多い河川であった可能性を指摘しておく。

・『東部 牟古辺郡 誌』(むこうべつ) = 向別川

「ムコベツ」：向別川が海に注ぐ河口で、明治年間には屈曲して東側に位置し(図2)、昭和19(1944)年では西側に移動し(図14)、昭和51(1986)年では現位置にみられ(図4)、砂浜海岸の形成過程で自然に流路が移動したと考えられる。現在、かつての河口は埋め立て地(築地)で、現況は確認できない。また「南瓜石(かぼちやいし)」と呼ばれる石が出土すると記され、「アンモナイトの化石」が古くから知られ、貝の化石であると解釈されている。



図4 遺跡周辺の状況(3) 昭和年間

「ウツタブルウシュ」(ウツタホロセ)：しけの時、魚のエイ(=ウツタ)が川に上ってきたことが由来と記されている。現在の栄丘川と推測している。

「ヲサルンナイ」：「アシ」と「ハギ」がうっそうとしていることが由来で、現在の三枝川と考えられる。この付近の向別川の西岸(右岸)は、はんの木や柳が多く、場所請負人の支配人が作った畑地があったが大雨で流されたと記されている。

・明治年間(図2)

明治29(1896)年の陸地測量図の五万分の1地形図「姨布」・「杵臼」・「浦河」を合成した。山地の形状が正確でない。掲載した範囲外に、海岸沿いの道に「自根室至苫小牧道」と表記がある。向別川の左岸には、道が現在の「向別中央橋」付近まで続き、下流域の右岸は低地(湿地)である。遺跡周辺の河川を位置から判断する。「ウツタブルウシュ」(=ウツタホロセ)は現在の栄丘川で、蛇行する向別川河口の左岸に注ぐ。「ボンナイプト」は昌平西川で、「ボン・ナイ・プト」=小さい・沢の・川口の意で、「オサルンナイ」(ヲサルンナイ)は三枝川で、「オ・サル・ナイ」で、河口に・葦原がある・川と解される。

井寒台(井寒臺村)の「チャシコツ」は「井寒台チャシ跡」である。また、町内で最も遺跡が多い西舎地区、日高幌別川とビバウ(現在のケバウ)川の間に、日高育成牧場内に源流部をもつ段丘沿いの流れと「ニシチャ」と記載がある。浦河百話「第34話」では、「西川(西舎川)」という名称と、この川と別に灌漑用水路を造ったとの記述がある。同牧場内には、現在三つの流れがあるが、名称の記載があるのは西側の山地の裾を流れる「ケバウ川」のみである。無名の二つは、平坦地の東側の崖下の流れと、その東あるいは南側に平行する直線的な流れである。前者の崖下の川は「ニシチャ川(西舎川)」、後者の直線的な流れは用水路と判断される。現在の地形図に「西舎川」の記載がないのは、明治年間の地形図にある名称「ニシチャ」が、河川名でなく地名と解されたためと思われる、以後の大正年間の地形図では「西舎」の名称は、地名として牧場付近に記載されている。

また「浦河町史」に明治39(1906)年「原野道路 向別川沿道路」が向別川沿いに、長さ1里19町11間5分(6km弱)で建設されたこととある。終点は現在の「目名太橋」のやや上流付近と判断され、百戸の住民生活が便利になると記されている。

・大正年間(図3)

大正9(1920)年測図の五万分の1地形図「三石」・「浦河」・「西舎」を合成した。向別川下流の右岸に「競馬場」があり、河口の右岸には海岸に沿った細長い等高線があり、砂丘があったと読み取れる。向別遺跡には、北西に開く「沢地形」が図示されており、調査区内の埋められた沢もこれの一部と考えられる。また、浦河市街地の北東側から浦河小学校のそばを通り、山間部に向かう小道(破線表記)がある。山間部で北西方向に曲がり、尾根から細長い形状の沢地形を下って三枝川沿いを行き、向別川の左岸に至る山越えの道である。この小道の現在は、南側部分は「潮見ヶ丘団地通」、その北側部分は常盤町遺跡の調査区でみられた山道である(図8・12)。

また、大正11(1922)年に「町村道 向別川沿道路」の名称で向別川沿いの「甲線」と、「茅名太橋」(現在の目名太橋)から分岐する支流の「メナブト川」沿いの「乙線」を延長工事したと「浦河町史」に記録がある。

・昭和21年頃(図14)

前掲の大正年間の地形図に一部加筆し、昭和21(1946)年11月30日に内務省地理調査所が発行した地形図である。加筆された主な情報は、昭和12(1937)年夏に様似まで開通した国鉄日高(本)線の線路であり、他に、向別川下流の右岸の競馬場の東(現在の堺町2丁目)に細長い建物が密集してみ

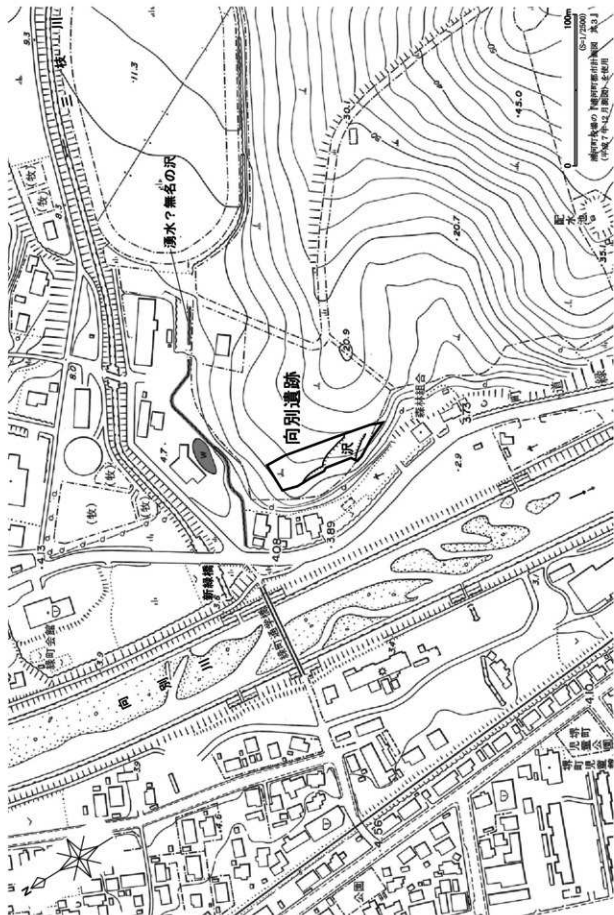


図 5 向別遺跡 周辺の地形 (都市計画図)

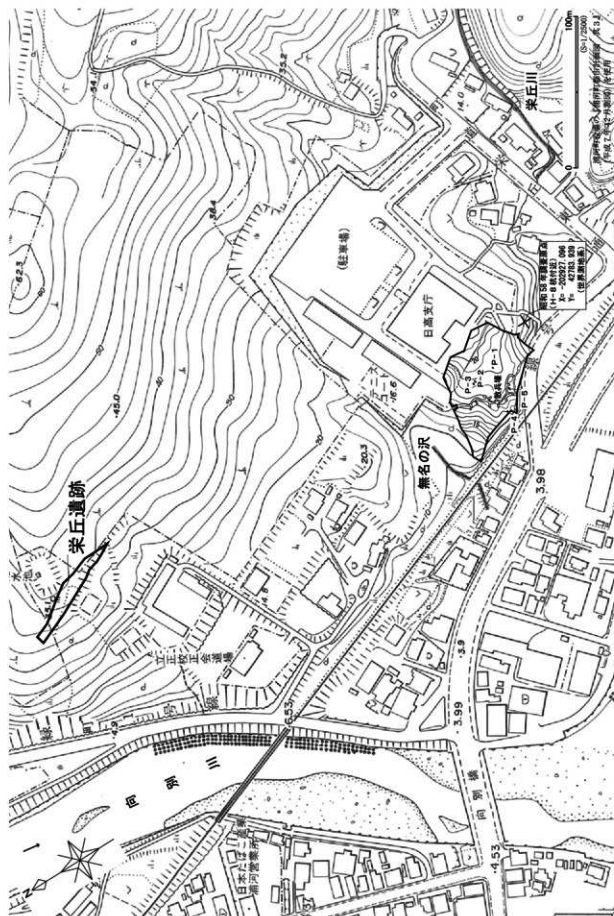


図 6 栄丘遺跡・日高支庁 周辺の地形 (都市計画図)

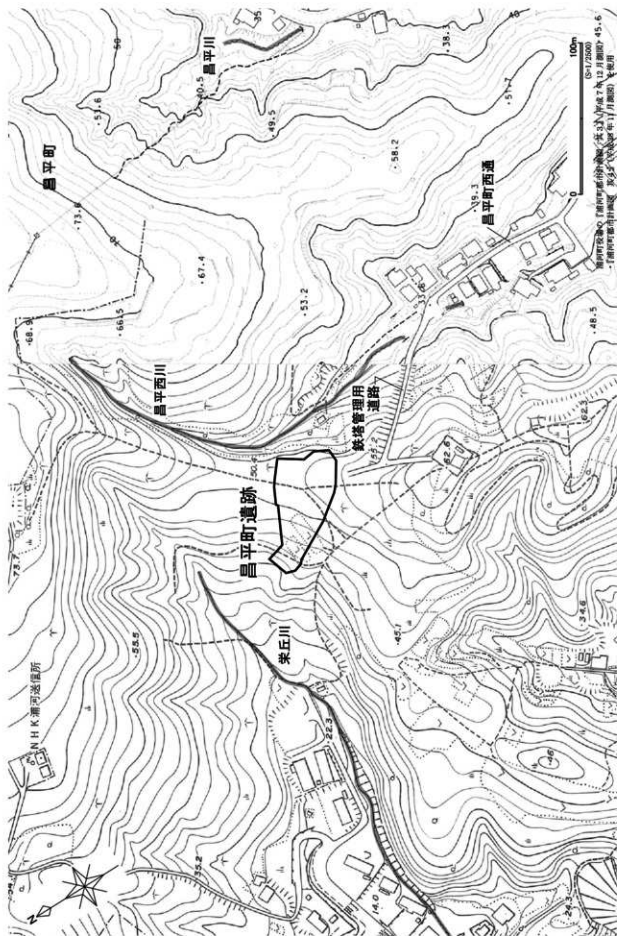


図7 昌平町遺跡 周辺の地形 (都市計画図)

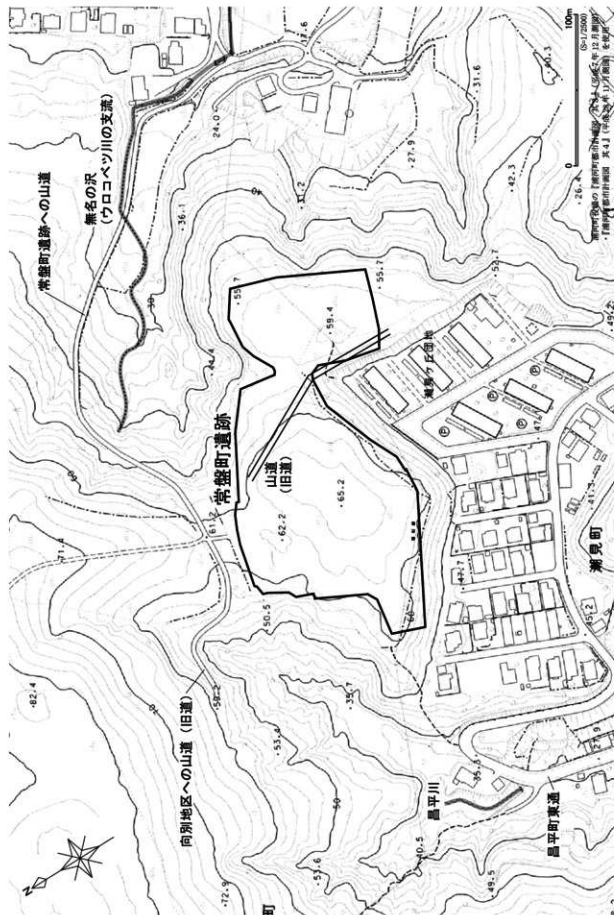


図8 常盤町遺跡 周辺の地形 (都市計画図)

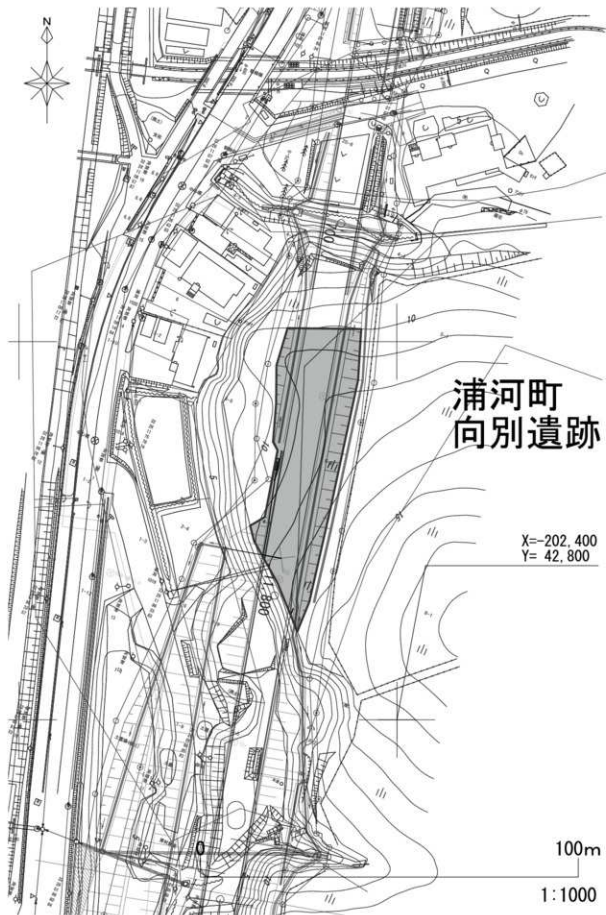


図9 向別遺跡 現況図 (工事図)

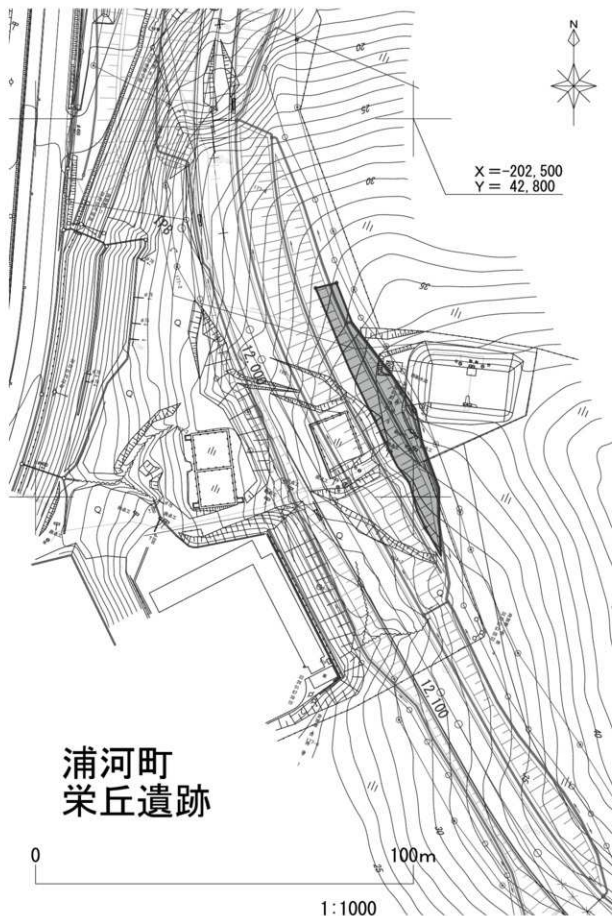
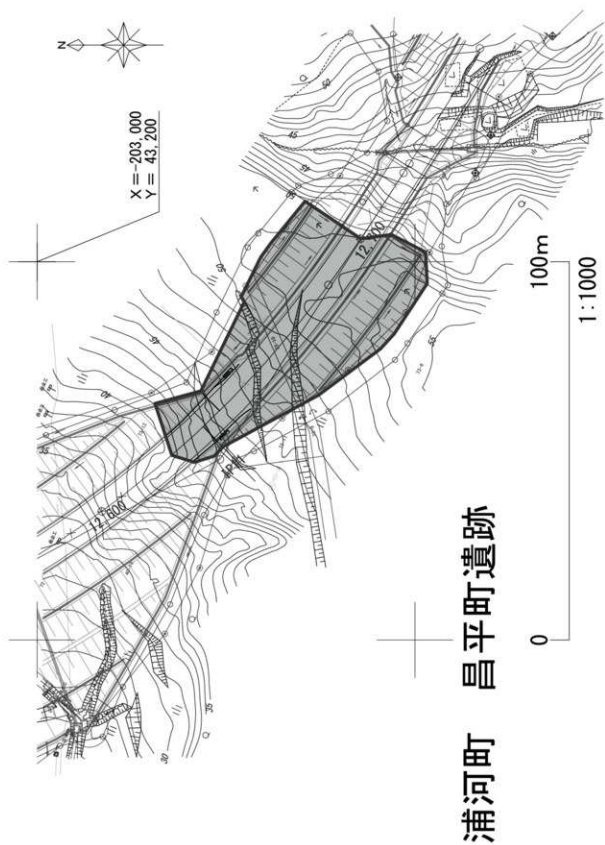
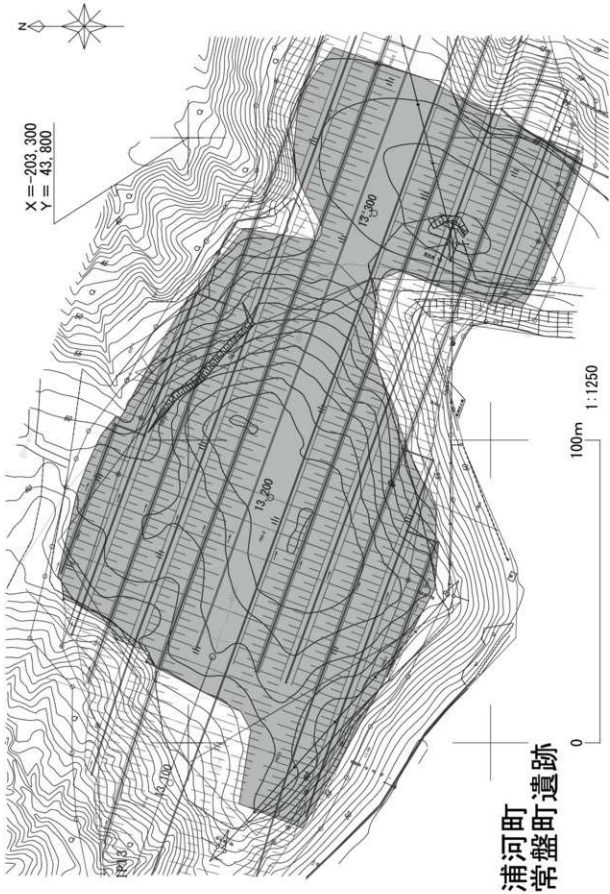


図10 栄丘遺跡 現況図 (工事図)



浦河町 昌平町遺跡

図11 昌平町遺跡 現況図 (工事図)



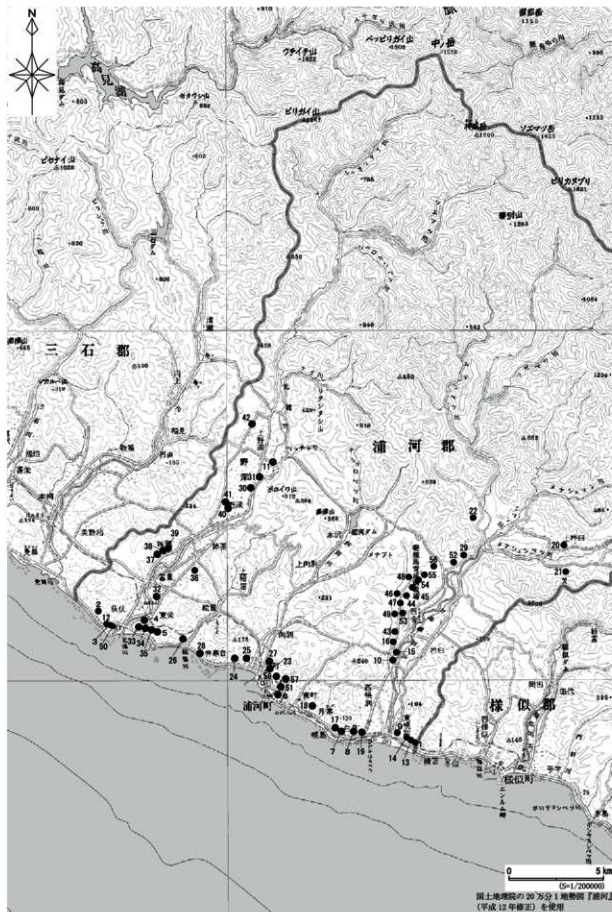


図13 浦河町内の遺跡

られる。これらは昭和13～15（1938～1940）年に建てられた陸軍第7師団第7工兵連隊の「向別兵舎」で、戦後は引揚者住宅となった。さらに、井寒台の山地の東側に、細長い長方形があり、人工的な地形の変更がみられる（本章5節）。

・昭和50年代（図4）

昭和51（1976）年の2万5千分の1地形図「浦河」・「西舎」を合成した。浦河港の北西側部分、現在の「築地」は埋め立て前で、日高振興局も移転前である。向別兵舎跡地は「向別中学校」になり、同校は現在、堺町東に移転し浦河第一中学校と名称も変更された。

向別遺跡は、20m等高線は沢状に「U」字状にみられるが、10m等高線は大きな屈曲がみられず、調査区内の沢は、この頃までに埋められたようである。栄丘遺跡には「川添」の地名がある。この付近は、かつて向別川の河口で「川添」は「向別川沿い」の意味で、異なる漢字で表記された通称と解される。また、常盤町遺跡内に現在も位置する送電線が完成している。

4. 浦河町内の遺跡（図13・表3）

現在、浦河町内では58か所の遺跡が確認されており、これらについて研究・調査史の概略を述べて、河川水系等の地域ごとに記述する。図13の数字と本文の遺跡名の語尾の丸括弧くくり数字は登録番号である。

（1）調査・研究史

・戦前

明治年間、坪井正五郎が北海道内の考古学資料を調査した報告が「（一八）古物出所拾遺 同国（日高国）浦河郡浦河の郡役所の後の山からは石鏃も出るし貝塚土器も出る、石斧も出た事が有る」と東京人類学会雑誌に掲載された（坪井 1888）。

昭和12～13（1937～1938）年、関正が「測候所遺跡」を試掘調査し、続縄文時代の土器と黒曜石の石器を発見している（関 1940）。

これら報告されたのは潮見台遺跡で、浦河町内に遺跡があることは古くから知られていた。

・昭和20年代

荻伏地区の国道の切替工事で遺物が見つかり、昭和27（1952）年頃、地元の学校教諭らが調査したのが浜荻伏1・2・3遺跡である。

・昭和30年代

昭和33（1958）年、西舎遺跡（西舎小学校校庭遺跡）が発見され、その年と翌年に発掘調査された。昭和35（1960）年、開館予定の郷土資料館の展示遺物の収集と町史編纂に向けた調査のため、「浦河町郷土史研究会」が町教育委員会内に組織され、「日高地方郷土史研究協議会」も発足した。同年、浜荻伏1・2・3遺跡と白泉遺跡が発掘され、白泉遺跡の調査は5ヶ年続いた。昭和36（1961）年、荻伏地区にある赤心社の事務所を改修し「浦河町郷土館」が開館し、浜荻伏2遺跡が調査された。昭和37（1962）年は東栄遺跡、昭和38（1963）年は東幌別地区の三つの遺跡と西舎牧場内の遺跡（西舎2・3遺跡）が調査された。昭和39（1964）年には、郷土館が「浦河町立郷土博物館」として堺町に移転し、荻伏は「郷土館荻伏分館」となった。また同年度「文化財保護と町立郷土博物館の整備充実」がはかられ、西舎日高種畜場放牧地遺跡（西舎2・3遺跡）、東幌別地区の遺跡が調査された。

・昭和40年代

昭和40（1965）年、東白泉遺跡と潮見台遺跡が調査された。昭和41（1966）年には「浦河文化財少年団」が組織され、昭和43（1968）年は西舎牧場第1地点遺跡（西舎2遺跡）と上野深地区で調査が行われた。昭和44（1969）年に「浦河町の遺跡」、昭和46（1971）年に「浦河町史」が刊行され、これまでの町内の埋蔵文化財の調査成果がまとめられた。同年、道道浦河大樹町線（現国道236号線）の改良工事に伴い緊急調査が行われ、西舎小学校近くにCトレンチ、日高種畜牧場側にD・E・Fトレンチが設けられた。詳細な地点が不明であり、本稿では西舎2遺跡として情報をまとめた。昭和49（1974）年、荻伏の郷土分館は「赤心社記念館」に改称した。

・昭和50年代～末

昭和50（1975）年に西舎遺跡、昭和52（1977）年に上野深遺跡が調査された。昭和53（1978）年に郷土博物館が現在の西幌別に移転し、昭和55（1981）年頃、北海道教育委員会による一般分布調査で、遺跡の登録番号が付され、名称等の情報が整理された。昭和56（1986）年、上東栄遺跡が発見された。昭和58（1983）年の日高支庁 栄丘遺跡の調査は浦河町内における当センター初めての調査である。昭和63（1988）年は、農道改良工事に伴い浦河町教育委員会により東栄2遺跡が調査された。

・平成前半期

平成元（1989）年に西舎遺跡、平成3（1991）年度には西舎3遺跡の範囲確認調査が行われ、翌年は同遺跡の立会調査が行われた。平成5（1993）年頃から、西舎地区の日高種畜牧場用地がJRA日本中央競馬会と浦河町に譲渡されることとなり、日高育成総合牧場施設の建設や浦河優駿レゾナエール建設に伴う大規模な緊急発掘調査等で、浦河町内での発掘調査が最盛期となり、平成10（1999）年まで継続した。

平成5（1993）年度：西舎3遺跡・西舎6遺跡・西舎7遺跡・西舎8遺跡

平成6（1994）年度：西舎遺跡・西舎3遺跡・西舎6遺跡

平成7（1995）年度：西舎3遺跡・西舎5遺跡・西舎6遺跡・上野深2遺跡（農道改良工事）

平成8（1996）年度：西舎3遺跡・西舎6遺跡・西舎8遺跡

平成9（1997）年度：西舎遺跡・西舎2遺跡・西舎4遺跡・西舎5遺跡・西舎8遺跡

平成10（1998）年度：西舎5遺跡

・平成後半期～令和

平成14（2002）年には「新浦河町史」が上梓され、西舎地区の遺跡の調査成果が公表された。

平成30（2018）年、道道上向別浦河停車場線道路改築事業で向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡を当センターが発掘調査し、令和2（2020）年3月に本書で報告する。現在建設中の高規格道路「日高自動車道」は浦河まで計画され、この建設工事を契機に新たな遺跡の発見が期待される。

（2）河川ごとの地域

・日高幌別川上流域 上杵臼・西舎地区

上杵臼小学校台地遺跡(20)では燃紐圧痕文土器や石器が出土し、現在は廃校である。上杵臼西島遺跡(21)はムロコバツ川を見下ろす縄文時代中期の遺跡で、春別遺跡(22)は日高幌別川の右岸の低位段丘で石器が出土した。

・日高幌別川中流域 西舎地区

西舎地区は、日高幌別川を見下ろす平坦な段丘に、縄文時代早期・前期を主体とする遺跡が連続して広がり「西舎遺跡群」と呼ばれる（浦河町 2002）。

西舎遺跡(10)は古くから知られており、かつての西舎小学校の校庭に位置する。大型の堅穴住居跡と東銅路式系土器の良好な資料や石刃鎌がみつきり、魚骨回転文が施された土器がある。

西舎2遺跡(15)は縄文時代早期・前期で、堅穴住居跡やTピットがみつきり、出土土器は縄文時代前期後半の静内中野式の細分型式「西舎式」が検討された。

西舎3遺跡(16)は縄文時代早期の堅穴住居跡や土坑が複数みつきり、土坑は列状に位置するものがある。遺物は底面にホタテガイの圧痕がある晩式土器、東銅路式系土器、石刃鎌が出土した。

西舎4遺跡(43)は堅穴住居跡やTピットが調査され、糸市式・北筒Ⅲ式や石刃鎌が出土した。

西舎5遺跡(44)は、地床炉と石組炉をもつ堅穴住居跡や土坑が多数みつきり、掘り上げ土を伴うTピットも確認された。土器は、網文式・美々7式・シュブノツナイ式(押型文)・植苗式・大麻V式・柏木川式・堂林式・タンネトウシ式等の各時期にわたり多様で、日高地方で初の出土例もある。石器は、一般的な器種に加え石刃鎌やアンモナイトの化石、岩偶もみつきり、浦河町内で最大規模の遺跡であろう。

西舎6遺跡(45)では3ヶ年の調査でTピットが694基みつきり、一つの遺跡では道内最多である。堅穴住居跡や遺物集中も調査され、縄文時代中期の復元土器がある。

西舎7遺跡(46)は縄文時代早期の集落跡で、小ピット群もみつきり、**西舎8遺跡(47)**は縄文時代早期・前期で、土坑やTピット、焼土が調査された。

西舎9遺跡(48)は石鎌やフレイク、**西舎10遺跡(49)**は縄文時代早期の土器、**西舎11遺跡(53)**はフレイクが出土した。**西舎12遺跡(54)**と**西舎13遺跡(55)**では、縄文時代の土器・石器、**西舎14遺跡(56)**からは石皿が出土した。

キムンチャシ跡(29)、**オバケ川左岸遺跡(52)**は、日高観別川とオバケ川の合流点付近、オロマップキャンプ場へ至る未舗装路沿いに位置する。前者はアイヌ文化期で、後者は縄文時代のフレイクがみつきり、

た。

・鶴岡川下流域 東幌別地区

鶴岡沢A遺跡(1)は北大式と捺文土器が出土し、対岸は様似町の鶴岡沢遺跡である。**東幌別遺跡(9)**は縄文時代早期の組紐瓦痕土器や前期の静内中野式土器が発見され、**東幌別2遺跡(13)**はアイヌ文化期の貝塚と記され、**東幌別3遺跡(14)**は静内中野式等の縄文土器がみつきりしている。

・JR日高本線日高観別駅〜東町の海岸沿い 西幌別・白泉・月寒地区

赤川川口遺跡(19)は捺文文化期で、昭和40年代に国道改修工事で消滅した。**東白泉遺跡(8)**で発見された焼土と複数の柱穴は平地住居跡と考えられ、当時「みぞ」と報告された遺構はTピットである。

白泉遺跡(7)は5ヶ年にわたる調査で続縄文時代の墓坑が13基みつきり、**幌島遺跡(17)**ではスクレイパーと磨製石斧、**月寒遺跡(18)**では石鎌と石槍が出土した。

・ウロコベツ川流域 潮見町・常盤町地区

潮見台遺跡(6)は古くから知られている遺跡で、海へ突き出す細長い丘陵上に位置し、縄文時代中期と続縄文時代の遺物が出土した。**潮見1遺跡(51)**は縄文時代の石器がみつきり、**常盤町遺跡(57)**ではTピットや遺物集中を調査した。

・昌平町・緑町地区

昌平町遺跡(58)は縄文時代中期で、**日高支庁 栄丘遺跡(23)**では土坑が調査され、静内中野式土器が出土し、戦時中の壘壕がみつきり、**栄丘遺跡(23)**では黒曜石の石鎌とフレイクが出土した。

・向別川下流域 緑町・堺町地区

向別遺跡(27)は、調査区内の沢を埋めた土から遺物が多く出土した。縄文時代後期のタブコブ式や捺文土器の復元個体が多く得られ、須恵器、土師器、珠洲焼陶器、内耳鉄鍋が出土した。**堺町遺跡(25)**は続縄文時代と捺文文化期の土器がみつきり、

た。

・井寒台・絵笛地区

井寒台遺跡(24)では、統縄文時代の土器・石器がみつまっている。井寒台チャシ跡(28)は「チャシコツ」の地名からチャシ跡と伝えられ、絵笛遺跡(26)は北大式土器が出土した。

・元浦川下流域 東栄・荻伏地区

元浦川河口の両岸は、西舎地区に次いで遺跡が多い場所である。左岸は東栄地区、右岸は荻伏地区(浜荻伏)である。

東栄遺跡(5)はアイヌ墓地で陸軍の演習場にもなった。縄文時代早期・前期の土器と完形の擦文土器がみつかった。東栄2遺跡(4)は後北式の完形土器が発見され、縄文時代晩期以外の土器が出土した。東栄3遺跡(33)はフレイクが出土し、東栄4遺跡(34)の土器は時期が不明である。東栄5遺跡(35)は磨製石斧や石皿がみつかり、上東栄遺跡(32)出土の堂林式土器4個体は浦河町指定有形文化財である。

浜荻伏1遺跡(3)は縄文時代中期で、円筒土器上層式や北海道式石冠が出土した。浜荻伏2遺跡(12)は恵山式土器が出土し、現在は国道235号の下である。浜荻伏3遺跡(2)は縄文時代前期の静内中野式土器がみつかった。浜荻伏4遺跡(50)は石鏃とフレイクが出土した。また、出土地点は不明であるが、浜荻伏で採集された擦文文化期の紡錘車がある(浦河町 2002 116頁)。

・元浦川中流域 瑞穂・姉茶地区

瑞穂遺跡(39)、瑞穂第1チャシ跡(37)と瑞穂第2チャシ跡(38)は、元浦川の支流ウツシナイ川の右岸に並んで位置し、後二者はアイヌ文化期である。上流の姉茶遺跡(36)では円筒式土器がみつまっている。

・元浦川上流域 野深地区

野深遺跡(30)は縄文時代早期・前期、野深2遺跡(31)は縄文時代中期と統縄文時代の遺物が出土し、野深3遺跡(40)と野深4遺跡(41)は時代が不明である。

野深地区の上流部分は「上野深」と呼ばれ、上野深遺跡(27)では住居跡とみられる掘り込みが確認され、後北式や北大式土器、須臾器が出土し、シカの骨もみつかった。上野深2遺跡(42)はTビットが多数調査され、石鏃やスクレイパー等が出土した。

5. 浦河町に駐屯した日本陸軍(図14 表4 図版1・2)

当センターが昭和58(1983)年に調査した「日高支庁 栄丘遺跡」(北埋調報16)で塹壕が発見された(図6)。深さ1.2~1.5mの楕円形が9か所と、これらをつなぐ深さ1mの曲線的な溝がみられる。前者は、かがんだ姿勢で射撃する「個人壕」(タコツボ)、後者は体を低くして移動する「交通壕」で、合わせて「散兵壕」と呼ばれる日本陸軍に特徴的な構造である。射撃方向は向別川河口とその周囲の砂浜へ向けられており、遺物は全く出土していない。この塹壕は船舶工兵連隊に関連するものと同報告書で解されている。本節では、表4に戦時中の北海道内の陸軍の動きをまとめ、日高支庁 栄丘遺跡に残された塹壕を構築した部隊について述べる。

(1) 昭和18(1943)年頃まで

「浦河百話」第96・100話では、昭和12(1937)年春頃、第7工兵連隊 第3中隊130名が浦河に来たとある。この工兵部隊は、大発動艇(大発)等の沿岸海域や河川で用いる小型船舶を装備し、堺町の南西側に兵舎・厩舎(「向別兵舎」と呼称する)を建て、浦河港内や井寒台の浜等で上陸訓練を行った。

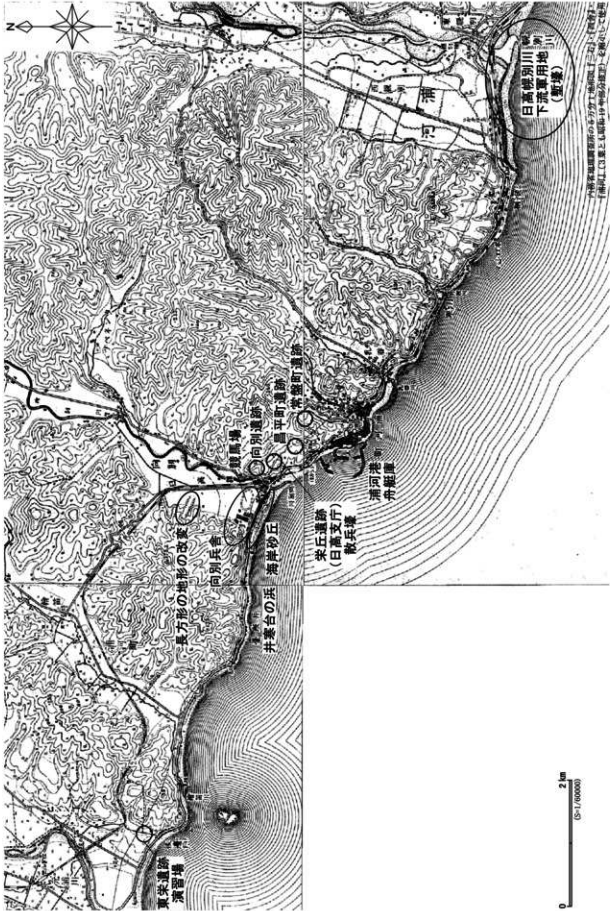


図14 浦河町内の軍隊

その後、昭和18(1943)年6月には、駐屯していた工兵部隊は浦河を去ったと記されている。

第7師団は2年間の満州での駐屯を終え、昭和15(1940)年10月6日に北海道旭川に帰還した。満州で同師団は国境紛争「ノモンハン事件」でソ連と激戦を経験した。当時、北海道地方は樺太や千島列島を含めて軍事上「北東方面」と呼ばれ、ソ連に対する防衛に主眼がおかれていた。アメリカと開戦すると、東方向から同国の攻撃が予想され、北海道の本土防衛は、直接アメリカ・ソ連に対峙する意味合いが強く、北海道唯一の師団であった同部隊はこれに備えるため旭川に戻った。

『戦史叢書 陸軍北東方面作戦(1)』では、昭和15(1940)年の時点で、浦河に第7師団第7工兵連隊 第4中隊の船舶工兵が駐屯し、昭和16(1941)年、小樽から室蘭の海域で行われた上陸訓練に参加したと記述がある。「船舶工兵」は通称で、工兵科のうち船舶運用や上陸作戦を専門とし、「丁(てい)の漢字が付けられていた。同師団は旭川で編成され、兵士の多くは北海道出身であった。また、『新浦河町史 下巻』には、東栄遺跡付近が演習地として昭和13(1938)年4月に買収されたと記されている(381頁他)。浦河が演習地の一つに選ばれたのは、崖や砂浜といった多彩な地形がある日高の海岸部が多様な上陸訓練に適し、司令部を置く旭川からの交通の便利さと考えられる。

翌年の5月、この工兵部隊からミッドウェー・ガダルカナル島への「一本支隊」(隊長 一木清直 大佐)が、アッツ・キスカ島への「北海支隊」(隊長 穂積松年 少佐)が第7師団から組織された。一本支隊は歩兵第28連隊から1個大隊分の兵士と、「工兵第1中隊」を選抜し、北海支隊は歩兵第26連隊から「独立歩兵301大隊」、工兵連隊から「独立工兵第301中隊」が編成された。

5月12～16日、北海支隊の全員は浦河で「仁号演習」の名称で、輸送船や「大発動艇」(大発)からの上陸訓練を実施した。その後5月23日付「第7師団に対する上陸訓練指示」が参謀本部から出され、同月中旬に、一本支隊を含むすべての歩兵連隊が、室蘭・苫小牧・浦河で上陸訓練を行った。これらは両作戦に備えた訓練である。さらに『戦史叢書 南太平洋陸軍作戦(1)』では、一本支隊は装備していた「折疊船」(「已型」折疊式軽舟艇)を用いてガダルカナル島に上陸したとあり、専門の船舶工兵の存在がうかがえる。戦史に残る激戦地となった島の上陸作戦に派遣された第7師団の兵士が浦河で訓練したことを確認できた。

向別兵舎は昭和19(1944)年の地形図(図14)や航空写真(図版1・2)にみられる。密集する細長い建物で20棟程度あり、いくつかは既舎である。おそらく東側にある向別競馬場も練兵場として使用されたであろう。また、現在の堺町西4丁目、井寒台の山地の東側裾部に長方形の平坦地がみられる。細長い形状と片側が山の斜面であることから、射撃場と推測している。

(2) 昭和18(1943)年～終戦

『浦河百話』第96・100話では、昭和18(1943)年9月～昭和19(1944)年8月まで第7師団の衛生隊が、同年7月～昭和20(1945)年5月まで第77師団の騎兵連隊が駐屯したとある。

北海道内での戦況は、昭和18(1943)年5月9日に、北海道の幌別村(登別市幌別)をアメリカ海軍潜水艦「スティールヘッド」(ガトー級SS-280)が砲撃した(『登別町史』年表)。これにより、見えない潜水艦による日本本土への攻撃に危機感が高まり、沿岸警備の強化が必要となった。しかし、守備地域に対し配置できる兵員が少ないため、予備役等の在郷軍人を「防衛召集(青紙での召集令状)」し、日本各地の沿岸や離島に「特設警備隊」を組織した。同隊は平時の人員は数名で、必要時に百名単位の兵員を集め防衛行動する部隊である。

『戦史叢書 陸軍北東方面作戦(2)』によると、昭和18(1943)年6月25日、旭川で「特設警備隊第321中隊」(連2289)が組織され、日高地方の襟裳岬に配置された。平時の人員は尉官：1名、下士

官：2名で、有事は尉官：4名、准士官：1名、下士官：17名、兵：100名の通常兵力に、経理部の准・下士官：1名、衛生隊の准・下士官：2名、兵：2名を加えた126名の中隊である。同警備隊は地域の防衛担当である第7師団隷属となり、浦河町を含む日高～十勝地方南部の沿岸を担当したと考えられる。また、同時期に道内の海に面する町村のすべてに「在郷軍人防衛隊」が組織されともあるが、詳細は記載がない。翌年5月頃、北海道の防衛地域を大雪山で分け、東側を「道東地区」、西側を「道西地区」と定め、日高地方は道西地区となった。大戦末期、樺太は対ソ連への警戒、千島列島はアメリカと接する最前線と位置付けられ、北海道内の沿岸防衛は、道東地区の根室～釧路～帯広の海岸、道西地区は勇払平野に重点がおかれた。しかし、本土決戦に備え北海道から戦闘部隊が次々に関東や九州に転出した結果、幾度となく道内の軍配置の見直しを余儀なくされ、道西地区を防衛する師団が変わる度に、特設警備隊の指揮司令部も変更された。なお終戦後、同警備中隊は9月7日に復員している。

また、同書には、昭和20（1945）年3月24日に、札幌司令部担当の「**第8地区特設警備隊**」（北部30112）が組織され浦河におかれたとある。通称や隷属が異なるので、同警備隊は襟裳岬の中隊と別の組織である。第8地区特設警備隊の平時の兵力は、特校：2名、下士官：4名で、有時には特校：3名、下士官：21名、兵：351名に増員する計画で、およそ三個中隊分であった。地区特設警備隊は、平時は日常の仕事に携わり、有事は正規軍並みの機動力をもち戦闘に参加する「屯田兵」的な性格が持たされた。終戦後は8月30日に復員している。これら特設警備隊がおかれた地域は、陸軍の正規部隊が配置されなかったことを示唆する。

日高支庁 栄丘遺跡の散兵壕を構築した部隊を特定する。先にも述べたが発掘調査では弾丸や薬きょう等、塹壕に伴う遺物が全く出土していない。このことは頻繁に使用される訓練地としては不自然である。ゆえに、この塹壕は大戦前半期に第7師団第7工兵連隊が造ったものではなく、日高地方の「特設警備隊」の両方またはいずれかが、昭和18（1943）年以降に造ったものと判断する。特徴から構築を計画・指示した者は陸軍の軍人と考えられる。加えて『新浦河町史』には、日高観別川下流域にも塹壕があった記述（372頁）や、「浦河百話」第20話に、昭和19（1944）年、元浦河川口の東側から東栄の砂浜にかけて防御陣地を構築するため、荻伏小学校の学校林の木材を提供した話がある。すなわち、大戦後半期には、浦河町内の三大河川の河口に特設警備隊が防御陣地を構築し、栄丘遺跡の塹壕はこの一つである。

（末光）

III章 調査の概要

1. 発掘区の設定 (図15～18 表5)

(1) 工事図面

基図は、北海道胆振総合振興局から提供を受けた『上向別浦河（停）線 交付金（改築）工事实測線実測設計 平面図（1：2500）平成29年3月』sfcファイルと「発掘区域図 図面1・2 1：2000」PDFファイルである。CADデータの前者には遺跡の調査範囲や座標値が示されていなかったため、PDF図上の調査区形を、sfcファイルに図示することが必要であった。出力した紙とパソコンの画面上で、PDF図に記された調査範囲を讀図し、地物や構築物の線等を参考にCAD図上での地点を確定させて、座標を計算した。この作業には誤差が生じている。

その後、調査区内の未買収地について『上向別浦河（停）線 防交交付金地方道（改築）工事に用地測量 用地平面地目別色分図 1：1000 平成30年3月20日』PDFファイルで示された。さらに「丈量図」、「水道管図」、「地番図」、「保安林指定施業要件変更調査地図」（浦河町常盤町127ほか5筆）台帳番号30 1/2000」がPDFファイルで提供され、調査に必要なこれらの情報はすべてCAD図上に統合した。

(2) グリッドの設定と調査杭の打設

調査グリッドは世界測地系の平面直角座標で設定した。浦河地域は第XII系座標原点からみて第四象限にあたり、南北方向のX軸は負、東西方向のY軸は正になる。遺跡ごとに北西方向に座標原点を「A-0」を設定し、調査区全体を網羅するように5m区画で区切った。X軸はアルファベットで、北から南方向へ昇順し「A～Z」そこから小文字「a～」を付した。Y軸は算用数字で、西方向の「0」から東方向へと値が大きくなる。各グリッドの呼称は座標原点のある「北西側」の杭名とし、アルファベットと算用数字を列記した。

現地には調査区形状の変化点に「範囲杭」を、5mごとのグリッドを示す「基準杭」と「方眼杭」は10mごとに打設し、前者には標高を記入した。これら調査杭は、遺跡近くにある工事用の既知の基準点、水準点（ベンチマーク）の成果を基にし、向別遺跡では補助基準点を1か所設置した。これらの情報は表5にまとめ、図面に加え座標や標高の数値も記録保存する。

(3) 面積変更

昌平町遺跡と常盤町遺跡の未買収地に近接する部分と後者の送電線の周囲について、発掘調査不要との北海道教育委員会の指示により、調査面積を昌平町遺跡は21㎡、常盤町遺跡は1,879㎡減じた。

2. 基本土層 (図19～23 表6～8 図版6・13・16)

基本土層はこれまでの浦河町内での発掘調査にならない、次のように区分し必要に応じ細分した。色調及び土層の観察項目は『標準土色帖』（小山・竹原 2011）と『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会 1984）による。

昌平町遺跡以外の三つの遺跡では盛土や削平がみられた。現地表土から遺物包含層まで一連の黒色腐植土とみなせるが、最上位の現地表部分には「I'層」として区別した。また、遺跡では降下火山灰

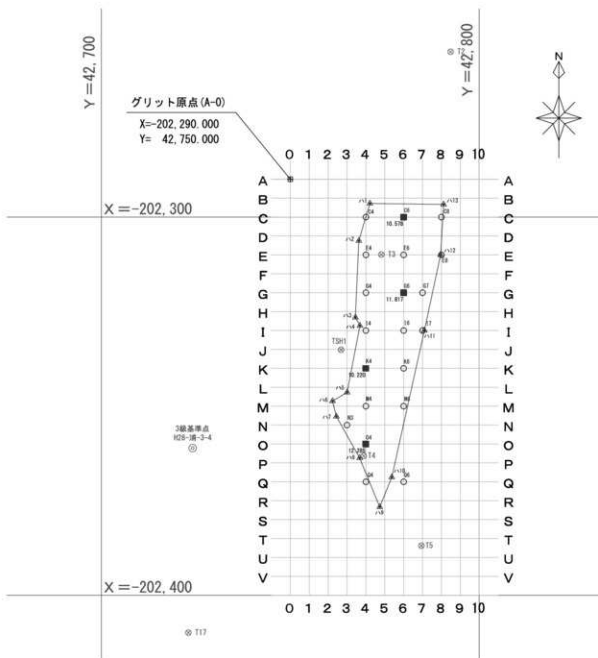
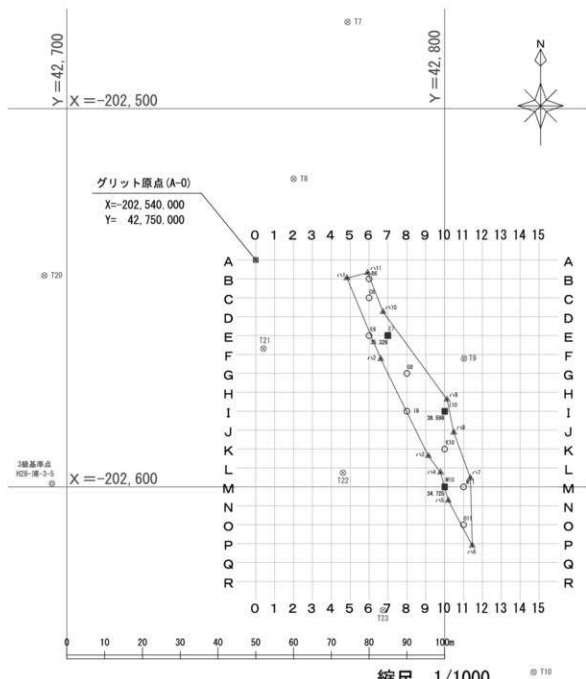


図15 向別遺跡 グリッド設定図



基準点成果表

点名	X	Y	標高	摘要
H28-浦-3-5	-202599.116	42696.071	6.955	3級基準点 [BNC] 2
T7	-202477.062	42774.304		4級基準点
T8	-202518.557	42760.017		4級基準点
T9	-202566.035	42805.141	41.746	4級基準点
T10	-202648.970	42823.553		4級基準点
T11	-202688.152	42830.744		4級基準点
T20	-202544.109	42694.048		4級基準点
T21	-202563.446	42752.049		4級基準点
T22	-202596.269	42773.084		4級基準点
T23	-202632.601	42783.661		4級基準点

凡例

⊙	3級基準点
⊗	4級基準点
■	基準杭
○	方眼杭
△	範囲杭
0.000	杭上高

図16 栄丘遺跡 グリッド設定図

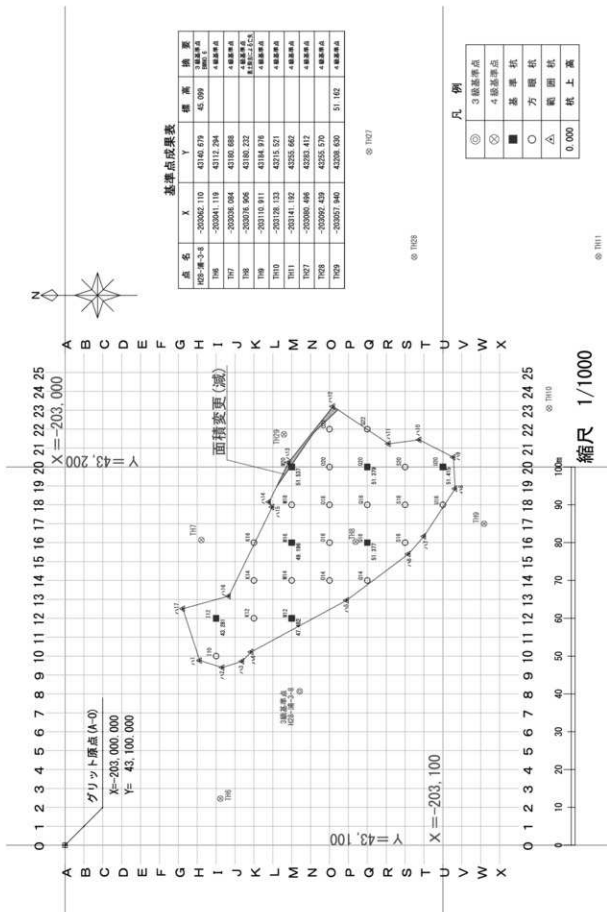


図17 昌平町遺跡 グリッド設定図

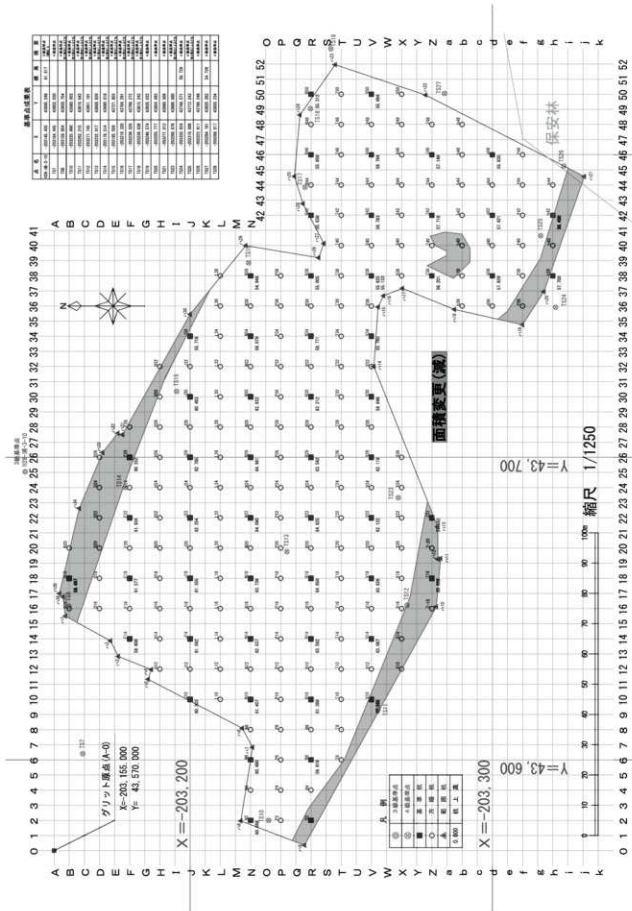


図18 常盤町遺跡 グリッド設定図

表5 浦河町 発掘調査基準点一覧表

地区名	年度	基準点名・地名	種類	調査範囲		位置		日本測高系		備考		
				年度別調査区画 延長(m)	面積(m ²)	経緯	緯度	年度別調査区画 延長(m)	面積(m ²)			
共同溝部	平成30 (2018)	グランド基礎 調査	A-0	-003,399,900	45,736,900	127°48' 24.4"	34°56' 24.4"	日本測高系 2018.0	43.7	-		
			119-1-2-3-4	2級基準点 延長区画	調査						-003,391,900	45,714,100
		5-7-1	2級基準点 延長区画	調査	-003,393,900						45,705,200	38,284
		調査区 基準点	N-08	-003,399,900	45,706,900						11,917	
		調査区 基準点	-1-1	-003,396,400	45,711,000						-	
		調査区 基準点	-1-2	-003,396,200	45,709,100						-	
		調査区 基準点	-1-3	-003,396,520	45,707,100						-	
		調査区 基準点	-1-4	-003,395,720	45,709,610						-	
		調査区 基準点	-1-5	-003,396,110	45,705,910						-	
		調査区 基準点	-1-6	-003,398,630	45,701,710						-	
		調査区 基準点	-1-7	-003,397,110	45,702,500						-	
		調査区 基準点	-1-8	-003,393,900	45,708,100						-	
		調査区 基準点	-1-9	-003,396,410	45,713,000						-	
		調査区 基準点	-1-10	-003,399,770	45,716,500						-	
東長溝部 (調査先行)	平成30 (2018)	グランド基礎 調査	A-0	-003,400,000	45,736,900	127°48' 24.4"	34°56' 24.4"	日本測高系 2018.0	43.7	-		
			119-1-2-3-4	2級基準点 延長区画	調査						-003,392,000	45,714,100
		5-7-1	2級基準点 延長区画	調査	-003,394,000						45,705,200	38,284
		調査区 基準点	N-08	-003,400,000	45,706,900						11,917	
		調査区 基準点	-1-1	-003,396,400	45,711,000						-	
		調査区 基準点	-1-2	-003,396,200	45,709,100						-	
		調査区 基準点	-1-3	-003,396,520	45,707,100						-	
		調査区 基準点	-1-4	-003,395,720	45,709,610						-	
		調査区 基準点	-1-5	-003,396,110	45,705,910						-	
		調査区 基準点	-1-6	-003,398,630	45,701,710						-	
		調査区 基準点	-1-7	-003,397,110	45,702,500						-	
		調査区 基準点	-1-8	-003,393,900	45,708,100						-	
		調査区 基準点	-1-9	-003,396,410	45,713,000						-	
		調査区 基準点	-1-10	-003,399,770	45,716,500						-	
東長溝部	平成30 (2018)	グランド基礎 調査	A-0	-003,400,000	45,736,900	127°48' 24.4"	34°56' 24.4"	日本測高系 2018.0	43.7	-		
			119-1-2-3-4	2級基準点 延長区画	調査						-003,400,100	45,714,100
		5-7-1	2級基準点 延長区画	調査	-003,401,900						45,705,200	38,100
		調査区 基準点	M-10	-003,400,000	45,706,900						11,917	
		調査区 基準点	-1-1	-003,396,400	45,711,000						-	
		調査区 基準点	-1-2	-003,396,200	45,709,100						-	
		調査区 基準点	-1-3	-003,396,520	45,707,100						-	
		調査区 基準点	-1-4	-003,395,720	45,709,610						-	
		調査区 基準点	-1-5	-003,396,110	45,705,910						-	
		調査区 基準点	-1-6	-003,398,630	45,701,710						-	
		調査区 基準点	-1-7	-003,397,110	45,702,500						-	
		調査区 基準点	-1-8	-003,393,900	45,708,100						-	
		調査区 基準点	-1-9	-003,396,410	45,713,000						-	
		調査区 基準点	-1-10	-003,399,770	45,716,500						-	
高平塚部	平成30 (2018)	グランド基礎 調査	A-0	-003,400,000	45,736,900	127°48' 24.4"	34°56' 24.4"	日本測高系 2018.0	43.7	-		
			119-1-2-3-4	2級基準点 延長区画	調査						-003,400,100	45,714,100
		5-7-1	2級基準点 延長区画	調査	-003,401,900						45,705,200	38,100
		調査区 基準点	M-10	-003,400,000	45,706,900						11,917	
		調査区 基準点	-1-1	-003,396,400	45,711,000						-	
		調査区 基準点	-1-2	-003,396,200	45,709,100						-	
		調査区 基準点	-1-3	-003,396,520	45,707,100						-	
		調査区 基準点	-1-4	-003,395,720	45,709,610						-	
		調査区 基準点	-1-5	-003,396,110	45,705,910						-	
		調査区 基準点	-1-6	-003,398,630	45,701,710						-	
		調査区 基準点	-1-7	-003,397,110	45,702,500						-	
		調査区 基準点	-1-8	-003,393,900	45,708,100						-	
		調査区 基準点	-1-9	-003,396,410	45,713,000						-	
		調査区 基準点	-1-10	-003,399,770	45,716,500						-	
堀川部	平成30 (2018)	グランド基礎 調査	A-0	-003,410,000	45,876,900	127°48' 24.4"	34°56' 24.4"	日本測高系 2018.0	43.7	-		
			119-1-2-3-4	2級基準点 延長区画	調査						-003,410,100	45,859,100
		5-7-1	2級基準点 延長区画	調査	-003,411,900						45,850,200	38,100
		調査区 基準点	N-08	-003,410,000	45,856,900						11,917	
		調査区 基準点	-1-1	-003,406,400	45,861,000						-	
		調査区 基準点	-1-2	-003,406,200	45,859,100						-	
		調査区 基準点	-1-3	-003,406,520	45,857,100						-	
		調査区 基準点	-1-4	-003,405,720	45,859,610						-	
		調査区 基準点	-1-5	-003,406,110	45,855,910						-	
		調査区 基準点	-1-6	-003,408,630	45,851,710						-	
		調査区 基準点	-1-7	-003,407,110	45,852,500						-	
		調査区 基準点	-1-8	-003,403,900	45,858,100						-	
		調査区 基準点	-1-9	-003,406,410	45,863,000						-	
		調査区 基準点	-1-10	-003,409,770	45,866,500						-	

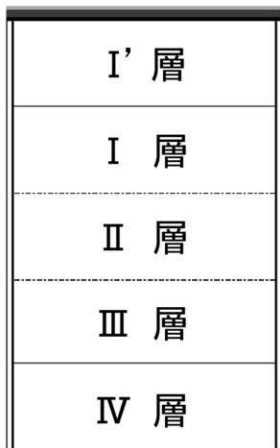


図19 浦河町 基本土層模式柱状図

土層断面図

向別遺跡 (図20 表6 図版6)

「基本土層1」はⅢ層まで耕作によるブラウ痕「P/」がみられ、黒色土層は攪乱された「P/B層」で、Ⅲ・Y層主体の「P/Y層」からも遺物が出土した。「基本土層2」は沢に向かって北方向へ傾斜する部分で、整然とした層序がみられる。上位に黒色土主体の盛土「M・B層」が堆積する。調査区で南北方向に広くみられた沢は盛土が最大3mと厚くみられ、ブルドーザーで押し埋めたと考えられ、各層は完全に混ざらず、ある程度のみとまりでみられた。

栄丘遺跡 (図21 表7 図版13)

上位に人為的な盛土が約2mと厚い。中位の「M・B層」は混じりがなく、プライマリーな層と誤認しやすく、調査では現代の物が混入していることで判断できた。盛土の下位は砂利層(河原礫)がみられる。遺物はこの「M・B層」をI層と誤認して取り上げた。表7には、日高支庁 栄丘遺跡の基本土層とも対比した。V層に支笏降下軽石堆積物とあるのは、灰白色の凝灰岩と考えられる(北埋調報16)。

昌平町遺跡 (図22 表8 図版16)

上位はI層とI'層で、漸移層の下位のⅢ層は黄色と橙色がみられる。

常盤町遺跡 (図23 表8)

I層黒色土と地表土I'層が区別でき、下位の漸移層は黄色のみである。

の堆積はみられなかった。町内北東側の上梓白地区では樽前b、樽前d降下火山灰が確認されている(浦河町 2002)。

標準的な層序 (図19)

I層：黒色腐植土

上位部分は、淡い色調や砂の混ざりが多い特徴から、現地表土を「I'層」と区別した。

II層：漸移層上位

黒褐～暗褐色を呈する漸移層の上位部分で、遺物包含層である。

III層：漸移層下位

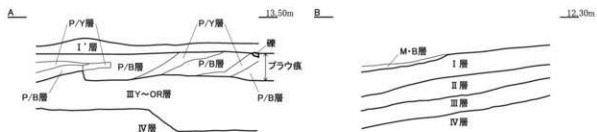
淡い暗褐～黄褐色または橙色の色調を呈する漸移層下位で、遺物は出土しない。

IV層：地山

灰褐色の固結したローム質土で、同色の軟質な凝灰岩～砂岩を多量に含む。第三紀の「蝦夷層群」上部の「乳呑川累層」あるいは「浦河累層」の最上位で、これら堆積岩が土壌化した層である。また、浦河地域ではこれら蝦夷層群(中生代白亜紀)にアンモナイト等の化石が豊富であることが知られている(Ⅷ章2節)。

向別遺跡 基本土層1

向別遺跡 基本土層2



メインセクション位置図

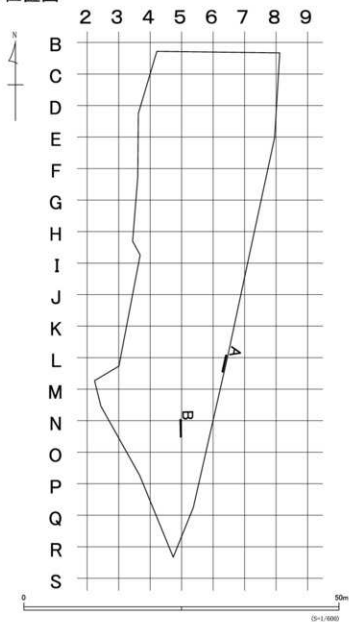


図20 向別遺跡 基本土層図

栄丘遺跡 基本土層

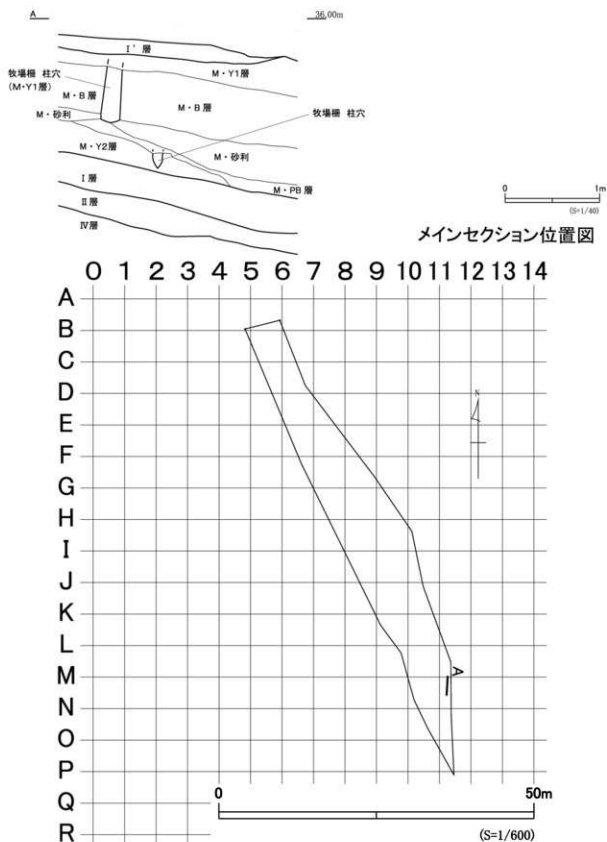


図21 栄丘遺跡 基本土層図

昌平町遺跡 基本土層



メインセクション位置図

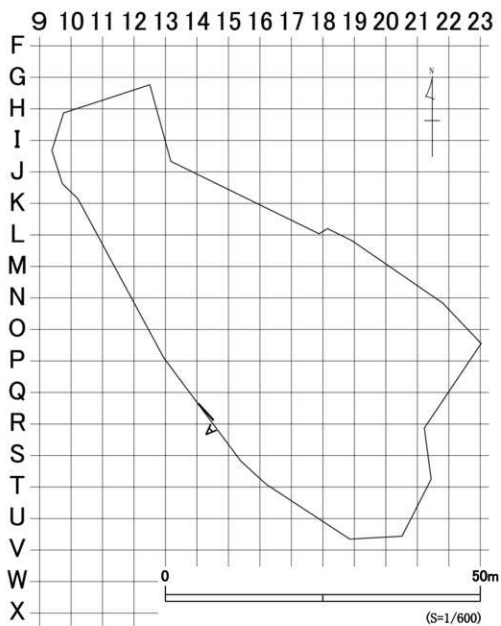
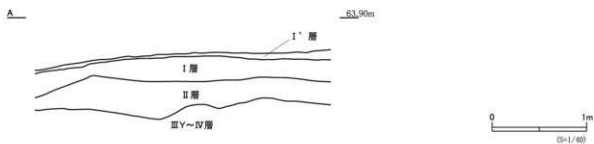


図22 昌平町遺跡 基本土層図

常盤町遺跡 基本土層



メインセクション位置図

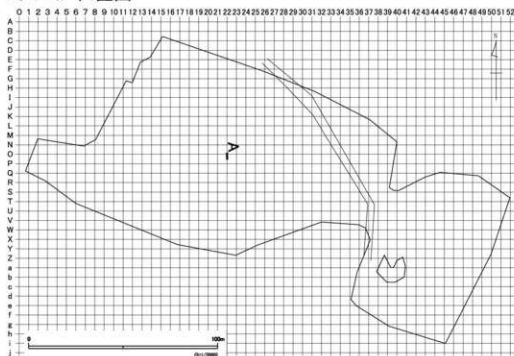


図23 常盤町遺跡 基本土層図

表6 向別遺跡 基本土層

層名	層の厚 色別層号	生成 原因	土層名	平均厚さ (cm)	層厚	砂・粘土・シルト (系統2mm未満)			礫 (系統2mm以上)				土工学名 日本区分 (旧)	備考
						野外 工程	色調 色名	シルト 割合	粘着性	堅密度	構造	固相割合 (%)		
I層	白層	人為的埋込 部積	現地黄土 黄色土	—	偶然 ~判然	黄色 10YR2/3	無	堅~軟	無	無	無	砂質粘土 砂質シルト	群存上 灰い色調と砂の多さで、I層と区別	
ブラウの風	P層	人為的埋込	—	—	偶然	—	—	—	—	—	—	—	—	
黄土	M層	人為的埋込	—	尺で最大 2m	偶然	—	—	—	—	—	—	—	—	
I層	白層	原積	現地黄土 黄色土	20	偶然	黄色 10YR3/7	無	堅	無	無	無	粘土質シルト	遺物も含層	
II層	BY層	土堆北	黒褐色~暗褐色土 黒粘土質土 粘砂層上位	20	漸次	黒褐色 (灰黄褐色)	中 すこぶる 無	中 すこぶる 無	細灰岩 10 ~ 20	2~3 10	垂直層 風化	粘土質シルトに 細灰岩・砂岩 が混じる	赤色に黄色 赤色に黄色	
火山灰層	—	降下噴積	黄褐色 火山灰層	1	偶然	褐色 1.5YR4/8	なし	弱	—	—	—	灰土	層中に部分的にみられる 降下火山灰層 起源不明	
III層	上位部分 V層	土堆北	暗褐色~暗黄褐色土 黄褐色土 ソフトローム	30~40	漸次	土に 黄褐色 土に 黄褐色	中 すこぶる 無	中 すこぶる 無	細灰岩 部分的に 最大 70	2~6 10	垂直層 風化	シルトに 細灰岩が混じる	—	
IV層	下位部分 OR層	土堆北	地山層 ハードローム	—	偶然	褐色 10YR2/6	強 すこぶる 無	強 すこぶる 無	砂岩 70	2~6 15	垂直層 中風化	粘土質シルト に砂岩が混じる	—	
V層	Tu層 (e: 470) (e: 370e)	土堆北	地山層	—	偶然	黄褐色 2.5YR4/8	強 すこぶる 無	強 すこぶる 無	細灰岩 80	3~6 10	垂直層 風化 ~ 中風化	粘土に細灰岩 が混じる	—	
VI層	BP層 (770e~76e)	堆積? 土堆北?	地山層 粘砂層	20	偶然	にぶい 褐色	なし	軟	細灰岩 90以上	5~15 50	垂直層 中風化 ~ 強風化	中硬	—	
Ym (w3)			(地層名) 黄褐色土 (層石内部まで黄色・軟化した土層)			(土工区分) 黄褐色土					(地層年代) 中五代行記		工事断面での地層区分	

細分層・ブラウ: P層
細分層・M層: 二重Y層位がみられた

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

細分層・I層: 1層位
細分層・II層: 1層位
細分層・III層: 1層位
細分層・IV層: 1層位
細分層・V層: 1層位
細分層・VI層: 1層位

3. 調査の方法

概要

遺構確認調査では、重機によりⅠ～Ⅲ層下位までを除去し（表土除去）、次に人力で残したⅢ層を掘り、地山のⅣ層上面を検出した。通常調査では、表土除去時に、土層の遺物の有無や残存状態等から、包含層調査する場所を選定し残した。その後の人力による調査は、先行トレンチ調査や25%調査を行い、土量や遺構・遺物のあり方について、より詳細な情報を調査の早い段階で把握・検討し、遺跡ごとに調査計画をたてた。包含層調査では、遺物の出土状況を観察して遺構確認を併せて行い、これらの確認・発見に努めた。遺構と予想した部分は半截、あるいはトレンチを設けて掘り下げ、土層断面、壁の立ち上がりや底面の形状、遺物の出土状況を精査した。地形測量図は主に調査完了した時点で作成した。

向別遺跡

黒色土層の調査予定は全面積の25%であり、遺物が多くみられた沢部分と、土層が残存していた北側部分とし、他の遺跡で減じた分を増やし約80%とした。最初に北側の約1/5を土置き場とし、ここ以外を除去した。人力による先行トレンチ調査で、沢地形と厚い盛土がみられたため、再度、重機で遺物の多い沢を深さ3m程度まで除去した。人力で沢と遺構を調査した後、機械で土を反転させ、北側部分を調査し、完了した。

栄丘遺跡

すべて遺構確認調査で、南東側半分を先に行い反転した後、北西側を調査した。

昌平町遺跡

黒色土層の調査は全面積の37.5%であったが、遺構・遺物ともに少ないので、約10%程度に減じた。調査は南東側半分を先に調査し反転した後、南西側を完了させた。

常盤町遺跡

黒色土層の調査予定は約42%である。遺構・遺物がある調査区西側と中央付近は25%調査を行い、通常調査の比重を高くした。調査の展開は、最初に東側部分を行った。ここは土が著しく削平され、周縁は盛土であった。次は西側部分で、北側から着手し南方向へ開けた斜面へと調査した。最後に中央部分を北から南方向へ進めて完了させた。

4. 整理の方法

(1) 一次整理の方法

土器・石器等の遺物は、現場で「遺跡名（略称：ムコ）：向別遺跡 サカ：栄丘遺跡 ショ：昌平町遺跡 トキ：常盤町遺跡」：出土地点（遺構名・グリッド）：出土層位：遺物種別（土器：剥片石器：礫石器とレキ：その他：の四つに大別）：取り上げ番号（出土位置記録のもの）：取り上げ年月日」の情報を記したビニール袋に取り上げた。

現場事務所では袋ごとに「取り上げ台帳」（水洗台帳）に記録し、一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」した後、「分類」し、出土地点・出土層位・遺物名等の遺物個別の情報を「遺物カード」に記し、チャック付きビニール袋に遺物とともに収納した。また、その遺物カードの記載事項を一覧表に書き記し（手書きの遺物登録台帳）、これをExcel文書の「遺物登録台帳」として作成し、二次整理作業を進めるための基本情報とした。集計作業は本エクセルデータを元に行った。

土器は接合作業を行うため、遺物カードの情報の一部を直接遺物に「注記」した。内容は「遺跡名：出土地点：出土層位：取り上げ月日：遺物番号」である。遺跡名はカタカナ略号（前述）、取り上げ月日は算用数字4桁で表記した。

（2）二次整理の方法

・遺物カード・遺物登録台帳の点検・修正

遺物カードと遺物登録台帳は相互に照合して点検した。誤りは「水洗台帳」等の他の記録で裏付けがとれるものや、誤記等の簡易なものを修正した。土器接合作業の結果、時期が判明したものがあるが、これらは修正していない。また、遺物カードは、エクセル文書で再作成し、原本である手書きのものと一緒に保管する。

・土器

接合作業は、残存状態が「良好」・「剥離」のものを中心に、遺構出土土器の接合は遺構内、遺構間、遺構が位置するグリッド、周辺のグリッドへと展開し、包含層出土のものは破片が多いグリッドから周囲へ広げるように進めた。接合した破片は復元可能なものを接着し「バイサム」で補填して復原した。これら復元土器は立面図等の実測図を作成し、破片土器は特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を中心に選び出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせて図示した。須恵器や土師器で、比較的大きな破片は、曲線から直径を算出し、推定復元実測図を作成した。すべての掲載土器は観察表を作成した。

・石器等

石器等は、残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示せるように掲載する石器を選び出し、実測図と観察表を作成した。

5. 遺物の分類基準（表9～15）

土器は表9「土器時期分類基準」・表10「土器部位分類基準」・表11「土器残存状態分類基準」で、石器等は表12「石器等器種分類基準」・表13「石器等残存状態分類基準」で、岩石の種類は表14「岩石分類体系表」・表15「岩石（石材）の略号」に基づき分類した。さらに、日高地方に由来する遺物名称について表9・12に記した。

また、浦河町の乳呑川上流では「ランプロファイア」（モンチカイト・煌斑岩（こうはんがん））と呼ばれる結晶質の塩基性火成岩が産出することが知られている。これはアンモナイトの化石を含む中生代白亜紀の蝦夷層群（灰白色の堆積岩）中の岩脈で、貫入年代は1,770万年前（新生代第三紀中新世）である（久保他 1984）。有色鉱物の黒雲母が粗粒で多量に含まれ、外観上は片麻岩に類似する。調査当初、この岩石を認識しておらず、一次整理で片麻岩に分類したものに含まれている可能性がある。

（末光）

表9 土器時期分類基準

種別	時代	時期	群	類	土器群・型式名	日高地方由来の名称
土器	縄文時代	早期	I群	a類	貝殻文・条痕文・沈線文を有する土器群	・「田原A式」：平底で沈線文 ・「マウタサップ式」：平底で条痕文
				b類	東側路式系土器群	・「田原B式」：東側路田→コッタロ式 ・「差別式」：東側路IV式
		前期	II群	a類	縄文実底土器群	・「静内中野式」 ・「トビノ式」：織線少ない斜行・羽状縄文 ・「西谷式」：織線少ない縄文・条痕文
				b類	円筒土器下層式それに伴う土器群	
		中期	III群	a類	円筒土器上層式・サイバ沢VII式 新々岡1式・新々岡文式に相当する土器群	
				b類	新々岡3（天神山式）、松木川式 北谷式に相当する土器群	
		後期	IV群	a類	余市式・タゴブ式・入江式に相当する土器群	
				b類	ウサタマイC式・手船式・ホッケマ式に相当する土器群	・「エリモB式」：ホッケマ式、突瘤文
				c類	堂林式・三ッ谷式・御殿山式に相当する土器群	・「静内御殿山式」
		晩期	V群	a類	大淵B式・大淵H C式それに伴う土器群	
				b類	大淵C1式・大淵C2式それに伴う土器群	
				c類	大淵A式・大淵A'式それに伴う土器群	
		縄縄文時代	VI群	縄縄文土器	・「大野部式」・「トニホ式」：沈線文（工字文）・縄縄文 ・「東歌別式」：突瘤文	
		縄文文化期	VII群	瓶文土器（北大皿式を含める）		
		古代～中世	本州の土器	土師器・須恵器・陶器		
時期不明、 判断可能なもの	不明	割罫や磨耗、小破片が多い				

表10 土器部位分類基準

部位・名称	内容
口縁部	・口唇部が残存するもの ・口唇部は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
底部	・底面が残存するもの ・底面は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
胴部	・口縁部、底部、不明以外のもの
不明	・部位を特定できないもので、小破片が多い

表11 土器残存状態分類基準

呼称	内容	備考
良好	・器の形状を留める個体土器 ・破片の表面面及び割れ口の 残存状態が良いもの	・接合可能な破片 ・文様等が残り、時期判断等に有効な情報が多い
剥離	・破片の表面面のいづれか、 あるいは両面の約1/2以上が 剥離・剥落しているもの	・接合可能な破片 ・文様が残る場合、時期判断等に有効な情報を有する ・剥離面は粘土の観察に基く ・破片化した後、人為的に加工されたものもある（再生土製品）
磨耗	・破片が磨耗しているもの	・磨耗した割れ口は接合に耐えられない ・文様等の磨滅により、破片そのものの情報は少ない ・遺物の二次的な移動を考慮の上で有意な情報を有する ・破片化した後、人為的に加工されたものもある（再生土製品）
小破片	・大きさが長径2cm程度以下の 小さな破片	・破片が小さいため接合に議さず、復原作業に与える影響も少ない ・破片そのものの情報は少ない ・小さいため注記できないものもある ・ある破片に接合した場合、接合関係についての情報が得られる

表12 石器等器種分類基準

分類	器種・名称	備考	日高地方での名称	主要な石材
剥片石器	石鏃		旧形式石鏃： 細身で薄く穂状剥離 ・早期の石鏃と認識されている	黒曜石 頁岩 チャート
	石鏃・ナイフ			
	石鏃			
	つまみ付きナイフ	「石匙」	「石小刀」	
	スクレイパー			
	U・Rフレイク	定型的な形態を有さないが、人為的な使用痕・加工痕が認められるフレイク U=utilized R=retouched		
	石核			
	フレイク・チップ			
礫石器	磨製石斧			緑色花崗 片岩 花崗岩 片麻岩 砂岩 凝灰岩 等
	磨製石斧原石			
	たたき石			
	すり石		「(打製)石包丁形石鏃」＝ 石鏃	
	北海道式石冠		「石冠(状石鏃)」	
	石鏃			
	砥石			
	台石・石皿			
石製品	名称・通称	アンモナイト化石等		—
礫	U・Rレキ	人為的な使用痕・加工痕が認められる礫 U=utilized R=retouched		各種
	レキ	自然礫で、遺跡に人為的に持ち込まれたと考えられるもの		

表13 石器等残存状態分類基準

分類	分類	内容
剥片石器 ・ 石製品	完形	残存する部分が90%以上のもの
	準完形	「完形」と「半形」の中間的なもの～完形に近いもの
	半形	残存する部分が50～25%程度のももの
	片	残存する部分が25%程度未満のもの
礫石器	完形	大きな割れ口が無いもの 割れ口を有しても機能部が損なわれていないもの
	準完形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が75%程度のももの
	半形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が50～25%程度のももの
	片	割れ口があり、完形の状態を想定し難く、残存する部分が25%程度未満のもの
礫	完形	割れ口のないもの
	片	割れ口があるもの

表14 岩石分類体系表

火成岩		優白岩(酸性)	中性岩(中性)	優黒岩(塩基性岩)	超塩基性岩
火山岩	火山噴出物(多孔質)	浮岩(軽石)	岩滓(スコリア)		—
	ガラス質(非結晶質)石基のみ	黒曜岩(石)	—		—
	微晶(球顆)の斑状組織石基	流紋岩	安山岩	玄武岩	—
半深成岩	細晶の斑状組織石基	石英斑岩	ひん岩	輝緑岩	—
深成岩	等粒状組織	花崗岩	閃緑岩	斑輝岩	橄欖岩 蛇紋岩
無色・白色	ケイ酸 SiO ₂	66%以上	52~66%	52%以下	45%以下
有色	有色造岩鉱物	10%以下	10~30%	30%以上	60~70%以上
主な造岩鉱物の種類	無色	石英 斜長石	斜長石		—
	有色	黒雲母	角閃石	輝石 橄欖石	橄欖石 蛇紋石
ランプロファイア	自形の結晶粒石基	モンチカイト	塩基性岩	自形の結晶鉱物: 黒雲母(粗粒) 石基: 灰色	

堆積岩	
火山砕屑岩	: 火山噴出物から構成される
火山角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物(火山岩塊) 50%以上含む
凝灰角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物(火山岩塊) 50%未満含む
火山礫凝灰岩	: 2~32mmの火山噴出物(火山礫) から主体的に構成される
凝灰岩(溶結凝灰岩)	: 2mm以下の火山噴出物(火山灰) から主体的に構成される
砕屑岩	: 丸みを帯びた鉱物片、岩片等から構成され「層理」がみられる
礫岩	: 粒度区分上の礫を50%以上含む ・含有する礫の円磨度によりに分けられる
砂岩	: 粒度区分上の砂を50%以上含む ・砂の粒度により「粗粒」・「細粒」に、硬さにより「硬質」・「軟質」等に分けられる
泥岩	: 粒度区分上の泥(シルト・粘土) 50%以上から構成される ・粒度区分から「シルト岩」と「粘土岩」に分けられる *「シルト岩」・「粘土岩」を含む
頁岩	: 泥岩のうち固結が強く、貝殻状の割れ口を呈するもの
頁岩	珪質頁岩 : 頁岩で透明な石英(ケイ酸SiO ₂)部分を含むもの
有機岩	
チャート	: 潜晶質石英(SiO ₂) ・有機質(生物遺体) ・無機質

変成岩	
変成岩	: 変成鉱物から構成され、結晶質がみられる
接触(熱)変成岩	: 熱による変成作用を受けたもの
ホルンフェルス	
広域変成岩	: 熱・圧力による変成作用を受けたもの
片岩	: 再結晶化により「片理」がみられるもの
片麻岩	: 再結晶化が進行し、「斑状変晶」や「片麻状組織」がみられるもの

* 石英質（ケイ酸 SiO₂）の岩石・鉱物の便宜的な分類体系

堆積岩	チャート	: チャートのうち、明瞭な貝殻状断口を呈するもの 火打ち石
	フリント	
	珪質頁岩	
	珪藻岩	
変成岩	珪岩（珪石）	: 珪藻類のケイ酸質遺骸が堆積し生じたもの
	珪岩	
鉱物	水晶	: 無色透明の石英 結晶質
	碧玉	: 隠微品質の石英で酸化鉄を多量に含む 不透明 暗緑～緑褐色
	玉髓	: 隠微品質の石英で比較的均質なもの 淡褐～灰色
	めのう	: 隠微品質 繊維状・縞状 不透明 玉髓の一種

表15 岩石（石材）の略号

大項目	小項目	岩石名	英語名	略号
火成岩	火山噴出物	軽石（浮岩）	Pumice	P u m
		岩滓（スコリア）	Scoria	S c o
	火山岩	黒曜石（黒曜岩）	Obsidian	O b s
		流紋岩	Rhyolite	R h y
		安山岩	Andesite	A n d
		玄武岩	Basalt	B a s
	深成岩	花崗岩	Granite	G r a
		閃緑岩	Diorite	D i o
		斑輝岩	Gabbro	G a b
超塩基性岩	蛇紋岩	Serpentine	S e r	
	橄欖岩	Peridotite	P e r	
堆積岩	火山砕屑岩	火山礫凝灰岩	Lapilli Tuff	L t u
	砕屑岩	凝灰岩	Tuff	T u f
		礫岩	Conglomerate	C o n
		砂岩	Sandstone	S a n
		泥岩 （緑色泥岩）	Mudstone (Green Mudstone)	M u d (G r . M u d)
		頁岩	Shale	S h a
	有機岩	チャート	Chert	C h e
変成岩	片岩	Schist	S c h	
	片麻岩	Gneiss	G n s	
上記以外	名称を表記			

IV章 向別遺跡

1. 概要 (図24・25 表16・17 口絵2 図版3～10)

調査した遺構は、土坑2基、土器集中9か所、鉄鍋集中1か所、道跡1条である。調査区の北側部分は同方向への斜面で、縄文文化期の土坑P-1・2、縄文時代早期の土器集中PS-9、アイヌ文化期初頭の鉄鍋集中、道跡が見つかった。土器集中PS-1～8は調査区の中央から南側にみられ、すべて沢に位置する。PS-3が縄文時代後期初頭で、PS-1・2・5・8は縄文文化期、PS-4は須恵器、PS-7は土師器、PS-6は陶器である。PS-1～8はI層で取り上げたが、すべて沢内の盛土からの出土である。

2. 土坑

P-1 (図26 表16 図版7)

位置 F-7区 **規模** 1.50×1.50/1.22×1.14/0.48m **平面形態** 円形
確認・調査 包含層調査完了後、円形の黒色土がみられた。半載して壁と坑底面を確認し、土坑と判断した。坑底面は砂に凝灰岩が混ざる層(V層)で、部分的にみられた地山である。
覆土 黒色土主体で、中～下位は凝灰岩を多く含む。
坑底面・壁 坑底面は曲線的にくぼみ、壁は開口して立ち上がる。
遺物出土状況 VII群土器、石鏃、フレイクが出土した(図44-1・図49-1)。
時期 出土遺物から縄文文化期と判断される。

P-2 (図26 表16 図版7)

位置 D-5区 **規模** 1.38×(1.22)/1.12×(1.12)/0.28m **平面形態** 円形
確認・調査 包含層調査中、黒色土がみられた。トレンチを設けてIV層を掘り下げたところ、土層断面で壁と坑底面がみられたので遺構と判断した。
覆土 黒色土主体で、凝灰岩が混ざる。
坑底面・壁 坑底面は平坦で、壁は曲線的である。
遺物出土状況 VII群土器と台石が出土した(図44-2・図49-3)。
時期 出土遺物から縄文文化期と判断される。

3. 土器集中 (図27～32 表17 図版7～9)

PS-1 (図27 図版7)

位置 O-5区 **規模** 0.29×0.24m
確認・調査 包含層調査中、土器がまとめて出土し記録して取り上げた(図41-5)。
時期 縄文文化期中期と考えられる。

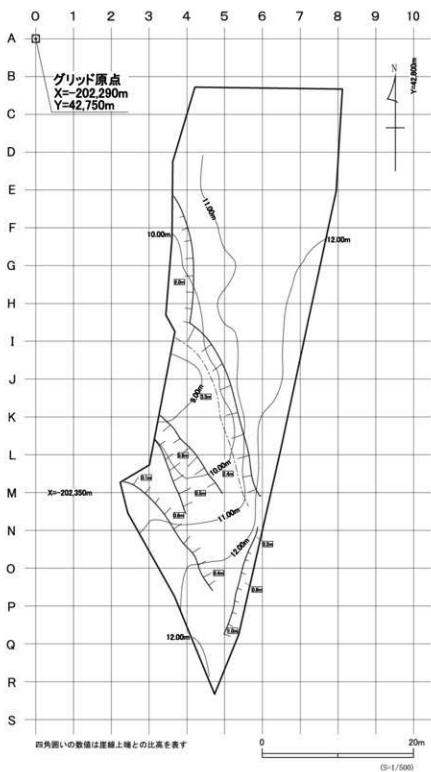
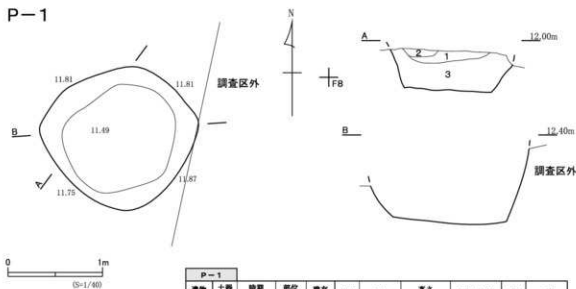


図24 向別遺跡 表土除去後地形測量図

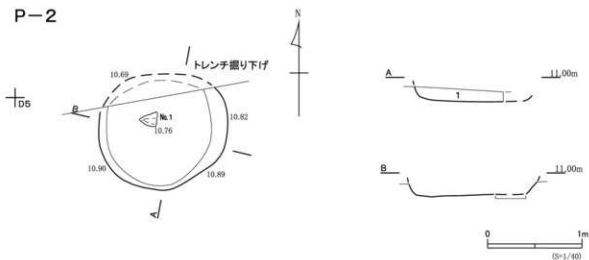
P-1



P-1										
遺物番号	土層	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備載	備考
—	フリイタ	—	黒曜石	—	1	埋土	—	20180613		
—	石鏝	—	黒曜石	完好	1	埋土	—	20180613	○	
—	土器	—	埴野	良好	1	埋土	—	20180613	○	

遺構名	新調査番号	大別層	細分層	生成要因	層界	砂-粘土層(長径2m未満)				礫層(長径2m以上)				備考		
						野州土性	色名	マンセル値	粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)	形状		風化の程度	
P-1	1	II層	堆積	自然	堆積土	黒色	10YR2/1	強	軟~堅	凝灰岩	20	10	非円礫	風化		
	2	IIY層	堆積	自然	砂礫土	黒色	10YR2/1	中	堅	凝灰岩	15	5	非円礫~粗角礫	風化	炭化物少量	
	3	III層	堆積	自然	礫土~砂礫土	黒褐色	10YR2/2	中	軟~堅	凝灰岩	70	5	10	非円礫~粗角礫	風化	炭化物少量

P-2



P-2										
遺物番号	土層	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備載	備考
—	土器	—	白磁器	良好	3	埋土II Y層	—	20181010	○	器合・埴野
1	土器	—	白磁器	完好	1	埋土II Y層	10.72	20181012	○	

遺構名	新調査番号	大別層	細分層	生成要因	層界	砂-粘土層(長径2m未満)				礫層(長径2m以上)				備考	
						野州土性	色名	マンセル値	粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)	形状		風化の程度
P-2	1	III層	堆積	自然	砂礫土	黒褐色	10YR2/2	中	堅	凝灰岩	50	3~5	非円礫	風化	

図26 向別遺跡 P-1・P-2

PS-1



106

PS-1											
遺物 番号	土層	時期	部位		残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
			石器	骨石							
—	土層	Ⅲ群	口縁部	良好	1	1層	11.94	20180619	○		
			胴部	良好	9	1層	~12.02	20180619	○		



PS-2

No.3



No.2

PS-2											
遺物 番号	土層	時期	部位		残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
			石器	骨石							
1	土層	Ⅲ群	胴部	良好	8	1層	9.53	20180730	○		
			口部	良好	1		9.88		○		
2	土層	—	Ⅲ群	良好	2	1層	9.78	20180730	○		
			—	良好	1				○		
3	土層	Ⅳ群	底面	良好	1	1層	9.70	20180727	○		
			—	良好	1				○		
—	土層	Ⅳ群	口縁部	良好	2	1層	—	20180726	○		
			—	良好	5				○		
			胴部	小破片	3				○		
—	土層	Ⅳ群	胴部	良好	4	1層	—	20180727	○		
			底面	良好	1				○		
			—	良好	17				○		
			胴部	遊玩	4				○		
—	土層	—	—	良好	9	1層	—	20180730	○		
			口縁部	良好	1				○		
			胴部	良好	4				○		



M4

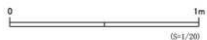


図27 向別遺跡 PS-1・PS-2

PS-3



上部



下部




PS-3		時期	部位	保存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
遺物 番号	土部	石器	磨石							
1	土部	石器	口縁部	良好	1	1層	9.87	20180823	○	
2	土部	石器	胴部	良好	1	1層	9.90~9.93	20180823	○	
3	土部	石器	口縁部	良好	2	1層	9.87 ~ 9.95	20180823	○	
			胴部	劣化	1					
4	土部	石器	胴部	良好	1	1層	9.84	20180823	○	
			口縁部	良好	2					
5	土部	石器	胴部	良好	2	1層	9.72 ~ 9.76	20180824	○	
			小破片	1						
			口縁部	良好	2					
6	土部	石器	胴部	良好	16	1層	9.77 ~ 9.97	20180824	○	
			磨石	6						
			小破片	11						
			口縁部	良好	2					
—	土部	石器	胴部	良好	2	1層	—	20180821	○	
—	土部	石器	口縁部	良好	2	1層	—	20180823	○	
			胴部	良好	1					
			胴部	良好	41					
			磨石	1						
—	土部	石器	口縁部	良好	4	1層	—	20180904	○	
			胴部	良好	3					
			小破片	1						

図28 向別遺跡 PS-3

PS-2 (図27 図版7)

位置 L-3区 規模 (全体) 1.44×0.55m (集中部分) 0.55×0.22m

確認・調査 包含層調査中、土器がまとめてみられた(集中部分)。付近を精査しやや離れた地点で、同一個体と思われる破片2点も記録した。擦文土器(図42-9)が復元でき、破片掲載のものは縄文土器(図44-3)である。

時期 出土遺物から擦文文化期後期と考えられる。

PS-3 (図28 図版8)

位置 L-5区

規模 (上部) 0.96×0.50m (下部 全体) 1.54×0.35m (下部 集中部分) 0.50×0.35m

確認・調査 包含層調査中、比較的大きな破片が数点認められ、出土位置を計測して取り上げた(上部)。下位を掘り進めたところ、底部と土壌化した破片、内面を上にした状態で大型の破片がまとめてみられ(下部)、これも記録して取り上げた。復元された土器はIV群A類タブコブ式である(図41-4)。

時期 出土遺物から縄文時代後期前半である。

PS-4 (図29 図版8)

位置 K-5、L-4区 規模 2.42×0.65m

確認・調査 包含層調査中に須恵器の底部(図40-2)が見つかったが、位置を記録できなかった。その後、近くから須恵器(図43-3)と擦文土器(図44-4)が出土したので、位置を記録した。

時期 須恵器は9~10世紀、擦文土器は同文化期後半と考えられる。

PS-5 (図29 図版8)

位置 (K-5区) 規模 一×一 m

確認・調査 PS-4の調査中に近くで擦文土器が出土し、関連する可能性を考え大まかな出土範囲を記録した。復元できた図41-7と図44-5の破片である。

時期 出土遺物から擦文文化期中期と考えられる。

PS-6 (図30 図版8)

位置 M-5区、K-4区 規模 (集中部分) 0.22×0.18m

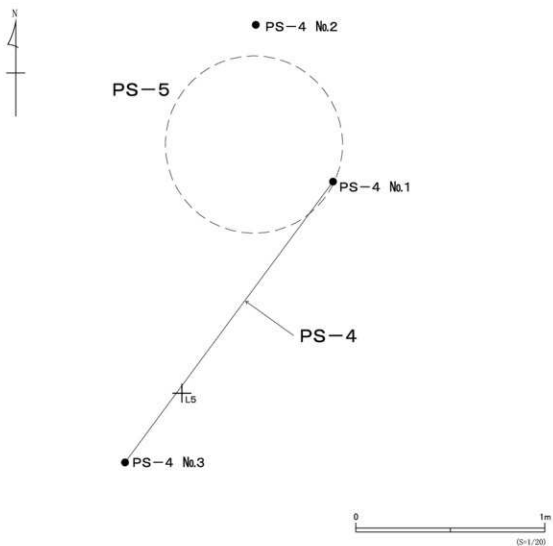
確認・調査 包含層調査中、暗灰色の土器がまとめてみられ、出土状況を図化して取り上げた。一見、須恵器に似るが、外観の特徴から陶器と判断した。さらに北側の10m以上離れた地点でも、破片が2点出土し、このうち1点(No.2・0912)はまとまりに接合した。図上で復元(図40-1)した後、立ち上げた。同一個体の可能性があるのは図43-1・2・9で、9は胎土分析試料「ウ1」である。

時期 これらは珠洲焼陶器で、中世の12~15世紀と考えられる。

PS-7 (図31 図版9)

位置 G-3・4区、E-3・4、F-3、H-3区 規模 (集中部分) 1.10×0.50m

確認・調査 包含層調査中に陶器(図43-1)が出土し、出土位置を記録した。その後、周囲を掘り進めたところ、土師器の坏が6点出土した(集中部分:No.2~5)。その後、南側から擦文土器(No.8)、北側で土師器が4点出土した(No.9~11)。図上復元した土師器は図40-3・4・6・7で、破片が



PS-4										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器		器石							
—			底部	良好	1	1層	—	20180823	○	※ 図16参照
1	土器	(須恵陶)	胴部	良好	1			20180827	○	接合 産
3			胴部	良好	1			20180828	○	
2			口縁部	良好	1			20180827	○	

PS-5										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器		器石							
—	土器	埴師	口縁部	良好	1	1層	—	20180827	○	接合
			底部	良好	2					
			胴部	良好	1					
			口縁部	良好	1					
—	U・Rレキ		軽石	片	1	1層	—	20180827	○	

図29 向別遺跡 PS-4・PS-5

PS-6

TK6



集中部分



TK5



PS-6										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器	石器	部石							
集中 部分	土器	(弥生)	胴部	良好	3	I層	10.72~10.79	20180904	○	部分 奈良県 大塚
2	土器	(弥生)	胴部	良好	1	I層	—	20180912	○	奈良県 大塚
3	土器	(弥生)	胴部	良好	1	I層	—	20180913	○	奈良県 大塚

図30 向別遺跡 PS-6

PS-7

● No.9



● No.10

● No.11

● No.6

● No.7

+ F4

+ G4

+ G4

● No.1

● No.4
● No.3

● No.2

● No.5

集中部分

+ H4

✕ No.8



PS-7		土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
遺物 番号	土器 石器			胎石							
1	土器	(陶器)	胴部	良好	1	1層	—	—	20180927	○	津波系 大発 掘時 非公開
2	土器	(土師器)	底部	良好	2	1層	—	—	20180927	○	津波系 大発 掘時 非公開
3	土器	(土師器)	口縁部	良好	1	1層	—	—	20181003	○	環(内黒)
4	土器	(土師器)	胴部	良好	1	1層	—	—	20181003	○	環(内黒) ※土器部 部(胎石)付
5	土器	(土師器)	胴部	良好	2	1層	—	—	20181003	○	環(内黒)
6	土器	(土師器)	胴部	良好	1	1層	9.81	—	20181010	○	破断
7	土器	(土師器)	底部	良好	1	1層	9.97	—	20181010	○	環(内黒)
8	土器	VR群	胴部	良好	1	1層	9.04	—	20181010	○	—
9	土器	(土師器)	口縁部	良好	1	1層	—	—	20181015	○	環(内黒)
			胴部	良好	1						
		フレイク	黒曜石	—	1						
10	土器	(土師器)	胴部	良好	1	1層	—	—	20181015	○	※土器部 部(胎石)付
11	土器	(土師器)	口縁部	良好	1	1層	9.44	—	20181009	○	※内黒で付

図31 向別遺跡 PS-7

PS-8



PS-8										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器									
—	土器	(雑野)	底部	良好	1	1層	—	2018020	○	



PS-9

上部



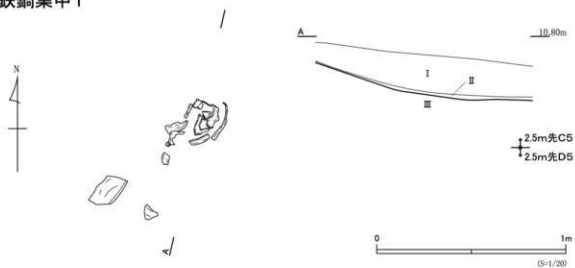

下部



PS-9										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器									
1	上部	(雑野)	胴部	小破片	2	B層	10.30	2018010	○	
				良好	14		10.32			
	フリイタ	黒曜石	—	1	—					
2	上部	(雑野)	胴部	口縁部	良好	B層	10.24	2018010	○	
				良好	20		10.32			
				小破片	5		—			
—	土器	—	口縁部	良好	3	B層	—	2018009	○	
—	土器	—	胴部	良好	14	B層	—	2018009	○	
—	土器	—	胴部	小破片	6	B層	—	2018009		

図32 向別遺跡 PS-8・PS-9

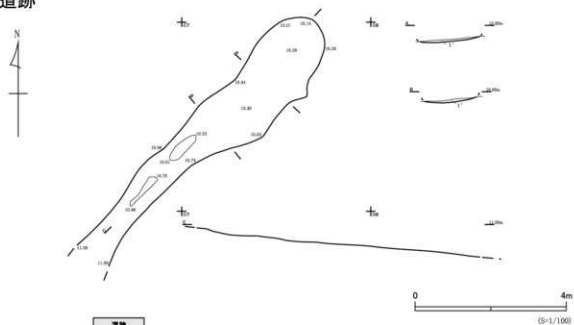
鉄鍋集中1



遺跡								
遺物番号	出土地点	遺物名	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
1	鉄鍋集中1	鉄鍋	15	1層	10.09	20181015	○	
			4		10.75	20181012	○	
—	C-4区	鉄鍋	1	1層	—	20181017	○	

図33 向別遺跡 鉄鍋集中1

道跡



遺跡										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
—	台石	—	礎石	平坦	1	1層	—	20181009		鉄鍋
—	U・Rc斗	—	花綱石	片	1	1層	—	20181010		

図34 向別遺跡 道跡

図43-5～8・11である。11は「胎土分析試料ウ3」で、捺文土器は図44-6である。

時期 陶器は12～15世紀頃、土師器は9～10世紀、捺文土器は同文化期後期と考えられる。

PS-8 (図32 図版9)

位置 H-4区 規模 一×一m

確認・調査 包含層調査中に捺文土器の底部(図44-7)が出土し、位置を記録して取り上げた。

時期 出土遺物から捺文文化期後期と考えられる。

PS-9 (図32 図版9)

位置 C-5区 規模 (上部)0.22×0.18m (下部)0.22×0.14m

確認・調査 包含層調査中にⅡ層で土器がまとまって出土し記録した。さらに掘り下げたところ、下部にもまとまりがみられた。一次整理でⅦ群と判断したが、復原して検討した結果、I群a類と考えられる(図41-1)。

時期 出土遺物から縄文時代早期前半と考えられる。

4. 鉄鍋集中

鉄鍋集中1 (図33 表17 図版9)

位置 C-4区 規模 (全体)0.70×0.58m (集中部分)0.30×0.30m

確認・調査 包含層調査中、黒色土から鉄片が出土した。周囲を掘り広げたところ、斜面の低い側で円形にまとまっている状態が認められた。トレンチを設け土層断面を確認したが、掘り込みはみられなかった。鉄鍋は内耳である。

時期 出土遺物からアイヌ文化期前半と考えられる。

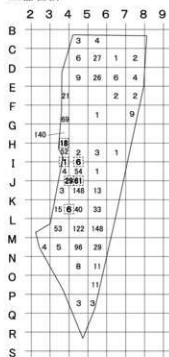
5. 道跡

道跡 (図34 表16 図版7)

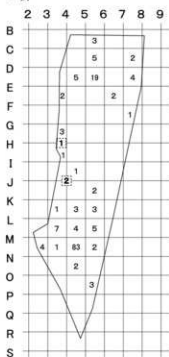
位置 C-6・7、C-7区 規模 (6.86)×1.52/0.16m 平面形態 溝状

概要 落ち込みの堆積はI'層であり、現代と判断する。

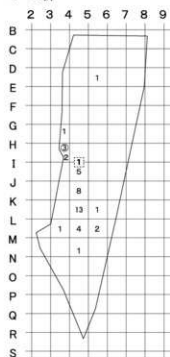
土器合計



I群

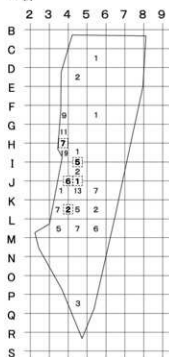


II・III群

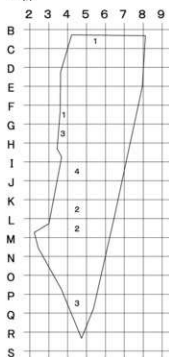


凡数字がI群

IV群



V群



VI群

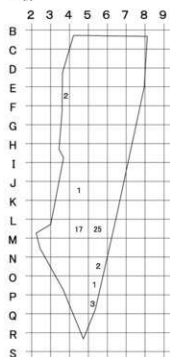
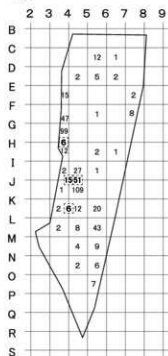
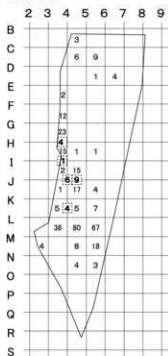


図35 向別遺跡 遺物出土分布図(1)

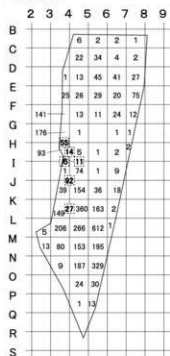
Ⅶ群



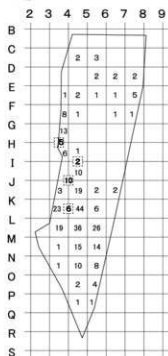
分類不明



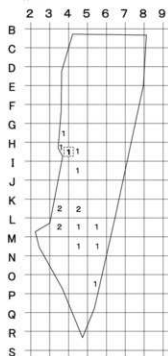
石器合計



石鏃



石槍・ナイフ



石錐

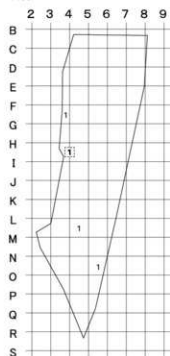
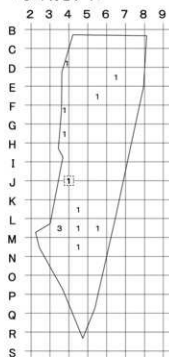
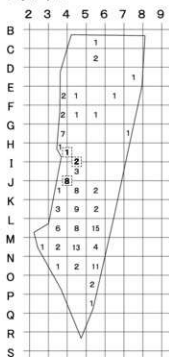


図36 向別遺跡 遺物出土分布図(2)

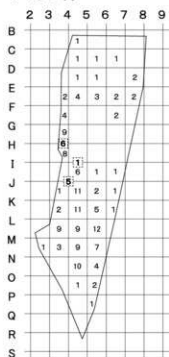
つまみ付きナイフ



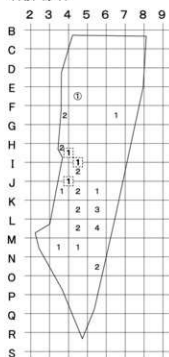
スクレイパー



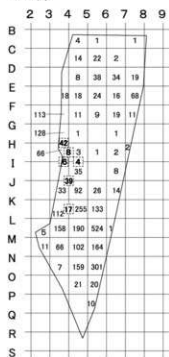
U・Rフレイク



石核・原石



フレイク



磨製石斧

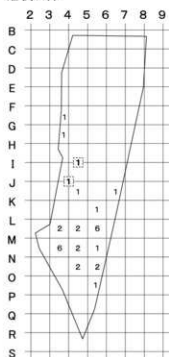
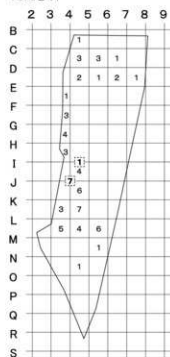
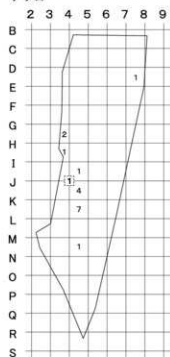


図37 向別遺跡 遺物出土分布図(3)

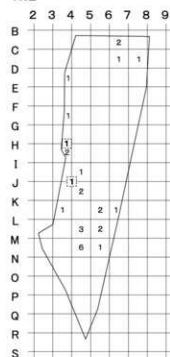
たたき石



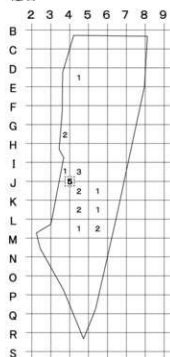
すり石



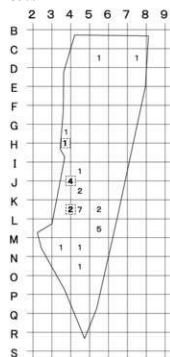
石錘



砥石



台石



石製品

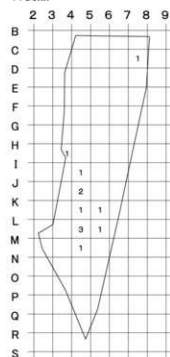


図38 向別遺跡 遺物出土分布図(4)

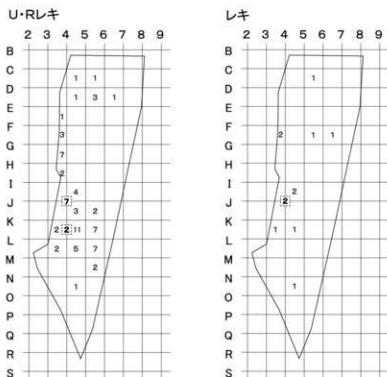


図39 向別遺跡 遺物出土分布図(5)

6. 包含層出土遺物の概要

遺物の取り上げ層位は、盛土と明確な部分は土色や土性にかかわらず「M層」とし、黒色腐植土は「I層」とした。沢内の黒色土層も「I層」としたが、すべて沢を埋めた盛土である。

出土点数表(表19・21)

土器は1,320点出土した。最も多いのはⅦ群41%で84%が胴部である。次いで、I群の13%で胴部が多い。Ⅵ群は51点、Ⅲ群は40点、Ⅱ群は3点出土した。これら以外は須恵器、土師器、陶器が数点出土した。二次整理でⅢ群はⅣ群と判明し、Ⅴ群もみられたが、遺物カードや台帳は修正していない。

石器は4,326点で、剥片石器93%、礫石器5%、石製品と自然礫(レキ)が2%である。剥片石器の82%がフレイクで、多い順に石鏃336点、U・Rフレイク174点、スクレイパー133点、つまみ付きナイフ14点、石槍・ナイフ18点、石錐4点である。石鏃が多いのは特徴で42%が完形である。U・Rフレイクとスクレイパーは、チャートや頁岩製のものが多い。完形は、つまみ付きナイフは57%、石槍・ナイフは39%で、石錐は黒曜石とチャート製が半々である。石核は29点みられ、多くが黒曜石製である。フレイクでは、原礫面の残存状態や形状から、素材は転礫と判断されるものが多い。礫石器を多い順に述べる。たたき石は65%が完形で、磨製石斧は78%、台石は50%が片である。石錘は93%が完形、砥石は片が多く、すり石は片が少ない。石製品は、黒曜石製の異形石器や軟質な岩石で石鏃を模したものの、アンモナイトの化石等がある。自然礫(レキ)は多くみられたが、現場で選別したため、少数である。

出土分布図(図35～39)

概して北側は包含層、中央より南側は沢を埋めた盛土からの出土である。また、複数のグリッドに

またがる破線は、重機で掘削し回収した遺物点数である。「土器合計」は、北側はC・D-5区が周囲に比してやや多く、沢ではG-3区、J-4区、L-4・5区で100点以上出土した。「I群」は調査区全体にみられ、M-4区に多い。「II・III群」は主に沢から、「IV群」と「V群」は南北の台地からも少量出土し、「VI群」はL-4・5区に多い。最も多く出土した「VII群」は全体にみられるが、沢からの出土が目立つ。「時期分類不明」も全体にみられる。

石器は全体から出土し、多いのはJ~N-4・5区付近とF~H-3区、E-7区である。「石鏃」はK-3・4区とL-4・5区に多く、「石槍・ナイフ」の出土は2か所にまとまる。「石鎌」と「つまみ付きナイフ」は散在的で、前者は沢に限られ、後者はL-3区で多くみられた。「スクレイパー」と「U・Rフレイク」は概して全体にみられるが、調査区の中央から南側の沢に多い。「石核」は沢からまんべんなく出土し、「原石」はE-4区にみられる。「フレイク」で、100点以上出土しているところは、F・G-3区とK~N-3~5区である。「磨製石斧」は沢と南側に比して多い。「たつき石」と「すり石」は沢と北側にみられ、K-4区に多い。「石錘」は沢と北東側で出土し、「砥石」は調査区中央付近にみられる。「台石」と「石製品」は沢と調査区北東側に少量みられる。「U・Rレキ」はG-3区、K-4・5区、L-5区に多く、「レキ」は散在的である。

7. 陶器・須恵器・土師器 (図40・43 表23・24 図版26・30)

遺構・包含層出土の土器をまとめて述べる。

(1) 図上復原土器 (図40 表23 図版26)

陶器

1は図上復原した後に立ち上げた甕の体部である。外面は小さな四角形が密集するタキ目で、底部近くは羽状にみえる。工具は木目交差の平行線と判断される。内面はナデと指頭圧痕がみられる。珠洲焼または珠洲焼系と考えられ、図43-1・2・9と同一個体と推定する。

須恵器

2は坯の底部で、回転糸切痕と複数の平行する筋、ヘラ記号がある。内外面には帯状に色が濃い部分である火襷がみられ、五所川原窯産と推測される。

土師器

3・4は内黒の坯の底部で、ともに外面はロクロナデ、内面はヘラミガキである。3は回転糸切痕がみられ、4の内面調整は縦横両方向である。5・6は内黒の坯の口縁部である。5は開く口縁部から曲線的に体部へ至る器形で、内面はヘラミガキである。6の器形は、5に比してやや直線的に体部へつながり、口唇部直下は外に広がる。内面のヘラミガキは上部で横方向、底部近くは縦方向である。7の器形は開く口縁部からすばまり、ゆるやかな曲線で体部へ至る。内黒ではなく、内外面の調整はロクロナデである。

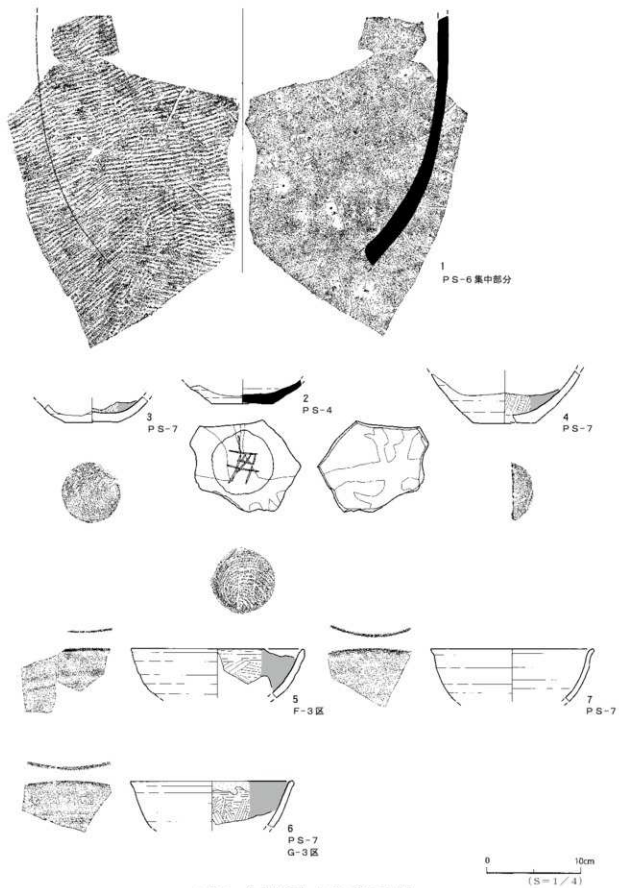


図40 向別遺跡 図上復原土器

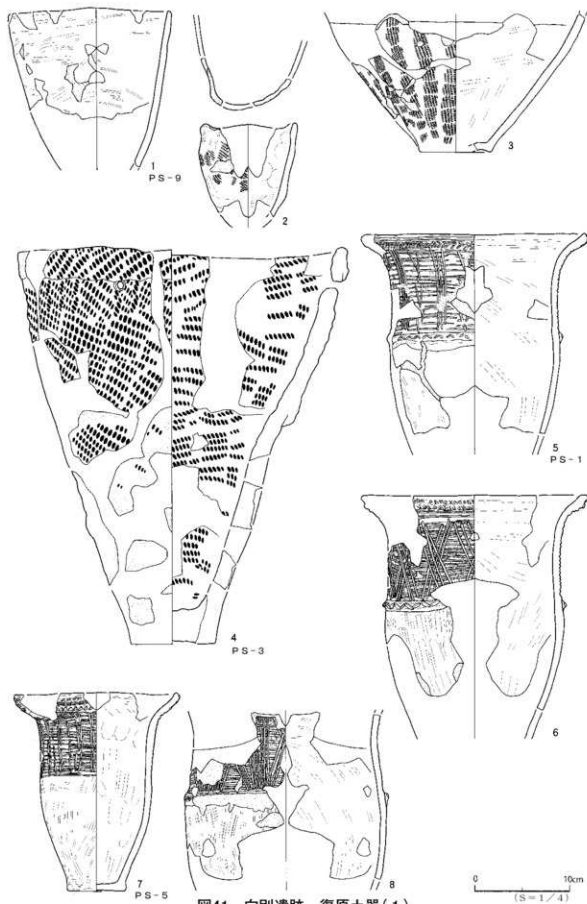


図41 向別遺跡 復原土器(1)

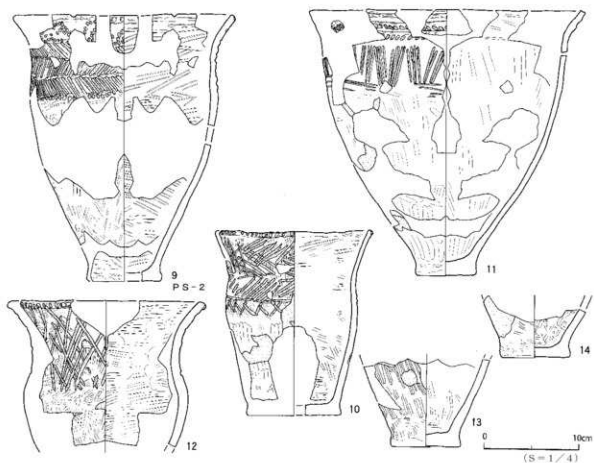


図42 向別遺跡 復原土器(2)

(2) 破片土器 (図43 表24 図版30)

陶器

1は肩部でタタキ目が重複してみられ、割れ口断面の色調は赤褐色である。2は体部下半で、タタキ目は縦方向、内面は指頭圧痕がみられる。1・2は珠洲焼または珠洲焼系と考えられる。

須恵器

3は壺の体部である。外面は縦方向にケズリ、内面はロクロナデである。

土師器

土師器の坏で、4～6は口縁部、7・8は胴部であり、図上復原したものも含め外見や胎土が類似し、同一個体か判断できない。外面はロクロナデ、内面は黒色でヘラミガキである。

土器胎土分析試料 (Ⅷ章・付篇1参照)。

9(試料名:ウ1)は珠洲焼の体部である。外面はタタキ目とガラス状光沢の釉薬がみられ、内面はナデである。10(試料名:ウ2)は須恵器の壺の肩部で、器壁が厚いので陶器の可能性も考えた。内外面ともにナデ調整である。11(試料名:ウ3)は土師器の坏で、外面はロクロナデで、内面はヘラミガキで内黒である。12(試料名:ウ4)は対照試料で、掬文化期後期の復原土器図42-11と同一個体の胴部である。外面は磨耗し、内面はナデ調整である。

なお、これら搬入品と在地の掬文土器の編年の対比をⅧ章の表64に示した。

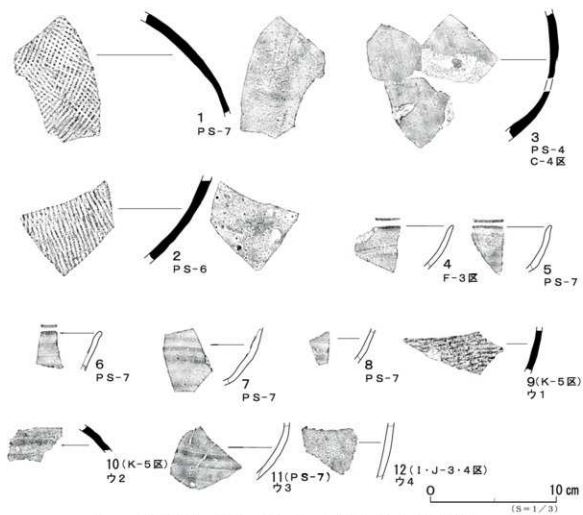


図43 向別遺跡 陶器・須恵器・土師器・胎土分析試料

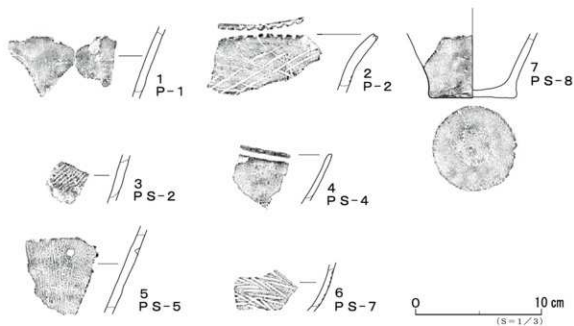


図44 向別遺跡 遺構出土破片土器



圖45 向別遺跡 包含層出土破片土器(1)

8. 縄文時代～擦文文化期の土器 (図41・42・44～48 表25～40 図版27～31)

遺構・包含層出土の土器をまとめて述べる。

(1) 復原土器 (図41・42 表25～38)

I群 a類 (図41-1 表25 図版27)

1はP S-9で、まとまって出土した。開口する口縁部から胴部へ曲線的にすぼまる器形で、内外面に横位の条痕文がみられる。晩式と考えられる。

IV群 a類 (図41-4 表28 図版27)

4はP S-3で沢の底からまとまって出土した。直立気味の口縁部から底部へとすぼまる器形である。口縁部直下と胴部中位には器面の段差がみられ、胴部中位～底部の外側は剥離または磨耗する。施文はL R原体で、外面は撚紐圧痕文、内面の条は横走る。タブコブ式である。

V群 c類 (図41-2 表26 図版27)

2は外面の縄文は部分的で、内面は指頭圧痕がみられ、上面観は楕円形で舟形土器である。

VI群 (図41-3 表27 図版27)

3は、開く胴部から底部へ急角度ですぼまる器形で、上げ底である。L Rの編縄文が施される。

VII群 (図41-5～8・図42-9～14 表29～38 図版27～29)

5・6は外反する口縁部から直立気味の頸部で、胴部は曲線的な器形である。貼付帯がみられ、頸部は横位の沈線文に加え、5は縦と「V」字、6は「X」字の沈線文が施される。内面の調整は主にミガキである。7はP S-5で、口縁部が開き、胴部の張り出しが弱い器形で、頸部の縦位の沈線文は断続する。8は、屈曲する頸部から胴部上位が張り出す曲線的な器形である。外面はハケメがみられ、頸部は沈線文、肩部は貼付帯が施される。

9はP S-2出土で、外反する口縁部が頸部ですぼまり、胴部上位がゆるやかに膨らみ、曲線的に底部へすぼまる器形である。口縁部は刺突文が施され、頸部は斜位の沈線文が複数あり、内面はハケメがみられる。10は比して口縁部の開きが弱く、底部が幅広く、すぼまらない器形である。11は幅広い口縁部から頸部ですぼまり、胴部で膨らみ曲線的に底部へすぼまる器形である。口縁部は凹線状のくぼみ、頸部は矢羽根状の刻みが施される。内面の調整は、口縁部付近は横で、これ以外は縦方向である。12の器形は曲線的で、外反する口縁部から頸部ですぼまり、胴部が強く張り出す。口縁部に刻み、頸部に沈線文が施され、内面は横位のハケメがみられる。13・14は底部で、13の底外面には葉脈痕らしき痕跡が観察され、14は外面が剥離する。

(2) 破片土器 (図44～48 表39・40)

遺構出土 (図44 表39 図版30)

P出土

1はP-1出土で、外面の調整はハケメ後ナデである。2はP-2出土で、口唇部に刻み、外面に交差する斜めの沈線文が施される。

P S出土

3はP S-2出土で、外面はL R縄文である。4はP S-4出土で、口唇部と内外面ともにミガキ調整である。5はP S-6出土で、内外面にハケメと外面から途中まで穿った補修孔が観察される。6はP S-7出土で、斜めの沈線文が複数施される。7はP S-8出土の底部である。

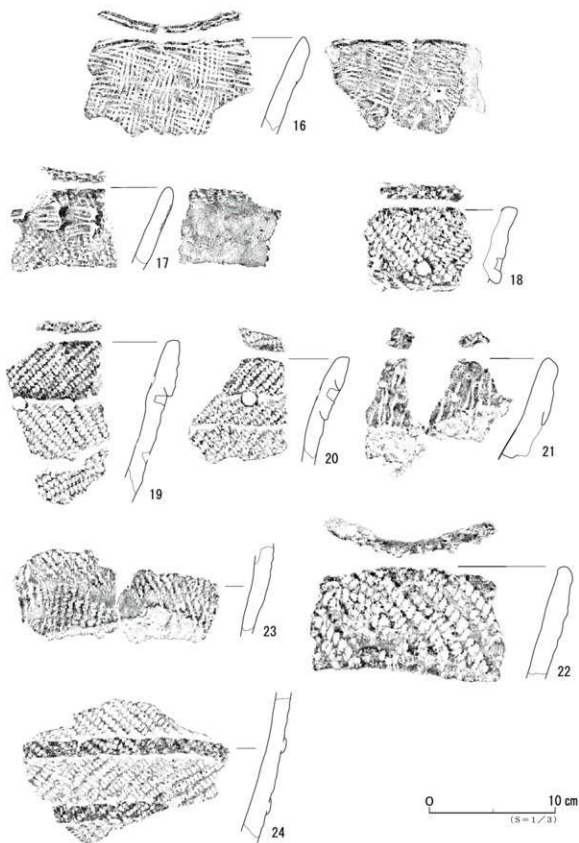


図46 向別遺跡 包含層出土破片土器(2)

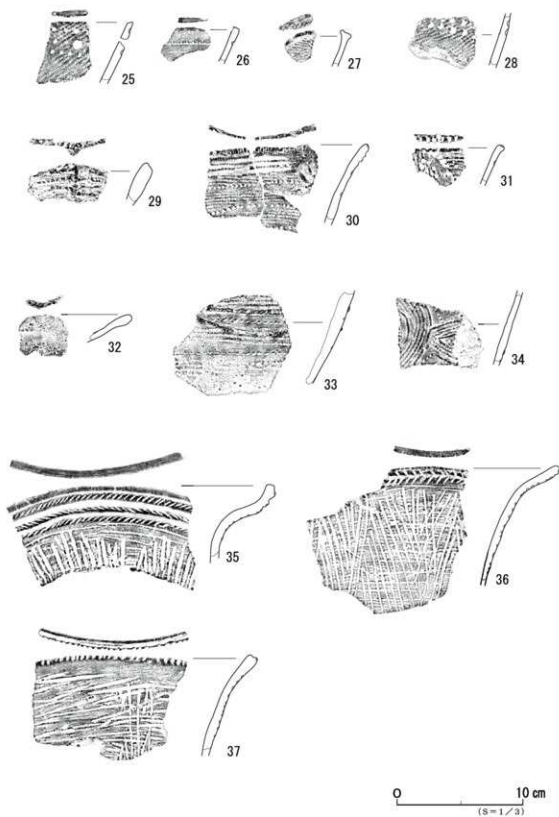


图47 向別遺跡 包含層出土破片土器(3)

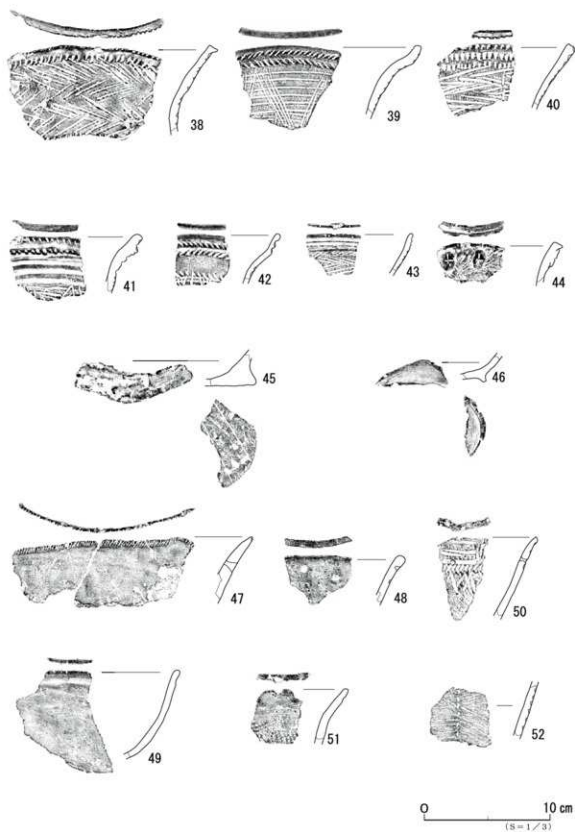


图48 向別遺跡 包含層出土破片土器(4)

包含層出土 (図45~48 表40 図版30・31)

I群 (1~15)

1・2は口縁部で外面に横位の条痕文が施され、I群a類と判断される。

3は幅広の口唇部に燃紐刻みと、外面は絡条体圧痕文が施される。4は口唇部が燃紐刻みで、外面は組紐圧痕文である。5はLとRの左巻き原体による羽状燃糸文が施される。6の口唇部はL R、外面はR Lによる施文である。7は底部で横走する燃糸文がみられる。8の貼付帯の断面は三角形が変形した様で、短縄文と絡条体圧痕文が施される。9はR L短縄文と組紐圧痕文が施される。10は縦位に短縄文、斜位に絡条体圧痕文がみられる。11はL右巻きの絡条体圧痕文が施される。12は細い微隆起線文と絡条体圧痕文がみられる。13の微隆起線文は複数みられ、間には燃糸文が施される。14の器面は縄文で、微隆起線文上は燃紐で施文される。15は羽状燃糸文が施される。

3・4・8~10は東銅路Ⅲ式である。11・12はコックロ式、13・14は中茶路式、5・6・15は東銅路Ⅳ式である。

IV群 (16~24)

16は内外面にR燃糸文が施される。17は刺突文とR L縄文がみられる。18の羽状縄文は縦位施文で、円形刺突文が施される。19は口縁部に貼付帯で、円形刺突文と羽状縄文がみられる。20の器面は段状で、L R縄文が施される。21の施文はRを用いた絡条体と考えられる。22のR L縄文は直前段多条で、23は前々段多条と推測する。24は貼付帯と器面に羽状縄文がみられる。

16~24は余市式・タブコブ式と考えられる。

V群 (25~28)

25はL R縄文地に刺突文が施され、補修孔もみられる。26は沈線文と刻みで、縄文地と無文地を区画する。27は口唇部が幅広で、R L縄文がみられる。28はL R縄文と刺突文が観察される。25~28はV群c類と考えられる。

VI群 (29~34)

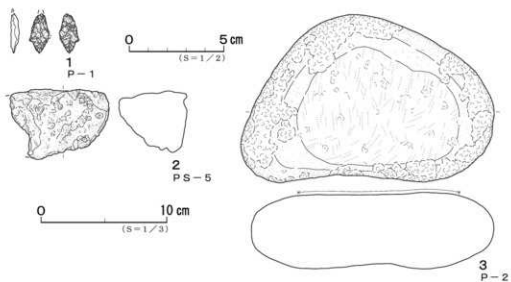
29は無文地に細い貼付帯が施され、この上も施文される。30は器面の文様は横位で、微隆起線文、三角列点文、縞縄文がみられる。31の口唇部は刻みで、外面に三角列点文と縄文がみられる。32は磨耗する片口部である。33は三角列点文が施された微隆起線文がみられる。34の微隆起線文は曲線的である。29・30は後北A~B式、31は後北D式、33は後北C1式、34は後北C2・D式と考えられる。

VII群 (35~46)

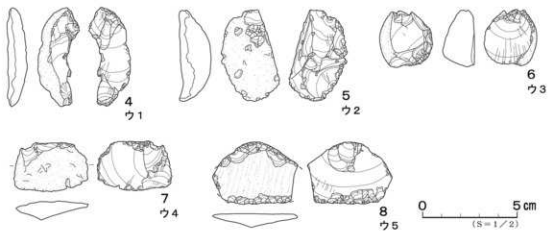
35は曲線的に外反する口縁部で、隆帯状の高まりに刻みがみられる。器面は沈線文が縦横位に施される。36の口縁部は外反し、沈線文と矢羽根状の刻みが施される。器面は横位と斜位の沈線文が交差する。37は口唇部の角に刻みが施され、横位の沈線文は断続的である。38は口唇部と直下の器面に刻みが施され、斜めの沈線文が施される。39は外面の隆帯状の高まりに刻みがみられ。器面の沈線文は整然とする。40は刻みと斜めの沈線文が施される。41は刻みが施された貼付帯があり、ナデによる凹線文と沈線文が観察される。42は隆帯状の高まりに刻みがみられ、器面に無文地がみられる。43は比較的薄手で、施文が整然としている。44は、外面に楕円形の貼り付けが施される。45は甕の底部で、葉脈痕がみられる。46は高台がみられ、ナデ調整である。

二次整理で時期を判断したもの (47~52)

47は無文で口唇部に細かい刻みがあり、VII群と判断した。48は円形刺突文があり北大式である。49は内外面と口唇部はミガキでVII群である。50の沈線文と刻みは浅い施文で、補修孔がみられる。51は無文地とR L縄文がみられ、V群と考える。52は垂下する刺突文と横位の沈線文がみられ、I群a類の沼尻式と判断する。



黒曜石原産地分析



石製品

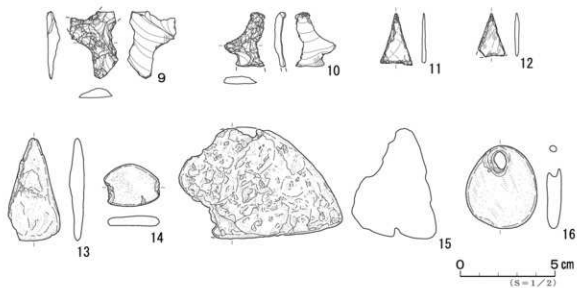


図49 向別遺跡 遺構出土・黒曜石原産地分析の石器・石製品

9. 遺構出土の石器 (図49 表41 図版32)

P出土

1はP-1出土の有茎の石鏃で、先端部と背面右側縁の一部が破損する。3は台石で、中央がすり痕、周囲はたたき痕がみられる。

PS出土

2はPS-5出土で、裏面が平坦化するので、U・Rレキに分類した。石材は軽石で遺跡周辺の環境には存在せず、噴出地は不明である。

10. 包含層出土の石器

(1) 剥片石器 (図49～51 表42 図版32・33)

黒曜石原産地分析試料 (4～8)

4(ウ1)は黒曜石製のU・Rフレイクで、原礫面が残存する。5(ウ2)の腹面は曲線的にふくらみ、複数方向からの剥離がみられる。6(ウ3)は厚みがあり、側面に広く原礫面を残す。7(ウ4)は背面が原礫面、腹面に三つの大きな剥離面がみられる。4～7は原礫面の形状から、素材は転礫(円礫)と考えられ、表面はくぼみが無作為にみられる。分析結果は上土幌産である。8(ウ5)は上下端部に刃部をもつスクレイパーである。背面に残る原礫面はざらついた手触りで複数の筋がみられ、赤井川産との結果である(付篇2)。

石鏃 (1～15)

1はすべての縁が直線で二等辺三角形を呈する。2・3は凹基で両側縁は曲線的である。4も凹基で基部がやや幅広い。5・6は細身で長く、厚みが薄く槌状剥離のものである。これらは「田原式石鏃」で、縄文時代早期と広く認識されている。7・8は有茎で、側縁や基部は、7が直線で、8は曲線的である。9は先端から基部まで両側縁が曲線的である。10は比して基部が長く、11は菱形を呈する。12はやや幅広く、背面にバルブの高まりを残す。13は先端部が破損する。14は背面中央が厚く、腹面は両側からの剥離痕が広くみられる。15は両側縁が曲線的で幅広くである。

石槍・ナイフ (16～20)

16は両側縁の中央が直線で、六角形を呈する。17は菱形であるが、先端部側の辺が長い。18は先端部と背面右側縁の一部が破損する。19は基部が明瞭で、20は先端部以外厚みがある。

石錐 (21～23)

21はチャートで、下端に尖る機能部を作出している。22はつまみ部分で機能部を破損する。23は両面調整の細長い形状で、下端が尖るので石錐と判断した。

つまみ付きナイフ (24～28)

24は黒曜石製の両面調整で、両側縁は曲線的である。25は両面調整で、機能部は左右が非対称の三角形である。26は背面に広い剥離面とヒンジフラクチャーがみられ、使用による剥離と考えられる。27は曲線的な周縁で、刃部の剥離は、背面の両側縁と腹面の下縁にみられる。28は片面調整である。

スクレイパー (29～36)

29は黒曜石のラウンドスクレイパーで、背面上端に原礫面を残す。擦文文化期と推測している。30は両面加工で、31は細長い長方形で原礫面が残る。32は背面の両側縁と腹面の下縁に剥離痕がみられる。33は頁岩製で、上端側を破損し下縁は曲線である。34は原礫面が残る頁岩製で、厚みがある。35

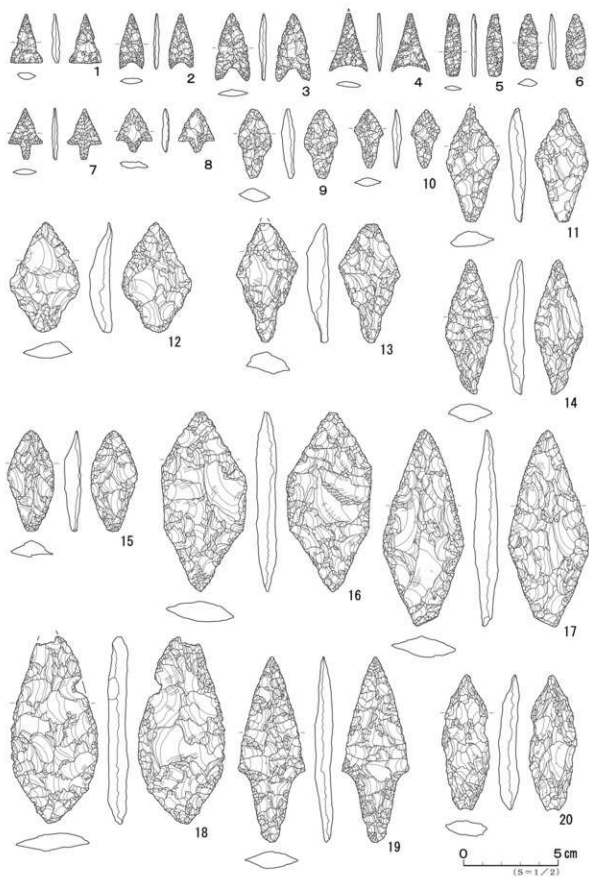


圖50 向別遺跡 包含層出土土片石器(1)

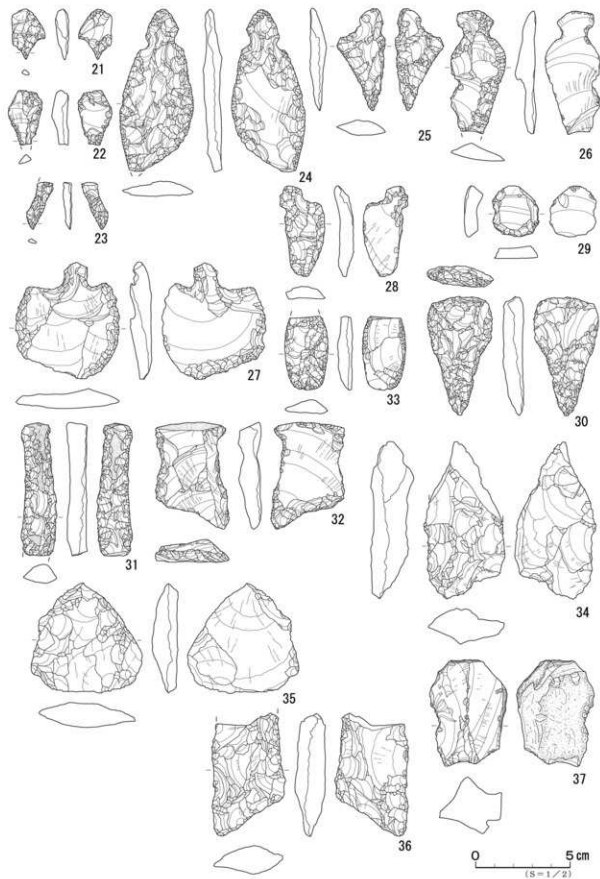


図51 向別遺跡 包含層出土剥片石器(2)

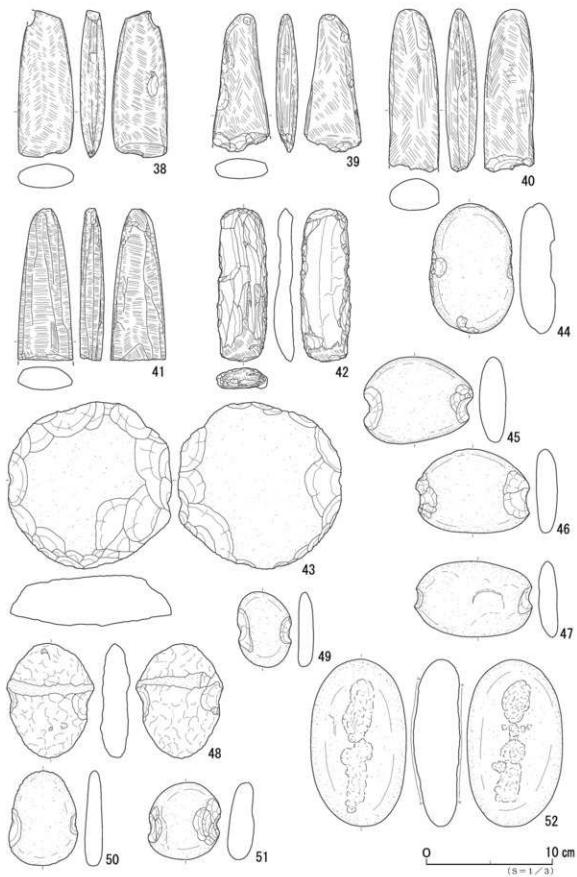


图52 向別遺跡 包含層出土礫石器(1)

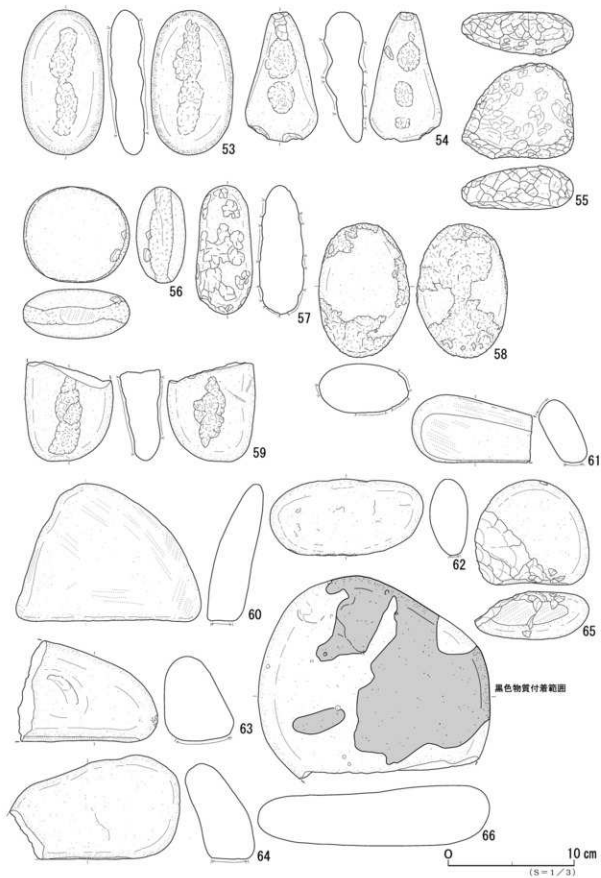


図53 向別遺跡 包含層出土礫石器(2)

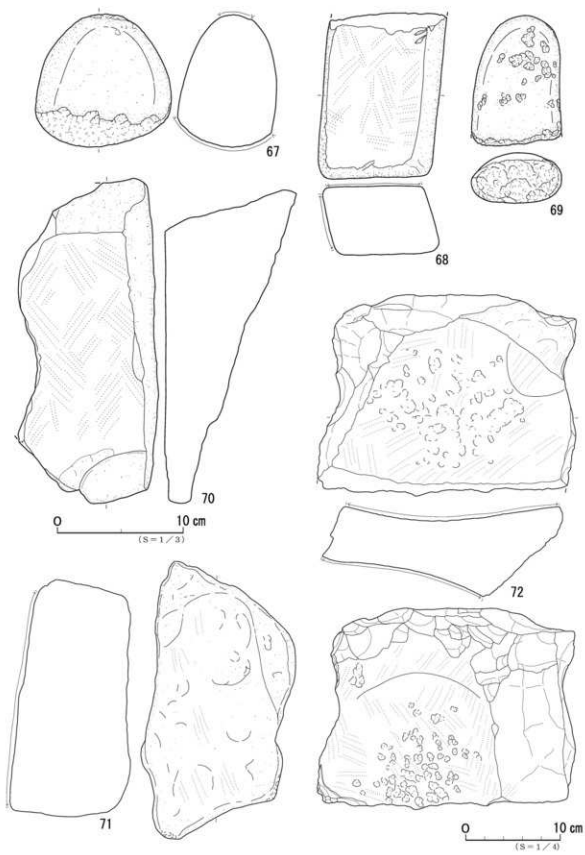


图54 向別遺跡 包含層出土礫石器(3)

の腹面は剥離面で、曲線的な刃部を三辺有する。36は両面調整で上部側を破損し、被熱する。

石核 (37)

37の表面は広い剥離面が複数あり、表面は原礫面である。

(2) 礫石器 (図52~54 表42 図版34・35)

磨製石斧 (38~42)

38はやや厚みがあり、表裏両面に研磨痕がみられる。39は刃部側の両側縁が幅広くなる形状で、一部に成形時と思われる剥離痕が残る。40は厚みがあり、両側縁は直線で概ね平行する。41の表面は研磨単位の境界である稜線が多くみられる。42は全体が剥離し、研磨痕は刃部付近にのみみられる。

石錘 (43~51)

43は概ね円形で、表裏両面の周縁を打ち欠いている。扁平な楕円礫の、44は短軸方向を、45~47は長軸方向を打ち欠いている。48は表裏両面の全体が敲打され、短軸方向に細い溝状のくぼみがめぐる。49・50は短軸方向に機能部があり、51は概ね円形である。

たたき石 (52~59・67)

52・53は表裏両面の長軸方向の中央に、たたき痕があり、両側縁は曲線的である。54は下縁が幅広い形状で、長軸方向に使用痕がみられる。55は花崗岩製で、周縁全体に使用痕が観察される。56は泥岩の円形礫の周縁にたたき痕が連続する。57は楕円礫が素材で、表裏両面にたたき痕がみられるが、長軸上中央に集中していない。58は砂岩で、表面は上下端部側と右側面に、裏面は中央の両側縁に近い部分以外に、使用痕がみられる。59は半形で、中央にたたき痕がみられる。67は厚みのある素材で下端部にたたき痕があり、この部分を使用面とする、すり石未製品の可能性がある。

すり石 (60~65)

60は下端面が使用により平坦化する。61は楕円礫の長軸方向の両側縁に使用面がある。62も楕円礫の長軸方向の側縁を使用している。63は厚めの素材で、左側を破損する。64は下縁が直線化し、この面にすり痕を有する。65は下端部に平坦な使用面がみられ、左側の破損と割れは、使用によると考えられている。

砥石 (68・70)

68は凝灰岩製で、直方体の礫の二面を使用している。70は砂岩で、表面は使用により平坦化する。

台石 (66・71・72)

66は花崗岩製で下側を破損し、黒色物質が付着する。71は厚みのある砂岩で、使用面は平滑である。72は大型で、断面では表裏両面が曲線的にくぼむ。

U・Rレキ (69)

69は、割れ面がたたき痕(敲打痕)である可能性を考えた。たたき石か、すり石未製品の可能性が考えられる。

(3) 石製品 (図49 表43 図版32)

9・10は黒曜石で、背面のみに加工がみられる。9は二又の上端部を、10は背面左側の一部を破損する。11・12は片岩製で二等辺三角形を呈し、周縁に微細な剥離痕がみられる。13・14は凝灰岩製で、13は磨製石斧を、14は石錘を模したと考えている。15は軽石製で、下端部に広い曲面をもち、すり石の形状に類似する。16は孔がある扁平礫で、含有物が脱落して生じた自然要因と考えられる。

(末光)

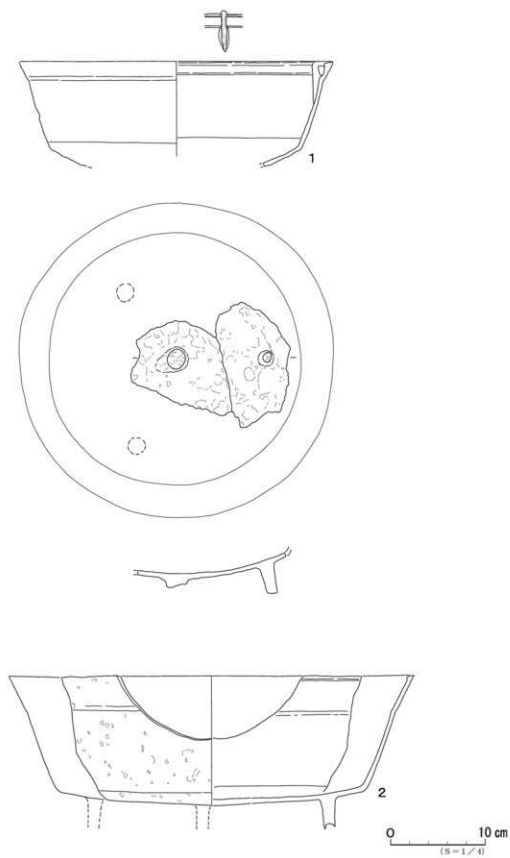


図55 向別遺跡 鉄鍋

11. 鉄製品

鉄鍋 (図55 表44 図版36)

1は、C-4区で検出した鉄鍋集中1の破片を一部接合し、図上で復元した内耳鉄鍋。内耳部・口縁部・胴部・底部と各片が出土しているが、一連の復元はできなかった。図上復元での推定では、口径約33cmの中型の鍋である。耳は完形の1耳のほかもう1耳分の破片があり、向かい合った2耳と推定できる。本体铸造後に取り付けたものとみられ、耳の下部は胴内部へ伸びている。口唇は厚みがあり、口縁部から胴部への移行部には明確な段がある。胴部の膨らみはほとんど無く、底部へは緩めに移行するため、底部は丸みを持っている。脚は3脚と推定され、湯口は径1.6~2cmの歪んだ円形である。日高地方で見つかっている内耳鍋としては、平取町二風谷遺跡とボロモイチヤシの計3例と静内町(現新ひだか町)の駒場貝塚1点に次ぐもので、日高地方南部の海岸近くの出土例として貴重なものである。中世、アイヌ文化期の遺物と考える。

2は、1とは別の大破片として出土したもので、接合片はない。口縁部~胴部~底部・脚と一体の破片であるが、全体の1/5ほどで耳や湯口部は検出していない。推定では耳のない丸湯口、3脚とみられ、口径は約43cmの大型のものとする。口唇は厚みがあり、口縁部から胴部への移行は緩い。胴部の膨らみはほとんど無く、底部はほぼ平坦である。脚の端部が凹んで造られているのが特徴的である。断面を見ると“す”(空洞)が多く、良質のものとは言えない。近代以降の製品と思われる。

(三浦正人)

表16 向別遺跡 土坑・道跡一覧表

遺構名	図面	グリッド	平面形状	規模 (m)				付属遺構 切り合い	出土遺物			備考		
				縦断面		横断面・坑底面			最大深	土器	石器等		その他	
				長さ	幅	長さ	幅							
P-1	26	7	P-7区	円形	1.50	1.50	1.22	1.14	0.18	—	埴器	—	—	
P-2	26	7	D-5区	円形	1.38	(1.22)	1.12	(1.12)	0.28	—	埴器不明	台石	—	
道跡	34	7	C-6・7、 C-7区	溝状	(6.80)	1.52	—	—	0.16	—	—	石 目・目シ生	—	1*層の落ち込み 溝状

表17 向別遺跡 遺物集中一覧表

遺構名	遺物 番号	図面	図添	グリッド	確認 層位	分布範囲 形状	規模 (m)			出土遺物		付属遺構 関連する遺構	備考		
							長さ	幅	最大深	土器	石器等				
PS-1	—	27	7	D-5区	1層	—	0.29	0.21	—	埴器	—	—	—		
PS-2	1~3	27	7	L-3区	1層	—	(全体)		1.44	0.55	—	埴器	—	—	
	(集中部分)						0.55	0.22	—	—	—	—			
PS-3	5・6	28	8	L-5区	1層	—	上部		0.96	0.50	—	—	—	—	
	下部 全体						1.51	0.33	—	IV群	—	—	—		
	下部集中部分						0.50	0.35	—	—	—	—	—		
PS-4	1~3	29	8	K-5、 L-4区	1層	(断在する範囲)	2.42	0.65	—	取土部 埴器	—	—	取土部は 出土位置記録なし		
PS-5	—	29	8	(K-5区)	1層	(およびその範囲)	*	*	—	埴器	L・Rレキ	—	—		
PS-6	—	30	8	M-5区	1層	集中部分	0.22	0.18	—	—	—	—	—		
	2・3			K-4区	1層	(前後立面 の直線距離)	(0.71)	—	—	—	—	—	—	—	
PS-7	1~5	31	—	G- 3・4区	1層	集中部分	1.16	0.50	—	—	土器部 埴器、埴器	フレイク	—	—	
	6			F-3区	1層	(%7.2の 直線距離)	(1.80)	—	—	土器部	—	—	—	—	
	7			9	F-3区	1層	(集中部分の 直線距離)	(4.49)	—	—	土器部	—	—	—	
	8			11	H-3区	1層	(集中部分の 直線距離)	(1.40)	—	—	土器部 (本取部)	—	—	—	—
	9			—	E-3区	1層	(%10.0の 直線距離)	(1.98)	—	—	土器部	—	—	—	—
	10			—	E-4区	1層	(%11.0の 直線距離)	(0.89)	—	—	土器部	—	—	—	—
	11			—	E-4区	1層	(%6.0の 直線距離)	(1.23)	—	—	土器部	—	—	—	—
PS-8	—	32	9	H-4区	1層	—	—	—	—	埴器 (取部)	—	—	—		
PS-9	1	32	9	C-5区	II層	—	上部		0.25	0.18	—	I層	フレイク	—	一次整理での分類は埴器
	下部						0.22	0.14	—	—	—	—			
鉄鍋集中1	—	33	9	C-4区	1層	—	全体		0.70	0.58	—	取土部 (内耳)	—	—	

表20 向別遺跡 遺構出土石器点数表

遺構名				P-1		P-2		PS-5		PS-7		PS-9		道跡		合計
器種名・分類 / 層位				覆土	小計	覆土 目Y層	小計	I層	小計	I層	小計	II層	小計	I層	小計	
器種	残存状態	岩石	被熱等													
剥片 石	石	完形	黒曜石	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
		準完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
		半形	—	—	—	1	—	0	—	0	—	0	—	—	—	0
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
	—	フレイク	黒曜石	—	1	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	3
小計				2	0	0	0	1	1	1	0	0	0	4		
礫石	台石	完形	片麻岩	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
		準完形	—	—	—	0	—	1	—	0	—	0	—	—	—	0
		半形	泥岩	被熱	—	—	—	—	—	0	—	0	—	—	1	1
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
	小計				0	1	0	0	0	0	0	1	1	2		
レキ	U・Rレキ	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
		片	粒石	—	—	0	—	0	—	1	1	—	0	—	1	1
	—	—	花崗岩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	2
小計				0	0	1	0	0	0	0	1	1	2			
合計				2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	8		

表22 向別遺跡 遺構出土鉄製品(鉄鍋)点数表

出土地点	鉄鍋集中1	C-4区	グリッドなし
層位	I層	I層	層位なし
点数	18	2	1
合計	21		

表18 向別遺跡 遺構出土土器点数表

遺構名		P-1		P-2		P-3		P-4		P-5		P-6		P-7		P-8		P-9		合計		
遺構種別 / 層位		遺土		遺土 層下層		1層		1層		1層		1層		1層		1層		1層				
種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位	種類	部位			
遺跡1	口縁部	土器																			12	
		土器																				13
		土器																				0
	底面	土器																				1
		土器																				0
		土器																				0
	胴部	土器																				12
		土器																				0
		土器																				0
	平部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	
遺跡2	口縁部	土器																			12	
		土器																				4
		土器																				0
	底面	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
	胴部	土器																				75
		土器																				0
		土器																				0
	平部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	87	
遺跡3	口縁部	土器																			11	
		土器																				1
		土器																				0
	底面	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
	胴部	土器																				38
		土器																				33
		土器																				0
	平部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	
遺跡4	口縁部	土器																			4	
		土器																				2
		土器																				0
	底面	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
	胴部	土器																				8
		土器																				0
		土器																				0
	平部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	
遺跡5	口縁部	土器																			0	
		土器																				0
		土器																				0
	底面	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
	胴部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
	平部	土器																				0
		土器																				0
		土器																				0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

表19 向別遺跡 包含層出土石器点数表 表21 向別遺跡 包含層出土石器点数表

遺跡名	層別	土器	石器	骨器	その他	合計
遺跡1	1
	2
	3
	4
遺跡2	1
	2
	3
	4
遺跡3	1
	2
	3
	4
遺跡4	1
	2
	3
	4
遺跡5	1
	2
	3
	4
遺跡6	1
	2
	3
	4
遺跡7	1
	2
	3
	4
遺跡8	1
	2
	3
	4
遺跡9	1
	2
	3
	4
遺跡10	1
	2
	3
	4

遺跡名	層別	土器	石器	骨器	その他	合計
遺跡11	1
	2
	3
	4
遺跡12	1
	2
	3
	4
遺跡13	1
	2
	3
	4
遺跡14	1
	2
	3
	4
遺跡15	1
	2
	3
	4
遺跡16	1
	2
	3
	4
遺跡17	1
	2
	3
	4
遺跡18	1
	2
	3
	4
遺跡19	1
	2
	3
	4
遺跡20	1
	2
	3
	4

表25 向別遺跡 P S-9 出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
							器高	口径	底径						
43	1	27	P S-9	1層	1010	無2	28	117.33	121.33	126.33	436	土器 - 弥生前期	弥生前期	1層目 土器 土高層 弥生前期	
接合破片 破片数		47		接合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 - 遺物番号 (点数)			P S-9・1層目・1010・無2・1 (28)・弥生前期 (10)								
加土 (泥和材)		種類	赤土		粒径	800		種類	弥生土器		量	少量	備考	(器種破片)	
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部位 (備存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内				
					口 器 部	(90 %)						土器	土器	土器	土器
					口 縁 部	(60~70 %)									
					胴 部 上 半	(90 %)									
胴 部 下 半	(10 %)														
底	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器		

表26 向別遺跡 M-5区出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)	
							器高	口径	底径					
43	2	27	M-5区	1層	0929	—	5	114.13	109	102	534	土器 - 弥生前期	弥生前期	1層目 土器 土高層 弥生前期
接合破片 破片数		3		接合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 - 遺物番号 (点数)			—							
加土 (泥和材)		種類	赤		粒径	中-細粒		種類	弥生土器		量	少量	備考	(器種破片)
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部位 (備存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内			
					口 器 部	(20 %)						土器	土器	土器
					口 縁 部	(20 %)								
					胴 部 上 半	(20 %)								
胴 部 下 半	(20 %)													
底	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器		

表27 向別遺跡 L-5区出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)	
							器高	口径	底径					
43	3	27	L-5区	1層	0923	—	3	114.40	121.40	127.40	406	土器 - 弥生前期	弥生前期	1層目 土器 土高層 弥生前期
接合破片 破片数		11		接合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 - 遺物番号 (点数)			L-5区・1層目・0923・— (3)・弥生前期 (2)							
加土 (泥和材)		種類	赤		粒径	細-中粒		種類	弥生土器		量	少量	備考	(器種破片)
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部位 (備存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内			
					胴 部 中 位	(5~20 %)						土器	土器	土器
					胴 部 下 位~底 部	(50~80 %)								
					底 部	(20 %)								
底 部	(20 %)													
底	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器		

表28 向別遺跡 P S-3 出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)							
							器高	口径	底径											
43	4	27	P S-3	1層	0824	46	4	142.12	126.42	136.42	1,000	口縁・底径	陶器	形跡不明 オブシド						
総合破片 点数		18		総合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 ・遺物番号 (点数)			P S-3・1層・0823・No. 1 (11), No. 2 (1), No. 3 (2), No. 4 (1), 0824・No. 5 (2), 0825・No. 6 (1), 0826・No. 7 (1), 0827・No. 8 (1), 0828・No. 9 (1), 0829・No. 10 (1), 0830・No. 11 (1)													
胎土 (土質)		組織	—	粒径	細	種類	灰白色土		量	少量	備考	(土質調査) (最大粒径400μ)								
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (保存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内								
	L土調文		灰白色 (G, 2000-0)	—	—	口 唇 部 (90%)							L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—				
	胎土 L土調文 L土調文(黒土)		(黒褐色)	—	黒褐色 底径部付着	口 縁 部 (90%)											L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—
	L土調文 (黒土)		灰白色 (G2000-0)	—	剥離	胴部上半 (90~80%)														
—		剥離部 (灰白色)	黒褐色 付着 (G, 2000-0)	剥離	胴部下半~底部 (90~80%)		L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—										
—		灰白色 (G2000-0)	—	剥離?	底 部 (90%)						L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—						

表29 向別遺跡 P S-1 出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)							
							器高	口径	底径											
43	3	27	P S-1	1層	0819	—	3	122.42	126.42	122.42	999	口縁	陶器	胎土不明 胎土						
総合破片 点数		18		総合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 ・遺物番号 (点数)			O-3区・1層・0818・No. 1 (1)													
胎土 (土質)		組織	—	粒径	細	種類	灰白色土		量	少量	備考	(土質調査)								
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (保存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内								
	土質		—	—	—	口 唇 部 (20%)							L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—				
	灰褐色 胎土 (L土調文)		(黒褐色)	—	黒褐色 底径部付着	口 縁 部 (20%)											L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—
	—		剥離部 (灰褐色)	黒褐色 付着 (G, 2000-0)	剥離	底 部 (20%)														
—		剥離部 (灰褐色)	黒褐色 付着 (G, 2000-0)	剥離	胴部上位 (20%)		L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—										
—		剥離部 (灰褐色)	黒褐色 付着 (G, 2000-0)	剥離	胴部中位 (20%)						L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—						

表30 向別遺跡 G-3区 出土復原土器観察表

調査番号	区画	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)							
							器高	口径	底径											
43	8	28	G-3区	1層	1018	—	3	126.42	126.42	122.42	1,070	口縁	陶器	胎土不明 胎土						
総合破片 点数		18		総合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 ・遺物番号 (点数)			G-3区・1層・0903・No. 1 (1)													
胎土 (土質)		組織	系	粒径	細~中粒	種類	灰白色土		量	少量	備考	(土質調査)								
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (保存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内								
	ナガ 胎土		(黒褐色)	—	—	口 唇 部 (10~15%)							ナガ L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—				
	胎土 胎土		(黒褐色)	—	黒褐色 底径部付着	口 縁 部 (10~15%)											ナガ L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—
	ナガ (底径上部 剥離部)		(黒褐色)	—	剥離	底 部 (20%)														
胎土 (底径上部 剥離部付着)		(黒褐色)	—	剥離	胴部上半 (20%)		L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—										
胎土 (底径上部 剥離部付着)		(黒褐色)	—	剥離	胴部下半~底部 (20%)						L土 黒土調文	灰白色 (G2000-0)	灰白色 底径部付着	—						

表31 向別遺跡 P S - 5 出土復原土器観察表

図	番号	原産	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (mm)		重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)				
								器高	口径								
41	7	28	伊東-5	1層	0027	—	5	121.41	125.49	6.3	71%	口縁部 底縁部	PS5	復原土器(復原)			
接合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 →遺物番号(点数)								$J = 4.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1)$ $K = 3.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1)$ $L = 2.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1)$									
胎土 (産地材)		種類	色	粒径	単位	種類	割合(%)	量	中量	備考	(胎土別)						
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)			文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内				
	王冠部		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	口縁部 (40%)								1.2g	—	—	—
	胴部 (1/3高部) 瓦敷部		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	口縁部 (40%)											
	胴・底 瓦敷部		(黄褐色)	—	—	胴部・胴部 (60%)								1.2g	—	—	—
	フタ部 →1.2g		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	胴部上半 (50%)								1.2g	—	—	—
フタ部		瓦敷部 (14700/1)	—	—	胴部下半～底部 (80%)			1.2g	—	—	—						
底	フタ部		瓦敷部 (14700/1)	—	—	底面 (100%)			—	—	—	—	底				

表32 向別遺跡 J - 4 区出土復原土器観察表

図	番号	原産	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (mm)		重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)				
								器高	口径								
41	8	28	J-4区	1層	0023	—	5	128.42	128.31	7.2	70%	胎土 胎土下部	PS5	復原土器(復原)			
接合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 →遺物番号(点数)								$J = 4.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1)$ $K = 3.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1)$ $L = 2.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1)$ $M = 1.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1)$									
胎土 (産地材)		種類	色	粒径	単位	種類	割合(%)	量	中量	備考	(胎土別)						
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)			文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内				
	フタ部 瓦敷部		黄褐色 (14700/1)	—	—	胴部・胴部 (6~20%)								1.2g	—	—	—
	胴部(胴部) フタ部		黄褐色 (14700/1)	—	—	胴部上半 (20~30%)								1.2g	—	—	—
底	胴部(胴部) フタ部		黄褐色 (14700/1)	—	—	胴部上半 (20~30%)			1.2g	—	—	—	底				

表33 向別遺跡 P S - 2 出土復原土器観察表

図	番号	原産	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (mm)		重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)				
								器高	口径								
41	9	28	伊東-2	1層	0723	№.1	5	128.33	125.33	1.027	口縁下部 胎土下部	PS2	復原土器(復原)				
接合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 →遺物番号(点数)								$P = 2 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow 2 (1), 0.012 \rightarrow 2 (1), 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1), 0.012 \rightarrow (1)$ $K = 3.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), L = 2.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1), M = 1.02 \cdot 1.88 - 0.012 \rightarrow (1)$									
胎土 (産地材)		種類	色	粒径	単位	種類	割合(%)	量	中量	備考	(胎土別)						
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)			文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内				
	フタ部		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	口縁部 (30%)								1.0g	—	—	—
	フタ部 (1/3高部)		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	口縁部 (20%)											
	瓦敷部 (1/3高部)		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	胴部 (25%)								1.0g	—	—	—
	胴部(胴部) →1.0g		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	胴部上半 (30%)								1.0g	—	—	—
底	胴部(胴部) →1.0g		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	胴部下半～底部 (40%)			1.0g	—	—	—	底				
	フタ部		2.01(黄褐色) (14700/1)	—	—	底面 (30%)			—	—	—	—	底				

表34 向別遺跡 L-5区出土復原土器観察表

図	番号	原形	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
								器高	口径	底径				
42	13	29	L-5区	1層	0021	—	1	136.71	136.71	135.61	779	片断～底唇	器種不明	42B 復原土器(片断)
総合破片 取込数								総合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 -遺物番号(点数)			L-5区・1層・0001～(1), 2, 0002～(1), 3, 0020～(1)			
胎土 (定和材)		種類	赤	粒径	800	種類	赤土・黒土 を混合	量	中量	備考	(片断あり)			
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	口 唇 部 (30%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—				
	ナツメ 丸 → 丸 → 直線文	(黄褐色)	黄褐色 土化付着	—	口 縁 部 (30%)	ナツメ 丸 → ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—				
	ナツメ 丸 → ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	—	—	頸 部・肩 部 (70%)	ナツメ 丸 → ナツメ 丸	(黄褐色)	黄褐色 土化付着	—	—				
	ナツメ 丸 → ナツメ 丸	黄褐色 (L1, 1000/2)	黄褐色	黄褐色	胴部上半 (70～90%)	ナツメ 丸 → ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—				
内	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	黄褐色	片断	胴部下半～底唇 (10%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—	片断			
底	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	黄褐色	片断	底 面 (20%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—	片断			

表35 向別遺跡 I・J-3・4区出土復原土器観察表

図	番号	原形	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
								器高	口径	底径				
42	11	29	I・J-3・4区	1層	0008	—	24	126.23	126.23	62.0	2,429	口縁～底唇	器種不明	42B 復原土器(片断)
総合破片 取込数								総合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 -遺物番号(点数)			I・J-3・4区・1層・0001～(1), 2・0002・1層・0003～(1)			
胎土 (定和材)		種類	赤	粒径	900	種類	赤土・黒土 を混合	量	中～大量	備考	(片断・底唇付の破片あり)			
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	ナツメ 丸(比色)	(黄褐色)	黄褐色	—	口 唇 部 (30%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—				
	比色(ナツメ 丸(比色))	(黄褐色)	黄褐色	—	口 縁 部 (30%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—				
	比色(ナツメ 丸(比色))	黄～黄褐色 (L1000/2 →L1000/2)	黄褐色	—	頸 部 (30～20%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	黄褐色	—	—				
	比色(ナツメ 丸(比色))	黄褐色 (L1, 1000/2)	黄褐色	黄褐色	胴部上半 (80%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	黄褐色 (L1, 1000/2)	—	—				
底	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1, 1000/2)	黄褐色	片断	胴部下半～底唇 (80～100%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—	片断			
底	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1, 1000/2)	黄褐色	片断	底 面 (100%)	ナツメ 丸	(黄褐色)	—	—	—	片断			

表36 向別遺跡 E-3区出土復原土器観察表

図	番号	原形	出土地点	層位	目付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)
								器高	口径	底径				
42	12	29	E-3区	1層	1004	—	1	126.42	125.30	124.81	442	口縁～底唇	器種不明	42B 復原土器(片断)
総合破片 取込数								総合・同一個体破片 出土地点・層位・目付 -遺物番号(点数)			E-3区・1層・1000～(1), 2・1001・1層・1002～(1)			
胎土 (定和材)		種類	赤	粒径	800	種類	赤土・黒土 を混合	量	中量	備考	(片断あり)			
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (積存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	—	—	口 唇 部 (15%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—				
	ナツメ 丸	(黄褐色)	黄褐色 土化付着	—	口 縁 部 (20%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—				
	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	—	—	頸 部・肩 部 (20%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—				
底	ナツメ 丸	比色(黄褐色) (L1000/2)	黄褐色 土化付着	—	胴部上位 (5%)	ナツメ 丸	(比色(黄褐色) (L1000/2))	—	—	—	片断			

表37 向別遺跡 L-5区出土復原土器観察表

図 番 号	図 版	出土地点	層位	日付	遺物 番号	破片 点数	計 測 値 (cm)			重量 (g)	部 位	器 種	備 考 (分類・型式)	
							器高	口径	底径					
42	13	29	L-5区	1層	0003	—	2	29.33	123.71	7.8	258	底器	258 (258)	3003
接合破片 数点数		3	接合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 ・遺物番号 (点数)				N=3区・1層=0003→(1)							
胎 土 (泥和材)		組織	—	粒径	000	種類	鉄灰・炭粉 土質の多		量	少量	備考	(白色土器中の粘土)		
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部 位 (残存率)			文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
					胴部下半～底部 (20～100%)	—	—						—	—
底	—	—	—	—	底 面 (100%)	—	—	—	—	—	—	—		

表38 向別遺跡 I・J-3・4区出土復原土器観察表

図 番 号	図 版	出土地点	層位	日付	遺物 番号	破片 点数	計 測 値 (cm)			重量 (g)	部 位	器 種	備 考 (分類・型式)	
							器高	口径	底径					
42	14	29	I・J-3・4区	1層	0025	—	2	26.62	124.37	2.8	277	底器	277 (277)	3003
接合破片 数点数		3	接合・同一個体破片 出土地点・層位・日付 ・遺物番号 (点数)				I・J-3・4区・1層=0025→(1)							
胎 土 (泥和材)		組織	—	粒径	000	種類	鉄灰・炭粉 土質の多		量	少量	備考	(赤褐色土器)		
外	文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	部 位 (残存率)			文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内		
					胴部下半～底部 (50%)	—	—						—	—
底	—	—	—	—	底 面 (50%)	—	—	—	—	—	—	—		

表39 向別遺跡 遺構出土破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺構 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
胎土(産和材)						文様・調整			色調		使用の痕跡		土器 型式	
続群	細径	種類	外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面			
44	1	30	P-1	1層	0613	—	2	胴部	29.7	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土・底物 とじにあり (白色顔料)	ハツマ ツマ ミヤキ	ナツ	—	紅褐色 (10197/1)	紅褐色 (10196/2)	黒色化 底物付着	—	—	—	—	縄文文化期	
44	2	30	P-2	1層	1040	—	2	口縁部	36.4	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土・底物 とじにあり (白色顔料)	ハツマ ツマ ミヤキ	ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	紅褐色 (10196/2)	—	—	—	—	—	縄文文化期 前期	
44	3	30	P5-2	1層	0730	—	1	胴部	6.1	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土主体 (産和産物)	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100	ミヤキ	—	紅褐色 (10196/2)	褐色 (7, 10197/1)	—	—	—	—	—	胎・中粒	
44	4	30	P5-4	1層	0827	—	1	口縁部	9.1	鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土・底物 とじにあり (白色顔料)	ミヤキ (産和産物の 調整物)	ミヤキ	—	紅褐色 (7, 7)	黒褐色 (7)	黒色化	黒色化 底物付着	—	—	—	縄文文化期	
44	5	30	P5-5	1層	0827	—	1	胴部	21.5	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	細粒	胎土・底物 とじにあり (白色顔料)	ハツマ ツマ ミヤキ	ナツ	—	紅褐色 (7, 10197/2)	黒褐色 (7)	黒色化 底物付着	黒色化 底物付着	—	—	—	縄文文化期	
44	6	30	P5-7	1層	1003	4	1	胴部	9.0	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土・底物 とじにあり (白色顔料)	比羅文	ミヤキ	—	褐色 (10197/1)	褐色 (10197/1)	—	—	—	—	—	縄文文化期	
44	7	30	P5-8	1層	0828	—	1	胴部(口 縁部)	302.5	深鉢 (製)	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土・底物 とじにあり (白色)	ミヤキ	ミヤキ ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	黒褐色 (7)	黒色化	黒色化 底物付着	—	—	—	縄文文化期	

表40 向別遺跡 包含層出土破片土器観察表(1)

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺構 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
胎土(産和材)						文様・調整			色調		使用の痕跡		土器 型式	
続群	細径	種類	外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面			
45	1	30	M-4底	1層	0803	—	1	口縁部	25.5	深鉢	1層×胎	—	一次整理では確認	
無	細粒	胎土主体 (底物・ 有底物)	赤褐色 ナツ	ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	紅褐色 (10197/1)	黒色化 底物付着	—	—	—	—	—	
45	2	30	L-4底	1層	0829	—	1	口縁部	31.0	深鉢	1層×胎	—	—	
無	細粒	胎土主体 (底物・ 有底物)	赤褐色 ナツ	赤褐色 ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	褐色 (10197/1)	黒色化	—	—	—	—	—	
45	3	30	C-7底	2層	1004	—	1	口縁部	7.9	深鉢	1層×胎	—	口縁部は外面に張り出す	
無	細粒	胎土主体	赤褐色 ナツ	ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	紅褐色 (10197/2)	—	—	—	—	—	最新調査式	
45	4	30	M-5底	1層	0804	—	1	口縁部	7.1	深鉢	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土主体 (産和産物 白色顔料)	比羅文	ナツ (胎土調整)	—	紅褐色 (10197/2)	黒褐色 (7)	黒色化	黒色化	—	—	—	最新調査式	
45	5	30	D-4底	1層	1019	—	1	口縁部	12.9	深鉢	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土主体	赤褐色 ナツ	赤褐色 ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	黒褐色 (7)	黒色化 底物付着	黒色化 底物付着	—	—	—	最新調査式	
45	6	30	L-5底	1層	0823	—	2	口縁部	36.9	深鉢	1層×胎	—	—	
無	中粒	胎土主体 (産和産物)	比羅文	ナツ (胎土調整)	—	紅褐色 (10197/2)	黒褐色 (7, 10197/2)	黒色化	黒色化 (7, 10197/1)	—	—	—	最新調査式	
45	7	30	M-4底	1層	0829	—	1	胴部	14.4	深鉢	1層×胎	—	—	
無	細粒	胎土主体 (底物・ 有底物)	赤褐色 (1, 1, 1, 調整)	ナツ	—	紅褐色 (10197/2)	紅褐色 (10196/1)	—	—	—	—	—	—	

表40 向別遺跡 包含層出土破片土器観察表(2)

図	番号	図面	出土地点	層位	取り上げ日	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
粘土(湿和材)						文様・調整			色調		使用の痕跡		土器 型式	
縦横	経径	種類	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
45	8	30	O-5区	1層	0615	—	2	胴部	22.4	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土 L.灰土 L.灰土	磁引物 L.灰土 L.灰土 L.灰土	ナデ	(磁引物) L.灰土	—	—	—	—	—	—	—	
45	9	30	B-5区	1層	0612	—	2	胴部	24.2	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (白色泥岩)	灰土主体 磁引物	灰土主体 磁引物	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	
45	10	30	M-2区	1層	0614	—	1	胴部	12.1	深鉢	1層5区	—	—	
無	中粒	灰土主体 (白色泥岩)	灰土主体 (L.石骨) L.灰土	灰土主体 (L.石骨) L.灰土	ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	
45	11	30	J-5区	M層	0602	—	1	胴部	22.8	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	
45	12	30	L-4区	1層	0629	—	1	2	胴部	17.6	深鉢	1層5区	—	—
無	中粒	灰土主体 (白色泥岩)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	
45	13	30	K-5区	1層	0621	—	1	胴部	35.5	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (白色泥岩)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	
45	14	30	M-4区	1層	0620	—	8	胴部	36.9	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	
45	15	30	G・H-3区	1層	0638	—	1	胴部	16.7	深鉢	1層5区	—	—	
無	細~中粒	灰土主体 (白色泥岩)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	
45	16	30	H-3区	1層	0616	—	2	口縁部	36.6	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	
45	17	30	K-5区	1層	0620	—	1	口縁部	66.3	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	18	30	L-5区	1層	0620	—	1	口縁部	97.2	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	19	30	L-5区	1層	0621	—	1	口縁部	67.4	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	20	31	J-3区	1層	0625	—	1	口縁部	105.0	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	21	31	J-4区	1層	0622	—	1	2	口縁部	149.2	深鉢	1層5区	—	—
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	22	31	G・H-3区	1層	0628	—	1	口縁部	201	深鉢	1層5区	—	—	
無	粗粒	灰土主体 (厚層状)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(口縁部)	—	—	—	—	—	—	—	
45	23	31	I-4区	1層	0611	—	2	胴部	106.8	深鉢	1層5区	—	—	
無	中~粗粒	灰土主体 (白色泥岩)	磁引物 L.灰土	磁引物 L.灰土	ナデ	(附焼工)	—	—	—	—	—	—	—	

表40 向別遺跡 包含層出土破片土器観察表(4)

国	番号	国産	出土地点	層位	取り上げ日	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
胎土(産和材)						文様・調整			色調		使用の痕跡		土器 型式	
						外面		内面		外面		内面		
48	40	31	G-3区	1層	0927	—	3	口縁部	19.5	深鉢 (甑)	焼附	—	—	
無	破綻	若石主体 (白色岩片)	沈殿文 斑入	ミ字キ	(口縁部) 斑入 ナズ (沈殿文の 調整用)	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期 前期
48	41	31	G-3区	1層	1000	—	1	口縁部	18.8	深鉢 (甑)	焼附	—	—	
無	破～中破	若石・磁物 土もにあり (白色の 岩片・磁物)	磁付物 斑入文 斑入 ナズ (調整文)	ミ字キ	(口縁部) ナズ (磁付物) 斑入	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	42	31	J-4区	1層	0913	—	1	口縁部	8.8	深鉢 (甑)	焼附	—	—	
無	破綻	磁物主体 (白色・ 有孔磁物)	沈殿文 斑入 ナズ	ミ字キ	(口縁部) ナズ	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	43	31	G-3区	1層	0927	—	1	口縁部	8.8	鉢	焼附	—	—	
無	中～破綻	若石主体 (ナース)	沈殿文 斑入	ミ字キ	(口縁部) ミ字キ	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	44	31	N-5区	1層	0918	—	1	口縁部	10.8	鉢?	焼附	—	—	
無	破～中破	若石主体 (薄緑石)	磁付物 斑入付 沈殿文	ミ字キ	(口縁部) ミ字キ ナズ (斑付) 斑入	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	45	31	G-3区	1層	1015	—	1	蓋部	29.9	深鉢 (甑)	焼附	—	—	
無	中破	若石・磁物 土もにあり (白色の 岩片・磁物)	(ナズ) ナズ	ナズ	(底外面) 蓋部	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	46	31	1-4区	1層	0911	—	1	蓋部	6.7	甕	焼附	—	—	底面あり 磨耗
無	破綻	若石・磁物 土もにあり	ナズ	ナズ	(底外面) ナズ	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文文化期
48	47	31	L-4区	1層	0914	—	1	口縁部	89.7	深鉢 (甑)	焼附?	磨耗孔あり	—	
無	中破	若石主体	ナズ	ナズ	(口縁部) 斑入	—	—	—	—	—	—	—	—	
48	48	31	L-5区	1層	0920	—	1	口縁部	11.3	深鉢 (甑)	焼附	—	—	
無	中破	若石・磁物 土もにあり (磁石)	同層部出土 ハナメ ナズ	ナズ	(口縁部) ナズ	—	—	—	—	—	—	—	—	縄文式
48	49	31	G-3区	1層	1015	—	1	口縁部 調整用下位	23.4	鉢	焼附?	—	—	
無	破～中破	若石主体 (白色岩片)	ミ字キ (調整用)	ミ字キ	(口縁部) ミ字キ	—	—	—	—	—	—	—	—	
48	50	31	L-5区	1層	0721	—	1	口縁部	11.1	鉢?	焼附?	—	—	磨耗孔
無	中～破綻	若石主体	沈殿文 斑入 (ミ字キ)	ナズ	(口縁部) ミ字キ	—	—	—	—	—	—	—	—	
48	51	31	L-4区	1層	0929	—	1	口縁部	10.8	深鉢	ミ字キ?	—	—	磨耗
無	破～中破	若石・磁物 土もにあり	若石 沈殿文	ミ字キ ナズ	(口縁部) ナズ	—	—	—	—	—	—	—	—	
48	52	31	J-4区	1層	0918	—	1	蓋部	11.9	深鉢	1段+磨?	—	—	
無	破綻	磁物主体 (白色・ 有孔磁物)	磁付文 沈殿文	ナズ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	同式式?

表43 向別遺跡 包含層出土石製品観察表

編年	遺跡	出土位置	層	取り上げ日	遺物番号	形状	計測値 (mm)				材質		加工	使用	用途	備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	成分	特徴				
第1	36	1-4区	1層	1010	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第2	36	2-4区	1層	1011	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第3	36	3-4区	1層	1012	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第4	36	4-4区	1層	1013	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第5	36	5-4区	1層	1014	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第6	36	6-4区	1層	1015	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第7	36	7-4区	1層	1016	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第8	36	8-4区	1層	1017	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第9	36	9-4区	1層	1018	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第10	36	10-4区	1層	1019	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第11	36	11-4区	1層	1020	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第12	36	12-4区	1層	1021	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第13	36	13-4区	1層	1022	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第14	36	14-4区	1層	1023	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第15	36	15-4区	1層	1024	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第16	36	16-4区	1層	1025	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第17	36	17-4区	1層	1026	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第18	36	18-4区	1層	1027	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第19	36	19-4区	1層	1028	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第20	36	20-4区	1層	1029	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—
第21	36	21-4区	1層	1030	—	1	石製品	5.5	5.5	5.5	15.5	燧石	—	—	—	—

表44 向別遺跡 鉄鍋観察表

編年	遺跡	出土位置	出土層	遺物番号	取り上げ日	計測値 (cm)					重量 (g)	特徴	時期	備考
						状態	部位	口径	器高	底径				
55	36	藤原集中 ・ (C-4区)	1層	1	1012 1015 ・ 1017	複製	—	(33.2)	(10.4)	(10.4)	—	内瓦 四形の開口 二本の脚	平安 イメ文化期	複製表面
						内瓦 口縁部～胴部	8.8	15.1	2.8	115.1	○			
						口縁部～胴部	7.4	12.1	3.2	112.9	○			
						口縁部～底面	10.7	8.2	3.2	110.4				
						胴部～底面	8.6	8.6	3.6	105.3				
						胴部～底面	8.9	8.6	3.2	101.9				
						胴部～底面	4.9	4.5	3.6	112.9				
						胴部～底面	4.2	3.9	3.2	112.2				
						胴部～底面	4.1	4.1	3.1	114.4				
						胴部～底面	3.0	2.5	2.9	111.9				
						底面 遺口・脚	17.2	13.0	3.9	101.0	○			
						小破片	—	—	—	11.9				
						口縁部	—	—	—	11.5				
						胴部	—	—	—	101.0				
2	36	1・J-3・4区	1層	—	0906	複製	—	(43.0)	(15.7)	(10.6)	—	二本の脚	近代	複製表面
						破片 口縁部～底面 脚	21.2	23.9	3.5	100.1	○			

V章 栄丘遺跡

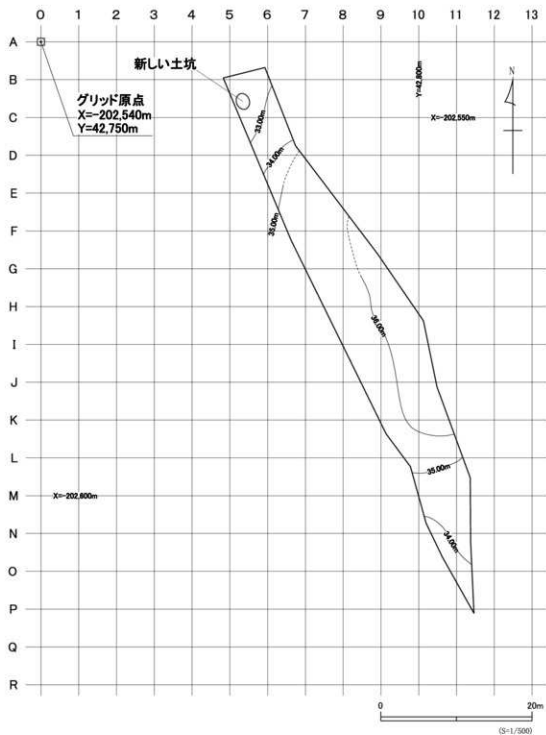


図56 栄丘遺跡 最終面地形測量図

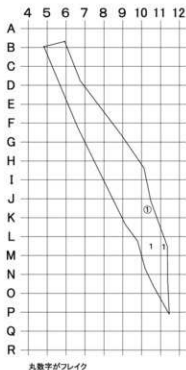


図57 栄丘遺跡 遺物出土分布図・出土遺物

1. 概要 (図56・57 表45~47 口絵2 図版11~13・38)

調査区北東側のB-5区で円形の黒色土が見つかった。調査したが土層断面にI'層が混ざるので、現代の土坑と判断した。遺物は、黒色土層の盛土（I層）から黒曜石の石鏃とフレイクで、調査区の南東側での出土である。1（ウ6）は五角形、2（ウ7）は三角形の、凹基の石鏃である。黒曜石原産地分析の結果は、ともに上土幌産である（Ⅷ章1節2項 付篇2）。また、範囲確認調査でも石鏃が出土している。（未光）

表45 栄丘遺跡 土坑一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面形態	規模 (m)			付属遺構 切り合い	出土遺物			備考	
					確認面 長径 短径	坑底面 長径 短径	最大深		土器	石器等	その他		
現代の土坑	36	—	B-5区	楕円形	(1.8)	*	—	(0.8)	現状の 張り出し	—	—	—	略図 掘り土1'層主体

表46 栄丘遺跡 包含層出土石器点数表

器種名・分類/層位				I層	合計
器種	残存状態	岩石	特殊等		
新 石器 期	石鏃	黒曜石	—	2	2
		黒曜石	—	—	—
		黒曜石	—	2	2
		黒曜石	—	—	—
新 石器 期	フレイク	黒曜石	—	1	1
		黒曜石	—	1	1
合計				3	3

表47 栄丘遺跡 包含層出土石器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺物 番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		残存 状態	加工痕	使用痕	特徴 観察事項	備考	
								長さ	幅	厚さ		岩石名	特徴						
57	1	38	L-11区	I層	0718	—	1	石鏃	2.8	1.2	0.3	1.0	黒曜石 赤色 透明部分	完形	剥離痕	—	五角形 平基	原産地分析試料 「ウ6」	
57	2	38	L-10区	II層	0719	—	1	石鏃	2.4	1.4	0.3	0.7	黒曜石	—	完形	剥離痕	—	三角形 凹基	原産地分析試料 「ウ7」

VI章 昌平町遺跡

1. 概要 (図58 表48 口絵3 図版14~16)

遺構との見込みで調査したのは、土坑11基、焼土1か所で、黒色の覆土は現地表土（I'層）が主体であり、現代と判断した。P-1~4は調査区南東側、P-9~11は北西側に列状でみられ、これら以外は単独である。耕作地であった時の水溜等の施設と考えられる。

土坑 (図59~62 表48 図版16)

P-1

位置 O-22区 規模 $1.48 \times (0.76) / 1.24 \times (0.62) / 0.34\text{m}$ 平面形態 円形
概要 トレンチで南西側を掘り下げ、断ち割りをした。

P-2

位置 P-21区 規模 $1.40 \times 1.42 / 1.20 \times 1.14 / 0.16\text{m}$ 平面形態 円形
概要 坑底面は南側へ傾斜する。

P-3

位置 P-21区 規模 $1.24 \times 1.16 / 1.14 \times 1.04 / 0.16\text{m}$ 平面形態 円形

P-4

位置 P・Q-20・21区 規模 $1.00 \times 0.92 / 0.84 \times 0.82 / 0.12\text{m}$ 平面形態 円形
概要 ともに斜面に構築されるが、坑底面は水平である。

P-5

位置 T-19、U-18・19区 規模 $1.18 \times (0.20) / 0.74 \times (0.62) / 0.34\text{m}$ 平面形態 円形
概要 約4/5が調査区外で、坑底面は二段みられる

P-6

位置 R-16区 規模 $1.20 \times (0.84) / 0.80 \times (0.66) / 0.50\text{m}$ 平面形態 楕円形
概要 内部に直径60cmのドラム缶が据えられていた。

P-7

位置 M-18区 規模 $1.12 \times 1.16 / 0.64 \times 0.60 / 0.36\text{m}$ 平面形態 円形
概要 出土したレキは、混入した地山のものである。

P-8

位置 M-17・18区 規模 $1.76 \times 1.08 / 1.46 \times 0.86 / 0.44\text{m}$ 平面形態 長方形
概要 覆土上位に被熱した布がみられ、鉄が出土した。坑底面は二段ある。

P-9

位置 J・K-10・11区

P-9A 規模 $(0.70) \times 0.68 / 0.60 \times 0.52 / 0.52\text{m}$ 平面形態 楕円形

P-9B 規模 $1.12 \times 1.12 / 0.88 \times 0.84 / 0.84\text{m}$ 平面形態 円形

P-9C 規模 $(0.82) \times 1.08 / (0.38) \times 0.84 / 0.42\text{m}$ 平面形態 円形

概要 3基が重複し、最深のBがAとCを切る。

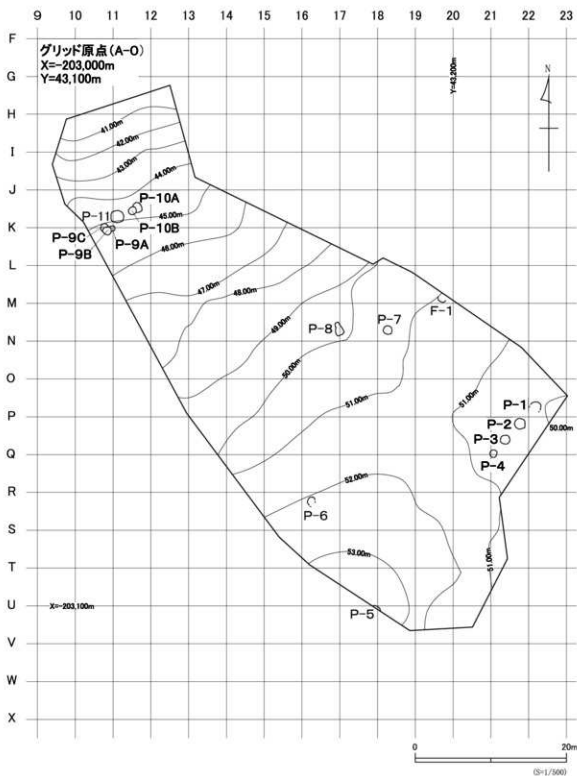
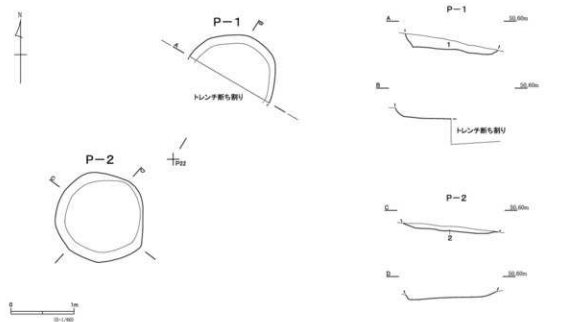
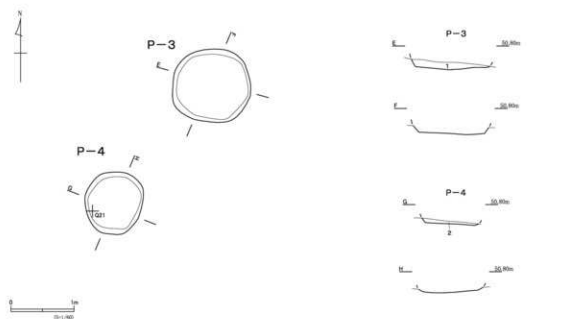


図58 昌平町遺跡 最終面地形測量図・遺構位置図

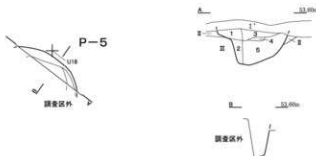


遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成原因	層厚	砂・粘土・シルト(長径2m未満)				礫(長径2m以上)				備考	
						野外土性	色相		顆粒度	種類	面積割合(%)		形状		風化の程度
							色名	サンセルム値色名			粘着性	堅密度			
P-1	1	BⅡ層	常硬	自然	硬塊上~埋上	褐色	10YR4/4	中~強	わずこぶる物	凝灰砂	30	2~3	10	縦円礫	風化
P-2	2	BⅡ層	常硬	自然	硬塊上~埋上	褐色	10YR4/4	中~強	わずこぶる物	凝灰砂	30	2~5	10	縦円礫	風化

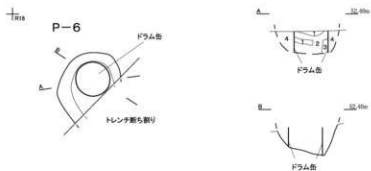


遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成原因	層厚	砂・粘土・シルト(長径2m未満)				礫(長径2m以上)				備考	
						野外土性	色相		顆粒度	種類	面積割合(%)		形状		風化の程度
							色名	サンセルム値色名			粘着性	堅密度			
P-3	1	B層	常硬	自然	硬塊上	灰褐色	10YR2/3	強	無	凝灰砂	20	2~5	5	縦円礫	風化
P-4	2	B層	常硬	自然	硬塊上	灰褐色	10YR2/3	強	無	凝灰砂	20	2~5	5	縦円礫	風化

図59 昌平町遺跡 P-1・P-2・P-3・P-4

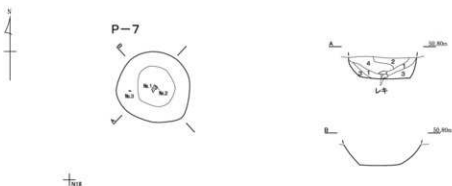


遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考		
						野外土性	色調		粘着性	堅硬度	種類	面積割合(%)			形状	風化の程度
							色名	マンセル色相				平均	最大			
P-5	1	Y層	堆積	自然	境界上	にぶい黄灰色	10YR5/4	地	軟	細砂	0-7	0-3	10	細片礫	適量	IV層主体
	2	Y白層 IV 白土層	堆積	自然	境界上	にぶい黄褐色	10YR4/2	地	軟	細砂	0-7	0-3	10	細片礫	高量	
	3	Y白層 IV 白土層	堆積	自然	境界上	灰黄褐色	10YR4/2	地	軟	土壌化した礫状砂またはIV層ブロック	50%					
	4	白層	堆積	自然	境界上	灰色	10B1.7/1	地	軟	土壌化した礫状砂またはIV層ブロック	10%					
	5	白土層	堆積	自然	境界上	黄褐色	10YR2/2	地	軟	土壌化した礫状砂またはIV層ブロック	5%					



遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考		
						野外土性	色調		粘着性	堅硬度	種類	面積割合(%)			形状	風化の程度
							色名	マンセル色相				平均	最大			
P-6	1	白層	堆積	自然	境界上	黄褐色	10YR2/2	地	しよろ							
	2	Y白層	堆積	自然	境界上	黄褐色	10YR2/2	地	軟	土壌化した礫状砂またはIV層ブロック	3-5%					
	3	Y層	堆積	自然	境界上	にぶい黄褐色	10YR4/2	地	軟							
	4	埋め戻し土	埋め戻し	自然	境界上(1層) / 境界面(2層-4層)	ブロックのブロック(1層のみ)										

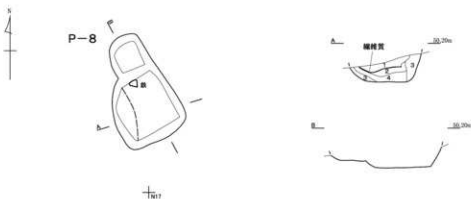
図60 昌平町遺跡 P-5・P-6



P-7										
遺物 番号	土層	時期	部位	形状	点数	層位	高さ (cm)	取り上げ日	掲載	備考
1	シキ	弥生	穴	円形	1	層土	50.41	20180605	—	地山の自然露
2	シキ	弥生	穴	円形	1	層土	50.39	20180605	—	地山の自然露
3	シキ	弥生	穴	円形	1	層土	50.46	20180605	—	地山の自然露

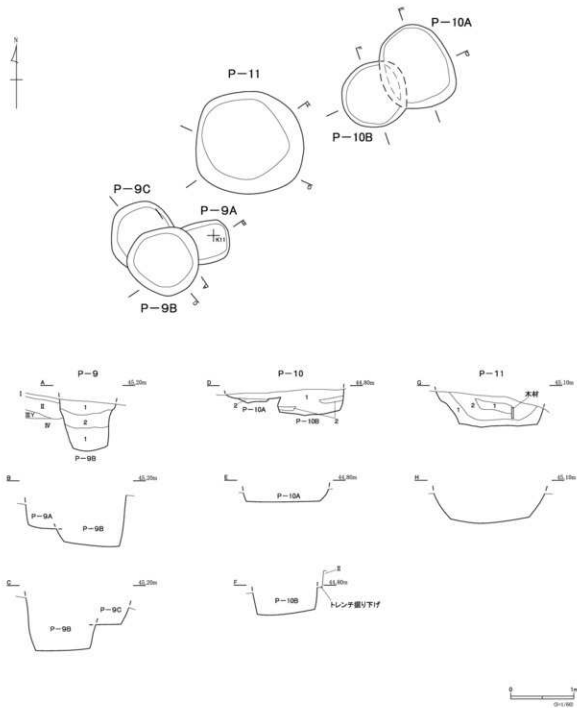


遺構名	断面図 番号	大別層	細分類	生成 原因	層界	野外 土性	砂・粘土・シルト〔高径2m未満〕				礫〔高径2m以上〕				備考	
							色相		粘着性	堅硬度	種類	面積割合 (%)		形状		風化の 程度
							マンセル 色名	マンセル 色相				平均	最大			
P-7	1	Ⅱ層	堆積	自然	境界土	黄褐色	10YR2/2	塊	すこぶる堅	—	—	—	—	—	—	
	2	Ⅲ層Ⅰ	堆積	自然	境界土	灰黄褐色	10YR4/2	塊	堅	細砂岩	10	2~3	5	床石露	風化	
	3	Ⅲ層Ⅱ	堆積	自然	境界土	こぶい黄褐色	10YR5/2	塊	堅	細砂岩	10	3	5	床石露	風化	
	4	Ⅳ層	堆積	自然	境界土ー重積土	こぶい黄褐色	10YR7.5/4	塊	堅	細砂岩	10	3~4	5	床石露	風化	



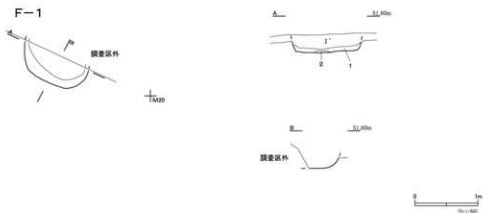
遺構名	断面図 番号	大別層	細分類	生成 原因	層界	野外 土性	砂・粘土・シルト〔高径2m未満〕				礫〔高径2m以上〕				備考	
							色相		粘着性	堅硬度	種類	面積割合 (%)		形状		風化の 程度
							マンセル 色名	マンセル 色相				平均	最大			
P-8 縦溝状	—	遺跡区	掘削による (掘削)	掘削	—	硬砂	1.5YR5/6	—	—	—	—	—	—	—	下部に 灰土層	
	1	Ⅱ層	堆積	自然	境界土	こぶい褐色	10YR2/2	塊	すこぶる堅	細砂岩	2~3	2	5	床石露	風化	
	2	Ⅲ層	堆積	自然	境界土	灰黄褐色	10YR4/2	塊	堅	細砂岩	10~15	3~5	5	床石露	風化	
	3	Ⅳ層	堆積	自然	境界土	灰黄褐色	10YR4/2	塊	堅	細砂岩	2	2~3	5	床石露	風化	
4	Ⅴ層	堆積	自然	境界土	こぶい黄褐色	10YR5.5/4	塊	すこぶる堅	細砂岩	10	2~3	2~3	床石露	風化		

図61 昌平町遺跡 P-7・P-8



遺構名	断面図番号	大別層	細分類	生成要因	層序	砂・粘土・シルト(黒粒文物未検)					層(黒粒200以上)				備考	
						野外土性	色相		粘着性	堅硬度	層厚	層厚割合(%)		形状		風化の程度
							色名	マンセル表色系				平均	最大			
P-9 A・B・C	1	YH層	YH1層	充填	雑然	壤土	黒褐色	10YR2/2	弱	堅	緩状部・砂層?	20~30	2~3	4	並行溝	風化
	2			YH2層	充填	雑然	壤土	黒褐色	10YR2/2	弱	堅	緩状部・砂層?	0	0~0	0	並行溝
P-10	1	YH層	YH1層	充填	雑然	砂壤土	暗褐色	10YR3/2	弱	軟	緩状部	10	0	0	並行溝	風化
	2			YH層	充填	雑然	砂壤土	紅・黄褐色	10YR4/3	弱	軟	緩状部	10	0	0	並行溝
P-11	1	YH層	YH1層	充填	雑然	壤土	黒褐色	10YR2/2	中	軟~堅	緩状部	10	0	0	並行溝	風化
	2			YH層	充填	雑然	砂壤土	灰黄褐色	10YR4/2	なし	軟~堅	緩状部	10	0	0	並行溝

図62 昌平町遺跡 P-9・P-10・P-11



遺構名	調査区番号	大別層	細分類	生成要因	境界	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)						礫(長径2mm以上)				備考
						野外土性	色相		粘性性	堅硬度	種類	数値(mm)			備考	
							野外地	マンセル染色系				面積割合(%)	平均	最大		
F-1	1	1層	底層	埋積	境界上	黄褐色	10YR/7	中~高	堅	幾何不明の細粒(2~3mm)の幾何%程度異なる						
	2	2層	埋積・混入	埋上					層に「風化物」40%混入							

(注) 埋上段から1層下段の埋積層の範囲

図63 昌平町遺跡 F-1

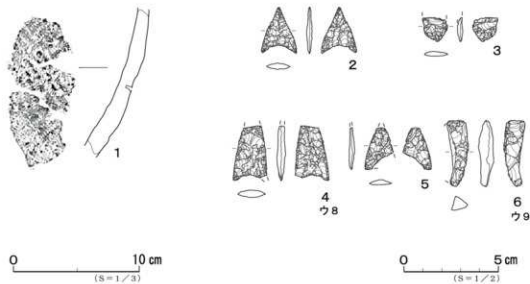
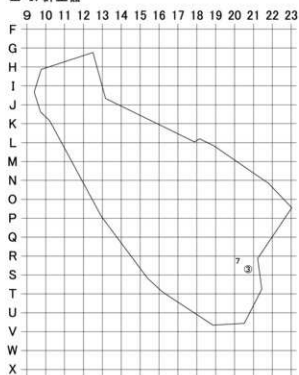


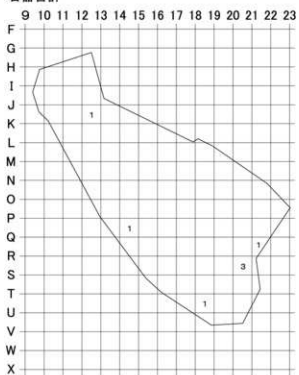
図64 昌平町遺跡 出土遺物

Ⅲ・Ⅳ群土器

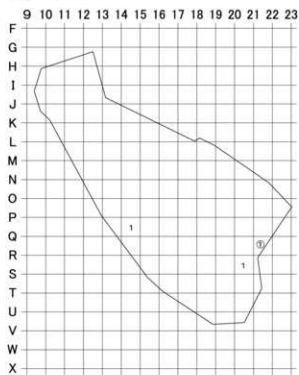


丸数字が遺跡

石器合計



石鉄・スクレイパー



丸数字がスクレイパー

フレイク

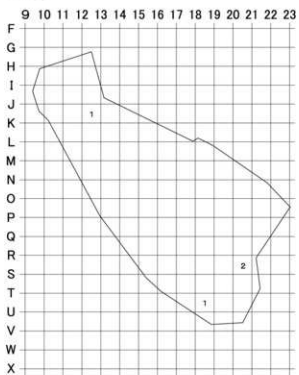


図65 昌平町遺跡 遺物出土分布図

P-10

位置 J-11区

P-10A 規模 $1.34 \times (1.04) / 1.18 \times (0.90) / 0.22\text{m}$ 平面形態 楕円形P-10B 規模 $1.00 \times (0.90) / 0.92 \times (0.76) / 0.44\text{m}$ 平面形態 円形

概要 土層断面では同じ覆土が連続し、新旧関係は不明である。

P-11

位置 J-10・11区 規模 $1.70 \times 1.62 / 1.38 \times 1.26 / 0.56\text{m}$ 平面形態 楕円形

概要 土層断面に木材が垂直にみられた。

焼土

F-1 (図63 表48)

位置 L-19区 規模 $1.12 \times (0.46) / 0.98 \times (0.32) / 0.22\text{m}$ 平面形態 円形?

概要 覆土上位はI'層が落ち込んでみられ、約1/2が調査区外である。

2. 出土遺物 (図64・65 表49~53 図版38)

土器は調査区南東側のII層から、石器は石鏃、スクレイパー、フレイクがII層から出土した。すべて黒曜石でフレイク2点はI'層出土である。石鏃は調査区の中央付近から南側でみられる。

破片土器

1はLR・RL結束第1種羽状縄文が施され、III群と考えられる。

石器

2~6は石鏃である。2は凹基、3は円基である。4(ウ8)・5は先端部と背面右下端部を破損する。6(ウ9)はスクレイパーで、左半分を破損し、側縁部に刃部を有する。黒曜石原産地分析の結果は4は置戸産で、6は上土幌産である。(末光)

表48 昌平町遺跡 遺構一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面 形態	規模 (m)				付属遺構 切り合い	出土遺物			備考	
					破断面		底面・坑底面			最大 深	土器	石器等		その他
					長さ	短径	長さ	短径						
P-1	59	16	O-225区	円形	1.48	(0.76)	1.24	(0.62)	0.34	-	-	-	-	現代の土坑
P-2	59	16	P-21区	円形	1.40	1.42	1.20	1.14	0.16	-	-	-	-	現代の土坑
P-3	59	16	P-215区	円形	1.24	1.16	1.14	1.04	0.16	-	-	-	-	現代の土坑
P-4	59	16	P・Q- 20・215区	円形	1.00	0.92	0.84	0.82	0.12	-	-	-	-	現代の土坑
P-5	60	-	T-17, U-17・185区	円形?	1.18	(0.20)	0.74	(0.16)	0.44	-	-	-	-	現代の土坑 一部、調査区外
P-6	60	-	R-165区	楕円形	1.20	(0.84)	0.80	(0.66)	0.50	ドラム缶 (直径66cm)	-	-	-	現代の土坑
P-7	61	-	M-185区	円形	1.12	1.16	0.64	0.60	0.36	-	-	レキ	-	現代の土坑
P-8	61	-	M- 16・175区	長方形	1.76	1.08	1.96	0.86	0.44	坑底面が 一段	-	-	数(片) 繊維質	現代の土坑
P-9A	62	16	J・K- 10・115区	楕円形	(0.70)	0.68	0.60	0.52	0.52	P-9日 に 切られる	-	-	-	現代の土坑
P-9B	62	16		円形	1.12	1.12	0.88	0.84	0.84	P-9A・C を 切る	-	-	-	現代の土坑
P-9C	62	16		円形	(0.82)	1.08	(0.28)	0.84	0.42	P-9日に 切られる	-	-	-	現代の土坑
P-10A	62	16		楕円形	1.34	(1.04)	1.18	(0.90)	0.22	P-10日と 切り合う断面不明	-	-	-	現代の土坑
P-10B	62	16		円形	1.00	(0.90)	0.92	(0.76)	0.44	P-10Aと 切り合う断面不明	-	-	-	現代の土坑
P-11	62	16	J- 10・115区	楕円形	1.70	1.62	1.38	1.36	0.56	-	-	-	-	現代の土坑
F-1	63	-	L-195区	円形?	1.12	(0.46)	0.98	(0.32)	0.22	粘土 厚み:0.4cm	-	-	-	現代の粘土 一部、調査区外

表49 昌平町遺跡

包含層出土土器点数表

遺物種別/層位			Ⅱ層	合計	
時期	部位	土器			
Ⅲ 群	口縁部	良好	0	0	
		剝離	0		
		磨耗	0		
		小破片	0		
		良好	0		
	底部	剝離	0	0	
		磨耗	0		
		小破片	0		
		良好	3		3
		剝離	3		0
	胴部	磨耗	0	3	
		小破片	0		
		良好	0		
		剝離	0		
		磨耗	0		
不明	小破片	0	0		
	良好	0			
	剝離	0			
	磨耗	0			
	小破片	0			
小計			3	3	
Ⅳ 群	口縁部	良好	0	0	
		剝離	0		
		磨耗	0		
		小破片	0		
		良好	0		
	底部	剝離	0	0	
		磨耗	0		
		小破片	0		
		良好	5		5
		剝離	7		0
	胴部	磨耗	0	7	
		小破片	2		2
		良好	0		
		剝離	0		
		磨耗	0		
不明	小破片	0	0		
	良好	0			
	剝離	0			
	磨耗	0			
	小破片	0			
小計			7	7	
合計			10	10	

表50 昌平町遺跡 遺構出土石器点数表

遺構名					P-7		合計			
器種名・分類/層位					覆土	小計	合計			
器種	残存状態	岩石	被熱等	小計						
レキ	U・R レキ	完形	-	-	3	3	0	3		
		片	砂岩	-					3	3
		小計							3	3
合計					3	3				

表51 昌平町遺跡 包含層出土石器点数表

器種名・分類/層位					Ⅰ層	Ⅱ層	層位 なし	合計
器種	残存 状態	岩石	被熱等	小計				
新石器 群	石器	刮削	磨製石	-	1	1	1	2
		穿孔刮	磨製石	-	1	1	1	2
		片	-	-	-	0	0	0
		片	-	-	-	0	0	0
		刮削	-	-	-	0	0	0
	スラレバール	穿孔刮	-	-	0	0	0	0
		片	-	-	1	1	1	1
		刮削	-	-	1	1	1	2
		片	磨製石	-	1	1	1	2
		刮削	-	-	1	1	1	2
フレイク					1	1	1	2
合計					2	6	4	11

表52 昌平町遺跡 包含層出土破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺物番号	破片数		破片部位	重量(g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
粘土(混和材)				文様・調整				色調		使用の痕跡		土器型式		
種類	約径	種類	外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面					
64	1	30	R-20区	Ⅱ層	0522	—	3	胴部中央	76.9	段縁	器形不明	—		
底～少量	細粒	砂石主体	L.R・R.L 総束第1種 羽状縄文	ナデ (工具の アタリ)	—	に濃い黄褐色 (10YR7/6)	に濃い黄褐色 (10YR7/4)	赤色化褐色 (5YR7/6)	—					

表53 昌平町遺跡 包含層出土石器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺物番号	点数	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材		保存状態	加工痕	使用痕	特徴 観察事項	備考
									長さ	幅	厚さ		原石名	特徴					
64	2	30	—	—	0255	—	1	石鏃	2.5	1.9	0.4	0.7	赤褐色	透明部分	片打	鈍縁面	—	三角形 刃部	
64	3	30	R-20区	Ⅱ層	0522	—	1	石鏃	1.3	1.4	0.3	06.4	赤褐色	透明部分	片	鈍縁面	先端部短く破断 — 破断	二等辺三角形 刃部	
64	4	30	—	—	0514	—	1	石鏃	2.9	1.8	0.4	12.1	赤褐色	透明部分	片打形	鈍縁面	先端部・右側部短く破断 — 破断	二等辺三角形 刃部	
64	5	30	P-14区	Ⅱ層	0517	—	1	石鏃	2.3	1.5	0.3	08.7	赤褐色	—	片打形	鈍縁面	先端部・右側部短く破断 — 破断	二等辺三角形 刃部	
64	6	30	Q-21区	Ⅱ層	0515	—	1	スクリュー	3.2	1.2	0.8	12.1	赤褐色	—	片	鈍縁面	左側・破断	横方向? 刃部短く破断 (少量)	

Ⅶ章 常盤町遺跡

1. 概要 (図66 表54～57・59 口絵3 図版17～25)

土坑1基、Tピット12基、遺物集中2か所を調査した。調査区の西側部分にTP-1～5が集中し、やや南側にTP-6と礫集中S-1がある。ともに西方向への緩斜面である。最も標高が高い調査区中央付近にTP-7～11と土器集中PS-1があり、東へと続く斜面にTP-12、P-1が位置する。PS-1はI群a類と考えられ、くわえて、S-1や包含層から石錘の出土が多いことから、遺跡の主たる時期は縄文時代早期と考える。

2. 土坑 (図67 表54 図版20)

P-1

位置 R-30区 **規模** 0.64×0.60/0.38×0.38/0.14m **平面形態** 円形
確認・調査 遺構確認調査中、黒色土がみられた。半載して壁と坑底面を確認し土坑と判断した。
覆土 黒色土主体である。
坑底面・壁 ともに曲線的で、立ち上がりは不明瞭である。
遺物出土状況 遺物は出土しなかった。
時期 縄文時代と推測される。

3. Tピット (図68～74 表55 図版20～23)

TP-1 (図68 図版20・23)

位置 M-13・14区 **規模** 3.18×1.42/2.44×0.46/1.00m **平面形態** 楕円形/溝状
確認・調査 遺構確認調査中、楕円形の黒色土を確認した。短軸方向で半載したところ、平坦な面と壁の立ち上がりを確認したので、Tピットと判断した。北西側は壁を誤認し掘り過ぎた。
覆土 12層に分けた。層界は曲線的で、中～下位は黄色土主体である。
坑底面・壁 長軸方向の坑底面は概して平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
遺物出土状況 覆土からすり石、台石が出土した。
時期 縄文時代と考えられる。

TP-2 (図69・70 図版20・23)

位置 L-13区 **規模** 3.84×1.00/3.18×0.26/1.24m **平面形態** 溝状/溝状
確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土を確認した。短軸方向で半載し、平坦な面と壁を確認したので、Tピットと判断した。
覆土 7層に分けた。上～中位は黒色土主体である。
坑底面・壁 長軸方向の坑底面は西側が低く、短軸方向の壁は上部が開く。
遺物出土状況 遺物は出土しなかった。
時期 縄文時代と考えられる。

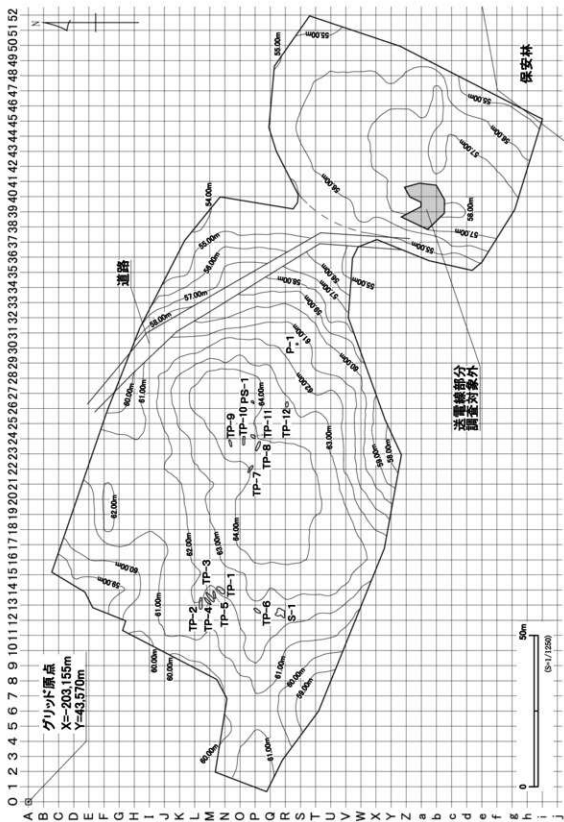
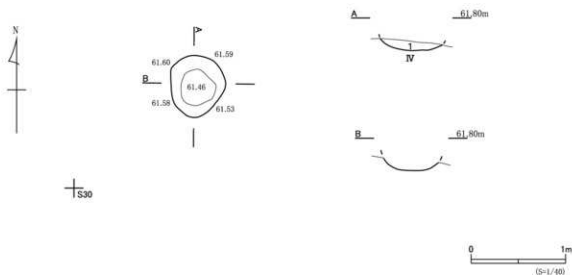


図66 常盤町道跡 最終面地形測量図

P-1



遺構名	断面調査番号	大規模	掘分層	生成要因	層厚	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				腐食径(2mm以上)				備考
						層内土性	色相	マンセル色名	粘着性	堅硬度	種類	面積割合(%)	形状	
P-1	1	5層	埋積	雨積	—	黒褐色	10Y5/3	中	堅	—	—	—	—	—

図67 常盤町遺跡 P-1

TP-3 (図69・70 図版20・23)

位置 L・M-13区 **規模** 3.96×0.98/3.40×0.36/1.34m **平面形態** 溝状/溝状
確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土を確認した。短軸方向で半載し、平坦な面と壁の立ち上がりを確認できたので、Tビットと判断した。

覆土 10層に分けた。層界は上位は曲線的で下位は水平である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は南西側へと傾斜し、短軸方向の壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-4 (図69・70 図版21・23)

位置 L・M-13区 **規模** 3.06×0.74/2.66×0.16/1.20m **平面形態** 溝状/溝状
確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁の立ち上がりを確認したので、Tビットと判断した。

覆土 7層に分けた。上位に黒色土主体が厚い。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は中央付近が若干低く、北東側の壁は比して緩やかである。

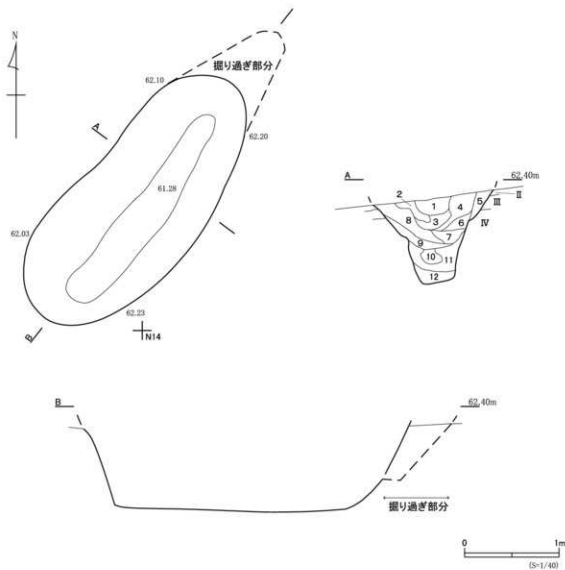
遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-5 (図69・70 図版21・23)

位置 M-13区 **規模** 2.58×0.68/2.10×0.20/0.96m **平面形態** 溝状/溝状

TP-1



TP-1

遺物番号	土器	時期	部位	存在状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	砂石	—	—	—	1	層土(土層)	—	20190628	○	
—	砂り石	片断計	—	—	1	層土(土層)	—	20190628	○	

遺構番号	断面番号	大別層	細分層	生成要因	層界	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考				
						野外土性	マンセル色		粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)			形状	風化の程度		
							色名	マンセル色名				粗目	細目					
TP-1	1	IV層	IV1層	堆積	面状	—	1L6.5	黄褐色	10YR5/3	中	堅	層状砂	25	20%以下	粗角礫	風化		
	2	IV層	IV1層	堆積	面状	—	黒褐色	10YR5/2	中	堅	—	—	—	—	—	—	—	
	3	IV層	IV1層	堆積	面状	—	褐色	10YR4/6	中	(中)軟	—	—	—	—	—	—	—	
	4	IV層	IV2層	堆積	面状	—	暗褐色	10YR5/3	中	堅	—	—	—	—	—	—	—	
	5	IV層	IV3層	堆積	面状	—	—	3m以下のコローム層	10YR5/3	中	堅	—	—	—	—	—	—	
	6	IV層	IV4層	堆積	面状	—	—	褐色	10YR4/4	中	(中)硬	—	—	—	—	—	—	—
	7	V層	V1層	堆積	面状	—	—	1L6.5	黄褐色	10YR4/3	中	軟	—	—	—	—	—	—
	8	IV層	IV5層	堆積	面状	—	—	褐色	10YR5/3	中	(中)硬	—	—	—	—	—	—	—
	9	V層	V2層	堆積	面状	—	—	1L6.5	黄褐色	10YR5/4	中	(中)硬	—	—	—	—	—	—
	10	IV層	IV5層	堆積	面状	—	—	—	暗褐色	10YR5/3	中	軟	—	—	—	—	—	—
	11	V層	V3層	堆積	面状	—	—	—	黄褐色	10YR5/6	中	堅	—	—	—	—	—	—
	12	V層	V4層	堆積	面状	—	—	—	1L6.5	黄褐色	10YR6/4	中	堅	—	—	—	—	—

図68 常盤町遺跡 TP-1

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁の立ち上がりが見られTピットと判断した。

覆土 6層に分けた。黒色土主体は最上位のくぼみにのみ堆積する。

坑底面・壁 坑底面は、長軸方向は西側、短軸方向は北側へ傾斜する。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-6 (図71 図版21)

位置 O・P-12区 **規模** 2.52×0.92/2.84×0.26/1.00m

平面形態 長楕円形/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、長楕円形の黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。

覆土 10層に分けた。上位は黒色土主体が厚い。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は曲線的で中央付近が低く、壁は内傾しオーバーハングする。

遺物出土状況 黒曜石の石鏃とフレイクが出土した。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-7 (図71 図版21)

位置 O-21・22区 **規模** (2.70)×0.72/2.70×0.22/1.02m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。なお、北西側部分のグリッドは掘り下げていたので、上端は破線で示した。

覆土 7層に分けた。黄色土主体は下位に堆積する。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は北西側へ傾斜し、南東側の壁はオーバーハングする。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-8 (図72 図版22・23)

位置 P-23区 **規模** 3.28×0.88/2.84×0.36/0.94m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。

覆土 6層に分けた。最上位は黒色土主体が堆積する。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は中央付近が低く、壁はゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-9 (図73 図版22・23)

位置 N-23区 **規模** 2.52×0.68/2.42×0.22/0.84m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半載し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。

覆土 6層に分けた。上位は黒色土主体で、層界は曲線的である。

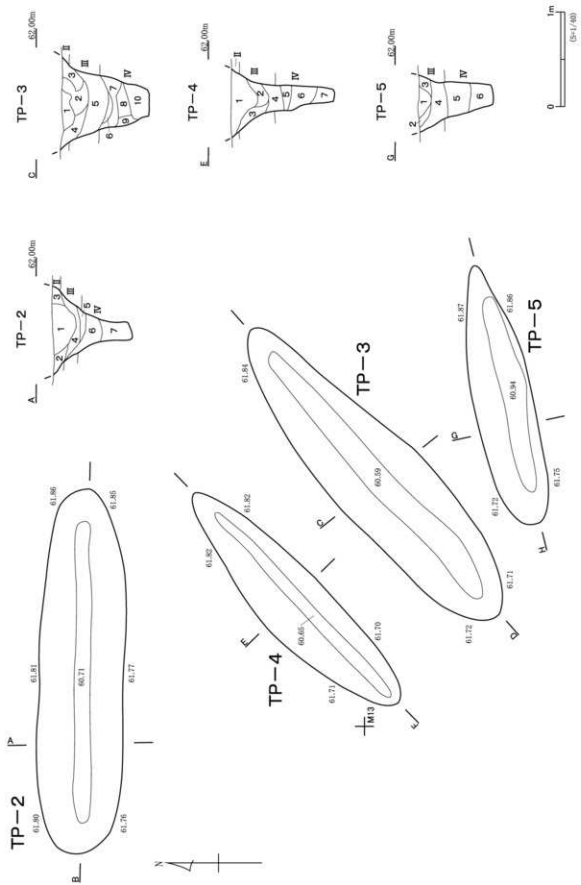
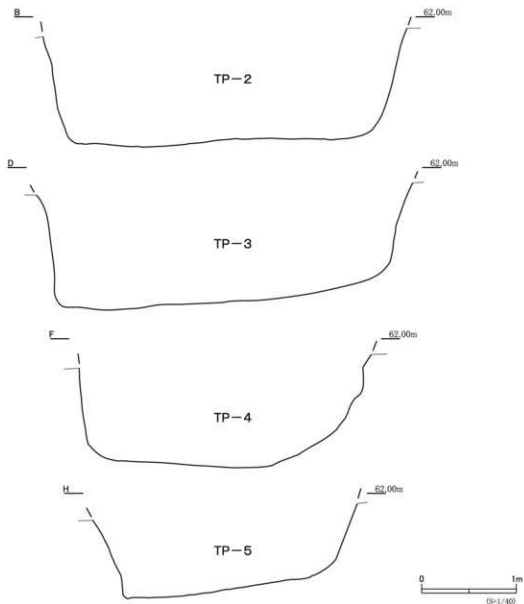


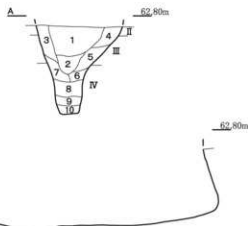
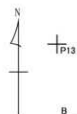
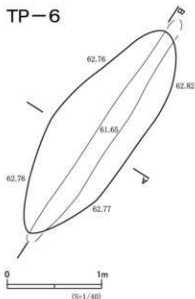
図69 常盤町遺跡 TP-2~TP-5(1)



遺構名	断面図番号	大目録	細分類	生成時期	層・相・土(古土)層種別(㎡未満)				層・相種別(㎡以上)				備考		
					層の土質	色相	サンセル	堆積性	埋没度	種類	面積割合(%)	面積(㎡)		形状	高さの程度
TP-2	1	中Y層	中Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	—
	2	中層	中Y2層	堆積	黄砂	—	100%以上の赤土層・砂層(27.3%)	—	埋没中	25	204.7	段状	前向き	褐色	
	3	中層	中Y3層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	—
	4	中Y層	中Y4層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	—
	5	中Y層	中Y5層	堆積	黄砂	—	灰褐色	100%	中	—	—	—	—	—	—
	6	Y層	Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	—
	7	Y層	Y2層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	—
TP-3	1	中Y層	中Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	2	中層	中Y2層	堆積	黄砂	—	100%以上の赤土層・砂層(27.3%)	—	埋没中	—	—	—	—	—	
	3	中層	中Y3層	堆積	黄砂	—	赤褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	4	中Y層	中Y4層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	5	中層	中Y5層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	6	Y層	Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	7	Y層	Y2層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	8	中Y層	中Y3層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	9	Y層	Y3層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	10	Y層	Y4層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
TP-4	1	中層	中Y1層	堆積	黄砂	—	100%以上の赤土層・砂層(27.3%)	—	埋没中	—	—	—	—	—	
	2	中Y層	中Y2層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	3	中層	中Y3層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	4	中Y層	中Y4層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	5	中Y層	中Y5層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	6	Y層	Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	7	Y層	Y2層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
TP-5	1	中層	中Y1層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	2	中Y層	中Y2層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	3	中Y層	中Y3層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	4	中層	中Y4層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	5	中Y層	中Y5層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	
	6	Y層	Y1層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	7	Y層	Y2層	堆積	黄砂	—	赤い土塊含む	100%	中	—	—	—	—	—	
	8	Y層	Y3層	堆積	黄砂	—	黄褐色	100%	中	—	—	—	—	—	

図70 常盤町遺跡 TP-2～TP-5(2)

TP-6

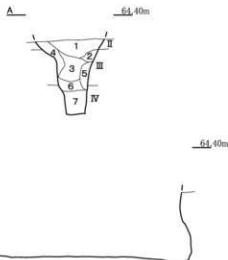
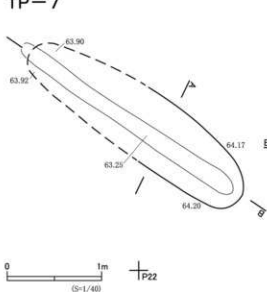


TP-6

遺物番号	土器	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	石鏡	原始期	準定形	I	1	層土1層	—	20180718	○	埋土日層
—	ブシイタ	原始期	—	—	1	層土1層	—	20180719	—	—

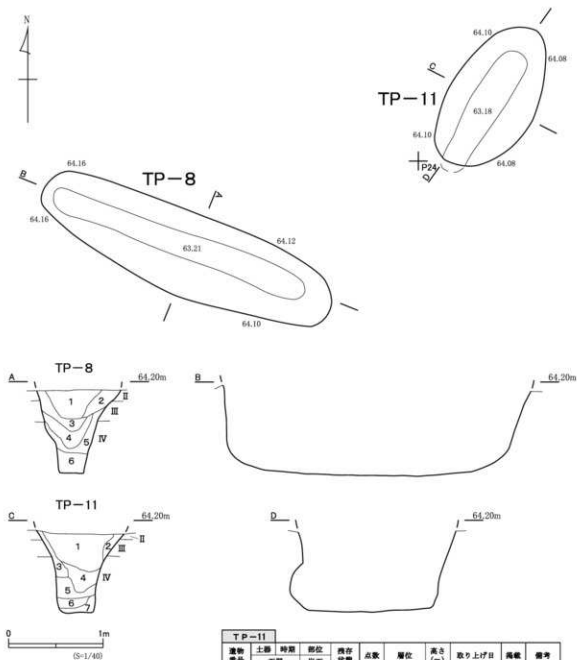
遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層厚	野外工性	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考	
							色相		塑性性	堅密度	種類	量積割合(%)		形状		風化の程度
							色名	マンセル濃色系				平均	最大			
TP-6	1	B層	B1層	堆積	両側	—	黒褐色	10YR5/2	中	堅	—	—	—	—	—	
	2	BY層	BY1層	堆積	両側	—	黒褐色	10YR5/2	中	堅	—	—	—	—	—	
	3	BY層	BY2層	堆積	両側	—	2mm以下のシルト・ clay層・砂層が1%	—	—	—	—	—	—	—	—	
	4	BY層	BY3層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/3	中	堅	—	—	—	—	—	
	5	Y層	Y1層	堆積	両側	—	褐色	10YR4/4	中	堅	—	—	—	—	—	
	6	Y層	Y2層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/5	中	堅	(やや軟)	—	—	—	—	
	7	Y層	Y3層	堆積	両側	—	黄褐色	7.5YR5/5	中	堅	(やや軟)	—	—	—	—	
	8	Y層	Y3層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/5	中	堅	—	—	—	—	—	
	9	BY層	BY4層	堆積	両側	—	堆積色	10YR5/7	中	(やや軟)	—	—	—	—	—	
	10	Y層	Y4層	堆積	両側	—	10mm以下のシルト・ clay層・砂層が2%	黄褐色	10YR5/6	中	(やや軟)	—	—	—	—	

TP-7



遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層厚	野外工性	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考	
							色相		塑性性	堅密度	種類	量積割合(%)		形状		風化の程度
							色名	マンセル濃色系				平均	最大			
TP-7	1	B層	B1層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/2	中	堅	緑次砂	2	最大5	(やや軟)	高化	
	2	B層	B2層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/2	中	堅	緑次砂	1	最大5	(やや軟)	高化	
	3	B層	B3層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/2	中	堅	—	—	—	—	—	
	4	BY層	BY1層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/4	中	堅	緑次砂	10	最大2	(やや軟)	高化	
	5	BY層	BY2層	堆積	両側	—	褐色	10YR4/4	中	堅	—	—	—	—	—	
	6	Y層	Y1層	堆積	両側	—	黄褐色	10YR5/2	中	堅	緑次砂	11	最大2	(やや軟)	高化	
	7	Y層	Y2層	堆積	両側	—	10mm以下のシルト・ clay層・砂層が2%	黄褐色	10YR5/4	中	堅	—	—	—	—	

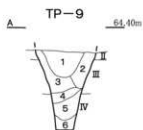
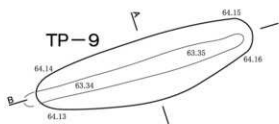
図71 常盤町遺跡 TP-6・TP-7



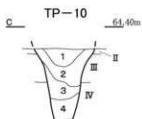
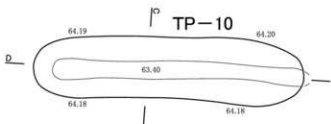
遺物番号		土層	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	—	石層	花崗岩	底面	完好	1	層上1層	—	20180928	○	—

遺構名	断面図番号	大形類	細分層	生成要因	層界	野外土性	砂・粘土・シルト(累積2mm未満)				礫(累積2mm以上)				備考
							色名	マンセル表色系	粘着性	塑性	実積割合(%)	平均	最大	形状	
TP-8	1	砂層	砂層	自然	—	—	黄褐色	10YR2/2	中	—	—	—	—	—	—
	2	砂Y層	砂Y1層	堆積	自然	—	比色(黄褐色)	10YR2/2	中	—	—	—	—	—	—
	3	砂Y層	砂Y2層	堆積	自然	—	3mm以下のローム(第・IV層)が2%	—	—	—	—	—	—	—	—
	4	Y砂層	砂層	自然	—	—	黄褐色	10YR2/2	中	—	—	—	—	—	—
	5	Y層	Y1層	堆積	自然	—	褐色	10YR4/3	中	—	—	—	—	—	—
	6	Y層	Y2層	堆積	自然	—	比色(黄褐色)	10YR5/4	中	—	—	—	—	—	—
TP-11	1	砂層	砂1層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	—	—	—	—	—	—
	2	砂層	砂2層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	—	—	—	—	—	—
	3	Y砂層	Y砂1層・砂層	堆積	自然	—	褐色	10YR4/4	中	—	—	—	—	—	—
	4	砂Y層	砂層	自然	—	—	黄褐色	10YR3/4	中	(中)軟	—	—	—	—	—
	5	Y層	砂層	自然	—	—	10mm以下のローム(第・IV層)が10%	—	—	—	—	—	—	—	—
	6	砂層	砂2層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	(中)軟	—	—	—	—	—
	7	Y砂層	Y砂2層	堆積	自然	—	褐色	10YR4/4	中	(中)軟	—	—	—	—	—

図72 常盤町遺跡 TP-8・TP-11



1024



遺構名	調査区 番号	大別層	細分層	生成 要因	野外 土性	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)			礫(長径2mm以上)				備考		
						色名	マンセル 値色系	粘着性	塑性度	種類	含量割合 (%)	平均 最大		形状	風化の 程度
TP-9	1	B層	堆積	自然	—	黄褐色	10Y2/2	中	中	中	—	—	—	—	—
	2	B Y層	B Y 1層	堆積	自然	—	3mm以下のローム(礫・石膏)計2%	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	B Y層	B Y 2層	堆積	自然	—	褐色	10Y5/4	中	中	中	—	—	—	—
	4	B Y層	B Y 3層	堆積	自然	—	にぶい黄褐色	10Y4/2	中	中	中	—	—	—	—
	5	Y層	Y 1層	堆積	自然	—	黄褐色	7, 8Y3/4	中	軟	—	—	—	—	—
TP-10	1	Y層	Y 1層	堆積	自然	—	黄褐色	10Y5/6	中	(中・中)層	—	—	—	—	—
	2	Y層	Y 2層	堆積	自然	—	にぶい黄褐色	10Y5/4	中	軟	—	—	—	—	—
	3	Y層	Y 3層	堆積	自然	—	黄褐色	10Y5/2	中	硬	—	—	—	—	—
	4	Y層	Y 4層	堆積	自然	—	3mm以下のローム(礫・石膏)計2%	—	—	—	—	—	—	—	—

図73 常盤町遺跡 TP-9・TP-10

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は曲線的で中央付近がくぼみ、短軸方向の壁は直線的に開口する。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-10 (図73 図版22・23)

位置 O-23・24区 **規模** 2.84×0.78/2.72×0.26/0.80m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土がみられた。短軸方向で半截し、平坦な面と壁がみられ、Tピットと判断した。

覆土 4層に分けた。中～下位は黄色土主体である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は中央付近がくぼみ、東側の壁はオーバーハングである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-11 (図72 図版22・23)

位置 O・P-24区 **規模** 1.74×0.94/1.46×0.38/0.88m

平面形態 楕円形/長楕円形

確認・調査 遺構確認調査中、楕円形の黒色土がみられた。短軸方向で半截し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。

覆土 7層に分けた。黒色土主体は中位までと下位に部分的にみられる。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は概して平坦で、南東側の壁はオーバーハングする。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-12 (図74 図版23)

位置 R-26区 **規模** 1.76×0.88/1.44×0.30/0.90m **平面形態** 楕円形/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、楕円形の黒色土がみられた。短軸方向で半截し、平坦な面と壁を確認し、Tピットと判断した。

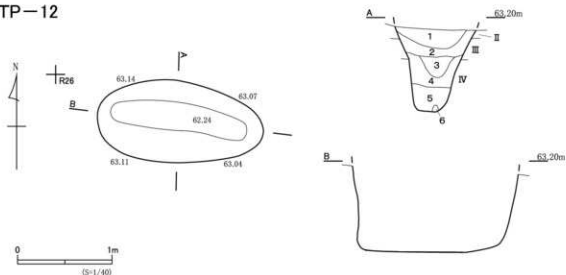
覆土 6層に分けた。第2・4層は水平堆積で、6層は黒色土主体で部分的である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は概して平坦で、短軸方向の壁は開口して立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代と考えられる。

TP-12



遺構名	断面調査時	大別層	細分層	生成要因	層厚	跡付土性	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考	
							色相		粘着性	緊密度	種類	長径(mm)		形状		長径の程度
							色名	マンセル値				割合(%)	平均			
TP-12	1	B層	B-1層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	無	細民石	3	最大10	(原形残)	風化	
	2	B層	B-2層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	無	細民石	1	最大20	(原形残)	風化	
	3	B層	B-3層	堆積	自然	—	2mm以下のローム(層・厚)が5%	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4	Y層	—	堆積	自然	—	紅褐色	10YR2/2	中	中(やや強)	—	—	—	—	—	—
	5	Y層	—	堆積	自然	—	紅褐色	10YR2/2	中	無	—	—	—	—	—	—
	6	B層	B-4層	堆積	自然	—	黄褐色	10YR2/2	中	(やや弱)	—	—	—	—	—	—

図74 常盤町遺跡 TP-12

4. 遺物集中 (図75 表56・57・62 図版24)

(1) 土器集中

PS-1 (図75 図版24)

位置 O-25区 規模 1.14×0.75m

確認・調査 遺構確認調査中、土器が出土し、周囲の石器も含め、位置を記録した。

時期 出土遺物から縄文時代早期前半と判断される。

(2) 礫集中

S-1 (図75 図版24)

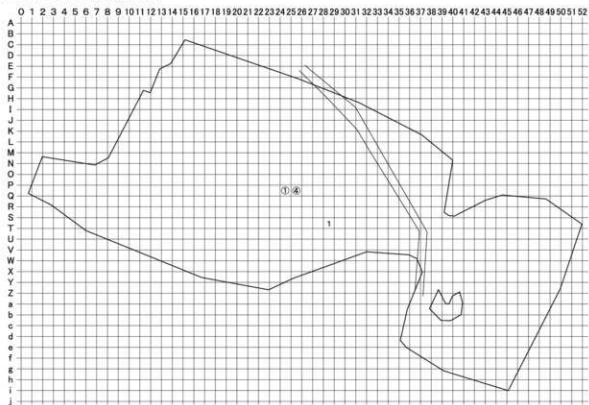
位置 Q-12区 規模 3.24×2.60m

確認・調査 遺構確認調査中、石錘と黒曜石が多くみられた範囲を記録した。

時期 出土遺物から縄文時代早～前期と推測される。

(菊池慈人)

土器 (V群・時期分類不明)



石器合計

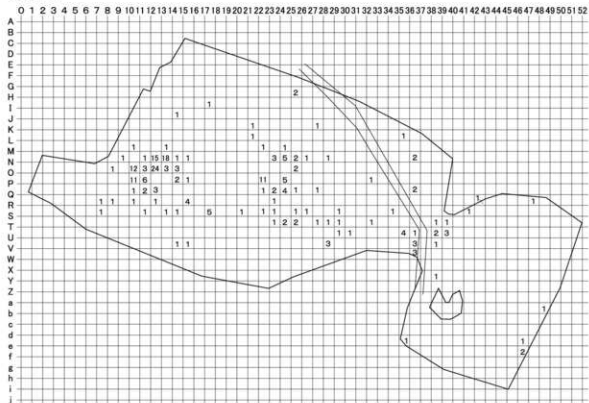
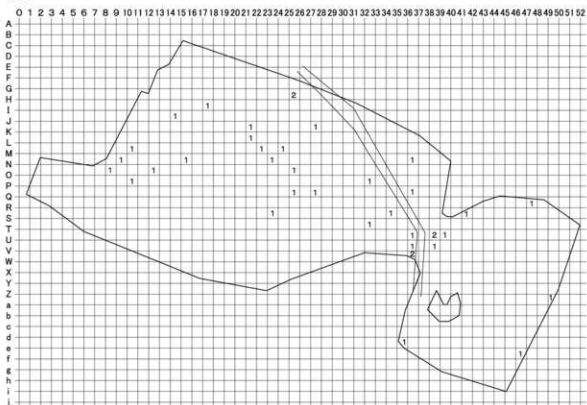
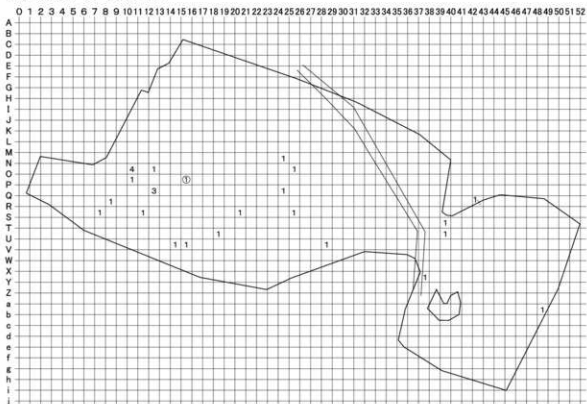


図76 常盤町遺跡 遺物出土分布図(1)

石鏃



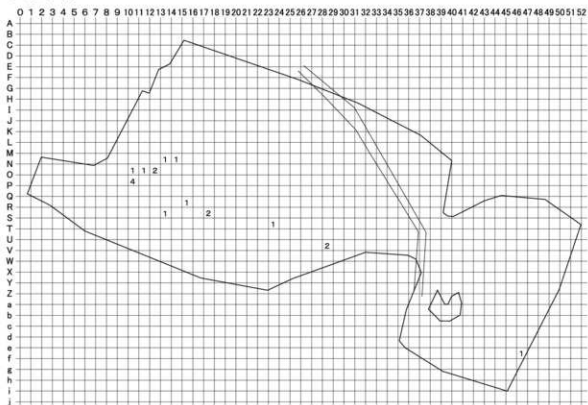
つまみ付きナイフ・スクレイパー



丸数字がつまみ付きナイフ

図77 常盤町遺跡 遺物出土分布図(2)

U・Rフレイク



フレイク

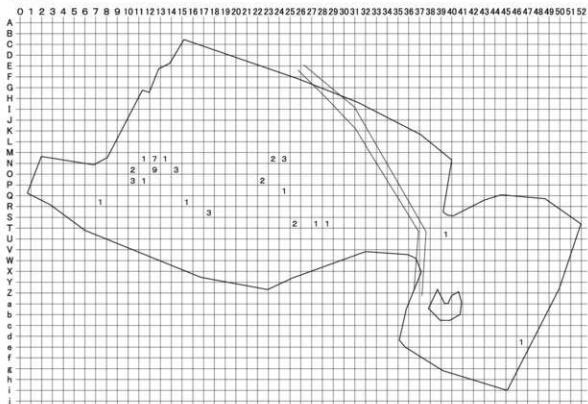
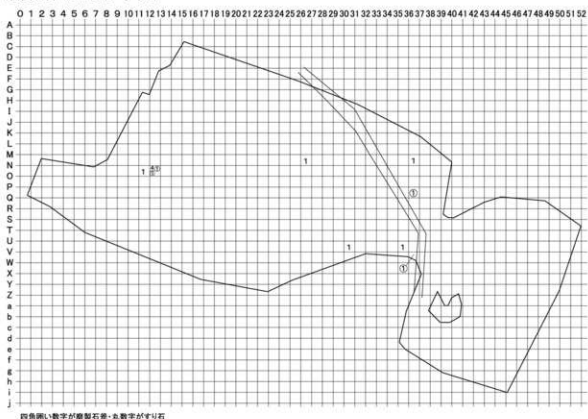


図78 常盤町遺跡 遺物出土分布図(3)

磨製石斧・たたき石・すり石



石錘

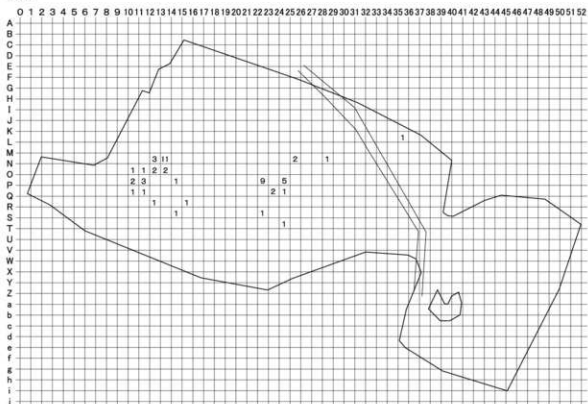
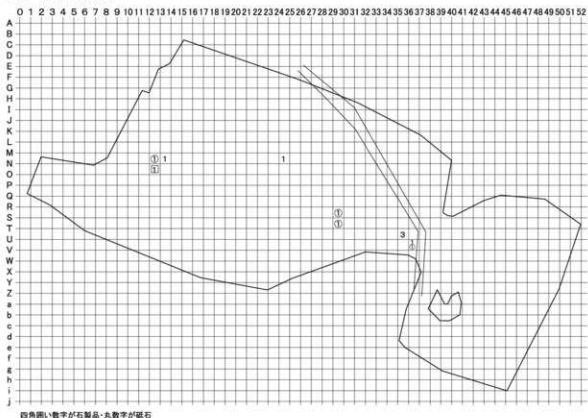


図79 常盤町遺跡 遺物出土分布図(4)

砥石・台石・石製品



U・レキ・レキ

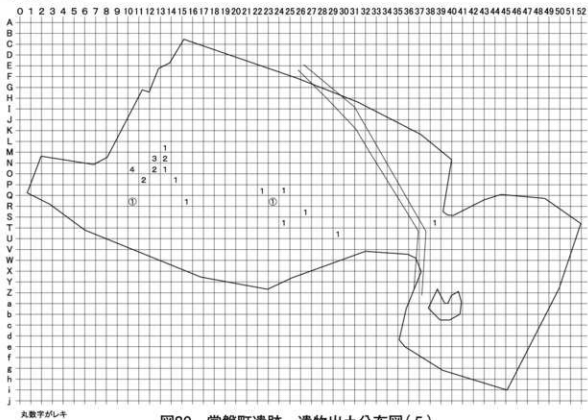


図80 常盤町遺跡 遺物出土分布図(5)

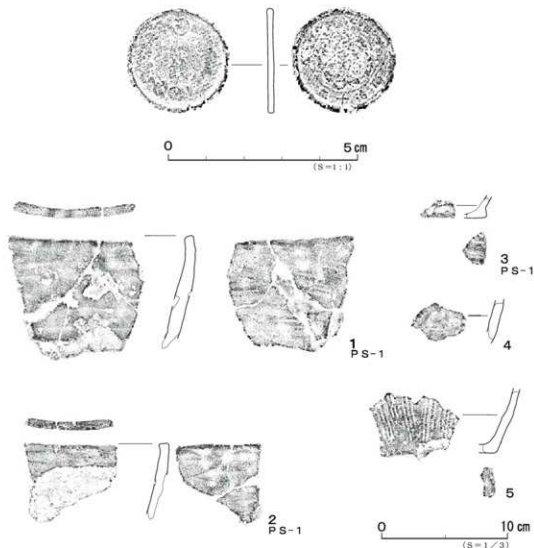


図81 常盤町遺跡 出土古銭・破片土器

5. 包含層出土遺物の概要

出土点数表（表58・60）

土器はⅡ層からの出土が多く、Ⅵ群（一次整理ではⅤ群）1点以外の時期不明のものは、Ⅰ群a類である。石器は268点出土し、各石器群の割合は剥片石器54%、礫石器33%、石製品と自然礫（レキ）が13%である。剥片石器では、石鏃、フレイクがそれぞれ50点弱、スクレイパーとU・Rフレイクの合計が53点で、これらが約1/3ずつを占める。また、黒曜石のつまみ付きナイフが1点出土した。礫石器は約64%が石錘で、次いで、たたき石、台石、砥石である。磨製石斧は1点で、石製品は黒曜石の異形石器とアンモナイトの化石が出土した。

出土分布図（図76～80）

「土器」は調査区の中央付近、土器集中の近くにみられる。「石器合計」は調査区の中央～西側寄りでは、標高が高い中央付近でみられ、東側は縁辺で出土し、土層の残存状態の影響であろう。比して多い部分は、①：M～Rと11～16ラインの間、②：L～Tと22～27ラインの間、③：R～Wと35～40

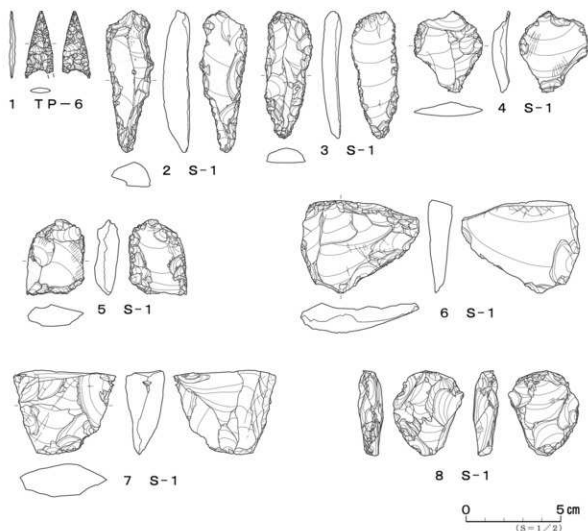


図82 常盤町遺跡 遺構出土剥片石器

ラインの間の3か所である。「石鏃」は遺跡全体で集中はみられない。「つまみ付きナイフ」はO-15区で、「スクレイパー」はN-10区とP-12区からは複数の出土である。「U・Rフレイク」はO-10区から4点出土し、「フレイク」はM・N-12区に多い。「磨製石斧」はN-12区出土で、「たたき石」・「すり石」は少量で散在的である。「石錘」は、前述の①と②に多くみられ、M-13区とO-22区に集中する。「砥石」・「台石」・「石製品」は少量の出土である。「U・Rレキ」と「レキ」も①と②にみられる。

また、明治十年の「竜1銭銅貨」が包含層から出土した(図81上段)。

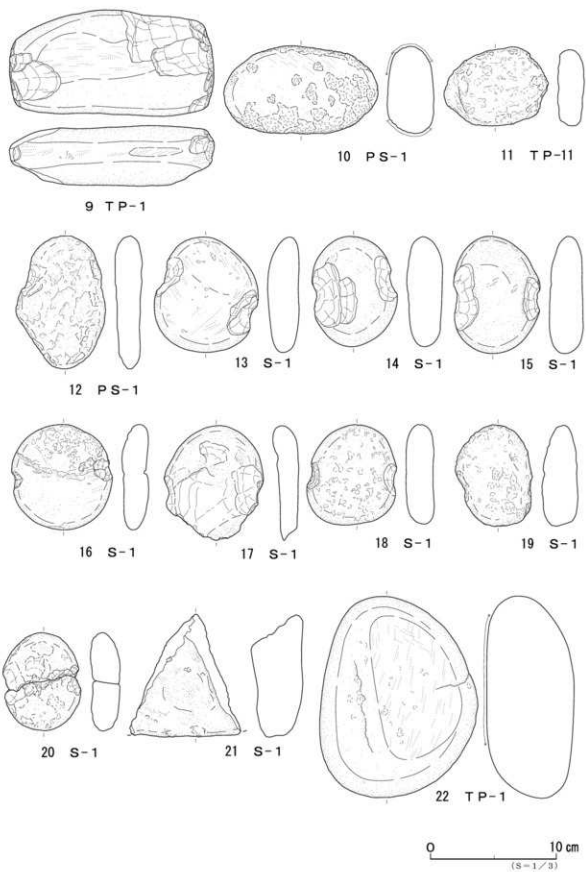


図83 常盤町遺跡 遺構出土礫石器

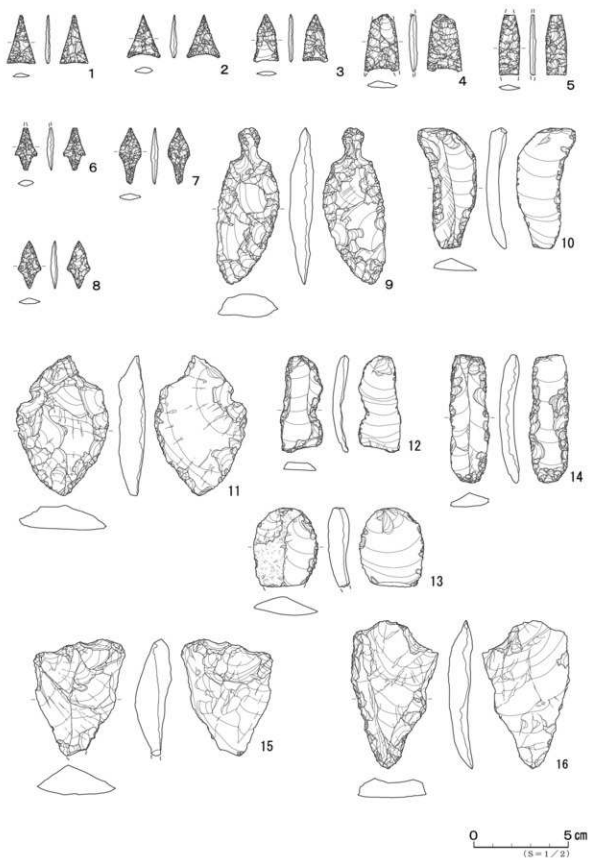


图84 常盤町遺跡 包含層出土剥片石器

6. 土器 (図81 表61 図版38)

遺構 (P S) 出土

1・2は同一個体の口縁部で、口唇部断面は角形で、若干内面に張り出す。外面はナデで、内面は条痕が観察される。3は底部で1・2と同一個体と推定する。1～3はI群a類と判断する。

包含層出土

4の内外面はナデ調整で、I群a類と考えられ、5はRL編縄文が施され、VI群と判断する。

7. 石器 (図82～85 表62・63 図版38～40)

(1) 遺構出土の石器

剥片石器 (図82)

TP出土

1はTP-6出土の石鏃で、基部は曲線的に内湾し、背面右側縁部を破損する。

S出土

2～8はスクレイパーで、2～6は黒曜石、7・8はチャート製である。2・3は背腹両面に剥離面を広く残す縦長素材で、周縁に刃部を有する。4は背面の両側縁と腹面の上部側に二次調整が施される。5は背面下縁に急角度の刃部を有し、破損面を再度加工したと考えられる。6の打面は原礫面で、剥離は背面にのみ観察される。7の断面は下端部へ尖り、広めの剥離痕が観察される。8は側面に一直線状の刃部がみられず、部分的に微細な剥離痕が観察される。

礫石器 (図83)

TP出土

9・22はTP-1出土である。9は片麻岩製のすり石で、下端面に平坦な使用痕がある。22は花崗岩製の台石で、すり面がみられる。11はTP-11出土で、全体が磨耗し、右側縁に抉りが2か所みられる。

PS出土

10・12はPS-1出土である。10は花崗岩製で、上下両端面に敲打痕がみられるので、これらを使用面とする、すり石の未製品と判断した。12は石錘で両側縁に打ち欠きがみられる。

S出土

13～21はS-1出土で、21は台石、これ以外は石錘で片麻岩製が多い。13・14は、打ち欠き部分を結んだ直線が、素材礫の横軸に対し斜めである。15は短軸方向に機能部を有し、16は素材礫が円形で、加工部分は小さい。17は下端部側が破損し、表面に剥離痕がみられる。18は素材礫の横軸上に加工痕がある。19は花崗岩製で、抉りが小さい。20は安山岩と思われ、風化している。21は表面のくぼみを使用痕と判断した。

(2) 包含層出土の石器

剥片石器 (図84)

石鏃

1は平基の二等辺三角形で、2は曲線的な抉りの凹基である。3は五角形で背面の約1/2に先行剥離面を残す。4は先端部と両側縁基部を破損する。5は薄手で細身・長身が特徴の「田原式石鏃」

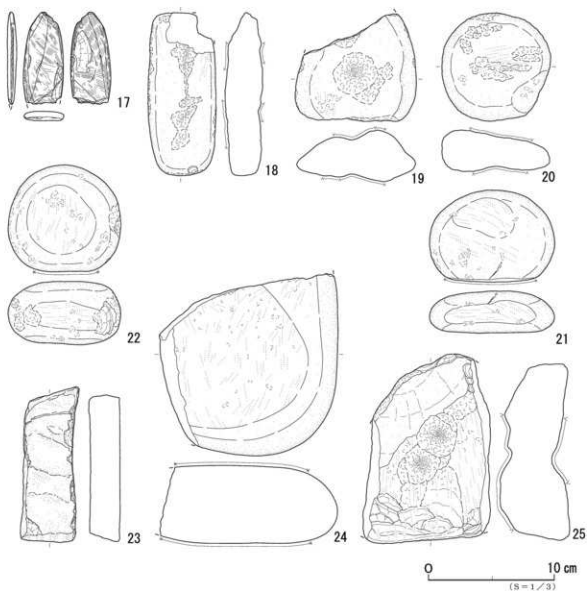


図85 常盤町遺跡 包含層出土礫石器

で、上下両端を破損する。6～8は有茎である。6は先端部を破損し、7は両側縁が曲線的、8は菱形に近い形状である。

つまみ付きナイフ

9は両面調整で、両側縁は曲線的である。

スクレイパー

10は背腹両面に広く剥離面を残し、周縁に刃部をもつ。11は横長剥片を素材とし、石材は粒の大きい球果を多量に含む黒曜石である。12は縦長で背面右側縁に挟りがみられる。13は下端部側を破損し、背面に原礫面を残す。14は両側縁が平行する縦長の形状である。15はチャート製で、大きな剥離面がみられる。16は背面の下端周辺と左側縁に細かな剥離がみられる。

礫石器 (図85)**磨製石斧**

17は緑色泥岩製で薄く、刃部を破損する。

たたき石

18は片麻岩製で、長軸方向の中央に、たたき痕がみられる。19は上端部を破損し、明瞭なくほみがある。20は平面が円形で、表裏両面に使用痕が観察される。

すり石

21は使用面が下端部で、直線化した形状が観察される。22は厚みのある花崗岩製で、すり痕の近くに、たたき痕も観察される。

砥石

23は細長い凝灰岩を素材とする。

台石

24は片麻岩製で、表裏両面に使用痕がみられる。

U・Rレキ

25は、表裏両面の中央部に使用による明瞭なくほみがみられる。

(末光)

表54 常盤町遺跡 土坑一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面形態	規模 (m)				付属遺構 切り合い	出土遺物			備考	
					確認面		坑底面			最大深	土器	石器等		その他
					長径	短径	長径	短径						
P-1	67	20	R-30区	円形	0.64	0.60	0.28	0.28	0.14	-	-	-	-	

表55 常盤町遺跡 Tピット一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	平面形態		規模 (m)				付属遺構	出土遺物			備考	
				確認面	坑底面	確認面		坑底面			最大深	土器	石器等		その他
						長径	短径	長径	短径						
TP-1	68	20・23	M-13・14区	楕円形	溝状	3.18	1.42	2.44	0.46	1.00	-	-	すり石 台石	-	
TP-2	69・70	20・23	L-13区	溝状	溝状	3.84	1.00	3.18	0.26	1.24	-	-	-	-	
TP-3	69・70	20・23	L・M-13区	溝状	溝状	3.96	0.98	3.40	0.36	1.34	-	-	-	-	
TP-4	69・70	21・23	L・M-13区	溝状	溝状	3.06	0.74	2.66	0.16	1.20	-	-	-	-	
TP-5	69・70	21・23	M-13区	溝状	溝状	2.58	0.68	2.10	0.20	0.96	-	-	-	-	
TP-6	71	21	O・P-12区	長楕円形	溝状	2.52	0.92	2.84	0.26	1.00	-	-	-	石鏃 フレイク	-
TP-7	71	21	O-21・22区	溝状	溝状	(2.70)	0.72	2.70	0.22	1.02	-	-	-	-	
TP-8	72	22・23	P-23区	溝状	溝状	3.28	0.88	2.84	0.36	0.94	-	-	-	-	
TP-9	73	22・23	N-23区	溝状	溝状	2.52	0.68	2.42	0.22	0.84	-	-	-	-	
TP-10	73	22・23	O-23・24区	溝状	溝状	2.84	0.78	3.72	0.26	0.80	-	-	-	-	
TP-11	72	22・23	O・P-24区	楕円形	長楕円形	1.74	0.94	1.46	0.38	0.88	-	-	-	石鏃	-
TP-12	74	23	R-26区	楕円形	溝状	1.76	0.88	1.44	0.30	0.90	-	-	-	-	

表56 常盤町遺跡 遺物集中一覧表

遺構名	図	図版	グリッド	確認層位	分布範囲 形状	規模 (m)			出土遺物		付属遺構 関連する遺構	備考
						長径	短径	最大厚	土器	石器等		
PS-1	75	24	O-23区	II層	不整形 楕円形	1.14	0.75	-	I群 (空式) 徳式ワ スタクレイバー	すり石 石鏃 レシキ	-	
S-1	75	24	Q-12区	II層	不整形	3.24	2.60	-	じ、長フレイク 石鏃 フレイク	石鏃 台石 じ、長レシキ レシキ	-	

表57 常盤町遺跡

遺構出土土器点数表

遺構名		PS-1		合計
遺物種別/層位		II層	小計	
土器				
時期	部位	残存状態		
I群	口縁部	良好	4	4
		剝離	0	0
		磨耗	0	0
		小破片	0	0
	底部	良好	1	1
		剝離	0	0
		磨耗	0	0
		小破片	1	1
	胴部	良好	3	3
		剝離	10	10
		磨耗	0	0
		小破片	15	15
不明	良好	0	0	
	剝離	0	0	
	磨耗	0	0	
	小破片	0	0	
合計		34	34	

表58 常盤町遺跡 包含層出土土器点数表

遺物種別/層位		土器			石器等		合計
時期	部位	残存状態	I層	II層	その他		
V・VI群	口縁部	良好	0	0	0	0	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
	底部	良好	0	0	0	0	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
	胴部	良好	0	0	1	1	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
不明	良好	0	0	0	0		
	剝離	0	0	0	0		
	磨耗	0	0	0	0		
	小破片	0	0	0	0		
小計		0	0	1	1		
不明	口縁部	良好	0	0	0	0	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
	底部	良好	0	1	0	1	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
	胴部	良好	1	0	0	1	
		剝離	0	0	0	0	
		磨耗	0	0	0	0	
		小破片	0	0	0	0	
不明	良好	0	0	0	0		
	剝離	0	0	0	0		
	磨耗	0	0	0	0		
	小破片	0	0	0	0		
小計		1	1	0	2		
合計		1	1	1	3		

表59 常盤町遺跡 遺構出土石器点数表

遺構名				TP-1		TP-6		TP-11		PS-1		S-1		合計	
器種名・分類/層位				覆土	小計	覆土 I層	小計	覆土 I層	小計	II層	小計	II層	小計		
器種	残存状態	岩石	被熱等												
剥片石器	石鏃	完形	—	—										0	
		準完形	黒曜石	—		0	1		1		0		0	1	1
		半形	—	—										0	
		片	—	—										0	
	スクレイパー	完形	黒曜石	—									4	4	
			チャート	—									2	2	
		準完形	頁岩	—	0	0				0	1	9	1	9	
		半形	黒曜石	—									1	1	
	U・Rフレイク	完形	黒曜石	—									1	1	
		準完形	黒曜石	—									3	3	
		半形	黒曜石	—									3	3	
		片	黒曜石	—									3	3	
	石核	完形	チャート	—	0		0	0	0	0	0	3	6	3	6
		準完形	黒曜石	—	0		0	0	0	0	1	1	1	1	1
	フレイク	完形	黒曜石	—			1							9	10
		準完形	チャート	—	0			1	0	0	0	1	11	1	12
			頁岩	—									1	1	
	小計				0		2		0		0		27		29
礫石器	すり石	完形	花崗岩	—						1			1	2	
			片麻岩	—	1								1	1	
		準完形	—	—		1		0		1		0	0	0	
		半形	—	—									0	0	
	石鏃	完形	花崗岩	—					1				2	3	
			片麻岩	—						1			7	8	
			安山岩	—									2	2	
		準完形	片麻岩	—	0		0	1		1	1	14	1	16	
	台石	完形	—	—									2	2	
		準完形	花崗岩	—	1								1	1	
		半形	—	—		1		0		0		1	0	0	
		片	砂岩	—									1	1	
小計				2		0		1		2		15		20	
レキ	U・Rレキ	完形	花崗岩	—						3		3	3	4	
			片麻岩	—	0		0	0		1	5	1	1	1	
	レキ	完形	花崗岩	—									1	1	
			チャート	—						1	1		6	1	
		片	片麻岩	—	0		0	0				6	6	7	
小計				0		0		0		1		11		12	
合計				2		2		1		3		53		61	

表60 常盤町遺跡 包含層出土石器点数表

器種	種名・分類/層位			I層	II層	M層 (礎土)	F層 (黒朽木儀)	層位なし・ 不明	合計		
	残存状態	岩石	製法等								
割片石器	石鏃	完形	黒曜石	—	12	2	2	5	20		
		チャート	—	1	—	—	—	1	21		
		厚定形	黒曜石	—	12	6	21	1	3	13	
	つまみ付き ナイフ	半形	黒曜石	—	2	—	—	—	2	2	
		片	黒曜石	—	2	—	—	—	2	2	
		完形	黒曜石	—	—	—	—	1	1	1	
	スクレイパー	厚定形	黒曜石	—	0	0	0	0	1	1	
		半形	黒曜石	—	—	—	—	—	0	0	
		片	黒曜石	—	—	—	—	—	0	0	
	U・Rフレイク	完形	黒曜石	—	9	—	—	—	—	9	
		チャート	—	1	—	—	—	—	1	13	
		厚定形	黒曜石	—	1	2	—	—	2	3	
	石核	完形	黒曜石	—	3	19	1	2	0	24	
		半形	黒曜石	—	3	3	19	1	2	27	
		片	黒曜石	—	1	1	—	—	—	2	
	フレイク	完形	黒曜石	—	1	1	1	—	—	3	
		チャート	—	1	1	1	—	—	—	3	
		厚定形	黒曜石	—	1	1	1	—	—	3	
	小計	完形	—	—	20	89	16	2	21	148	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		半形	—	—	—	—	—	—	—	—	
	雑石器	磨製石斧	完形	—	—	—	—	—	—	0	
			厚定形	緑色泥岩	—	0	1	1	0	0	1
			片	—	—	—	—	—	—	—	0
たたき石		完形	花崗岩	—	—	3	—	—	—	3	
		厚定形	花崗岩	—	—	1	—	—	—	1	
		片	花崗岩	—	—	4	—	—	—	4	
すり石		完形	—	—	0	1	12	—	—	13	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
石鏃		完形	片麻岩	—	—	1	—	—	—	1	
		厚定形	片麻岩	—	—	2	—	—	—	2	
		片	片麻岩	—	—	1	—	—	—	1	
石核		完形	花崗岩	—	—	3	—	—	—	3	
		厚定形	片麻岩	—	—	8	—	—	—	8	
		片	片麻岩	—	—	5	—	—	—	5	
砥石		完形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
台石		完形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
小計		完形	—	—	8	67	6	0	6	87	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
石製品	完形	黒曜石	—	—	1	—	—	—	1		
	厚定形	—	—	0	1	0	0	1	2		
	片	—	—	—	—	—	—	—	—		
レキ	U・Rレキ	完形	花崗岩	—	4	—	—	—	4		
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—		
		片	—	—	—	—	—	—	—		
	レキ	完形	花崗岩	—	0	1	20	—	—	21	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
	小計	完形	—	—	0	1	2	0	0	3	
		厚定形	—	—	—	—	—	—	—	—	
		片	—	—	—	—	—	—	—	—	
	合計			28	179	25	2	35	269		
	古銭							1	1		

表61 常盤町遺跡 破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺物番号	破片数		破片部位	重量(g)	器種	分類	備考
							小計	合計					
胎土(泥和材)				文様・調整				色調		使用の痕跡		土器型式	
編種	粒径	種類	外面	内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
81	1	30	PS-1	1層	0914	-	4	口縁～ 胴部上位	123.4	深鉢	1群a型	2と同一個体	
?	細粒	胎物主体 極多量 有色胎物 (輝石)	ナゲク (胎物江成)	赤灰 (ヨソ)	(口唇部) ナゲク (胎物江成)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄緑 ～灰黄褐色 (10YR6/2～4/2)	黒色化? 剥離・表面荒れ	黒色化				
81	2	30	PS-1	1層	0914	-	3	口縁～ 胴部上位	37.4	深鉢	1群a型	1と同一個体	
?	細粒	胎物主体 極多量 有色胎物 (輝石)	ナゲク 胎物配粒欠? (胎物江成)	赤灰 (ヨソ)	(口唇部) ナゲク (胎物江成)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	灰黄褐色 (10YR5/2)	黒色化? 剥離	黒色化				
81	3	30	PS-1	1層	0914	-	1	底蓋	4.8	深鉢	1群a型?	全体的に磨耗	
無	細粒	胎物主体 多量 石英・有色胎物	ナゲク?	(剥離)	(底外面) ナゲク (浅緑文様の帯)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	(剥離)	-	(剥離)				
81	4	30	P-24区	1層	0923	-	1	胴部	9.8	深鉢	1群a型?	-	
少量	微～細粒	胎物主体 白色岩片 準輝石	ナゲク (胎物江成)	ナゲク	-	灰黄褐色 (10YR6/2)	(黒褐色)	-	黒色化				
81	5	30	S-28区	-	0921	-	1	胴部下位 ～底蓋	29.2	深鉢	V群	-	
無	粗粒	胎物主体 準輝石	京L 縄文	ナゲク	(底外面) ナゲク	黒灰色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR6/2)	黒色化?	黒色化?	後式			

表62 常盤町遺跡 遺構出土石器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取り上げ日	遺物番号	点数	群種	計測値(mm)		重量(g)	形状		用途	加工痕	使用痕	特徴 観察事項	備考	
									長さ	幅		厚さ	機能名						特徴
図	1	38	TP-6	墓土	0719	-	1	石鏃	2.6	1.5	0.7	1.1	両端部	透孔あり	磨製	右側基部に縦溝あり	二層出土内層	同表	
図	2	38	S-1	1層	0725	-	1	スライパース	3.3	0.5	1.4	11.7	両端部	両側の1線貫通孔	定形	剥離	剥離面?	ナゲクスライパース	
図	2	38	S-1	1層	0726	-	1	スライパース	3.7	0.5	0.8	11.4	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面	ナゲクスライパース	
図	4	38	S-1	1層	0726	-	1	スライパース	4.5	0.7	0.8	11.5	両端部	乳白色の膜	定形	剥離	上・下部分、剥離面	ナゲクスライパース	
図	5	38	S-1	1層	0725	-	1	スライパース	4.9	0.1	1.2	14.1	両端部	両端部・中央部分	定形	剥離	剥離面	ナゲクスライパース	
図	6	38	S-1	1層	0726	-	1	スライパース	4.9	0.2	1.4	10.1	ナゲク	尻尾(1.0cm)の 片断あり	定形	-	剥離面	-	
図	7	38	S-1	1層	0725	-	1	スライパース	4.5	0.4	1.8	11.5	ナゲク	尻尾(1.0cm)程度の 片断あり	定形	-	上部・縦溝部 剥離面	-	
図	8	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	4.5	0.9	1.2	11.9	両端部	短形の両側貫通孔	-	剥離	-	-	
図	9	38	TP-1	墓土上層	0923	-	1	ナゲク	4.1	0.4	0.2	9.6	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	剥離	剥離面	ナゲク	平ら面
図	10	38	PS-1	1層	0914	-	1	ナゲク	4.8	0.7	0.5	10.9	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面?	剥離した面から平ら面が 平ら面から出土した	
図	11	38	TP-11	墓土上層	0923	-	1	石鏃	4.2	0.4	1.4	10.9	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面?	-	
図	12	38	PS-1	1層	0914	-	1	石鏃	3.9	0.5	1.4	10.6	両端部	両端部 透孔・中央部分	定形	剥離	剥離面?	-	
図	13	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	4.1	0.4	1.7	11.5	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面?	-	
図	14	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	3.9	0.4	1.9	10.5	両端部	両端部・中央部分	定形	剥離	剥離面	-	
図	15	38	S-1	1層	0721	-	1	石鏃	4.2	0.4	1.2	11.0	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	剥離	剥離面?	-	
図	16	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	3.4	0.4	1.4	10.7	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	剥離	剥離面?	-	
図	17	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	3.1	0.3	1.4	10.0	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	剥離	剥離面?	下部・縦溝部 剥離面	
図	18	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	3.2	0.3	1.3	10.5	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	剥離	剥離面?	-	
図	19	38	S-1	1層	0726	-	1	石鏃	3.2	0.1	1.8	10.6	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面?	-	
図	20	38	S-1	1層	0726	-	2	石鏃	3.7	0.2	1.8	11.4	両端部	両端部	定形	剥離	剥離面?	部分	
図	21	38	S-1	1層	0721	-	1	石鏃	3.3	0.3	1.4	10.6	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	-	平ら面・縦溝部	-	
図	22	38	TP-1	墓土上層	0923	-	1	石鏃	3.7	0.4	0.7	10.9	両端部	両端部 中央部分の 透孔あり	定形	-	平ら面	-	

表63 常盤町遺跡 包含層出土石器観察表

調査 番号	調査 期	出土地点	層位	取上げ日	遺物 番号	点数	種類	計測値 (mm)		重量 (g)	材質		用途 推定	加工 工程	修理 状況	特徴 観察事項	備考	
								長さ	幅		厚さ	種類						特徴
84	1	40	94-22層	I層	0809	-	1	石類	3.6	1.5	0.7	0.7	石類	-	定形	多層状	-	二層以上有蓋 片蓋
84	2	40	94-20層	I層	0825	-	3	石類	3.1	1.9	0.3	0.7	石類	-	定形	多層状	-	二層片 10蓋
84	3	40	94-19層	II層	0814	-	3	石類	2.6	1.5	0.3	0.7	石類	透明状砂	定形	多層状	-	二層片
84	4	40	94-17層	I層	0829	-	3	石類	3.2	1.9	0.4	0.7	石類	透明状砂	不定形	多層状	-	二層以上有蓋 片蓋
84	5	40	94-16層	I層	0782	-	3	石類	3.5	1.1	0.5	1.0	石類	透明状砂	不定形	多層状	-	二層以上有蓋 片蓋
84	6	40	94-17層	M層	0813	-	3	石類	3.3	1.3	0.5	0.8	石類	-	定形	多層状	-	二層以上有蓋 片蓋
84	7	40	94-14層	I層	0825	-	3	石類	3.6	1.2	0.5	0.9	石類	透明状砂	定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	8	40	94-14層	I層	0801	-	3	石類	3.5	1.3	0.3	0.9	ガラス	両面加工 上・下両面 江川埋め込み層	定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	9	40	94-15層	II層	0717	-	3	ガラス片 ガラス片	6.3	3.4	0.3	06.3	石類	-	定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	10	40	94-15層	II層	0717	-	3	ガラス片 ガラス片	6.3	3.2	0.3	11.4	石類	-	定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	11	40	94-14層	I層	0804	-	3	ガラス片 ガラス片	7.4	4.9	1.3	12.0	石類	-	定形	多層状	-	ガラス片 有蓋
84	12	40	94-22層	II層	0821	-	3	ガラス片 ガラス片	3.3	2.5	0.5	2.0	石類	-	定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	13	40	94-22層	II層	0829	-	3	ガラス片 ガラス片	6.7	3.5	1.0	13.6	石類	多層状	不定形	多層状	-	ガラス片 有蓋
84	14	40	94-17層	II層	0717	-	3	ガラス片 ガラス片	6.8	3.1	0.8	12.3	石類	-	定形	多層状	-	ガラス片 有蓋
84	15	40	94-19層	I層	0829	-	3	ガラス片 ガラス片	6.3	3.6	1.6	10.0	ガラス	両面加工 上・下両面 埋め込み層	定形	多層状	-	-
84	16	40	94-16層	II層	0721	-	3	ガラス片 ガラス片	7.6	4.7	1.6	20.3	ガラス	両面加工 埋め込み層 埋め込み層	定形	多層状	-	ガラス片 有蓋
84	17	40	94-17層	II層	0825	-	3	埋め込み 埋め込み	5.9	3.5	0.5	16.7	埋め込み	埋め込み層 埋め込み層 埋め込み層	不定形	多層状	-	ガラス片 有蓋
84	18	40	94-17層	II層	0782	-	3	ガラス片 ガラス片	6.8	3.8	1.0	20.1	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	19	40	94-17層	II層	0829	-	3	ガラス片 ガラス片	6.7	4.4	2.5	13.0	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	20	40	94-17層	II層	0786	-	3	ガラス片 ガラス片	5.7	3.9	1.0	10.6	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	21	40	94-20層	II層	0804	-	3	ガラス片 ガラス片	6.9	4.7	2.5	26.1	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	22	40	94-17層	II層	0819	-	3	ガラス片 ガラス片	6.7	4.6	1.4	17.6	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	23	40	94-19層	II層	0802	-	3	埋め込み 埋め込み	6.7	3.7	1.7	13.0	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	24	40	94-17層	M層	0815	-	3	埋め込み 埋め込み	6.6	4.0	1.0	13.0	石類	埋め込み層 埋め込み層	不定形	多層状	-	二層片 有蓋
84	25	40	94-15層	M層	0711	-	3	埋め込み 埋め込み	6.9	4.9	2.7	33.5	埋め込み	埋め込み層 埋め込み層	不定形	多層状	-	二層片 有蓋
-	-	37	-	-	0801	-	3	埋め込み 埋め込み	1.9	1.1	0.3	1.1	埋め込み	埋め込み層 埋め込み層	不定形	-	-	二層片 有蓋
84	-	38	-	-	0801	-	3	石類	3.6	2.0	0.7	0.4	-	-	-	-	-	二層片 有蓋

Ⅷ章 まとめ

1. 自然科学的分析結果について

(1) 向別遺跡 土器胎土分析について (表64・65)

胎土は、「混和材」と考えられる「砂・礫」(岩石や鉱物)と「粘土(粒度区分上のシルト・粘土)」(基質)に分けて捉えられる。土器製作時に、粘土に混和材が混ぜられて「素地土」となり、焼成を受ける。混和材と粘土はそれぞれ自然の産物で人為的に組み合わせられ、さらに被熱した影響が生じ、個々の特徴を有している。これらから共通する属性をみつけ、在地のものとは区別し搬入されたものを明らかにすることが産地同定で、土器の胎土分析=産地同定が一般的な認識である。

胎土分析は大きく二つの方法がある。一つは土器の胎土に含まれる微細な粒子を観察するため、薄片に加工し顕微鏡下で岩石鑑定と同様に観察し、岩石や鉱物、粘土に含まれる微化石の種類と量を特定する。分析結果は個別の観察情報で、肉眼観察での結果の裏付けや、より細部の詳細を明らかにできる。観察対象は大きさから主として混和材で、粘土部分の観察は限界がある。

もう一つは蛍光X線分析法で元素を測り、測定数値について比や式を立て、分布図(判別図)で既知の成果と比較し産地を特定する。「公式」(判別式)にあてはめ「解答」(産地)を求める性格で、主として泥質部分(基質)の化学組成を分析する。

今回は両方の分析を行った。試料を破壊するので、土器破片4点を分析前に記録化した(図43 表24 図版30)。顕微鏡での観察は岩石の観察方法に準じ、プレパラートを作成して偏光顕微鏡で細部を観察し、モード測定で岩石・鉱物の種類を特定し量を計測した。

蛍光X線分析は二つの方法を実施した。「FP」法は既知の分析成果と比較するため、カリウム(K)・カルシウム(Ca)・ストロンチウム(Sr)・ルビジウム(Rb)の主要元素に加え鉄(Fe)とナトリウム(Na)を計測し、産業技術研究所 地質総合研究センターの標準試料(「JG-1」花崗閃緑岩)も同時に分析し、規格化した測定値を分布図で示し、ある産地の領域内に位置するか否かで判別する。主要元素であるK・Caは花崗岩の造岩鉱物である長石類に含まれ、微量元素のSrとRbは、主要元素と相関関係にあるとされ、粘土の起源となる花崗岩の地域差もこれら四つの元素で表すことが可能であるとの前提の、三辻利一の研究方法が知られている(三辻 2013)。

「検量線法」はガラスビードを作成し、試料の主要10元素(%)・微量元素(ppm)を測定した。判別のための元素の種類と判別式は、松本建速の方法で行った。すなわち、長石類に含まれるK・Na・Caの3元素で「 $K/Na+Ca$ と $Ca/Na+K$ 」の分布図(指標①)と、Feとこれに関連するチタン(Ti)・マグネシウム(Mg)、粘土に多く含まれるアルミニウム(Al)の四つの元素を用いた「 $Ti/Al+Fe+Mg$ 」の式をたて、先述のK/Na+Caとの分布図(指標②)を作成し、試料の値をプロットして判別する(松本 2003)。本方法では「ウ3」土師器の産地を推定した。

陶器「ウ1」(図43-9 表24 図版30・41・42)

(考古学的観察)

珠洲焼または珠洲焼系の陶器である。外面はタタキ目、内面はナデである。外面はガラス状光沢を帯び、内面は同様の黒色粒子が付着し、これらは自然釉である。肉眼観察で混和材は細粒・微量である。12世紀中頃～15世紀末(徳文文化期末期～中世アイヌ文化期)と考えられる。

(偏光顕微鏡観察・モード測定)

岩石：0.8% 鉱物：6.9% (混和材合計：7.7%) 基質：71% 孔隙：21.1%

灰色の色調と含有する斜長石の分解から、還元状態での高温焼成と考えられる。混和材は細粒・少量で、岩石は火山岩で、鉱物は斜長石と石英が多い。粘土は珪藻を含み、水成堆積物と考えられる。孔隙が多く軽量であるが、強度もある。

(蛍光X線分析 F P法)

分布図の領域内に位置するのは、青森県五所川原、宮城県内1か所、福島県内3か所であるが、これらはすべて須恵器の窯で産地である。

(結論)

考古学的な観察では珠洲焼あるいは珠洲焼系の特徴である。秋田県内2か所の珠洲焼系窯の分布図とは全く一致しない。珠洲焼のK-Ca図でのプロット位置が境界付近であることを考慮すると、石川県の珠洲焼の領域内と判断する。

須恵器・陶器「ウ2」(図43-10 表24 口絵4 図版30・42-44)

(考古学的観察)

須恵器の壺または甕の肩部である。器壁が厚いので、分析後に珠洲焼陶器の可能性も考えた。内外面はナデ調整で、外面はこれにより生じた水平方向の段状の高まりがある。肉眼観察で混和材は細粒・微量である。須恵器なら9～10世紀(捺文文化期前・中期)と考えられる。

(偏光顕微鏡観察・モード測定)

岩石：2.6% 鉱物：10.4% (混和材合計：13.0%) 基質：80.7% 孔隙：5.8%

色調は灰色系と赤色部分がみられ、斜長石の分解もあることから、一部、酸素が供される還元状態での高温焼成であろう。混和材は細粒で少～中量である。岩石は火山岩と凝灰岩で、鉱物は斜長石と石英が多く、新鮮な火山ガラスや軽石もみられる。粘土は放散虫と珪藻を含む。

(蛍光X線分析 F P法)

青森県五所川原、岩手県瀬谷子、宮城県2か所、福島県内3か所の領域に位置する。

(結論)

上記すべての須恵器窯跡の可能性がある。加えて、秋田県内の珠洲焼系ではなく、石川県珠洲焼の領域の境界上ともみならずことができ、特定できない。

土師器「ウ3」(図43-11 表24 口絵4 図版30・44-46)

(考古学的観察)

土師器の坏で、外面はロクロによるナデ、内面はミガキで「内黒」である。肉眼観察で混和材は微粒・微量である。9世紀中頃(捺文文化期前期)と考えられる。

(偏光顕微鏡観察・モード測定)

岩石：2.9% 鉱物：7.4% (混和材合計：10.3%) 基質：88.8% 孔隙：0.9%

内面から1/5の部分は黒色で、外面の褐色との境目は漸移的である。混和材は細～中粒が少量で、岩石は火山岩、鉱物は斜長石が多く石英がみられない。孔隙が少なく密である。

(蛍光X線分析 F P法)

須恵器窯跡の判別図では、石川県珠洲、岩手県瀬谷子、山形県1か所、宮城県1か所、福島県2か所であるが、土師の種類が異なり該当しない。また、北海道余市町の大川遺跡出土の土師器(坏)との比較では、Kが少ないことは共通するが、大川遺跡の土師器はSrが多く、離れた位置である。

(蛍光X線分析 検査線法)

比較地域は東北地方北部で、土師器胎土の分布図は、指標①では青森県中央～西部の遺跡に近く、指標②では青森県中央部と離れている。自然粘土との比較は指標①・②ともに青森県西部である。

(結論)

ロクロ成形の土師器は本州で製作されたことは確実である。F P法では、大川遺跡出土の土師器とは産地が異なると解される。検査線法の結果では青森県中央～西部が産地である。

擦文土器「ウ4」(図43-12 表24 口絵4 図版30・46・47)

(考古学的観察)

擦文文化期後期(12～13世紀末期)の復原土器(図42-11 図版29)と同一個体である。外面は磨耗するがミガキと推測され、内面はナデである。肉眼観察で混和材は細粒・微量(誤認)で、岩石・鉱物がともにみられる。在地の土器を「対照試料」として分析した。

(偏光顕微鏡観察・モード測定)

岩石:9.7% 鉱物:16.7%(混和材合計:26.4%) 基質:65.2% 孔隙:8.1%

フラクチャー孔隙がみられ、強度が弱い。混和材は粗粒で多量かつ多種類である。岩石はホルンフェルスと安山岩が多く、凝灰岩や堆積岩もみられる。さらに、「変形」した堆積岩や緑色化した玄武岩等が含まれ、これらは「付加体」(地質学のプレートテクトニクスで、日本列島が位置する大陸プレートに、太平洋(北米)プレートが沈み込む際に、海洋プレート上の堆積物が陸側に付加したもの)由来と考えられる。鉱物は斜長石と石英が多く、粘土は放散虫と珪藻を含む。

(蛍光X線分析 F P法)

宮城と福島両県の領域に位置するが、土器の種類が違うので偶然の一致である。

(結論)

考古学的な観察で、擦文土器であることは疑う余地がない。胎土に含有する変形・緑色化した岩片は、日高変成帯の西に位置する「イドンナップ帯」(中生代白亜紀)の付加コンプレックス起源と判断でき、この擦文土器は日高地方で製作されたと断言できる。

山間部などの上流部に存在する付加体の岩石体が崩れて砂礫となったものが、水で流された結果、円磨され、下流部の中州等に粒径ごとに堆積したものが、混和材として採取されたと考える。

・胎土分析の方法について

蛍光X線分析

一定の技術をもつ工人が製作し、窯で焼成される土器の粘土(基質)の分析は、蛍光X線分析が有効である。須恵器や土師器は混和材の粒子も細かく、量も少ないため、観察可能な岩石や鉱物が少ない。結果は、測定値の評価の方法、すなわち選び出す元素と判別式と分布図に決定される。

F P法

分布図で東北各県では各窯跡群の領域が重なるものが多く、重複部分にプロットされる場合や、複数の窯跡に該当する場合、他に手がかりがなければ判断できない。

標準試料]G-1での四つの元素を1.0とした場合の中間値「0.5」を基準に、本遺跡の試料「ウ1～4」の測定値について考える。Kはすべて概ね同量で中間値未満である。Caは「ウ4」が概ね中間値で、これ以外は少ない。Rbはすべて中間値未満で「ウ4」が比して少ない。Srはすべて中間値付近であるが、「ウ1・2」は未満で、「ウ3・4」はより多い。分布図を一見すると、擦文土器の「ウ4」だけが離れてプロットされる。

検量線法

CaとKの分布図では、左上から右下への曲線の範囲に試料がプロットされ、TiとCaの分布図は全体的に点が広がる。両図ともに境界を画せるほどでないが、同じ試料がまとまる範囲がみられ、視覚的に判別がしやすい。余市町大川遺跡でも同じ方法による分析が報告され、同遺跡出土のロクロ製土師器は津軽地方と判別された(松本 2001)。

向別遺跡出土の土師器試料「ウ3」の計算値は、

$K/Na + Ca = 0.86$, $Ca/Na + K = 0.25$, $Ti/Al + Fe + Mg = 0.048$ で、津軽地方(青森県西部)と判別できる。

F P法では産地を特定できなかったが、本方法で可能であったのは、原産地の土器と自然粘土の元素データがあり、判別式が適切であったからと考えている。

検量線法での「ウ1～4」試料の測定値の特徴を述べておく。主要元素はいずれも酸素(O)・ケイ素(Si)が70%で、比して、窯での高温焼成の「ウ1・2」はAlとFeが、野焼き焼成の「ウ3・4」はNaが多い。また、「ウ3」はリン(P)、「ウ4」はCaがそれぞれ多い。微量元素では「ウ1・2」はバリウム(Ba)・ジルコニウム(Zr)・バナジウム(V)の値が概ね同じで多く測定され、亜鉛(Zn)とSrに若干差がみられる。「ウ3・4」はともにBaが多い。「ウ3」はZnが多く、「ウ4」はZrが少ない。さらに、検量線法の測定値から、主要元素と微量元素で新たな判別式をたてて再検討が可能であることは分析方法として望ましく、その基礎データの蓄積が望まれる。

両分析方法に共通する知見で、三辻は、東北地方では太平洋側は日本海側に比べカリウム(K)・ルビジウム(Rb)が少ないことを指摘(三辻 前掲 45頁)し、松本も東北地方北部は第四紀の火山噴出物の違いが表層地質に反映され、東北北部では、カリウム(K)が日本海側で多く、津軽平野～太平洋側ではカルシウム(Ca)・ナトリウム(Na)が多くなると述べている(松本 前掲 4頁)。

顕微鏡観察

混和材が多い推文土器はこの観察方法が有効で、混ぜられた砂・礫が土器製作地周辺の地質環境を表す。岩石の観察・鑑定と同様の方法で実施でき、手法が確立されている。本方法では、より多くの土器を肉眼や拡大鏡で基礎的な観察を行い、体系的な記述を蓄積することで、おのずと研究が進展することが期待できる。顕微鏡観察はより詳細に行うための方法と位置付けられる。今回は、日高地方南部の特徴ある地質環境が大きな決め手となった。

(2) 黒曜石原産地分析について

栄丘遺跡出土の石鏃2点(ウ6・7)と、昌平町遺跡出土のスクレイパー(ウ9)は「土師産」と判断され、産地は十勝地方であろうとの予想に合致した。石鏃(ウ8)は道東地方の置戸産である。

向別遺跡の試料は原産面が残るものを選び出し、原産面の特徴から二つに分け、肉眼で産地を推定するときの裏付けとなる情報を得ることも目的とした。「大小のくぼみが無作為にみられる曲線的な形状のもの」と「細かい平行する複数の筋(「層理」あるいは「節理」)がみられ、手触りがサンドペーパーの様なもの」である。前者は「土師産」と判断された「ウ1～4」である。同地方の河川で採取された長径10cm程度の円礫(円礫)が、浦河に持ち込まれたと考えられる。後者は「赤井川産」で「ウ5」のみである。原産面は屈曲がなく平坦で、表面にくぼみはみられない。露頭等から崩落した「直方体」に近い形状が原形と考えられる。

原産面が残るすべての黒曜石製遺物を再確認し、9割以上が前者の特徴を有し、日高地方に位置するこれら遺跡の石材は、比較的近くの十勝産の黒曜石が多いことはうなずける。(末光)

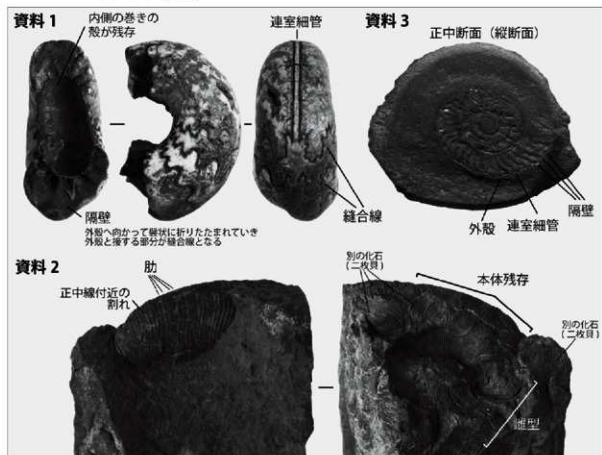
表64 向別遺跡 歴史時代の土器

三分区	西暦年	本州						世紀	北海道			
		土器		須恵器		陶器			時代・文化期	縄文土器	鉄器	
		土器産地	図	土器産地	図	土器産地	図					
古代	710	飛鳥						8	0	—		
	794	奈良					I		前期			
	平安	香森島 中国～西部	図40-1 3・4・5・6・7	香森島 図41-1 4・5・6・7・8	香森島 五河川跡 図42-11 (ウ2)	香森島 図40-2 図41-3 図41-10 (ウ2)			II	中期	図40-1 3・6・7・8	
			III	中期								
			IV	前期								
	1192	鎌倉							V	後期	図40-9・8	
中世	1336	室町				石川橋 瑞清橋	図40-1 図41-1・2 図44-9 (ウ1)	VI	後期	図40-11・12 図40-12 (ウ4)		
										(中世) アイヌ文化期		内耳跡 図45-1

表65 胎土分析試料 比較遺跡一覧表

比較対象	地方	沿岸	郡道府県	市町村	原産群・地域名称・遺跡名 【科別種別名称】	三分区分	時代	世紀	備考							
縄縄橋	北海道	苫小牧	札幌市	札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(中世・古墳期) 須恵器(1・2)等類、陶器(古墳期)	古墳	鎌倉・室町	13～15世紀								
縄縄橋系	北海道	札幌市	札幌市	札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	鎌倉	13～15世紀								
										札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	鎌倉	13～15世紀		
須恵器	北海道	札幌市	札幌市	札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
		札幌市	札幌市	札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
											札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											札幌南遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
	北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀							
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
		山越町	山越町	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀						
												山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀
												山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀
北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
須恵器	北海道	札幌市	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
	北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀							
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
須恵器	北海道	札幌市	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
	北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀							
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
土器	北海道	札幌市	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
	北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀							
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
自然胎土	北海道	札幌市	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀								
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
										山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀		
	北海道	札幌市	山越町	山越町	山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀							
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	
											山越町遺跡	土器(1・2)等類、須恵器(古墳期)	古墳	平安	13～15世紀	

2. アンモナイト化石 (表66 図版37)



出土アンモナイト化石 (図版37参照) 縮尺は任意

アンモナイトの化石が向別遺跡から2点、常盤町遺跡から1点出土した。アンモナイトは、古生代シルル紀(約4億年前)～中生代(約6,500万年前まで)に生息した海棲軟体動物で、当該期の地層から化石が産出する。野外調査で地中から発見されることから、しばしば埋蔵文化財と混同されるが、考古学が対象とする人間活動との関連性はなく、地質学・古生物学の研究分野である。しかし今回の3例は遺跡からの出土で、縄文時代あるいは擦文文化期の人間が遺跡に持ち込んだと考えられるので、人間活動に関わる所産、すなわち遺物と認定し、一次整理では「石製品」に分類した。遺跡での化石の出土層位は、向別遺跡の2点はI層(現代の盛土)、常盤町遺跡は遺物包含層のII層である。これらの土層の形成時期は新生代第四紀完新世(約10,000年前～現在)で、本来的にはアンモナイト化石を含まない。浦河町域の南西部には中生代白亜紀後期の地層が広く分布するが、アンモナイト化石はそこから産出し、遺跡へ持ち込まれたと考えられる。浦河町域でアンモナイト化石を産出する地層を『浦河地域の地質』(蟹江・酒井 2002)の記述をまとめ、表66に示した。ここでは3例のアンモナイト化石についての観察と種同定および産出地推定を行う。

資料1 (図版37上段 表43 向別遺跡 L-4区出土)

Eupachydiscus sp. (ユウパキディスカス属の一種)。

巻き(螺環)の一部のみが遊離した状態。摩耗して、外周の殻は失われており、縫合線と連室細管が露出している。対して、螺環の内周には内側の巻きの外殻が残存しており、凹凸模様(肋)が明瞭に観察される。内部は大部分がメノウ化している。外周の摩耗が著しく、海岸で採取されたものと考えられる。

Eupachydiscus sp. は白亜紀カンパニアン期に産出する属。当該期の地層は浦河町内の複数か所に分布している。浦河町井寒台もその一つで、海岸では現在でも摩耗したアンモナイト化石が採集でき、本資料の採取候補地に挙げられる。

資料 2 (図版37中段 表43 向別遺跡 M-4 区出土)

Gaudryceras sp. (ゴードリセラス属の一種)。

化石は赤褐色の泥岩の角礫に包含されている。巻き(螺環)の一部が残存しているが、それより内側の部分は欠失して、母岩にその痕跡(雌型)が残っている。圧密を受けて変形しており、螺環は厚さ方向につぶれ正中線付近で割れており、また写真右面では上下方向に押しつぶされ、本来は円形に近い渦巻きがやや扁平に変形している。外殻表面と雌型には、*Gaudryceras* sp. に特徴的な細い縞状の凹凸模様(肋)が明瞭にみられる。母岩の摩耗が顕著でないことなどから、採取地点は内陸部の可能性がある。

Gaudryceras sp. は白亜紀後期に普遍的に産出する属。当該期の地層は、遺跡周辺を含む浦河町域の南西部を広く覆っており、遺跡近隣の沢筋などから採取可能と考えられる。

資料 3 (図版37下段 表63 常盤町遺跡出土)

属種不明。泥岩の薄い破片に、アンモナイトの縦断面が露出し、外殻と隔壁・連室細管が観察される。殻がまだ小さく、圧密を受けているため、属種同定はできなかった。泥岩片の厚さは3mm程度しかないが、反対面にはアンモナイトは露出していない。

遺跡出土のアンモナイト化石は、道内で4遺跡4例が確認されており、今回の例を含め6遺跡7例目となる。これまでの確認例のうち、千歳市美々4遺跡・未広遺跡のものは、いずれも *Eupachydiscus haradai* (JIMBO) (ユウバキディスカス・ハラダイ) と同定され、内部はメノウ化しており、産出地の候補として浦河地域が想定されている(北海道立埋蔵文化財センター 2019)。属とメノウ化という特徴が資料1と共通する。資料1は現代の盛土からの出土で時期が不明確なため、拙速な判断はできないが、千歳市の2例の産出地が浦河町域と想定されていることと整合する。

また、厚みのあるずんぐりした形で、肋が発達して表面に凹凸が目立つ。ある種のアンモナイト化石は「かほちゃ石」と呼ばれることがある。向別川で「かほちゃ石」が産することは、江戸時代の松浦武四郎の紀行文にも記されている。1858年に向別川の河口を通過した際の『牽古辺都誌』では「ムコベツフト(略) 南瓜石といへるもの出る也。其形ち南瓜に異ることなく、色は赤き有、青黒き有、是を土人は南瓜の化石と云り。余は是を螺の化石と云り。」すなわち「向別川の付近では「かほちゃ石」がみつかる。その形状はかほちゃと違わず、赤や青黒色がある。住民はかほちゃの化石というのが、私は巻貝の化石と話した」とある。このような外観的特徴のアンモナイト化石としては、バキディスカス科に属するアンモナイトが想定されている(栗原・三浦 2018)。資料1は肋のある外殻を失っているため、外見上かほちゃには類似しないが、これもバキディスカス科である。

なお、今回の種同定および産出地推定には、株式会社ジオ・ラボの栗原憲一氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。(柳瀬由佳)

主要参考文献

北海道立埋蔵文化財センター 2019 「II-3-(1)-イ、遺跡出土アンモナイト化石資料の調査」
 [北海道立埋蔵文化財センター年報] 20
 森 伸一 2012 「北海道羽幌地域のアンモナイト」
 栗原憲一・三浦泰之 2018 「松浦武四郎が見たアンモナイトの種類は何? -北海道150年、学芸員にはどう見える?」
 コラムリレー第20回 「集まれ! 北海道の学芸員」 ウェブサイト
 2018.12.30公開 (2019.11.28閲覧) <http://www.hk-curators.jp/archives/3939>

3. 松浦武四郎の記録との照合

(1) 山越の道と地形の名称 (図86)

標高の高い山間部が海岸近くまで広がる日高地方は、現在も国道は概ね海岸沿いにみられ、この幹線道路から北方向の山間部へは、川筋や狭小な平地ごとに道が枝分かれする。この種の道を内陸部で東西方向につなぐ山越え道が、現在、林道や道道に姿を変えて残っている。

ここでは、江戸時代末期に北海道を探検した松浦武四郎が『保呂辺津誌』の「附録」に聞き記した日高幌別川流域から向別川流域への山越の道を、現在の地形図上に推定し、遺跡周辺の山・沢の名称を特定する。

「三股からヘケレメナ川を通る山道」

当時も、この道筋は誰も使用せず知られていないとある。「三股」は日高幌別川、シマン川、メナシュンベツ川の大河川の合流地点であることは間違いないであろう。この三股より少し下流に山の南側の崖沿いに「オバケ川」が流れ、これ沿いに道道746号「高見西舎線」が続く。これが山越えルートであれば、現在のオバケ川が「ヘケレメナ川」の可能性がある。

「タン子ルベシベ越」

冬の積雪時にも利用されていた長距離の山道である。現在の西舎地区の南側、ケバウ川左岸に、西から流れ込んでいるルベシベ川の位置が正しいとの前提で考察する。この川沿いに道が始まり、標高200m以上の山頂をつなぐ稜線を超え、乳香川（松浦が記したウロコベツは誤り）の上流部を通り、タンベツ川の上流部左岸に注ぐ無名の支流沿いの平坦地に出る道で、現在の道道1025線「静内浦河線」である。

「月寒川・乳香川・ウロコベツ川をまたぐ道」

この道は三つの山越の区間に分けられる。

・区間1：トメナ・チノミ越

日高幌別川の支流トメナ（川）が位置する向かい側の岸、すなわち右岸、現在の西幌別神社付近からの山道は標高100mの鞍部を通り、月寒川の源流部付近へ続く。四等三角点「東町」（標高154.2m）と四等三角点「月寒」（標高121.9m）の間を超えて、乳香川左岸の支流「ルウトラシナイ沢」沿いを下る。この合流点のやや上流の右岸は「ユウベチカフナイ沢」が流れ、乳香川の源流の山は「ウヌンコイノホリ」と記載がある。山裾が崖で急な山と解され、標高242.4mの四等三角点「浦河峠」である。

・区間2：「小山」越

乳香川右岸の「ユウベチカフナイ沢」から小さな山一つ越えて、ウロコベツ川流域に出るとあり、現在の東町ちのみ4丁目付近の西側の山間部と考えられる。

・区間3：ホロナイ越

ウロコベツ川の左岸には、下流部から支流「カハチリニセリ沢」と「ラシヨナイ沢」があり、後者の沢の水源は「ウロコベツシルトル」という山で、四等三角点「太平台」（標高211.7m）であろう。この山越えると、向別の「ホロナイ」に出るとあり、ホロナイは向別川とタンベツ川との合流地点で、『牟吉辺津誌』には「キムクシホロナイ」と記されている。ウロコベツシルトルはウロコベツ川上流の山の意味であろう。

(2) 海岸沿いの名称 (図87)

「東西蝦夷山川取調圖六」に記載された浦河町内に位置する海岸沿いの名称を、現在と対比して記

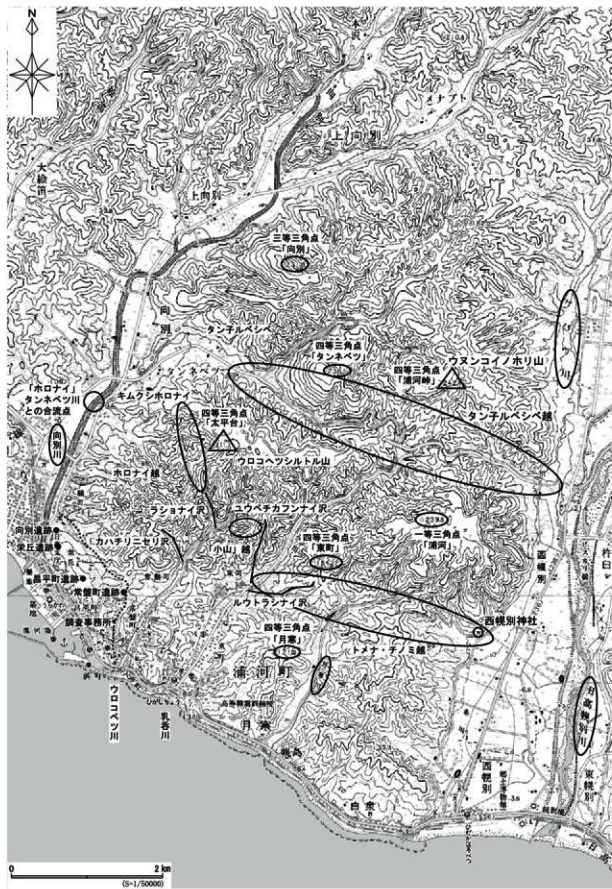


図86 遺跡周辺の山越えの道 国土地理院の5万分1地形図『西倉』（平成9年修正）・『瀬川』（平成8年修正）を使用



図87 東西蝦夷山川取調圖 六(浦河町の部分)

す。町内の三大河川は「ホロヘツ」は日高幌内川、「ムコヘツ」は向別川、「ウラカワヘツ」は元浦川で、向別川の左岸の「ウラカワ」は浦河会所である。

・日高幌別川左岸

「フシコヘツ」は、東幌別地区の日高幌別川左岸の古い流れである。

・日高幌別川右岸～向別川左岸

「フウレヘツ」は赤川、「シリエントモ」は白泉川、「ホロシユマ」は幌島川、「チキシヤフ」は月寒川、「モチキシヤフ」は小さい月寒川で、月寒川から北西方向へ約750mの地点の無名の小沢であろう。「ヘシホキ」は崖下の(川)と解され、現在の東町うしお町を流れ、乳呑川に注ぐ「東川」であろう。「チノミ」は乳呑川で、「ユクウフトユウシ」は東町ちのみ1丁目付近、常盤公園がある山地が海側へのびる場所の中央付近を南流する無名の沢と推測する。「ウロコヘツ」はウロコベツ川、「ホシナイフト」は昌平西川である。

・向別川右岸～元浦川左岸

ほとんどの河川名称にアイヌ語は残っていない。「ヒラトカリ」は井寒台の山間部の東縁、堺町西2丁目付近を流れる無名の沢と推測する。「ヲヤウシ」・「ヲコツナイ」の場所は不明である。「エカンタイ」は迂回して通る坂の意味で、井寒台地区の名称になっている。「トヘニ」・「マオナイ」の場所は不明である。「チャシコツ」は井寒台チャシ跡、「イフイ」は絵笛川、「シレエト」は東栄の東側で、「トヤエ」は東栄地区である。

・元浦川右岸

获伏地区で、位置から考えると「エカニウシ」が获伏大橋の上流で元浦川に流れ込む「赤川」、「ヲトイ」が山間部に源流をもつ無名の沢、「ヲウナイ」が浜获伏1号川で、「获伏」の由来である「ヲニウシ」は、新ひだか町の行政界近くの無名の沢と判断する。

(3) 地名「西舎」について

浦河町内で遺跡が最も集中する地区である「西舎」は、地形図上の名称が誤認され、現在、無名の河川が「西舎川」であると述べた(Ⅱ章3節)。

「西舎(ニシチャ)」は、松浦武四郎が『保呂辺津誌』に記した「キムニシチャ」が由来で、キム=山の、ニシチャ=高台で、「山の高台」と解される。この地形は、現在のJRA日高育成牧場と浦河優駿ビレッジアエルが位置し、日高幌別川流域を西岸から見下ろす平坦な台地で、浦河町内で遺跡が最も多い場所である。松浦の同記録には、上流から河口へと下った実際の行程とは逆の順、すなわち河口部から書き直したものと断りがある。「キムニシチャ」の記述の前には「ヘケレメナ」、「ケハウ」(ケバウ川)、「ルベシベ」(ルベシベ川)が、後ろには「ヘケシリ」が記されている。

一方、『東西蝦夷山川取調圖 六』には「キムンチャシ」と記載がある。この名称から存在が予想され、平成6(1994)年の西舎地区遺跡巡検で見えられたのがキムンチャシ跡(登録番号:29)である(Ⅱ章4節表3)。同図では、周囲に「ハケレメナ」、「ルベシベ」(ルベシベ川)、「ケハウ」(ケバウ川)、「ハケシリ」(ヘケシリ)の名称がみられる。周囲の情報が同じことから、『保呂辺津誌』の「キムニシチャ」と『山川取調圖』の「キムンチャシ」は同じ地物と判断される。

現地名に残る「西舎」の由来と考えられる高台を表す「キムニシチャ」が正しいと解する。同図の「キムンチャシ」は、「ニ」を「ン」と誤り、「チャ」と「シ」の文字並びを入れ替えた誤記と考えられる。

(末光)

付篇 1. 浦河町向別遺跡出土土器の胎土分析

アースサイエンス株式会社

まとめ・考察：加藤孝幸 菅原 誠

薄片作製：佐々木克久

偏光顕微鏡観察・モード測定：加藤孝幸

全岩化学分析：菅原 誠 岡村 聡

1. 分析試料

浦河町 向別遺跡出土試料

陶器 1点、須恵器 1点、土師器 1点、撥文土器 1点（計 4点）

2. 分析内容

薄片作製、偏光顕微鏡観察、モード測定、全岩化学分析および考察

3. 分析結果

3.1 偏光顕微鏡観察・モード測定

偏光顕微鏡観察結果を表 3.1.1 に示す。また、それらの偏光顕微鏡写真を口絵 4 と図版 41～47 に示す。さらにモード測定（ポイント法、各 500 点以上カウント）の結果を表 3.1.2 および図 3.1.2 に示す。以下にそれぞれの試料の特徴を述べる。

1) ウ 1【陶器】（図 43-9 表 24 図版 30・41・42）

厚さ 5～6mm の断面は均質で全体に灰色を呈する。含まれる粒子は小さく、直径 0.1mm 以下が主体で、それ以上のものはごくまばらに散在する（最大径 0.7mm）。粒子は斜長石＞石英が主体で、微量の不透明鉱物・凝灰岩・軽石・珪藻・単斜輝石を含む。注目すべきは斜長石粒子の分解反応が進んでいることである。周囲の基質にも反応ゾーンが形成されている。ただし、全体に分解することもあるが、それは稀で、大部分は中心部が残存している。

気泡が発達し、気泡を含む孔隙は全体の 21% に及ぶ。バブル状でややいびつな大小の気泡が散在する。レンズ状などの偏平な気泡も目立つ。

2) ウ 2【須恵器】（図 43-10 表 24 口絵 4 図版 30・41・42）

厚さ 5～6mm のわん曲した断面は凸側（外面）より褐色、灰色、赤色、暗灰色の部分が縞状に配列する。含まれる粒子はウ 1 に比べてやや大きい。直径 0.1mm 以下の粒子が主体であるが、最大径 1.1mm 以下の粒子が散在する。粒子は斜長石＞石英が主体であるが、凝灰岩・不透明鉱物・強珪化岩・火山ガラス（新鮮）・玄武岩・放散虫・軽石（新鮮）・珪藻を含む。斜長石粒子の分解反応が一部で認められるが、多くはまぬがれている。気泡はレンズ状などの偏平な気泡が発達するが、少量のバブル状の気泡が含まれ、しばしば真円に近い断面を示す。

3) ウ 3【土師器】（図 43-11 表 24 口絵 4 図版 30・44～46）

幅 5～6mm のわん曲した断面は凸側（外面）より黄褐色、淡褐色、黒色を呈する部分が帯状に配列する。含まれる粒子は直径 0.1mm 以下が主体ではあるが、最大径 1.5mm 以下の粒子が散在し、全体としてウ 1、ウ 2 より粗粒である。粒子は斜長石＞軽石（新鮮）が主体で、安山岩・火山ガラス（新鮮）・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物を含む。石英粒子は確認できない。斜長石の分解反応も確認できない。



図 3.1.2 モード測定結果

3.2 全岩化学分析

3.2.1 分析方法

今回、分析結果の考察を行うにあたり、2種類の測定方法で蛍光X線分析を行う必要が生じたので、分析方法および分析結果については、各々について以下に記載する。

3.2.1.1 検量線法

蛍光X線分析により主成分元素 (SiO_2 , TiO_2 , Al_2O_3 , Fe_2O_3 , MnO , MgO , CaO , Na_2O , P_2O_5) および微量元素 (V, Cr, Co, Ni, Zn, Rb, Sr, Ba, Y, Zr, Nb)、灼熱減量 (LOI) を分析した。分析結果の比較検討の際に使用するSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, Pに関しては、各酸化物の分析結果を無水で100%にノーマライズした値から計算で求めた。

◆試料調整：試料は宮本・岡村 (2003) に基づいて低希釈率 (融剤：試料 = 2 : 1) のガラスビードを作成した。融剤として四ホウ酸リチウム ($\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$)・メタホウ酸リチウム (LiBO_2) を3.6 gと、試料1.8 gを混ぜ、1,050℃で融解させる。その後冷却し、ガラスビードを作成し分析に供した。

◆使用機器：フィリップス社製蛍光X線分析装置 MagiX。

◆測定条件：各元素の測定条件を表3.2.1に示す。X線管球はエンドウィンドウ型のRh管球を用いた、測定環境は真空環境中で測定。

表 3.2.1 各元素の測定条件

	Analytical element		Crystal	Detector	kV	mA	Angle (2θ)	Counting time (s)
	K α	L α						
1	Mo-Pr		LiF200	Scint.	60	50	9.5-21	115
2	Zn-Mo		LiF220	Scint.	60	50	27.5-62	345
3	V-Cu	Pr-W	LiF220	Duplex	50	60	61-126	650
4	K-V	In-Ce	LiF200	Flow	24	125	76-146	175
5	P-Cl	Zr-Ru	Ge111	Flow	24	125	91-146	22
6	Si-Si	Rb-Sr	PE002	Flow	24	125	100-115	5
7	Al-Al	Br-Br	PE002	Flow	24	125	130-147.04	5.68
8	Na-Mg	Zn-Se	PXI	Flow	24	125	20-30.05	2.68

Scint: シンチレーション検出器, Duplex: ガスフロー検出器とXeシールド型のタンデム型検出器, Flow: ガスフロー検出器

- ◆定量操作：補正計算はファイリップ社のソフトSuper Qを用いたが、これにはマトリックス補正、ラインオーバーラップ補正、バックグラウンド補正、コンプトン散乱補正およびマトリックス補正が組み込まれている。

3.2.1.2 ファンダメンタルパラメータ (FP) 法

FP法¹⁾は、標準試料を用いた検量線法とは異なり、分析線の強度が試料の組成と基礎的定数（ファンダメンタルパラメータ）の関数として記述できるという考え方を基礎とした理論計算法である。この方法は、出所不明の未知試料の分析や、試料の形状・重量に関係なく前処理なしで定量できるメリットがある。三辻（2013）などで議論に使用されている主成分元素（Na、K、Ca、Fe）および微量元素（Rb、Sr）のX線強度を用いた手法でも比較検討するために、これら元素のX線強度を蛍光X線分析により分析した。

分析結果の比較検討の際に使用する値は、未知試料（今回は土器試料）の各元素のX線強度を同日に同条件下で測定したJG-1（標準試料）の同元素のX線強度で標準化 $[(\text{未知試料のX線強度}) \div (\text{JG-1のX線強度})]$ した値を用いるため、未知試料のほかにもJG-1の分析も行った。

- ◆試料調整：分析試料は、粉碎し粉末処理したものを測定試料とした。まず、試料測定用プラスチック製カップに、一重のポリプロピレンフィルムを装着し、できるだけ底面を十分に覆い隠す量の粉末試料を入れた。粉末試料は軽く加圧し、中の粉末試料が動かないようにした。その後、蓋をして金属ホルダーに入れ試料室にセットし測定を行った。
- ◆使用機器：ファイリップス社製蛍光X線分析装置MagiX。
- ◆測定条件：各元素の測定条件を表3.2.2.に示す。X線管球はエンドウィンドウ型のRh管球を用いた、測定環境はヘリウム環境中で測定している。
- ◆定量操作：定量分析は、パナリティカル社製のソフトIQ+を用いファンダメンタルパラメータ法（FP法）によって行った。

表3.2.2 各元素の測定条件

Scan or Channel	Analytical element		Crystal	Detector	kV	mA	Start (2θ)	End (2θ)
	K α	L α						
Sc1	Mo-Pr	-	LiF200	Scint.	60	50	9.53	20.98
Sc2	Ga-Te	Ir-Am	LiF200	Scint.	60	50	19.02	40
Sc3	V-Zn	Pr-Re	LiF220	Duplex	50	60	59.53	125.98
Sc4	K-V	In-Ce	LiF200	Flow	30	100	76.04	145.96
Sc5	P-Cl	Zr-Ru	Ge111	Flow	30	100	91.05	145.95
Sc6	Si-Si	Rb-Sr	PE002	Flow	30	100	100.05	114.95
Sc7	Al-Al	Br-Br	PE002	Flow	30	100	130.05	146.95
Sc8	Na-Mg	Cu-Se	PX1	Flow	30	100	20.02	31.02
Ch1	Cd		LiF200	Scint.	60	50	15.27	15.27
Ch2		Hg	LiF200	Scint.	60	50	35.87	35.87

Scint：シンチレーション検出器、Duplex：ガスフロー検出器とXoシールド型のタンデム型検出器、Flow：ガスフロー検出器

※補足：蛍光X線強度を、管球の電圧・電流・ターゲット材（Rh）・各元素の質量吸収係数・ジャンプ比・蛍光収率などの物理定数・装置感度定数などのパラメーターから、理論的にX線強度を算出することで定量計算を行う方法。この仮定で計算された強度を理論X線強度と呼ぶ、理論強度は、濃度を変数とすることで変化することができるが、ここでは、測定強度と比較した回帰計算を行うことにより、定量値を算出している。

3.2.2 分析結果

検量線法による分析結果を表3.2.3、FP法による分析結果を表3.2.4に示す。

表3.2.3 検量線法による分析結果

浦河町 向別遺跡出土土器 胎土分析									
試料番号	ウ1	ウ2	ウ3	ウ4	試料番号	ウ1	ウ2	ウ3	ウ4
遺物名	陶器(珠洲焼)	消息器	土師器	標文土器	遺物名	陶器(珠洲焼)	消息器	土師器	標文土器
器種	大甕	甕?	杯	甕	器種	大甕	甕?	杯	甕
部位	胴部	胴部・肩部	胴部	胴部	部位	胴部	胴部・肩部	胴部	胴部
出土地点	K-5区	K-5区	PS-7	I・J-3・4区	出土地点	K-5区	K-5区	PS-7	I・J-3・4区
層位	I層	I層	I層	I層	層位	I層	I層	I層	I層
主成分元素(酸化物)(wt.%)					主成分元素(wt.%) 【水(L01)を除いて100%ノーマライズしたデータで計算】				
SiO ₂	63.07	61.28	63.01	60.93	Si	30.43	29.72	31.59	30.97
TiO ₂	0.96	0.95	1.06	0.79	Ti	0.59	0.59	0.68	0.51
Al ₂ O ₃	21.18	22.20	18.72	18.04	Al	11.57	12.19	10.62	10.38
Fe ₂ O ₃ *	7.35	7.78	4.18	6.05	Fe	5.31	5.65	3.14	4.60
MnO	0.05	0.02	0.03	0.04	Mn	0.04	0.02	0.02	0.04
MgO	1.07	1.16	0.85	1.11	Mg	0.66	0.72	0.55	0.73
CaO	0.76	0.70	0.79	1.24	Ca	0.56	0.52	0.61	0.96
Na ₂ O	0.85	0.78	1.26	1.67	Na	0.65	0.60	1.00	1.34
K ₂ O	1.51	1.40	1.56	1.47	K	1.29	1.21	1.39	1.33
P ₂ O ₅	0.10	0.11	1.80	0.63	P	0.05	0.05	0.84	0.30
L01	-0.63	0.29	6.57	9.70	O	48.85	48.73	49.56	48.84
Total	98.86	96.86	99.82	101.67	Total	100.00	100.00	100.00	100.00
【水(L01)を除いて100%ノーマライズ(wt.%)】					微量元素(ppm)				
SiO ₂	65.09	63.58	67.57	66.25	V	142.5	138.9	119.8	123.3
TiO ₂	0.99	0.98	1.14	0.86	Cr	65.1	66	58.6	64.6
Al ₂ O ₃	21.86	23.04	20.07	19.62	Co	29.9	31.7	16.3	24.3
Fe ₂ O ₃ *	7.59	8.07	4.49	6.57	Ni	17.6	21.8	22.3	19.1
MnO	0.05	0.02	0.03	0.05	Zn	66.6	81.5	108.9	70.9
MgO	1.10	1.20	0.91	1.21	Rb	91.7	86.4	97.4	57.4
CaO	0.79	0.73	0.85	1.35	Sr	94.6	85.5	104.2	129.7
Na ₂ O	0.87	0.81	1.35	1.81	Ba	424.4	491.1	732.5	509.9
K ₂ O	1.56	1.45	1.67	1.60	Y	35	33.3	33.7	21.2
P ₂ O ₅	0.10	0.12	1.93	0.68	Zr	205	207.8	209.1	145.3
Total	100.00	100.00	100.00	100.00	Nb	17.5	15.9	15.8	9.6

Fe₂O₃*は、total Fe₂O₃を意味する

表3.2.4 FP法による分析結果

浦河町 向別遺跡出土土器 胎土分析値					標準試料
試料番号	ウ1	ウ2	ウ3	ウ4	JG-1
遺物名	陶器(珠洲焼)	消息器	土師器	標文土器	
器種	大甕	甕?	杯	甕	
部位	胴部	胴部・肩部	胴部	胴部	
出土地点	K-5区	K-5区	PS-7	I・J-3・4区	
層位	I層	I層	I層	I層	
X線強度					
Fe	130.558	138.534	77.909	114.482	39.547
Ca	8.810	7.994	7.224	12.319	23.341
Na	4.172	3.965	6.173	6.273	20.142
K	16.781	15.630	18.463	17.275	50.426
Sr	6.775	6.373	8.545	9.299	18.036
Rb	5.882	5.466	6.520	3.599	13.615
JG-1による規格化値(土器試料のX線強度÷標準試料のX線強度)					
Fe	3.301	3.503	1.970	2.895	
Ca	0.377	0.342	0.309	0.528	
Na	0.207	0.197	0.306	0.311	
K	0.333	0.310	0.366	0.343	
Sr	0.422	0.397	0.533	0.580	
Rb	0.432	0.401	0.479	0.264	

4. 考察

4.1 偏光顕微鏡観察結果の検討

偏光顕微鏡観察の結果からは以下のことが言える。

1) ウ1(陶器)

ウ1は他試料より高温で焼かれている。それは斜長石の分解反応がもっとも進んでいるからである。焼結が相対的に充分なため、「焼けむら」がなく、全体が灰色を呈する。孔隙率が21%と高く、バブル状の気泡と偏平な気泡が大部分を占める。このことは軽量であるが強度が保たれていることを意味する。含まれる粒子は中～酸性の火山灰に由来すると考えて良いものが多い(斜長石・石英・軽石・単斜輝石)。珪藻が含まれることか

ら考えて、少なくとも粘土材料は中～酸性の火山灰が再堆積、粘土化したものを使用した可能性が考えられる。なお、花崗岩の粒子は確認されていない。

2) ウ2 (須恵器)

ウ2の断面には赤色酸化部と考えられる部分を含めて、色調の異なる縮状の配列が認められる。また斜長石の分解反応が一部で認められるものの、多くはまぬがれている。すなわち、焼結の程度はウ1に比べて明らかに低い。孔隙率も約6%と低く、ウ1より高密度である。

含まれる粒子はガラス質の軽石凝灰岩に由来すると考えられるものが多い(斜長石・石英・火山ガラス・軽石)。これらの多くは砂質粒子であり、混和材として軽石凝灰岩を使用したと考えられる。一方、粘土材料は放散虫や珪藻を含むことから粘土は凝灰岩の水中への再堆積物を使用した可能性と、まったく起源の異なる粘土を使用した可能性が考えられる。なお、花崗岩の粒子は確認できない。

3) ウ3 (土師器)

ウ3の断面には赤色酸化部と考えられる部分を含めて、色調の異なる縮状の配列が認められる。斜長石の分解反応は認められない。すなわち、焼結の程度はウ1に比べて明らかに低く、ウ2に比べても低い可能性がある。孔隙率は他の3試料と比べて著しく低く、1%に満たない。重い強度もある土器である。

含まれる粒子は中性(安山岩質)の軽石凝灰岩に由来すると考えられるものが多い(斜長石・軽石(新鮮)・火山ガラス(新鮮)・単斜輝石・斜方輝石)。これらの多くは砂質粒子で、混和材として安山岩質の軽石凝灰岩を使用した可能性が考えられる。粘土はこれらの水中への再堆積物を使用したか、あるいは起源の異なる粘土を使用した可能性が考えられるが、積極的な根拠がない。本試料は他試料と比べて、少なくとも石英粒子が顕微鏡レベルでは確認できないので、混和材と粘土はその点で共通である。

4) ウ4 (擦文土器)

ウ4の断面は褐色を呈する比較的低温の酸化部と考えられる部分と黒色部からなる。孔隙率が約8%とウ1に次いで高く、3%はひび割れであるフラクチャー孔隙が占める。このことは他の試料より強度が低いことを示している。

含まれる粒子は他試料とまったく異なり、付加体由来と考えられる粒子(変形砂岩・変形泥岩・緑色岩化玄武岩・チャート・酸性凝灰岩)が目立つ。その他、ホルンフェルス・安山岩・軽石・溶結凝灰岩・砂岩・泥岩などが認められる。これらは混和材として採取されたであろうが、花崗岩類、角閃岩、片麻岩など日高変成帯由来の岩石は確認できない。したがって、もし、向別遺跡の近傍に混和材の産地を捜すとすれば、日高変成帯の西側に分布するイドンナップ帯などの付加体を主として流下する河川の河床材料を候補とする必要がある。

4.2 全岩化学分析結果の検討

4.2.1 検討の方針

今回、分析を実施した土器試料は、ウ1が珠洲焼、ウ2が須恵器、ウ3が土師器、ウ4が擦文土器の可能性が推定されている。

須恵器や珠洲焼の化学組成の検討においては、同じ手法を用いて多数の比較検討論文(例えば、三辻ほか(2006)・三辻(2013)など)が報告されており、これらと同じ手法で比較検討を進める。まず始めに、化学組成の特徴をグラフ(散布図)にプロットし、どの地域の領域に近いかということを目視的に判断する。これは視覚的な判断のため、より詳細な定量的な検討のために統計学的手法(マ

ハラノビスの汎距離)を用いた検討もこれらの論文の中では併せて行っており必須である。しかし、今回は統計学的計算ができる環境が揃わなかったため、こちらの検討は行うことが出来なかった。ただ、論文中でも述べられている通り、化学組成の検討だけでもおおよその特徴を把握する事は可能である。

土師器に関しては、須恵器や珠洲焼と同様の検討例は少ないので、さらに松本(2003)の検討例とも比較する。

撥文土器に関しては、参考出来る公表論文を見つけることが出来なかったため、須恵器・珠洲焼・土師器の検討方法と同じ方法で比較してみる。

今回分析に供した試料は、それぞれ由来が推定されているが、確定している状況ではないことを鑑みした場合、色々な可能性の考慮や相互比較を試みたほうが良いと考えられるので、各グラフにプロットする際には、4試料全ての分析値を同じグラフにプロットした。

以下、試料の比較検討に関しては、種類ずつ検討を進めていく。

4.2.2 各分析試料の検討

1) 分析試料;ウ1〔陶器(珠洲焼)〕

珠洲焼に関しては、まず始めに三辻ほか(2006)のデータと比較した(図4.2.1)。珠洲陶器の他に、珠洲系陶器として秋田県の大畑窯・エビハチ長根窯も比較されている。Rb-Sr図では珠洲焼・エビハチ長根窯の領域に入り、大畑窯の領域から外れるが、K-Ca図では、珠洲焼の領域から僅かに外れ、大畑窯・エビハチ長根窯の領域からは大きく離れる。これらの事から珠洲陶器・珠洲系陶器の両者とも違うと言えるが、K-Ca図における領域からの外れの程度は僅かであり、完全に違うと断定するのは尚早かもしれない。珠洲焼である可能性が低いので、次の比較対象として北海道に近い東北地方産の須恵器の可能性を検討していく。

県毎に比較していく。青森県の須恵器産地は五所川原のみで、データは五所川原市教育委員会(1998)・五所川原市教育委員会(2003)を用いて比較した(図4.2.2)。K-Ca図・Rb-Sr図ともに五所川原窯群の領域にプロットされ、さらにFeおよびNaに関しても五所川原窯群の組成領域にプロットされ、五所川原窯の可能性が考えられる。秋田県には須恵器の窯跡が多数存在するが、三辻(2013)のデータを用いて比較した(図4.2.3)。Rb-Sr図ではいくつかの窯跡の領域にプロットされるが、K-Ca図では全ての窯跡の領域から外れてプロットされるので、秋田県の窯産の可能性は低いと言える。岩手県の須恵器の窯跡は瀬谷子窯跡のみで、三辻(2013)を用いて比較した(図4.2.4)。Rb-Sr図では領域内にプロットされるが、K-Ca図ではやや外れる。これらから瀬谷子窯産ではない可能性が高いが、K-Ca図の外れ方はそれほど大きくないことを留意しておく必要はあるかもしれない。山形県には秋田県同様、窯跡が多数存在し、三辻(2013)を用いて比較した(図4.2.5)。Rb-Sr図では、鶴岡市の荒沢窯跡の領域からは外れるが、他の窯跡の領域内にはプロットされる。しかしながら、K-Ca図では全ての領域から外れてしまうので、山形県の窯跡の可能性は低いと言える。ただし、内陸側の寒河江市の平野山1, 2, 3, 12号窯跡の領域からは、僅かに外れているだけなので、可能性を完全に否定することは出来ない。宮城県にも窯跡は多数存在する。これも三辻(2013)を用いて比較した(図4.2.6)。Rb-Sr図では、仙台市の土手内1, 2, 3号窯跡、白石市の一本杉窯跡の領域からは外れているが、他の窯跡の領域の中にプロットされる。そして、K-Ca図であるが、これまでの県と異なり、領域内にプロットされるか外れていても僅かの場合が多い。ただし、K-Ca図で領域内にプロットされていることに厳密に着目した場合は、宮城県内の木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹瀧窯・硯沢窯の可能性が挙げられる。しかし、Rb-Sr図で大きく領域

から外れる仙台市の土手内1, 2, 3号窯跡や、領域から外れる量は僅かだが両図で外れる白石市の一本杉窯跡以外の窯跡の可能性は完全には否定できない。福島県にも窯跡は多数存在する。これも三辻(2013)を用いて比較した(図4.2.7)。Rb-Sr図では、会津若松市の大戸窯跡、泉崎村の泉崎窯跡からは外れるが、その他の窯跡の領域との比較では、領域内かその近くにプロットされている。また、K-Ca図であるが、会津若松市の大戸窯跡の領域からは大きく外れ、伊達市の伊達窯跡から僅かに外れる以外は領域内または境界付近にプロットされる。宮城県と同様に、両図で領域内にプロットされていることに厳密に着目した場合は、大久保窯跡A窯・B窯、入道迫窯跡、河沼郡の新田山窯跡の可能性が挙げられる。

次に、珠洲焼の産地と同じ石川県、近い富山県の須恵器のデータと比較する(図4.2.8および図4.2.9)。データは、石川県は三辻ほか(2008)から、富山県は三辻ほか(2008)および三辻(2014)から引用した。どちらの県においてもK-Ca図において大きく領域から外れてしまい、可能性は低いと言える。

最後に、参考までに須恵器の一大産地であった陶邑窯跡群と比較してみる(図4.2.10)。データは三辻(2013)から引用した。石川県・富山県同様、K-Ca図において大きく領域から外れてしまい、可能性は低いと言える。以上の結果を踏まえて、厳密に可能性を考えると

○青森県五所川原窯

○宮城県木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹端窯・硯沢窯

○福島県大久保窯跡A窯・B窯、入道迫窯跡、河沼郡の新田山窯跡

の可能性が考えられる。青森県五所川原以外は太平洋側の県に特徴が近い傾向がある。

2) 分析試料:ウ2〔須恵器〕

ウ2試料は須恵器と推定されているが、念のため珠洲陶器および珠洲系陶器と比較する(図4.2.1)。Rb-Sr図、K-Ca図においてウ1試料よりもさらに珠洲陶器および珠洲系陶器の領域から離れる。珠洲陶器および珠洲系陶器の可能性は低いと考えられる。ただし、これらの領域から大きく離れているわけではないことには注意が必要かもしれない。

以降は須恵器の産地との比較をウ1試料と同様に行う。使用する図や引用した文献は、ウ1試料と全く同じなので比較した結果だけを記述していく。青森県の五所川原との比較(図4.2.2)では、K-Ca図・Rb-Sr図ともに五所川原窯群の領域にプロットされ、さらにFeおよびNaに関しても五所川原窯群の組成領域にプロットされ、五所川原窯の可能性が考えられる。秋田県の須恵器の窯跡との比較(図4.2.3)では、大仙市の成沢1, 2, 3号窯跡の領域に、Rb-Sr図でプロットされ、K-Ca図で僅かに外れた位置にプロットされる。可能性を否定できないと考えられる。岩手県の瀬谷子窯跡との比較では(図4.2.4)、K-Ca図・Rb-Sr図ともに領域内にプロットされ、瀬谷子窯跡の可能性がある。山形県の須恵器の窯跡との比較(図4.2.5)では、内陸側の寒河江市の平野山1, 2, 3, 12号窯跡の領域から僅かに外れているだけで、ウ1試料と同様、可能性を完全に否定することは出来ないかもしれない。宮城県の須恵器の窯跡との比較(図4.2.6)では、宮城県内の木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹端窯・硯沢窯、河南町の河南町窯跡の領域内にプロットされ、陸前古川市の日の出山窯跡の領域とはK-Ca図において僅かに外れるのみである。これらの窯跡の可能性が考えられる。福島県の須恵器の窯跡との比較(図4.2.7)では、会津若松市の大戸窯跡の領域から両図において大きく外れ、泉崎村の泉崎窯跡の領域に対してはRb-Sr図においてやや外れるのみである。これはウ1試料と類似の特徴である。両図で領域内にプロットされていることに厳密に着目した場合は、ウ1試料と同様の大久保窯跡A窯・B窯、入道迫窯跡、河沼郡の新田山窯跡の他

に、善光寺窯跡、伊達市の伊達窯跡の可能性も完全に否定できない。

次に、ウ1試料と同様に石川県、富山県の須恵器および陶邑窯跡群のデータと比較する（図4.2.8、図4.2.9および図4.2.10）。ウ1試料と同様、どの窯跡の領域に対してもK-Ca図において大きく外れてしまい、可能性は低いと言える。

以上の結果を踏まえて、厳密に可能性を考えると

- 青森県五所川原窯
- 岩手県瀬谷子窯
- 宮城県木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹端窯・硯沢窯・河南町の河南町窯跡
- 福島県大久保窯跡A窯・B窯、入道迫窯跡、河沼郡の新田山窯跡

の可能性が考えられる。ウ2試料は、岩手県の瀬谷子窯跡や宮城県の河南町の河南町窯跡の可能性も加わり、ウ1試料と同様の青森県五所川原以外は太平洋側の県に特徴が近いという傾向がさらに強いと言えるだろう。

3) 分析試料；ウ3〔土師器〕

ウ3試料は土師器だが、須恵器と同様の手法を用いた化学組成の検討例は少なく、須恵器のデータとも単純比較は出来ない。しかしながら、三辻（2013）によると、須恵器と同様の手法を用いて青森県の縄文土器を検討した結果、太平洋側と日本海側で地域差があることがわかったと述べられている。また、土師器についても近畿地方の生駒山西麓遺跡群において、同様の手法を用いて検討した結果、何種類かのグループに分けられることが分かり、胎土にいくつかの種類が存在したと推定された。そして、そのグループ分けが土器の様式の違いに対応しており、後背地の違う土器生産地がいくつか存在した可能性が述べられている。

以上のことから、土師器であるウ3試料についてもウ1試料・ウ2試料と同様の検討を試み、どの地域の特徴と類似しているのかを把握する事は重要だと考えられる。また、土師器の化学組成に関して、別の手法を用いて青森県および秋田県北部の土師器の特長について議論している報告（松本、2003）があるので、これとも比較検討を行う。

珠洲陶器および珠洲系陶器との比較においては（図4.2.1）、珠洲陶器の領域に入る。ウ3試料の胎土の化学組成は、珠洲地域または珠洲地域に類似した化学組成を持つ地域の可能性がある。青森県の五所川原との比較（図4.2.2）では、Rb-Sr図で領域から外れており、五所川原周辺地域の特性は持っていない。秋田県の須恵器の窯跡との比較（図4.2.3）では、大仙市の成沢1、2、3号窯跡、秋田城周辺の新城窯跡の領域にはほぼプロットされる。ただし、境界線上の部分もある。これらの地域と胎土の類似性がある可能性が存在する。岩手県の瀬谷子窯跡との比較では（図4.2.4）、K-Ca図・Rb-Sr図ともに領域内にプロットされ、瀬谷子窯跡地域と胎土の類似性がある可能性が存在する。山形県の須恵器の窯跡との比較（図4.2.5）では、内陸側の寒河江市の平野山1、2、3、12号窯跡の領域内にプロットされ、酒田市の山海窯跡の領域とはRb-Sr図は領域内、K-Ca図においては境界線上にプロットされる。これらの地域と胎土の類似性がある可能性が存在する。宮城県の須恵器の窯跡との比較（図4.2.6）では、宮城県内の木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹端窯・硯沢窯の領域内にプロットされるのみで、ウ1試料やウ2試料とは傾向がやや異なり、重なる地域が少ない。前述の窯跡の地域と胎土の類似性がある可能性が存在する。福島県の須恵器の窯跡との比較（図4.2.7）では、両図で大久保窯跡A窯・B窯、河沼郡の新田山窯跡の領域内にプロットされ、入道迫窯跡は両図ともに境界線付近にプロットされる。宮城県の場合と同様に重なる地域が

少なく、ウ1試料やウ2試料とは傾向がやや異なる。前述の窯跡の地域と胎土の類似性がある可能性が存在する。

ここで、三辻ほか(2008)に記載されている北海道余市町大川遺跡から出土した土師器のデータと比較してみると(図4.2.11)、Rb-Sr図においてやや離れた場所にプロットされており、同様のものとは考えにくい。そして、参考までに石川県、富山県の須恵器および陶器窯跡群のデータと比較する(図4.2.8、図4.2.9および図4.2.10)。ウ1試料・ウ2試料と同様、どの窯跡の領域に対してもK-Ca図において大きく外れてしまい、可能性は低いと言える。ただし、各領域から外れる距離は一番少なくなっている。

以上の結果を踏まえて、K-Ca図およびRb-Sr図から推定される胎土の特徴が類似する地域に関して、厳密に可能性を考えると

- 岩手県瀬谷子窯地域
- 山形県寒河江市平野山1, 2, 3, 12号窯地域
- 宮城県木戸窯・吹付窯・河原窯・横前窯・吹端窯・硯沢窯地域
- 福島県大久保窯跡A窯・B窯、河沼郡の新田山窯地域
- 石川県珠洲窯地域

の可能性が考えられる。日本海側に山形県が加わり、青森県の五所川原地域が該当していない。ここでは厳密に判断したので、秋田県が該当していないが、秋田県のいくつかの地域も可能性が考えられる。ウ1試料・ウ2試料と異なり、日本海側の地域のいくつかが該当しているという特徴がある。

次に、青森県と秋田県北部に対象地域は限られるが、松本(2003)の土師器の化学組成データと比較してみる。松本(2003)で対象とされた遺跡および粘土試料採取位置を図4.2.12(松本, 2003の図1を転用)に示す。松本(2003)では、土師器の他に土器試料出土遺跡の周囲から粘土等試料も採取し同様に分析比較している。本考察では松本(2003)の図5に今回の分析値を加筆し比較検討した(図4.2.13)。松本(2003)の土師器のデータとウ3試料のデータを比較した場合、 $[K/(Na+Ca)] - [Ca/(Na+K)]$ 図・ $[Ti/(Al+Fe+Mg)] - [K/(Na+Ca)]$ 図の両図において、青森県西部の下志塚土師器(弘前市)・矢沢土師器(鯉ヶ沢町)、秋田県北部の館の上土師器(八竜町)のデータがプロットされている領域にプロットされる。粘土試料との比較では、青森県西部の五所川原大溜池粘土(五所川原市)のデータがプロットされている領域にプロットされる。

今回は青森県・秋田県北部に限られるが、ウ3試料は、より日本海側の地域の特徴を持っており、これまで比較検討してきたK-Ca図やRb-Sr図の特徴から得られた「ウ3試料はウ1・ウ2試料よりも日本海側の地域の特徴を有するかもしれない」という結果と調和的である。また松本(2003)では、このような化学組成の地域差は、東北部地域のような第四紀火山噴出物降下地域では、島弧横断方向に火山岩の化学組成が系統的に変化することに起因していると述べられている。ただし、この因果関係は利用する粘土層が第四紀層に限定できる場合のみであることは注意しなければならない。

4) 分析試料：ウ4 [撥文土器]

ウ4試料は撥文土器と推定されており、全く異なる土器であり、厳密に化学組成を比較検討する対象データが無かった。参考としてK-Ca図・Rb-Sr図で同じように比較検討してみたが(図4.2.1~図4.2.10)、やはり各県の各地域のデータと比較しても、かなり異なる領域にプロットされる場合がほとんどである。その中で2地域だけ、宮城県の本杉窯跡(白石市)の領域内、福島県の大久保窯跡A窯・B窯の領域付近にプロットされる。偶然に類似の組成を有するのか、どのような意味があるかは今後の課題である。

これまでの4試料の比較検討結果を表4.2.1に比較総括表を示す。

表4.2.1 比較総括表

清河町 向原遺跡出土土器							
試料番号	ウ1	ウ2	ウ3	ウ4			
遺物名	陶器(珠洲焼)	須恵器	土師器	埴文土器			
器種	大甕	甕?	坪	甕			
部位	胴部	胴部・肩部	胴部	胴部			
出土地点	K-5区	K-5区	PS-7	I・J-3・4区			
層位	I層	I層	I層	I層			
珠洲・珠洲系陶器との比較							
	K-Ga	Rb-Sr	K-Ga	Rb-Sr	K-Ga	Rb-Sr	K-Ga
珠洲	△	○	×	△	○	○	×
エビハ字長腹(珠洲系)	×	△	×	×	×	○	×
大甕(珠洲系)	×	×	×	×	×	×	×
青森県との比較							
五所川原	○	○	○	○	○	×	×
秋田県との比較							
新城(秋田城周辺)	×	○	×	○	△	○	×
海老沢(男鹿半島)	×	×	×	×	×	△	×
手形山1号・2号(秋田市内)	×	×	×	×	×	×	×
成沢1号・2号・3号(大仙市)	×	○	△	○	○	△	×
岩手県との比較							
瀬谷子(奥州市胆沢城周辺)	×	○	○	○	○	○	×
山形県との比較							
山崎(酒田市)	×	○	×	○	△	○	×
奥谷地・城崎・藤藤(酒田市)	×	○	×	○	×	×	×
克武(鶴岡市)	×	×	×	△	×	×	×
平野山1号・2号・3号・12号(寒河江市)	△	△	△	×	○	×	×
宮城県との比較							
本戸・牧付・河原・榎前・牧塚・根沢(宮城県内の代表的な窯)	○	○	○	○	○	×	○
宮南町(河内町)	△	○	○	○	○	×	○
土手内1号・2号・3号(仙台市)	○	×	△	×	△	×	×
日の出山(陸前古川市)	×	△	△	×	×	×	×
一本杉(白石市)	×	×	×	△	×	×	○
福島県との比較							
大戸(会津若松市)	×	×	×	×	×	×	×
新田山(河沼町)	○	○	○	○	○	○	×
曹光寺	△	×	○	△	△	×	○
伊達11号機・12号機	×	×	△	△	○	×	×
人達池	○	○	○	○	△	△	×
大久保A窯・B窯	○	○	○	○	○	○	△
泉崎	○	×	○	×	○	×	×
石川県(小松市周辺)との比較							
押水高松地城	×	×	×	×	×	×	×
小松地城	×	×	×	×	×	×	×
富山県との比較							
万年谷池(滑川市、9世紀)	×	×	×	×	×	×	×
7世紀(平岡・センガリ山・吉沢(富山県))	×	×	×	○	×	○	△
小杉丸山・天地C(小杉町)、湊田No.7,1号2号(大門町)、西澤池・山王薬・蓮沼池(小矢部市)	×	○	×	○	×	○	×
参考(近畿地域)							
陶器窯群(大阪府堺市)	×	○	×	○	×	△	×
参考(土師器)							
大川(北海道余市町)					△	×	

[○]: 窯城内 △: 境界線上または境界線外側に接する ×: 窯城外

4.3 まとめ

偏光顕微鏡観察と全岩化学分析を総合すると以下のことが言える。

1) ウ1【陶器】(図43-9)

本試料は、遺物の考古学的検討から、珠洲焼系ないし青森県五所川原窯産の可能性が考えられている試料である。化学組成の分析結果からみて、珠洲焼系とは考えにくい。五所川原窯産である可能性は、他の候補も考えられるものの、否定されない。また、偏光顕微鏡観察から、中～酸性の火山灰に由来する粒子が認められたが、五所川原周辺には、八甲田カルデラ形成時の酸性火砕流堆積物である

鶴ヶ坂層が分布し、また、東方には同じ八甲田山火山のより新しい火砕流も分布している（例えば生田ほか編、1989）。すなわち、ウ1が五所川原産であるという考えは分析結果から支持できる。ただし、化学分析値からは、東北地方東側の宮城県や福島県の約10ヶ所との類似性もある。

2) ウ2【須恵器】(図43-10)

ウ2試料は化学組成の検討からみて、珠洲陶器や珠洲系陶器である可能性は低い。

須恵器との比較では青森県五所川原産のほか、岩手県瀬谷子窯や宮城県の本戸窯6ヶ所、福島県の大久保窯跡A窯・B窯2ヶ所の可能性が考えられた。五所川原以外は太平洋側の県の窯に由来する土器とも化学組成上の特徴が一致する。偏光顕微鏡観察からはガラス質の軽石凝灰岩を含むので、ウ1が八甲田系の火山灰を含む可能性があることは矛盾しない。しかし、東北地方には種々の火山噴出物が分布しており、詳しい検討にはウ1の出所検証も含めて土器中の火山ガラスのEPMA分析などが必要である。

ただし、いずれにしても、ウ1とウ2は焼方が異なっており、例え材料が類似していても、同じ時代の窯の製品とは考えにくい。

3) ウ3【土師器】(図43-11)

ウ3は全岩化学組成上の特徴からみると、岩手県瀬谷子窯地域や宮城県の6地域、福島県の2地域の他、日本海側の山形県寒河江市平野山の諸窯地域や石川県珠洲窯地域も候補に入る。ウ1やウ2で考えた青森県五所川原地域は該当しない。

ウ1やウ2と材料が異なることは、偏光顕微鏡観察からも支持される。すなわち、ウ3には安山岩質の軽石凝灰岩を使用したと考えられ、石英粒子は確認できない。火山ガラスが残存しており、今後EPMA分析を行えば産地にせまれる情報が得られる可能性がある。

4) ウ4【攪文土器】(図43-12)

ウ4は化学組成上、材料の産地の有力な情報は得られない。ただし、偏光顕微鏡観察から、多量の付加体構成岩類の砂を混入していることが判明した。このことから、他の考古学的条件が許せば、向別遺跡に近い北海道中軸帯西側の付加体分布域を流下する河川（例えば、向別川）に由来する砂であると考えることが可能である。

【引用・参考文献】

五所川原市教育委員会（1998）犬走須恵器窯跡発掘調査報告書。五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集。102-111。

五所川原市教育委員会（2003）五所川原須恵器窯跡群。五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集。94-109。

松本建彦（2003）誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）による東北北部古代土器の胎土分析。

第四紀研究。42(1)。1-12。

三辻利一（2013）「新しい土器の考古学」。同成社。219p。

三辻利一・小野裕子・天野哲也（2008）オホーツク文化の集団間・対外交流の研究-1。

礼文島香深井1遺跡出土陶質土器の蛍光X線分析-。北海道大学総合博物館研究報告。4。139-152。

三辻利一・吉岡康暢・乾友美（2006）統計学的手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究（第18報）

- 珠洲陶器と珠洲系陶器の相互識別-。考古学と自然科学。52。19-38。

宮本佳彦・岡村聡（2003）蛍光X線分析法による地質試料の主成分及び微量元素の高精度分析。

北海道教育大学紀要（自然科学編）。54。49-59。

生田慶司・中川久夫・繁沢聡史編（1989）「日本の地質2 東方地方」。共立出版。338p。

柳澤清一編（2014）型式論の実践的研究3。人文科学研究科研究プロジェクト報告書。290。251-256。

（令和元年8月30日受領 内容点検・編集 末光）

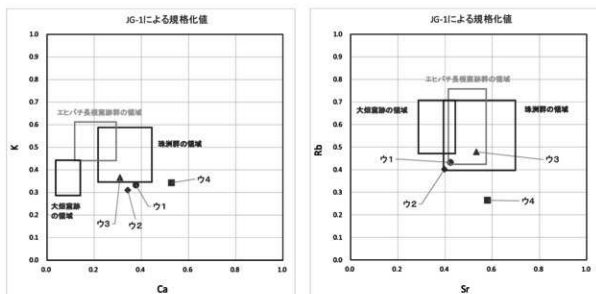


図 4.2.1 珠洲陶器・珠洲系陶器との比較

〔珠洲群（石川県珠洲市）・エヒバチ長根窯跡群（秋田県山本郡ニツ井町）・大畑窯跡（秋田県仙北郡南外村）の領域は、三辻ほか（2003）から引用〕

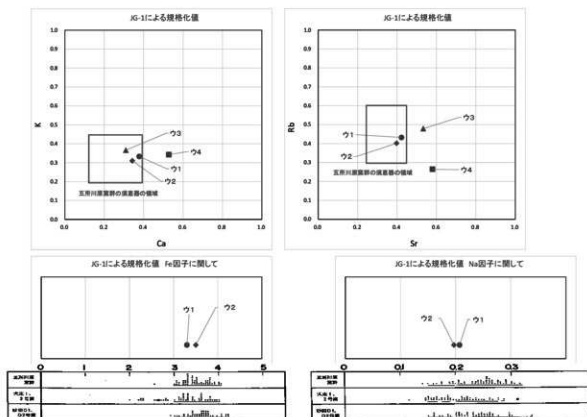


図 4.2.2 青森県の須恵器窯跡との比較

〔五所川原窯跡群の領域およびデータは五所川原市教育委員会（2003）から引用。

Fe 因子・Na 因子のデータは五所川原市教育委員会（1998）から引用〕

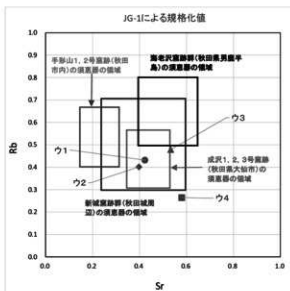
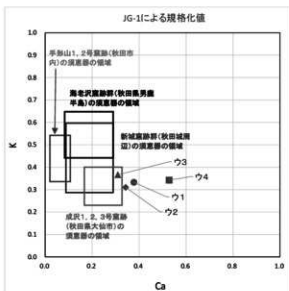


図 4.2.3 秋田県の須恵器窟跡との比較

(新城窟跡群(秋田県雄物川)・海老沢窟跡群(秋田県男鹿半島)の領域は三辻(2013)から引用。
手形山1, 2号窟跡(秋田市内)・成沢1, 2, 3号窟跡(秋田県)の領域は、三辻(2013)を参考に加筆)

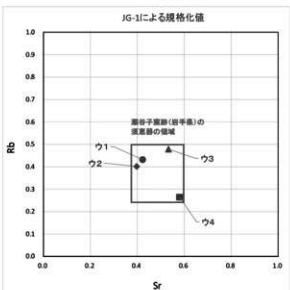
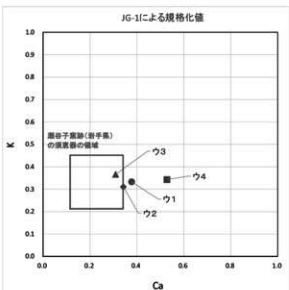


図 4.2.4 岩手県の須恵器窟跡との比較

(瀬谷子窟跡(岩手県胆沢城周辺)の領域は、三辻(2013)から引用)

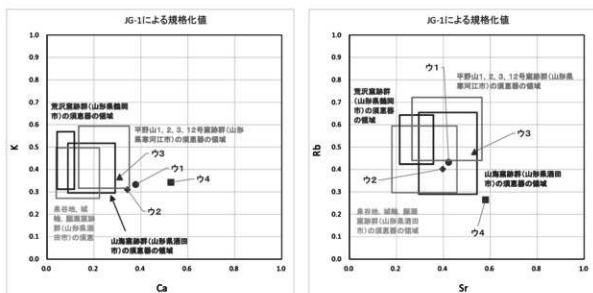


図 4.2.5 山形県の須恵器窟跡との比較

[山海窟跡群 (山形県酒田市) の領域は、三辻 (2013) から引用。
 泉谷地、城輪、瀬瀬窟跡群 (山形県酒田市)・荒沢窟跡群 (山形県鶴岡市)・
 平野山1, 2, 3, 12号窟跡群 (山形県寒河江市) の領域は、三辻 (2013) を参考に加筆]

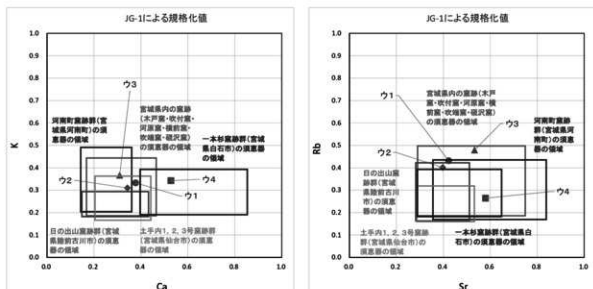


図 4.2.6 宮城県の須恵器窟跡との比較

[宮城県内の窟跡 (木戸窟・吹付窟・河原窟・横前窟・吹端窟・硯沢窟)・
 一本杉窟跡群 (宮城県白石市) の領域は、三辻 (2013) から引用。
 河内町窟跡群 (宮城県河内町)・日の出山窟跡群 (宮城県陸前古川市)・
 土手内1, 2, 3号窟跡群 (宮城県仙台市) の領域は、三辻 (2013) を参考に加筆]

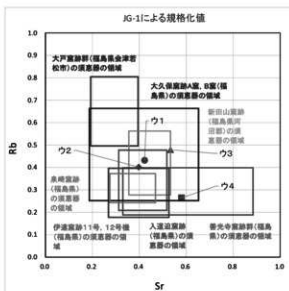
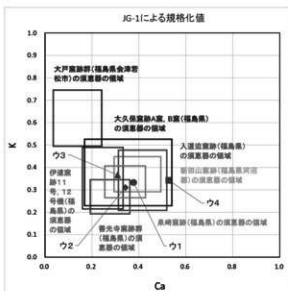


図 4.2.7 福島県の須恵器窯跡との比較

[大戸窯跡群(福島県会津若松市)・入道迫窯跡(福島県)の領域は、三辻(2013)から引用。
 新田山窯跡(福島県河沼郡)・善光寺窯跡群、伊達窯跡11号および12号機、
 大久保窯跡A室およびB室、泉崎窯跡(福島県)の領域は、三辻(2013)を参考に加筆]

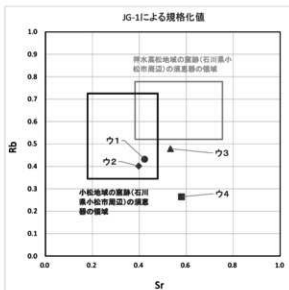
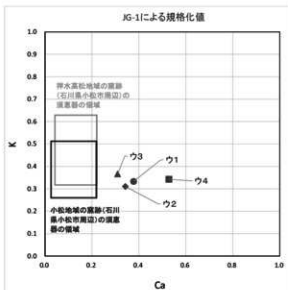


図 4.2.8 石川県の須恵器窯跡との比較

[小松市周辺の窯跡(8世紀代だが、6世紀代の二つ製殿構窯のデータも含む)の須恵器の領域は、三辻ほか(2008)から引用]

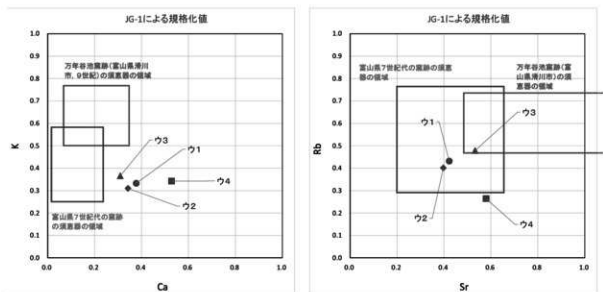


図 4.2.9 富山県の須恵器窯跡との比較

[万年谷池窯跡 (富山県滑川市, 9世紀) の領域は, 三辻 (2014) から引用。

富山県の7世紀代の窯跡 (富山市: 平岡窯跡・センガリ山窯跡・古沢窯跡,

小杉町: 小杉丸山窯跡・天池C窯跡, 大門町: 流団No. 7, 1, 2号窯跡,

小矢部市: 西蓮沼窯跡・山王奥窯跡・蓮沼池窯跡) の領域は, 三辻ほか (2008) を参考に加筆]

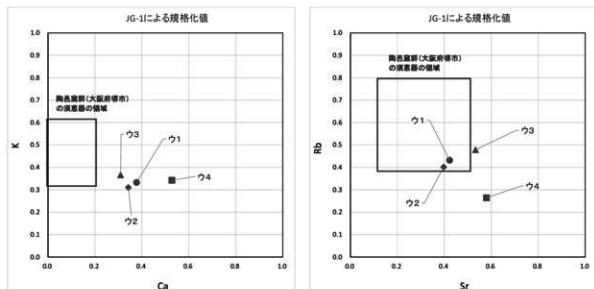


図 4.2.10 近畿地方陶器窯跡との比較

[陶器窯群の領域は, 三辻 (2013) から引用]

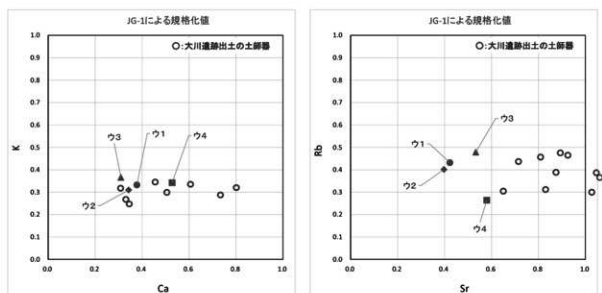


図 4.2.11 余市町大川遺跡の土師器との比較

[余市町大川遺跡の土師器のデータは、三辻ほか (2008) を参考に加筆]

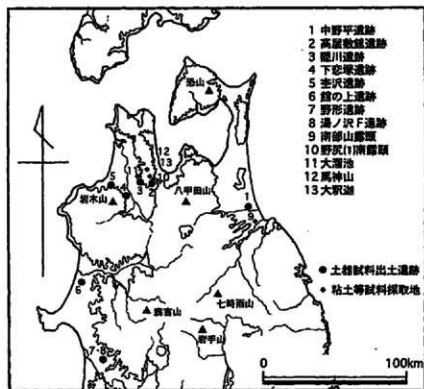


図 4.2.12 土器試料出土遺跡および粘土等試料採取地の位置

[松本 (2003) の図 1 を引用]

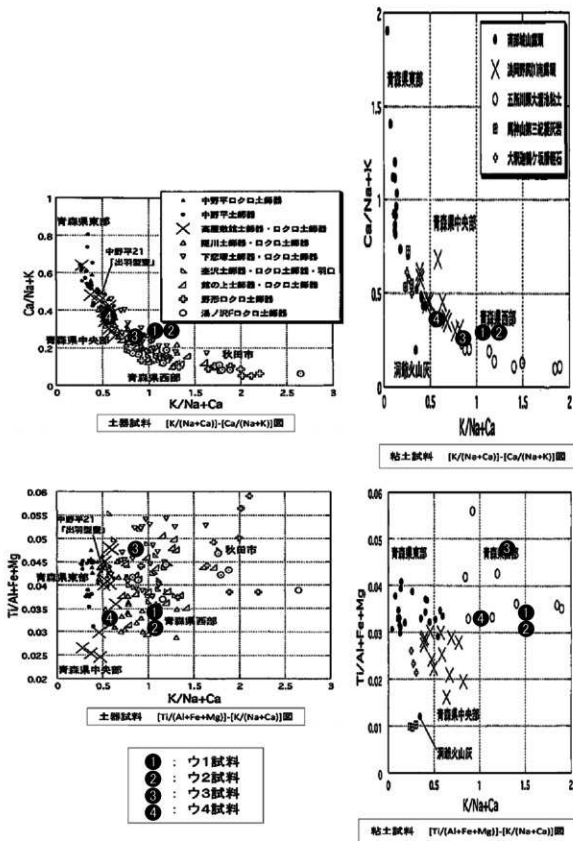


図4.2.13 青森県および秋田県北部の遺跡から産する土師器および遺跡周辺地域の粘土試料との比較
 (松本 (2003) の図5に加筆修正)

付篇 2. 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

株式会社バレオ・ラボ 竹原弘展

1. はじめに

浦河町に所在する向別遺跡、栄丘遺跡、昌平町遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、各遺跡より出土した縄文時代の黒曜石製石器計9点である(表1)。

試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

表1 分析対象

試料番号	遺跡	器種	残存状態	形状	原産面の特徴	内部の特徴	出土地点	層位	時期	重量(g)	備考
ウ1	向別遺跡	U・Rフレイク	—	転縁の破片	密 小さくぼみ	赤色部分 90%以上	L-5区	1層	縄文時代 後期	8.2	
ウ2		U・Rフレイク	—	転縁の破片	粗 くぼみ多 くぼみ多	黒色	G-3区	1層		30.4	
ウ3		スタレイバー	完形	転縁の破片	やや密 くぼみ	黒色	J-4区	1層		13.5	青面石製縁 下部部に刃部
ウ4		U・Rフレイク	—	転縁の破片	粗 くぼみ多 爪形	黒色 乳白色の結	H-3区	1層		8.5	水による磨滅
ウ5		スタレイバー	準定形	板状?	密 ざらつき 複数の結	黒色 小球果の結	P-5区	1層		7.9	エンド スタレイバー
ウ6	栄丘遺跡	石鏃	完形	—	無	赤色部分 10%程度	L-11区	1層	縄文時代	1.0	
ウ7	—	石鏃	完形	—	無	黒色	L-10区	目録	縄文時代	0.7	
ウ8	昌平町遺跡	石鏃	準定形	—	無	黒色	—	—	縄文時代	2.1	
ウ9	—	スタレイバー	片	—	無	黒色	Q-21区	目録	縄文時代 中期	2.5	

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月、1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps:count per second)に

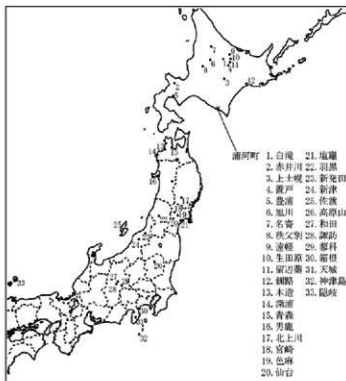


図1 黒曜石産地分布図(東日本)

ついて、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率 = $Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) Sr分率 = $Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月、1999)。試料の測定面には、なるべく平滑面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、8点が赤井川群(北海道、赤井川エリア)または上土幌群(北海道、上土幌エリア)、1点が所山群(北海道、置戸エリア)の範囲にプロットされた。図2、3の判別図では、赤井川群と上土幌群の範囲の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、以下に示すY分率を算出した。(Y分率 = $Y \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$)

赤井川群および上土幌群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図4に示す。図4より、1点が赤井川群、7点が上土幌群と判断できる。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。表4に、遺跡別の産地を示す。なお、向別遺跡出土の石器5点(ウ1~5)はいずれも原産面が残っており、上土幌産の4点はいずれも円産であった。赤井川産の1点は角産であった。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白糠	白糠1	赤石山山頂(43)、八号武蔵館(10)	
		白糠2	アの沢(1)、大沢(2)、11路頭(10)、十勝石炭露出地(下河床)(11)、アジノイの滝産地(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・本木川(20)	
	上土幌	上土幌	十勝三鼓(4)、タウシユベツ川右岸(12)、タウシユベツ川左岸(16)、十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(3)	
		所山	所山(5)	
	豊原	豊原	豊原(10)	
	旭川	旭川	近文(8)、赤岡台(2)	
	秋田	名寄	名寄	志賀町(19)
			秋文町1	
秋文町2			中山(60)	
秋文町3				
遠軽		遠軽	乳玉川河床(2)	
青森	生田原	生田原	仁田川河床(10)	
		蟹江島1	ケンシヨウ川河床(9)	
	蟹江島2			
	網走	網走	網走市東ノキー橋(9)、網走市志保(2)、網走市志保(6)	
	本庄	本庄	山田長尾(15)、鶴ヶ原(10)	
	八森山	八森山	八森山(7)、九森山公園(8)	
	秋田	芳野	芳野	天田内川(6)
		芳野	金ヶ崎	金ヶ崎産地(10)
	前手	北上山	北上新産1	
			北上新産2	北上山(9)、真崎(33)
北上新産3				
宮城	宮崎	宮ノ倉	宮ノ倉(40)	
		色麻	色麻(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
塩竈	塩竈	塩竈(10)		
山形	羽黒	月山	月山産地(2)、大橋沢(10)	
	鶴川	鶴川	たらのき代(19)	
新潟	新井原	新井原	新井原産地(10)	
	新津	新津	金津(17)	
熊本	高野山	高野山	高野山(14)、東原産地(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
	和田	土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(30)、土屋橋西(1)	
		古崎	和泉(17)、トネル上(20)、古崎(30)、和泉(10)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ武	牧ヶ武(20)	
		高松町	高松町(19)	
		西原産	長野パーライト土砂集積場(30)	
		廣山	廣山(14)、東原産地(54)	
小深沢	小深沢(42)			
長野	高野山	高野山(14)、東原産地(54)		
	小深沢	小深沢(42)		
	土屋橋1	土屋橋西(10)		
	土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(30)、土屋橋西(1)		
神奈川	箱根	箱根	箱根(15)	
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)	
	静岡	上多賀	上多賀(20)	
		柏崎	柏崎(20)	
東京	神津島	神津島(27)		
	砂嶋崎	砂嶋崎(20)		
鳥取	嵯峨	久見	久見パーライト中(6)、久見産地(5)	
		東原	東原産地(3)、加茂(4)、原田(3)	

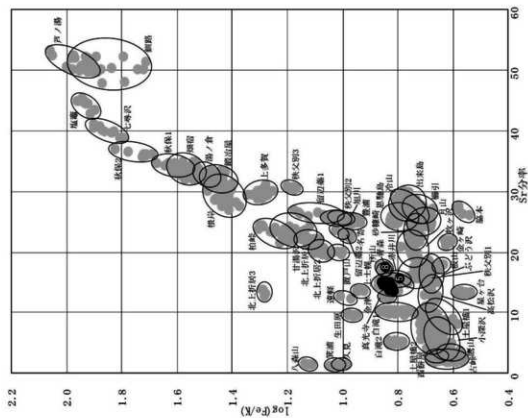


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

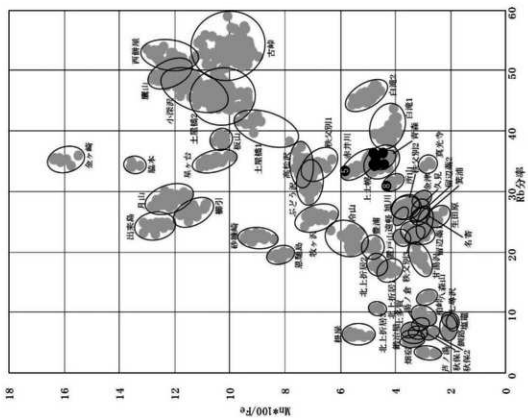


図3 黒曜石産地推定判別図(1)

表3 測定値および産地推定結果

試料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log E _k	Y分率	判別群	エリア	試料番号
ウ1	291.9	93.7	1976.4	811.4	356.2	427.6	776.9	34.20	4.74	15.02	0.83	18.03	上土幌	上土幌	ウ1
ウ2	304.8	95.3	1991.2	814.0	305.3	422.2	699.0	36.33	4.79	13.63	0.82	18.84	上土幌	上土幌	ウ2
ウ3	322.2	100.3	2131.7	886.4	353.2	462.7	799.0	35.44	4.70	14.12	0.82	18.50	上土幌	上土幌	ウ3
ウ4	233.9	79.9	1667.1	714.7	301.7	379.9	678.5	34.45	4.79	14.54	0.85	18.31	上土幌	上土幌	ウ4
ウ5	324.4	117.3	2016.1	794.8	372.4	396.9	818.8	33.35	5.82	15.63	0.79	16.66	赤井川	赤井川	ウ5
ウ6	270.4	85.6	1946.5	759.4	328.6	393.8	720.9	34.48	4.40	14.92	0.86	17.88	上土幌	上土幌	ウ6
ウ7	231.1	70.2	1577.3	652.9	246.8	339.0	561.7	36.26	4.45	13.71	0.83	18.83	上土幌	上土幌	ウ7
ウ8	274.6	83.1	1927.8	779.6	439.4	368.2	930.3	39.97	4.31	17.45	0.85	14.63	所山	置戸	ウ8
ウ9	299.8	97.7	2088.1	837.0	364.4	437.4	794.8	34.39	4.68	14.97	0.84	17.97	上土幌	上土幌	ウ9

表4 遺跡別の産地

遺跡 (時期)	器種	赤井川	上土幌	置戸	合計
向別遺跡 (縄文時代後期)	スクレイパー	1	1		2
	U・Rフレイク		3		3
	小計	1	4	0	5
栄丘遺跡 (縄文時代)	石鏃		2		2
	小計	0	2	0	2
昌平町遺跡 (縄文時代中期)	石鏃			1	1
	スクレイパー		1		1
	小計	0	1	1	2
合計		1	7	1	9

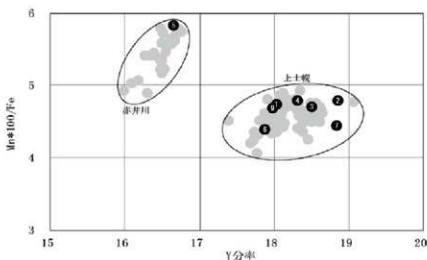


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

4. おわりに

向別遺跡、栄丘遺跡、昌平町遺跡より出土した縄文時代の黒曜石裂石器9点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、1点が赤井川、7点が上土幌、1点が置戸エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育局委員編

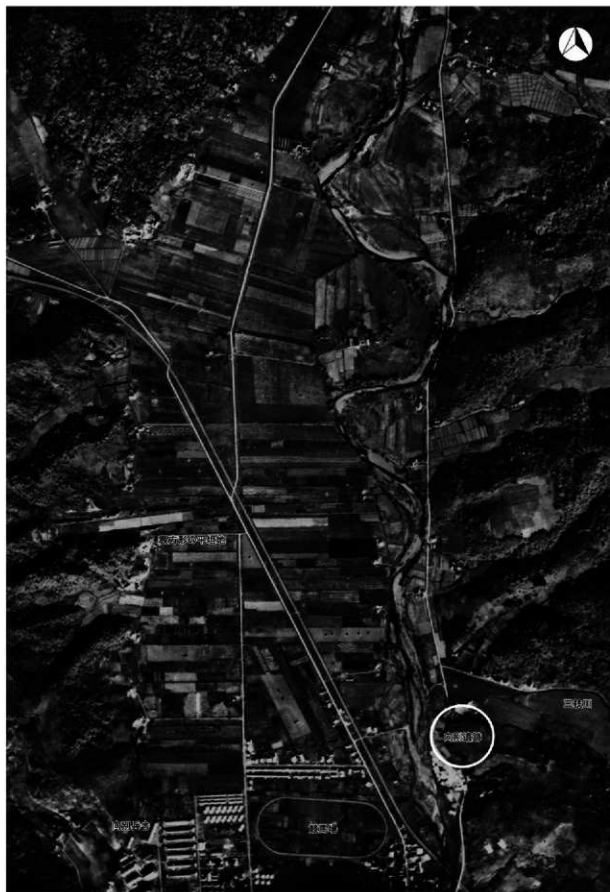
「黒曜文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 - 上和田城山遺跡篇 -」: 172-179. 大和市教育局委員.
(令和元年8月28日受領 内容点検・編集 末光)

写 真 图 版



遺跡周辺の地形(空中写真)

※国土地理院空中写真「C1-4(1944年)」に加筆



向別遺跡周辺の地形(空中写真)

※国土地理院空中写真「M-29183(1953年)」に加筆



調査区遠景(南東から)



表土除去完了(北から)

図版 4 向別遺跡



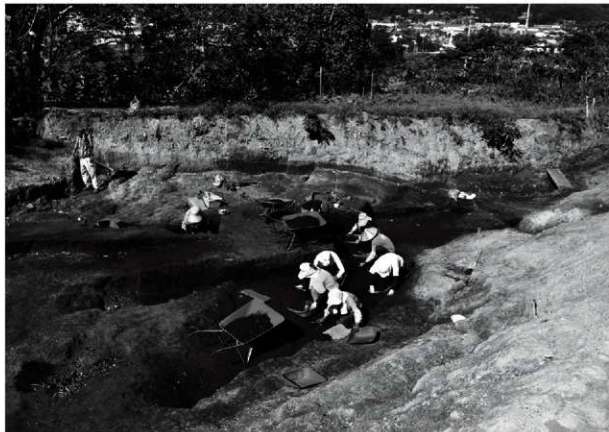
沢部埋め土除去完了(北西から)



台地部北側表土除去完了(南東から)



沢部南側調査状況(北から)



沢部中央調査状況(東から)

图版 6 向別遺跡



台地部土層断面



沢斜面部土層断面



P-1 完掘



P-2 完掘



道跡土層断面



PS-1 検出



PS-2 検出

図版 8 向別遺跡



PS-3 検出



PS-4 検出



PS-6 検出



PS-5 検出



PS-7 検出



PS-8 検出



PS-9 検出



鉄鍋集中1 検出

図版10 向別遺跡



調査区南側完掘(北西から)



調査区北側完掘(西から)



調査区周辺遠景(東から)



表土除去作業

図版12 栄丘遺跡



調査区南側調査状況(北西から)



調査区中央調査状況(東から)



基本土層



調査区南側完掘(北西から)



調査区北側先端部完掘(南東から)

図版14 昌平町遺跡



調査区遠景(北東から)



調査区東側表土除去完了(北西から)



調査区東側調査状況(北西から)



調査区西側調査状況(北西から)

図版16 昌平町遺跡



基本土層



P-1~4土層断面



P-9~11完掘



調査区西側完掘(北西から)



調査区東側表土除去作業(北西から)



調査区中央表土除去作業(北東から)

図版18 常盤町遺跡



調査区東側調査状況(北東から)



調査区中央斜面部調査状況(南東から)



調査区西側調査状況(北東から)



調査区中央平坦部調査状況(南から)

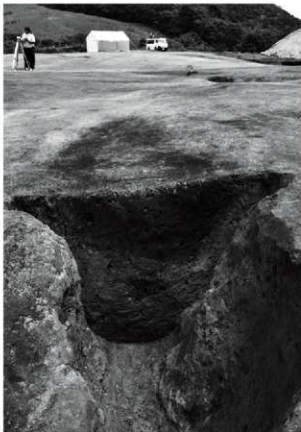
図版20 常盤町遺跡



P-1 土層断面



TP-1 確認



TP-1 土層断面



TP-2 土層断面



TP-3 土層断面



TP-4 完掘



TP-5 土層断面



TP-6 土層断面



TP-7 完掘

図版22 常盤町遺跡



TP-8 土層断面



TP-9 完掘



TP-10 土層断面



TP-11 土層断面



TP-12土層断面



TP-8~11完掘



TP-1~5完掘

図版24 常盤町遺跡



P S - 1 検出



S - 1 検出



石錘出土状況(N-13区)



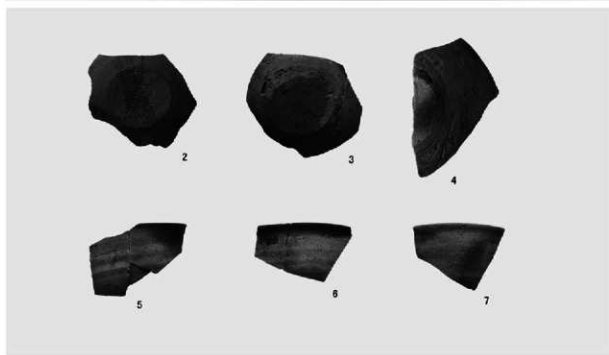
石錘出土状況(M-13区)



調査区東側完掘(北東から)



調査区西側埋め戻し作業(東から)



図上復原土器



1



4



2



5



3

復原土器(1)

図版28 向別遺跡



6



8



7



9

復原土器(2)



10



12



13

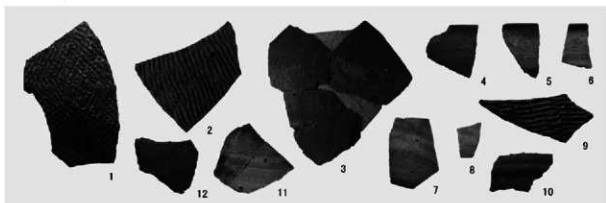


11

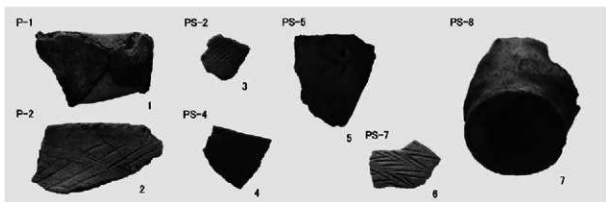


14

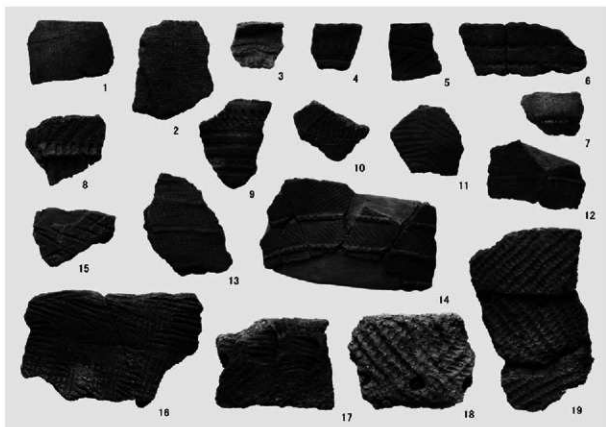
圖版30 向別遺跡



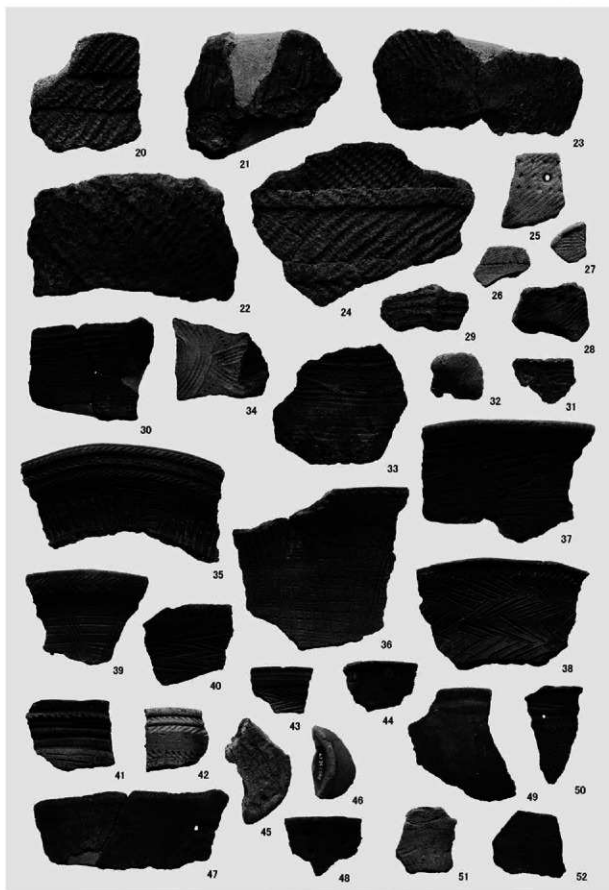
陶器・須恵器・土師器・胎土分析試料



遺構出土破片土器

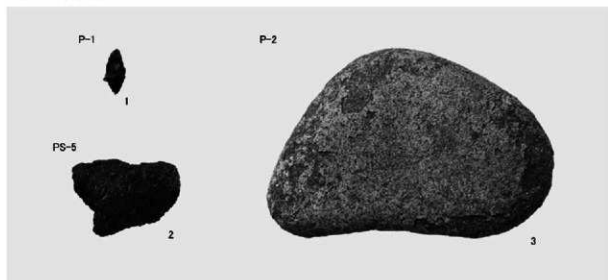


包含層出土破片土器(1)



包含層出土破片土器(2)

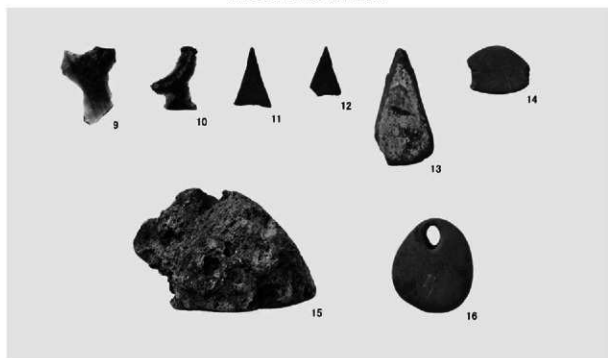
図版32 向別遺跡



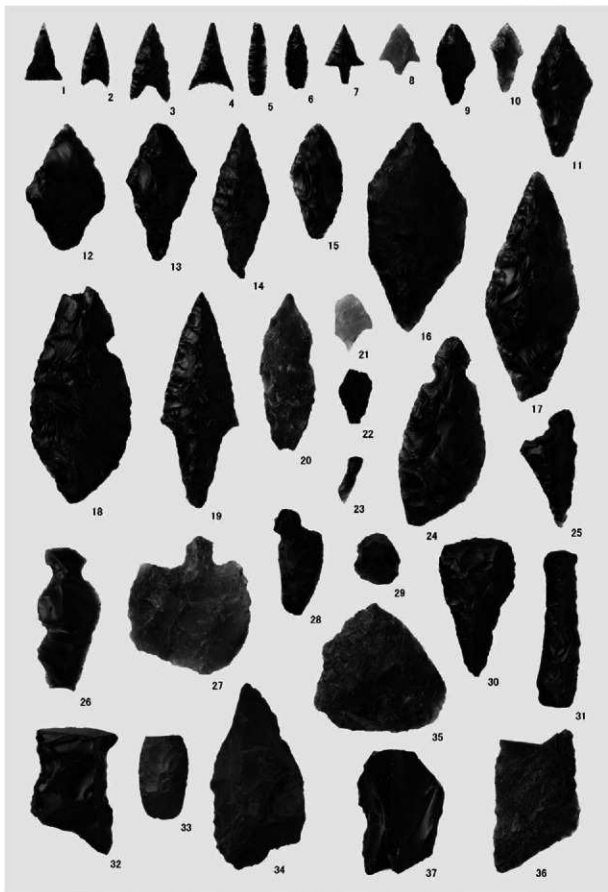
遺構出土石器



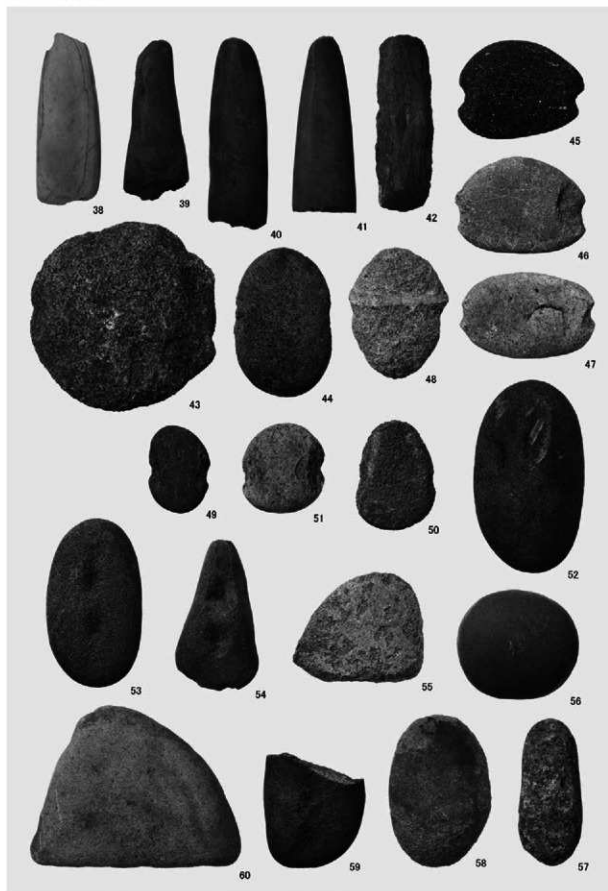
黒曜石製石器産地分析試料



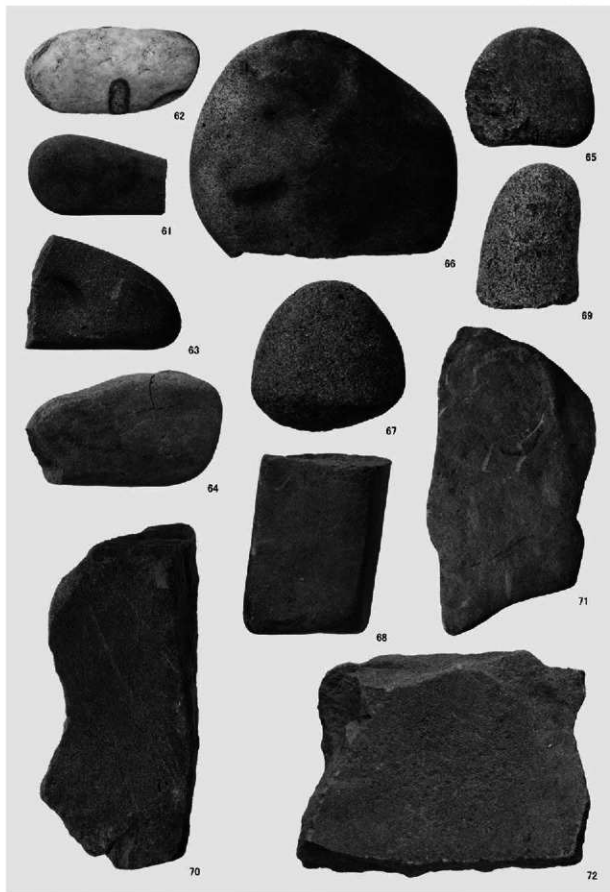
石製品



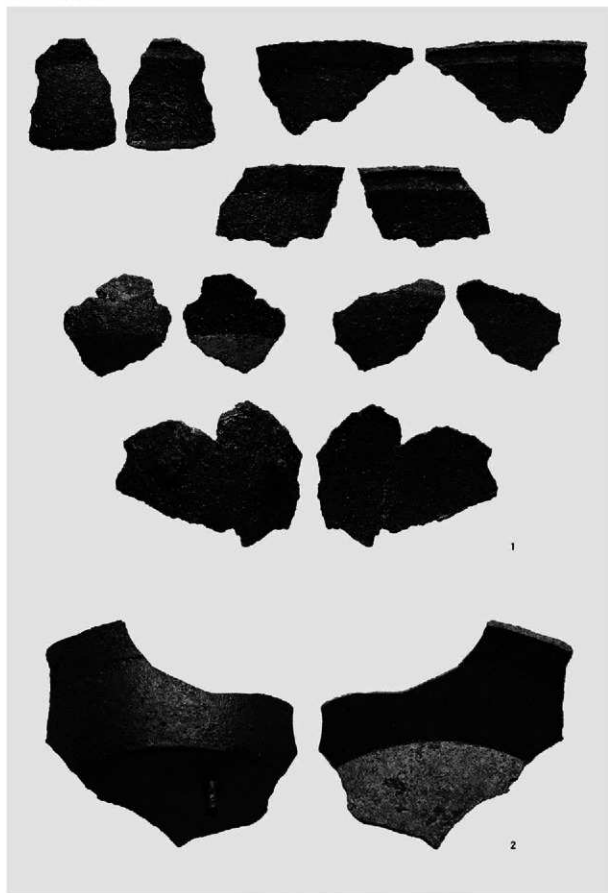
包含層出土石器(1)



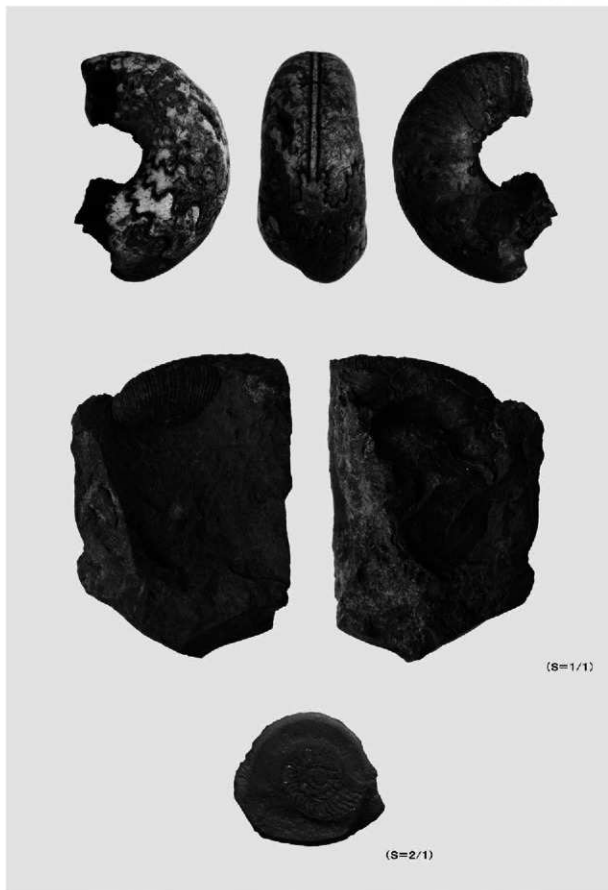
包含層出土石器(2)



包含層出土石器(3)



鉄鍋



アンモナイト化石

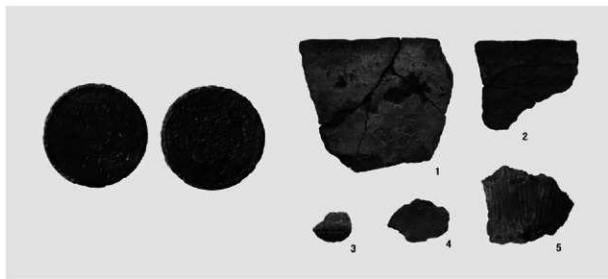
図版38 栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡



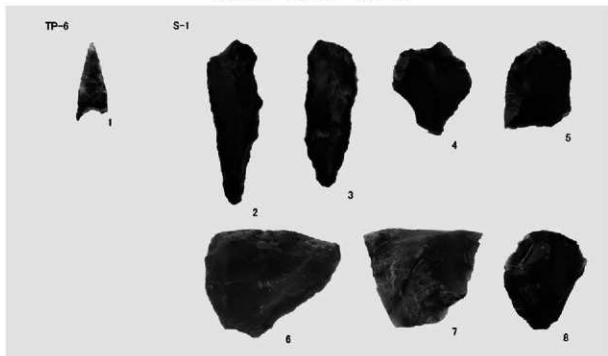
栄丘遺跡 出土遺物



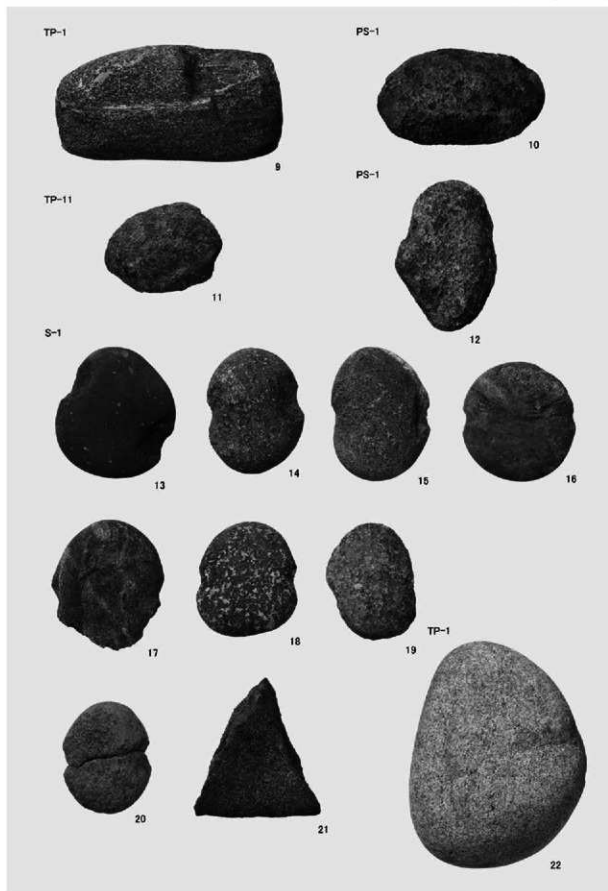
昌平町遺跡 出土遺物



常盤町遺跡 出土古銭・破片土器

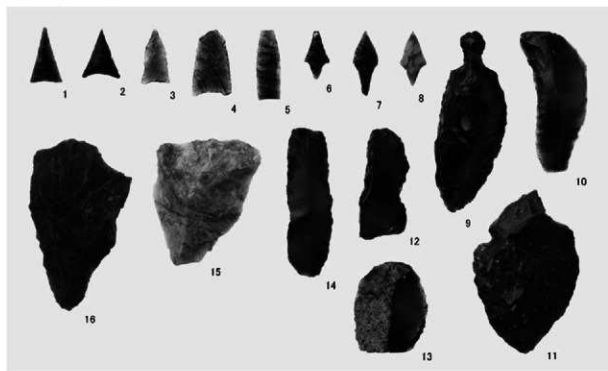


常盤町遺跡 遺構出土剥片石器

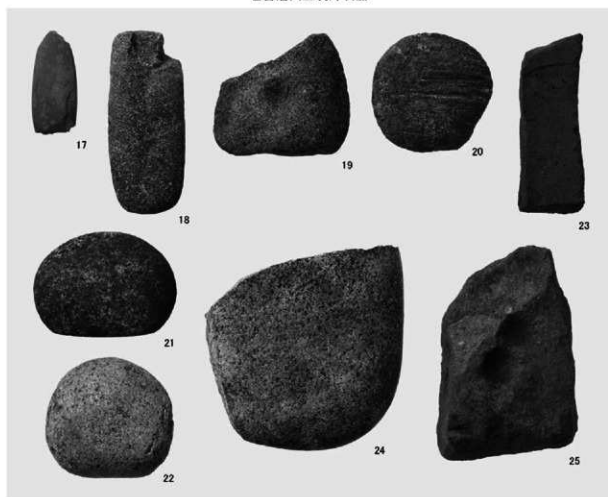


遺構出土礫石器

图版40 常盤町遺跡

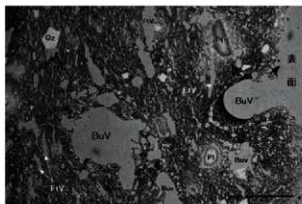


包含層出土剥片石器

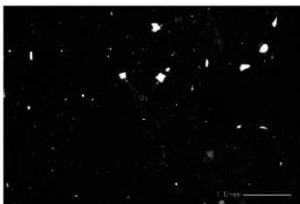


包含層出土礫石器

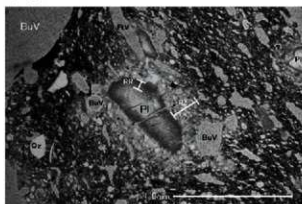
試料番号：ウ1 岩石名等：陶器（珠洲焼系）



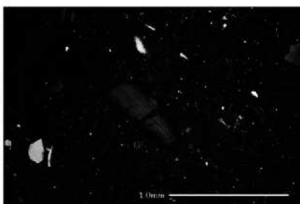
オープンニコル



クロスニコル



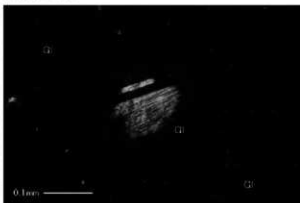
オープンニコル



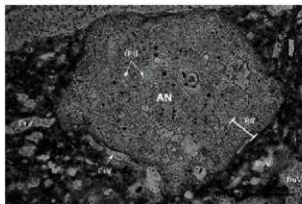
クロスニコル



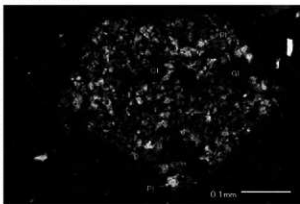
オープンニコル



クロスニコル



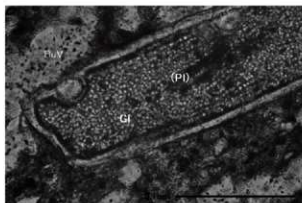
オープンニコル



クロスニコル

胎土分析試料偏光顕微鏡写真(1)

図版42

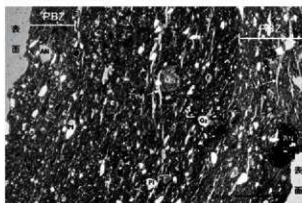


オープンニコル

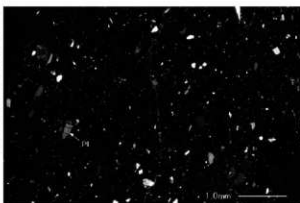


クロスニコル

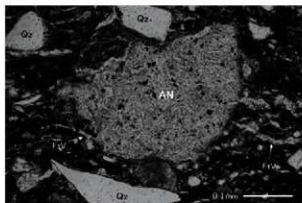
試料番号：ウ2 岩石名等：須恵器



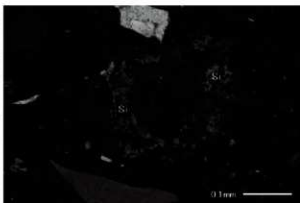
オープンニコル



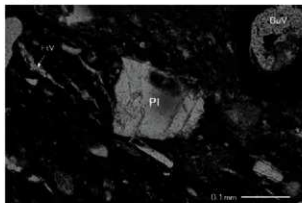
クロスニコル



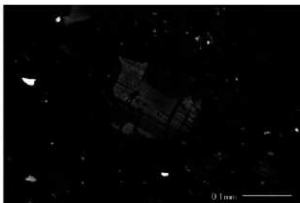
オープンニコル



クロスニコル

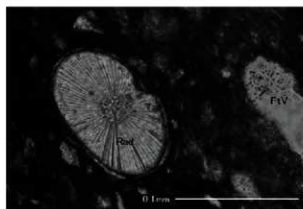


オープンニコル



クロスニコル

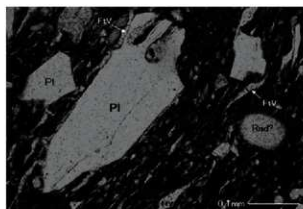
胎土分析試料偏光顕微鏡写真(2)



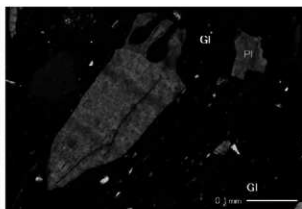
オープンニコル



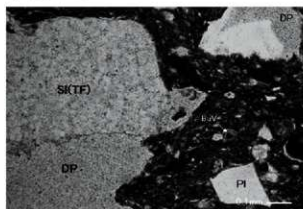
クロスニコル



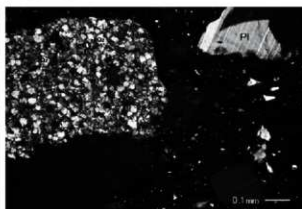
オープンニコル



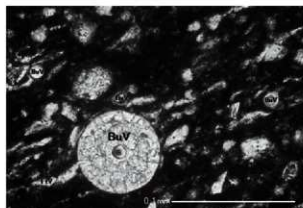
クロスニコル



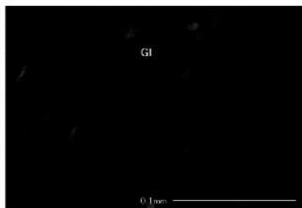
オープンニコル



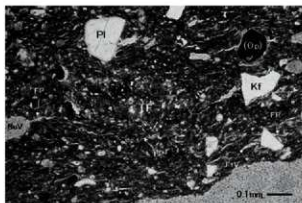
クロスニコル



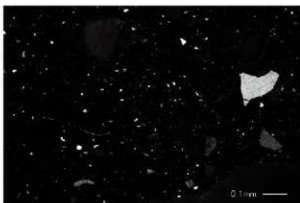
オープンニコル



クロスニコル

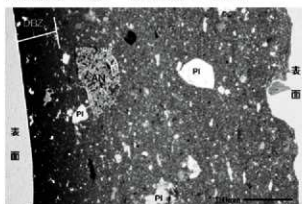


オープンニコル

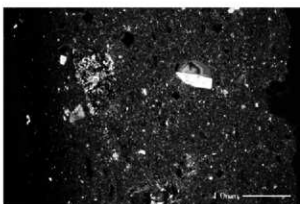


クロスニコル

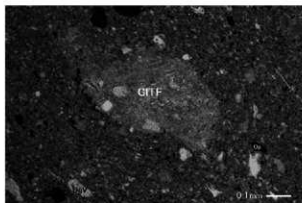
試料番号：ウ3 岩石名等：土師器



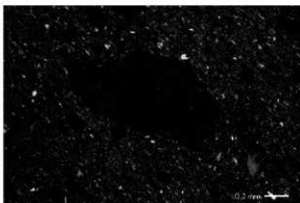
オープンニコル



クロスニコル



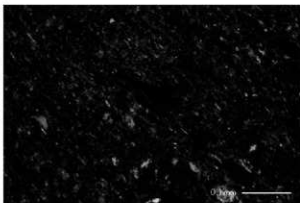
オープンニコル



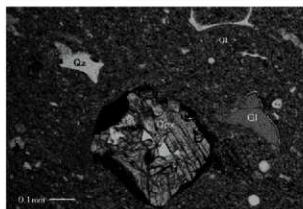
クロスニコル



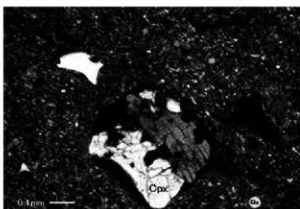
オープンニコル



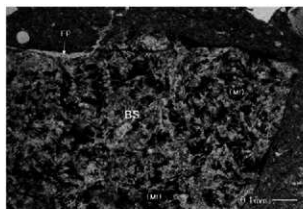
クロスニコル



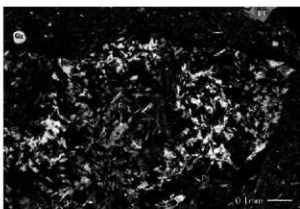
オープンニコル



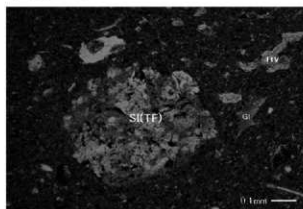
クロスニコル



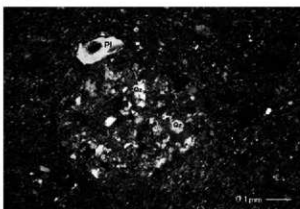
オープンニコル



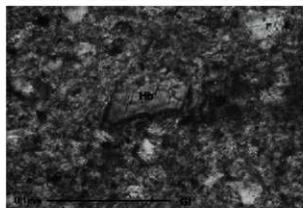
クロスニコル



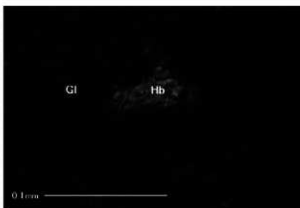
オープンニコル



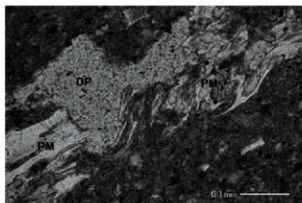
クロスニコル



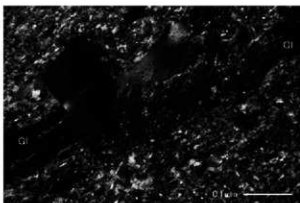
オープンニコル



クロスニコル

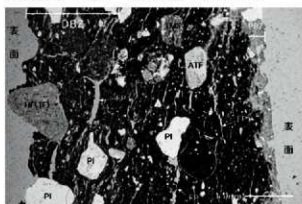


オープンニッケル

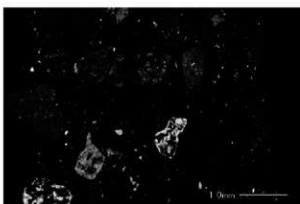


クロスニッケル

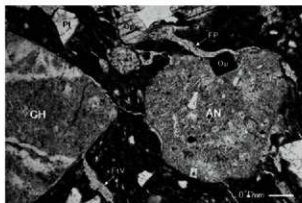
試料番号：ウ4 岩石名等：擦文土器



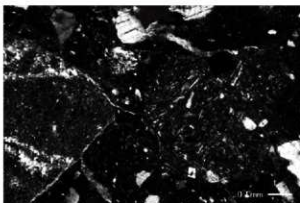
オープンニッケル



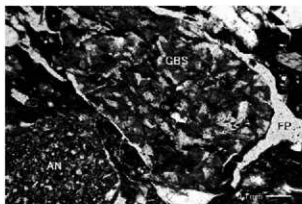
クロスニッケル



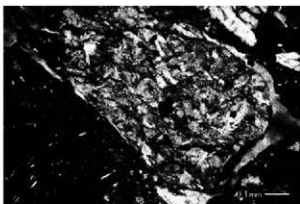
オープンニッケル



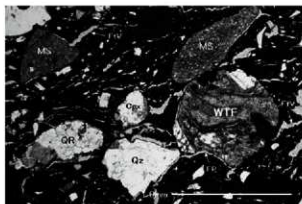
クロスニッケル



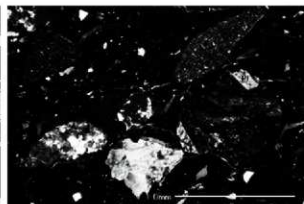
オープンニッケル



クロスニッケル



オープンニコル



クロスニコル

凡例

[岩石]

AN:安山岩 BS:玄武岩 PM:軽石 TF:凝灰岩 GiTF:ガラス質凝灰岩
 WTF:溶結凝灰岩 GBS:玄武岩(緑色岩化) TMS:変形泥岩 ATF:酸性凝灰岩
 CH:チャート HF:ホルンフェルス MS:泥岩 SI:強珩化岩 QR:石英岩

[鉱物]

Qz:石英 Kf:カリ長石 Pl:斜長石 Hb:普通角閃石 Cpx単斜輝石
 Mf:(詳細不明)苦鉄質鉱物 Op:不透明鉱物 Gl:ガラス

[微化石]

Rad:放散虫

[孔隙]

FtV:偏平な気泡 BuV:バブル状の気泡
 FP:フラクチャー孔隙 DP:溶解孔隙(脱落痕含む)

[その他の記号]

(): 仮像 RR:反応縁(粒子側) RZ:反応ゾーン(基質側)
 PBZ:淡褐色ゾーン DBZ:暗褐色ゾーン

引用参考文献

団体・組織刊行物

- 浦河町 1971 『浦河町史』上下巻
浦河町 1991 『浦河百話』
浦河町 2002 『新浦河町史』上下巻
小野寺信子・河村和美・高田則雄 2013 『続浦河百話』続浦河百話編集委員会
静内高校郷土研究部 1958 『ひだか』第4号
静内町 1963 『静内町史』
全国シンポジウム 2005 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』同実行委員会
全国シンポジウム 2005 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』同実行委員会
独立行政法人 産業技術総合研究所 地質総合調査センター 2002 『浦河地域の地質』地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)
登別町役場 1967 『登別町史』
羽幌古生物研究会 2012 『北海道羽幌地域のアンモナイト』株式会社アワード
日高管内郷土史研究協議会 1967 『日高の文化財』第1集(埋蔵文化財篇)
ペドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
防衛庁防衛研修所 戦史室 1968 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦(1) アップの玉砕』朝雲新聞社
防衛庁防衛研修所 戦史室 1968 『戦史叢書 南太平洋陸軍作戦(1) ポートモレスビー・ガ島初期作戦』朝雲新聞社
防衛庁防衛研修所 戦史室 1969 『戦史叢書 北東方面海軍作戦』朝雲新聞社
防衛庁防衛研修所 戦史室 1971 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦(2) 千島・樺太・北海道の防衛』朝雲新聞社
米陸軍省編 1944 『日本陸軍便覧』米陸軍省テクニカル・マニュアル(菅原完訳 1998 光人社)
北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸～考古学が語る社会史～』桂書房
三笠市 1993 『新三笠市史 通史編』
三笠市立博物館 1998 『アンモナイト化石写真集』

浦河町教育委員会・浦河町郷土史研究会 埋蔵文化財調査報告書

- 浦河町教育委員会 1960 『浦河町西舎遺跡発掘調査報告書』(ガリ版) 手書き・小冊子 = 西舎小学校校庭
浦河町教育委員会 1962 『浦河郡浦河町 白泉遺跡の発掘について 第一輯』(黒崎重雄 宮夫靖夫)(冊子)
浦河町教育委員会 1969 『浦河町の遺跡』
浦河町教育委員会 1974 『一般道々高見西舎線 浦河町西舎地内 埋蔵文化財分布調査報告書』(手書・冊子)
浦河町教育委員会・室蘭土木現象所 1972 『西舎遺跡1972』縄文時代早期の住居址と前期の遺物 = 西舎2遺跡
浦河町郷土史研究会 不明 『西舎遺跡発掘調査報告書』 = 西舎小学校校庭 (手書・冊子) 1975か1976年頃?
浦河町教育委員会 1976 『上野深遺跡発掘調査報告書 S51』(手書・冊子)
浦河町教育委員会 1977 『上野深遺跡発掘調査報告書 S52』(手書・冊子)
浦河町教育委員会 1978 『上野深遺跡発掘調査報告書 S53』(手書・冊子)
浦河町教育委員会 1980 『旧姉茶墓地調査報告』
浦河町教育委員会 1989 『東栄2遺跡』道営畑総事業収伏地区第2号農道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
浦河町教育委員会 1990 『西舎遺跡発掘調査報告書』寿の家建設事業に伴う緊急発掘調査
浦河町教育委員会 1993 『浦河町西舎3遺跡立会調査報告書』日本中央競馬会日高育成総合施設建設に伴う立会調査
浦河町教育委員会 1994 『北海道浦河町 西舎3遺跡・西舎7遺跡・西舎8遺跡』
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
浦河町教育委員会 1995 『北海道浦河町 西舎3遺跡発掘調査概要報告書』
浦河町「ホースランド浦河」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
浦河町教育委員会 1995 『北海道浦河町 西舎6遺跡発掘調査概要報告書』
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
浦河町教育委員会 1996 『北海道浦河町 平成7年度 上野深2遺跡発掘調査報告書』
道営担い手育成畑地帯総合整備事業 収伏地区第10号農道工事
浦河町教育委員会 1996 『北海道浦河町 平成7年度 西舎5・6遺跡発掘調査概要報告書』
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
浦河町教育委員会 1997 『北海道浦河町 西舎6遺跡・西舎8遺跡発掘調査概要報告書』
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
浦河町教育委員会 1997 『北海道浦河町 西舎3遺跡発掘調査概要報告書』
浦河町「優駿の里」「ホースランド浦河」整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査成果概要報告書
浦河町教育委員会 1998 『北海道浦河町 西舎5・西舎8遺跡発掘調査概要報告書』
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

浦河町教育委員会 1999 「北海道浦河町 西舎5遺跡発掘調査概要報告書」
JRA日本中央競馬会「日高育成総合施設」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所 2002 「秋田城跡-政庁跡-」
秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所 2008 「秋田城跡Ⅱ-瀬ノ木地区-」
五所川原市教育委員会・大走須恵器窯跡発掘調査団 1998 「大走須恵器窯跡発掘調査報告書」
五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集
五所川原市教育委員会 2003 「五所川原須恵器窯跡群」五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
二ツ井町教育委員会 1990 「エヒバチ長根窯跡・大川口館跡・鳥野遺跡」二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第1集
余市町教育委員会 1993 「1992年度大川遺跡発掘調査概要」余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅳ
余市町教育委員会 2001 「余市町大川遺跡における考古学的調査Ⅳ」
余市川改修工事に伴う1989-1994年度 大川遺跡発掘調査報告書（総括篇）

論文・書籍等

大久保雅弘・藤田至則 1984 「地学ハンドブック・新訂版」築地書館
蟹江康光・酒井 彰 2002 「浦河地域の地質」地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 釧路(2) 第69号
独立行政法人 産業技術研究所 地質調査総合センター
久保和也・柴田 賢・佐藤博之 1984 「北海道浦河地域のランプロファイアーのK-Ar年代」地質調査所月報 第35巻2号
黒崎康雄・橋本善 1965 「北海道浦河郡浦河町浜秋伏遺跡」『古代』45・46合併号（早稲田大学考古学から転載）
小山正忠・竹原秀雄 2011 「新版 標準土色帳」34版 日本色研事業株式会社
佐藤愛子・江原啓之 2001 「あの世の話」文藝春秋
関正 1940 「標案碑を繞る石器時代遺跡」史前学雑誌第12巻第1号
高橋正勝・畑宏明 1976 「浦河町栄丘遺跡出土の遺物」北海道考古学第12輯
谷岡康孝・下斗米哲明 1976 「西舎遺跡の発掘調査報告」会報「うららべつ」第18集 浦河町郷土史研究会
谷岡康孝・下斗米哲明 1977 「浦河町上野深遺跡発掘調査概要」北海道考古学第13輯
坪井正五郎 1888年 「石器時代の遺物遺跡は何者の手に成れたか」東京人類学雑誌第3巻31号
藤本英夫 1964 「アイヌの墓 考古学からみたアイヌ文化史」日本経済新聞社
藤本英夫 1971 「北の墓 ヴェールに包まれた北の原人と遺跡の謎」学生社
松浦竹四郎（高倉新一郎 校訂 秋葉 実 解説）1985 「戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌」下 北海道企画出版センター
「東部 保呂辺津 誌」戊午第五十三巻（はろべつし）
「東部 幸古辺郡 誌」戊午第五十四巻（むこべつし）
「東部 宇羅加和 誌」戊午第五十三巻（うらかわし）
松浦竹四郎 「緯四十二 経七度 従サル銀サルフツ ニイカッブ シツナイ ミツイシ ウラカワ 到シヤマニ領ホロマヘツ」
東西蝦夷山川取調 六 草風館版
松本建速 2001 「付篇12 大川遺跡出土土師器の胎土分析」『余市町大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』
余市川改修工事に伴う1989-1994年度 大川遺跡発掘調査報告書（総括篇）
松本建速 2003 「誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）による東北北部古代土器の胎土分析」第四紀研究42-1
三辻利一 2001 「付篇6 大川遺跡出土土器の蛍光X線分析」『余市町大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』
余市川改修工事に伴う1989-1994年度 大川遺跡発掘調査報告書（総括篇）
三辻利一・吉岡康暢・乾 友美 2006 「統計学的手法による古代・中世土器の産地問題に関する研究（第18報）
- 珠洲陶器と珠洲系陶器の相互識別 -」考古学と自然科学52
三辻利一・小野裕子・天野哲也 2008 「オホーク文化の集団間・対外交流の研究-1. 礼文島香深井1遺跡出土
陶質土器の蛍光X線分析-」北海道大学総合博物館研究報告第4号
三辻利一 2013 「新しい土器の考古学」同成社
山本哲也 1993 「d-1 大川遺跡出土の須恵器」1992年度大川遺跡発掘調査概要
余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅳ
吉岡康暢 1989 「日本海域の土器・陶磁〔中世編〕人類史叢書10 六興出版
吉岡康暢 2001 「付篇15 北方中世史と大川遺跡」『余市町大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』
余市川改修工事に伴う1989-1994年度 大川遺跡発掘調査報告書（総括篇）

北海道埋蔵文化財センター刊行物

(財)北海道埋蔵文化財センター 1983 「栄丘遺跡」日高支庁庁舎移転仮設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報16
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986 「ユオイチャシ跡 ポロモイチャシ跡 二風谷遺跡」
沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報26
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2019 「調査年報31」平成30年度
北海道埋蔵文化財センター 2019 「北海道埋蔵文化財センター年報」20

報告書抄録

ふりがな		うらかわちやう むこうべついせき - さかえおかいせき - しょうへいちやういせき - ときわちやういせき							
書名		浦河町 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡							
副書名		上向別浦河停車場線道路改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名		(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号		第363集							
編著者名		中山昭大・菊池慧人・末光正章・三浦正人・柳瀬由佳							
編集機関		公益財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地		〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL 011-386-3231							
発行年月日		西暦2020年3月25日							
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
むこうべつ 向別 いせき 遺跡	ほっかいどう うらかわちやう 北海道 浦河郡 うらかわちやう みどりまち 浦河町 緑町 4-6, 5-2	01 607	K-07 -27	G-6 グリッド統		20180507 ~ 20181031	2,400㎡	道道 上向別浦河 停車場線道路 改善事業 に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
向別遺跡	散布地	縄文時代 早期・中期・後期・晩期 統縄文文化期 推定文化期 アイヌ文化期		土坑 土器集中 鉄剣集中 遺跡(現代)		土器・石器 陶器(珠洲焼) 須恵器・土師器・内耳鉄鍋		珠洲焼・須恵器・土師器 推定土師の胎土分析	
要約	向別遺跡は、向別川の左岸の段丘に立地する。かつては深い谷があったが厚く盛土されていた。 縄文時代早期・中期・後期・晩期、統縄文文化期、アイヌ文化期で、土坑・土器集中・鉄剣集中と現代の遺跡を調査した。 土器は縄文時代早期の条状土器、後期のタブコブ式、縄文時代晩期の身形土器と、推定文化期中・後期の土器が復原できた。また、9-10世紀の須恵器と土師器が複数検出され、12-15世紀の珠洲焼陶器が出土し、胎土分析の結果から本所からの搬入品と考えられる。また、推定土器が日高地方で報告されたことも確認できた。 羽片石器は石鏝、石楯・ナイフ、石鏝、つまみ付きナイフがあり、黒曜石製のものが多い。礫石器は磨製石斧、たたき石、すり石、石鏝、砥石、片石が出土した。また、鉄は内蔵で、アンモナイトの化石も出土した。								
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
さかえおか 栄丘 いせき 遺跡	ほっかいどう うらかわちやう 北海道 浦河郡 うらかわちやう みどりまち 浦河町 緑町 177-1・4、 192、194-2	01 607	K-07 -23	1-10 グリッド統		20180507 ~ 20181031	800㎡	道道 上向別浦河 停車場線道路 改善事業 に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
栄丘遺跡	散布地	縄文時代		-		石鏝 フレイク		-	
要約	栄丘遺跡は、向別川左岸の台地に位置する。時期は縄文時代で、遺構はみつからなかった。出土遺物は黒曜石製の石鏝・フレイクである。								
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
しょうへいちやう 昌平町 いせき 遺跡	ほっかいどう うらかわちやう 北海道 浦河郡 うらかわちやう しょうへいちやう 浦河町 昌平町 73-8、10、12	01 607	K-07 -56	M-16 グリッド統		20180507 ~ 20181031	3,179㎡	道道 上向別浦河 停車場線道路 改善事業 に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
昌平町遺跡	散布地	縄文時代 中期		-		土器・石器		-	
要約	昌平町遺跡は、栄丘丘と昌平西川に挟まれた北西への斜面に位置する。調査した土層等はすべて現代であった。土器は縄文時代中期後半が出土し、石器は黒曜石製の石鏝・スクレイパー・フレイクが出土した。								
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
ときわちやう 常盤町 いせき 遺跡	ほっかいどう うらかわちやう 北海道 浦河郡 うらかわちやう しょうへいちやう 浦河町 昌平町 103-2、104-3、 105、106-2 ときわちやう 常盤町 130-3、131-2、 133-3、170-2、 229-2、242	01 607	K-07 -57	N-26 グリッド統		20180507 ~ 20181031	18,121㎡	道道 上向別浦河 停車場線道路 改善事業 に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
常盤町遺跡	散布地	縄文時代早期 統縄文文化期		土坑・Tビット 土器集中・礫集中		土器・石器		石鏝が多い	
要約	常盤町遺跡は、昌平川とワコバツ川の間を流れる支流にはさまれた台地に位置する。かつては牧場であり土の削平と盛土がみられた。時期は縄文時代早期と統縄文時代後半と考えられ、遺構は土坑・Tビット・土器集中・礫集中がみつかった。土器は縄文時代早期前半の地式と統縄文土器が出土した。羽片石器は石鏝、つまみ付きナイフ、スクレイパー、フレイクで黒曜石製のものが多い。礫石器は磨製石斧、たたき石、すり石、石鏝、砥石、片石が出土し、石鏝が多い。また、アンモナイトの化石、明治時代の硬貨もみつかった。								

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第363集

浦河町

向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡

－上向別浦河停車場線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

令和2（2020）年3月25日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 柏楊印刷株式会社
〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号
TEL 011(789)2377 FAX 011(789)2376

